# 京都府遺跡調査概報

## 第79冊

1．平遺跡

2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡

（1）奈具岡南古墳群

（2）シミズ谷城跡

3．五領池東瓦窯跡群

1997

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成８年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局の依頼を受けて行った平遺跡、国営農地(丹後東部地区)関係遺跡(奈具岡南古墳群・シミズ谷城跡)、五領池東瓦窯跡群に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、丹後町教育委員会・弥栄町教育委員会・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成９年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　樋口隆康

# 凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

　1．平遺跡　　2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡(奈具岡南古墳群・シミズ谷城跡)

　3．五領池東瓦窯跡群

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

| 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|---|---|---|---|---|
| 1．平遺跡 | 竹野郡丹後町平小字湊 | 平8.8.26～平8.12.5 | 京都府土木建築部 | 河野　一隆 |
| 2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 | | | 農林水産省近畿農政局 | |
| (1)奈具岡南古墳群 | 竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡 | 平8.4.11～平9.1.30 | | 竹原　一彦<br>河野　一隆 |
| (2)シミズ谷城跡 | 竹野郡弥栄町堤小字平野・シンズ | 平8.5.7～9.6 | | 柴　　暁彦 |
| 3．五領池東瓦窯跡群 | 相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平 | 平8.5.7～9.27 | 住宅・都市整備公団関西支社 | 有井　広幸 |

3．　本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4．　本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 本　文　目　次

1．平遺跡発掘調査概要----------1
2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡平成８年度発掘調査概要----------69
（1）奈具岡南古墳群----------74
（2）シミズ谷城跡----------118
3．五領池東瓦窯跡群発掘調査概要----------149

# 挿　図　目　次

1．平遺跡

第１図　調査地位置図----------2
第２図　昭和40年度の平遺跡の調査----------3
第３図　調査地周辺地形図----------4
第４図　調査トレンチ平面図----------5
第５図　平遺跡土層断面図----------6
第６図　埋甕出土状況図----------7
第７図　石組炉実測図----------7
第８図　埋甕関連遺物(石器・石製品)実測図----------8
第９図　黄島式土器----------9
第10図　北白川下層Ⅱｃ式土器実測図----------9
第11図　北白川下層Ⅱａ・Ⅱｃ・Ⅲ式土器実測図----------10
第12図　北白川下層Ⅱｃ・Ⅲ式土器実測図----------11
第13図　大歳山式土器実測図(1)----------13
第14図　大歳山式土器実測図(2)----------14
第15図　前期の土器底部実測図----------15
第16図　鷹島式土器実測図(1)----------15
第17図　鷹島式土器実測図(2)----------16
第18図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(1)----------17
第19図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(2)----------18
第20図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(3)----------20

第21図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(4)----------21
第22図　船元式土器(74のみⅢ式、他はⅠ・Ⅱ式)実測図----------22
第23図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器底部実測図----------23
第24図　北陸系土器(中期前葉)実測図(1)----------24
第25図　北陸系土器(中期前葉)実測図(2)----------25
第26図　中期中葉～後葉の土器実測図----------26
第27図　平式(平CⅢ式)土器実測図(1)----------26
第28図　平式(平CⅢ式)土器実測図(2)----------27
第29図　平式(平CⅢ式)土器実測図(3)----------28
第30図　平式(平CⅢ式)土器実測図(4)----------29
第31図　後期前葉の土器実測図----------29
第32図　注口土器・深鉢(元住吉山Ⅰ・Ⅱ式)実測図----------30
第33図　凹線文土器群実測図----------30
第34図　元住吉山Ⅰ・Ⅱ式土器実測図----------31
第35図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(1)----------32
第36図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(2)----------33
第37図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(3)----------34
第38図　滋賀里式併行土器実測図(1)----------36
第39図　滋賀里式併行土器実測図(2)----------37
第40図　滋賀里式併行土器実測図(3)----------39
第41図　滋賀里式併行土器実測図(4)----------40
第42図　篠原式土器実測図(1)----------42
第43図　篠原式土器実測図(2)----------43
第44図　篠原式土器実測図(3)----------45
第45図　篠原式土器実測図(4)----------46
第46図　東日本系土器実測図(1)----------47
第47図　東日本系土器実測図(2)----------48
第48図　土製品実測図----------49
第49図　石匙実測図----------49
第50図　石鏃実測図----------50
第51図　磨製石斧実測図----------51
第52図　打製石斧実測図----------52
第53図　石錘実測図----------53
第54図　削器・楔形石器・礫刃器・敲石・磨石実測図----------54
第55図　石皿実測図(1)----------55

第56図　石皿実測図(2)----------56
第57図　玉類実測図----------57
第58図　赤漆塗板実測図----------57
第59図　古墳時代の石敷遺構実測図----------58
第60図　須恵器実測図----------59
第61図　土師器実測図(1)----------60
第62図　土師器実測図(2)----------61
第63図　ミニチュア土器・土錘・土玉・臼玉実測図----------62
第64図　平遺跡出土の製塩土器実測図----------63
第65図　5世紀後半の日本海岸に見る製塩土器の二者----------64
第66図　製塩土器実測図(塩浜式)----------64
第67図　平成8年度調査による平遺跡の土器編年----------65
2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡
第68図　調査地周辺遺跡分布図----------70
第69図　奈具岡南古墳群位置図----------72
第70図　奈具岡南古墳群地形測量図(1)----------73
(1)奈具岡南古墳群
第71図　5号墳地形図----------74
第72図　5号墳石室実測図----------74
第73図　5号墳出土遺物実測図----------75
第74図　11号墳地形図----------76
第75図　11号墳主体部実測図----------76
第76図　11号墳出土遺物実測図----------76
第77図　22号墳地形測量図----------77
第78図　22号墳主体部実測図----------78
第79図　22号墳壺棺実測図----------79
第80図　22号墳壺棺使用土器実測図----------79
第81図　12号墳地形図----------80
第82図　12号墳第1主体部実測図----------81
第83図　12号墳第2主体部実測図----------81
第84図　12号墳第3主体部実測図----------81
第85図　12・13号墳間溝出土遺物実測図----------82
第86図　13号墳地形図----------82
第87図　13号墳主体部実測図----------83
第88図　13号墳出土遺物実測図----------84

第89図　21号墳地形図----------84
第90図　21号墳主体部実測図----------85
第91図　14号墳地形図----------85
第92図　14号墳主体部実測図----------86
第93図　14号墳主体部出土遺物実測図----------87
第94図　15号墳地形図----------87
第95図　15号墳主体部実測図----------88
第96図　16号墳地形図----------89
第97図　16号墳主体部実測図----------90
第98図　16号墳第３主体部実測図----------91
第99図　16号墳出土遺物実測図----------92
第100図　17号墳地形図----------92
第101図　17号墳第１主体部実測図----------93
第102図　17号墳第２・第３主体部実測図----------94
第103図　17号墳第１主体部出土遺物実測図----------95
第104図　18号墳地形図----------95
第105図　18号墳第１・第２主体部実測図----------96
第106図　18号墳墳丘部出土遺物実測図----------97
第107図　18号墳主体部出土遺物実測図----------97
第108図　19号墳地形図----------98
第109図　19号墳第１・第２主体部実測図----------99
第110図　20号墳地形図----------100
第111図　20号墳主体部実測図----------100
第112図　奈具岡南古墳群地形測量図(2)----------101
第113図　23号墳地形図----------102
第114図　23号墳主体部実測図----------102
第115図　４号墳地形図----------103
第116図　４号墳第１～３主体部実測図----------104
第117図　３・４号墳間溝出土遺物実測図----------104
第118図　３号墳地形図----------105
第119図　３号墳第１・第２主体部実測図----------106
第120図　３号墳主体部出土遺物実測図(1)----------106
第121図　３号墳主体部出土遺物実測図(2)----------107
第122図　８・９号墳地形図----------108
第123図　８号墳主体部実測図----------109

第124図　9号墳主体部実測図----------109
第125図　9号墳出土遺物実測図----------109
第126図　7号墳地形図----------110
第127図　7号墳主体部実測図----------111
第128図　炭窯実測図----------112
（2）シミズ谷城跡
第129図　調査地位置図----------118
第130図　縄張り図----------119
第131図　調査前地形測量図----------120
第132図　検出遺構平面図----------121
第133図　土層断面図----------122
第134図　上層遺構実測図----------123
第135図　虎口・石列ＳＸ08・鍛冶炉跡ＳＫ18実測図----------124
第136図　検出遺構平面図----------126
第137図　鍛冶炉跡ＳＫ25（上）・竪穴状遺構ＳＫ30（下）実測図----------127
第138図　Ｂ′地区遺構配置図----------129
第139図　柵列ＳＡ01実測図----------130
第140図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図----------131
第141図　出土遺物実測図（1）----------132
第142図　出土遺物実測図（2）----------133
第143図　出土遺物実測図（3）----------134
第144図　出土遺物実測図（4）----------135
第145図　出土遺物実測図（5）----------136
第146図　出土遺物実測図（6）----------138
第147図　出土遺物実測図（7）----------139
第148図　出土遺物実測図（8）----------140
第149図　出土遺物実測図（9）----------141
第150図　出土遺物実測図（10）----------142
第151図　Ｂ′地区出土遺物実測図----------143
３．五領池東瓦窯跡群
第152図　調査地位置図----------150
第153図　遺跡周辺図----------151
第154図　調査地南北・灰原断面図----------153
第155図　調査地全体図----------154
第156図　1号窯実測図----------156

第157図　2号窯実測図(1)----------158
第158図　2号窯実測図(2)----------159
第159図　3号窯実測図(1)----------161
第160図　3号窯実測図(2)----------162
第161図　出土遺物実測図(1)----------165
第162図　出土遺物実測図(2)----------166
第163図　出土遺物実測図(3)----------167
第164図　出土遺物実測図(4)----------168
第165図　出土遺物実測図(5)----------169
第166図　出土遺物実測図(6)----------170
第167図　出土遺物実測図(7)----------171

# 付　表　目　次

**2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡**
付表1　平成8年度国営農地開発事業に伴う発掘調査(今回報告分のみ)----------69
**(1)奈具岡南古墳群**
付表2　古墳一覧表----------115

# 図　版　目　次

**1．平遺跡**
図版第1　(1)調査地全景(南から)　(2)調査地全景(南から)
(3)調査地全景(下が北)
図版第2　(1)調査地全景(西から)　(2)土層セクション設定状況(南から)
(3)土層セクション設定状況(西から)
図版第3　(1)調査区東壁　(2)南北セクション東壁
(3)東西セクション南壁((4)のアップ)　(4)東西セクション南壁
(5)調査区東壁　(6)南北セクション西壁
(7)南北セクション東壁(土石流)　(8)東西セクション北壁
図版第4　(1)埋甕検出状況(東から)　(2)埋甕内部の調査状況

(3)埋甕内面の状況(標石及び蓋の検出)
図版第5　(1)土器集積状況(1)　晩期　(2)土器集積状況(2)　晩期
(3)石組炉の土器集積状況　(4)石組炉検出状況　(5)石皿検出状況
(6)石組炉検出状況((3)のアップ)　(7)調査風景(西から)
(8)調査風景(南から)
図版第6　(1)古墳時代石敷遺構全景(北から)　(2)石敷遺構近景(南東から)
(3)石敷遺構近景(北から)
図版第7　(1)晩期土器出土状況(1)　(2)晩期土器出土状況(2)
(3)晩期土器出土状況(3)　(4)晩期土器出土状況(4)
(5)晩期土器出土状況(5)　(6)晩期土器出土状況(6)
(7)注口土器出土状況(1)　(8)注口土器出土状況(2)
図版第8　(1)石斧出土状況(1)　(2)石斧出土状況(2)　(3)石錘出土状況
(4)土師器甕出土状況　(5)土器溜まり2検出状況
(6)土器溜まり1検出状況　(7)土師器椀出土状況
(8)製塩土器出土状況
図版第9　(1)篠原式土器出土状況　(2)新保式土器出土状況(1)
(3)元住吉山Ⅱ式土器出土状況　(4)船元式土器出土状況
(5)新保式土器出土状況(2)　(6)新保式土器出土状況(3)
(7)鷹島式土器出土状況　(8)北白川下層式土器出土状況
図版第10　縄文土器(1)
図版第11　縄文土器(2)
図版第12　縄文土器(3)
図版第13　北白川下層Ⅱc・Ⅲ式土器
図版第14　大歳山式土器
図版第15　鷹島式土器
図版第16　船元Ⅰ・Ⅱ式土器
図版第17　船元Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器
図版第18　平式(平CⅢ式)土器
図版第19　元住吉山Ⅰ・Ⅱ式土器
図版第20　宮滝式土器
図版第21　滋賀里式併行土器(1)
図版第22　滋賀里式併行土器(2)
図版第23　篠原式土器
図版第24　東日本系土器
図版第25　(1)他地域系土器(中期前葉)　(2)石錘・敲石

図版第26　磨製石斧・打製石斧・礫刃器
図版第27　石鏃
図版第28　(1)石匙　(2)玉・赤漆塗板
図版第29　須恵器・土師器
図版第30　土師器

**2．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡**

**(1)奈具岡南古墳群**

図版第31　(1)奈具岡南古墳群全景(北から)　(2)奈具岡南古墳群全景(南から)
図版第32　(1)中尾根調査前全景(北西から)　(2)北尾根調査前全景(南から)
(3)北尾根調査後全景(南から)
図版第33　(1)5号墳調査前全景(北西から)　(2)5号墳石室(北東から)
(3)5号墳石室・外護列石(南西から)
図版第34　(1)22号墳(左)・11号墳(右)(空撮、南から)　(2)11号墳主体部(西から)
(3)22号墳第1主体部(南から)
図版第35　(1)22号墳壺棺調査風景　(2)22号墳壺棺全景(北東から)
(3)22号墳壺棺内部状況(北東から)
図版第36　(1)12号墳(左)・13号墳(右)(空撮、北東から)　(2)13号墳全景(南西から)
(3)13号墳主体部(北東から)
図版第37　(1)13号墳第1主体部鉄器出土状況(西から)
(2)13号墳第2主体部鉄器出土状況(南から)
(3)13号墳第2主体部鉄器出土状況(西から)
図版第38　(1)21号墳(左)・14号墳(中央)・15号墳(右)(空撮、北東から)
(2)14号墳第1主体部(南西から)　(3)14号墳第2主体部(南西から)
図版第39　(1)21号墳主体部(西から)　(2)14号墳第3主体部断面(北西から)
(3)14号墳第3主体部玉類出土状況(北西から)
図版第40　(1)15号墳全景(南から)　(2)15号墳第1主体部(南東から)
(3)15号墳第1主体部西小口(西から)
図版第41　(1)16号墳(左)・17号墳(右)(空撮、北から)　(2)16号墳主体部全景(東から)
(3)16号墳第2・第4主体部(北東から)
図版第42　(1)16号墳第2主体部(東から)　(2)16号墳第1主体部鉇出土状況(西から)
(3)16号墳第1主体部断面(南から)
図版第43　(1)17号墳調査風景(東から)　(2)17号墳第1・第3主体部(南西から)
(3)17号墳第1主体部鑿・鉇出土状況(南東から)
図版第44　(1)18号墳(左)・19号墳(右)(空撮、北東から)　(2)18号墳主体部(南西から)
(3)18号墳第1主体部鉄剣・鉇出土状況(北西から)

図版第45　(1)18号墳主体部調査風景(南西から)　(2)18号墳第２主体部(南西から)
(3)18号墳第２主体部玉類出土状況(南西から)
図版第46　(1)19号墳主体部全景(北東から)
(2)19号墳主体部断面(南西から)　(3)墳丘掘削作業風景
図版第47　(1)３号墳・４号墳・23号墳(空撮、北から)
(2)３号墳第２主体部全景(西から)　(3)３号墳第１主体部全景(西から)
図版第48　(1)３号墳第２主体部遺物出土状況(1)
(2)３号墳第２主体部遺物出土状況(2)
(3)３号墳第１主体部遺物出土状況(1)
(4)３号墳第１主体部遺物出土状況(2)
(5)３号墳第１主体部遺物出土状況(3)
(6)３号墳第１主体部遺物出土状況(4)
図版第49　(1)14号墳第１主体部(北西から)　(2)14号墳第３主体部(西から)
(3)４・５号墳間溝断面(北から)
図版第50　(1)８・９号墳調査前遠景(北東から)　(2)８号墳主体部(南東から)
(3)墳丘部遺物出土状況
図版第51　(1)７号墳全景(東から)　(2)７号墳主体部(北西から)　(3)現地説明会風景
図版第52　出土遺物(1)
図版第53　出土遺物(2)
図版第54　出土遺物(3)
(２)シミズ谷城跡
図版第55　(1)調査前全景(上から、左上が北)　(2)上層遺構検出状況(上から、左上が北)
図版第56　(1)登り道部分岩盤削り出しの状況(北西から)　(2)登り道部分(北西から)
(3)上層虎口集石(北から)
図版第57　(1)上層石列ＳＸ08検出状況(南西から)
(2)上層土坑ＳＫ10完掘状況(南西から)　(3)同上(北東から)
図版第58　(1)上層茶臼出土状況(北東から)　(2)鍛冶炉跡ＳＫ18検出状況(南東から)
(3)同上(上から、左上が北)
図版第59　(1)下層遺構検出状況(南東から)　(2)下層土坑検出状況(南東から)
(3)下層遺構検出状況(北西から)
図版第60　(1)下層鍛冶炉跡ＳＫ25礫出土状況(東から)　(2)同上下部構造(西から)
(3)同上完掘状況(西から)
図版第61　(1)下層土坑ＳＫ28(北から)　(2)同上(南から)
(3)竪穴状遺構ＳＫ30完掘状況(北東から)
図版第62　(1)Ｂ′地区掘立柱建物跡ＳＢ02(南から)　(2)同上(東から)

(3)柵列ＳＡ01検出状況(南西から)
図版第63　出土遺物(1)　土器
図版第64　出土遺物(2)　銅製品
図版第65　出土遺物(3)　鉄製品
図版第66　(1)出土遺物(4)　銭貨、表面　(2)出土遺物(5)　同上、裏面
３．五領池東瓦窯跡群
図版第67　(1)調査地周辺(北東から)　(2)調査地周辺(南東から)
(3)調査地周辺(南西から)　(4)調査地遠景(南西から)
図版第68　(1)調査地全景(上が北)　(2)窯跡群全景(上が北)
図版第69　(1)調査地遠景(南西から)　(2)調査前風景(東から)
(3)調査前風景(南から)
図版第70　(1)窯跡群全景(南から)　(2)１・２号窯全景(南から)
図版第71　(1)１号窯掘削状況(南から)　(2)１号窯完掘状況(南から)
(3)１号窯焚き口から隔壁(南から)
図版第72　(1)１号窯焼成室奥壁崩落状況(南東から)
(2)１号窯焼成室火床検出状況(北から)
(3)１号窯焼成室火床に使用した丸瓦検出状況(北から)
図版第73　(1)１号窯西端通焔孔軒平瓦検出状況(南から)
(2)１号窯燃焼室縦断面(東から)
(3)１号窯焚き口東壁軒平・軒丸瓦検出状況(南西から)
図版第74　(1)２号窯掘削状況(南から)　(2)２号窯
(3)２号窯焚き口東壁検出状況(南西から)
図版第75　(1)２号窯焼成室天井用瓦出土状況(南から)　(2)２号窯焼成室縦断面(東から)
(3)２号窯焼成室奥壁検出状況(南から)
図版第76　(1)２号窯焼成室床面検出状況(東から)
(2)２号窯隔壁壁体内瓦積み状況(西から)
(3)２号窯隔壁壁体内瓦積み状況(北から)
図版第77　(1)２号窯燃焼室隔壁検出状況(南から)　(2)２号窯燃焼室横断面(北から)
(3)２号窯焚き口閉塞状況(東から)
図版第78　(1)３号窯掘削状況(南から)　(2)３号窯完掘状況(南から)
(3)３号窯全景焚き口付近閉塞状況(南東から)
図版第79　(1)３号窯焼成室天井用瓦検出状況(西から)
(2)３号窯焼成室奥壁崩落状況(東から)
(3)３号窯焼成室火床検出状況(北から)
図版第80　(1)３号窯焼成室西壁検出状況(東から)　(2)３号窯燃焼室完掘状況(南東から)

(3) 3号室燃焼室天井残存状況(東から)
図版第81　(1) 3号窯隔壁検出状況(南から)　(2) 3号窯焚き口閉塞状況(南から)
(3) 3号窯焚き口完掘状況(南から)
図版第82　(1) 2号窯・SD01検出状況(南から)　(2) SD01上面瓦出土状況(南から)
(3) SK03掘削状況(南から)
図版第83　(1) SK04掘削状況(南から)　(2) SD05掘削状況(西から)
(3)調査地南斜面全景(北から)
図版第84　(1)調査地北斜面断面2号窯東側付近(西から)
(2)灰原掘削状況(南から)　(3)灰原断面1号窯南側谷部分(南から)
図版第85　出土遺物(1)　土器
図版第86　出土遺物(2)　軒丸瓦
図版第87　出土遺物(3)　軒平瓦
図版第88　出土遺物(4)　軒平瓦

# 1．平遺跡発掘調査概要

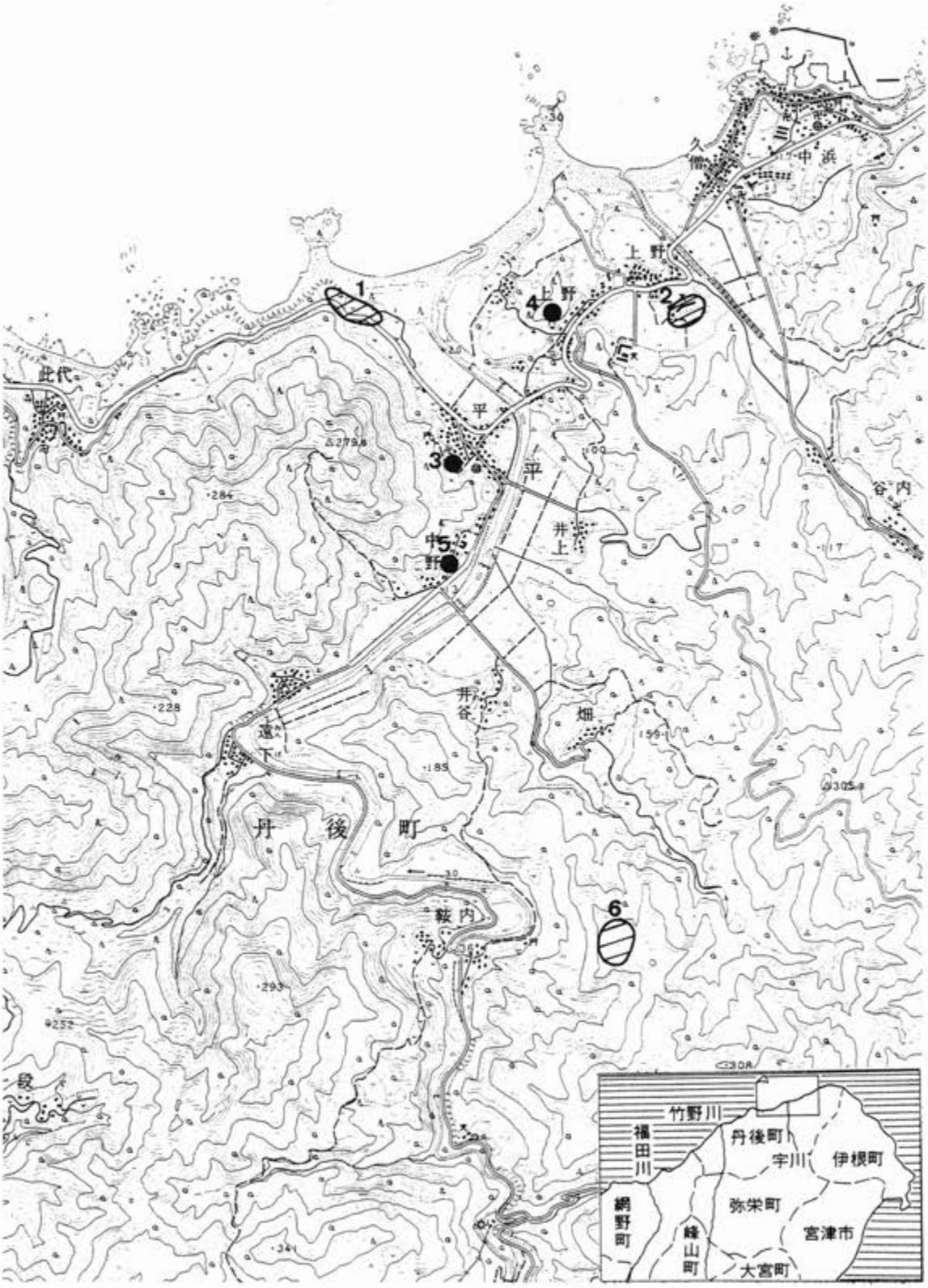
## 1．はじめに

平遺跡は、近畿地方の最北端の経ヶ岬より西に7km隔たった丹後町平小字湊に所在する縄文・古墳時代を中心とする遺跡である。遺跡の現況は、北に150mで日本海に達する砂丘の松林で、天然鮎の遡上で知られる宇川の左岸に立地する。この遺跡の発見の経緯は、昭和37年11月に畑の開墾中に土器が出土することが、宇川中学校花光　勤氏(当時)、峰山中学校坪倉利正氏(当時)を経て、同志社大学の故酒詰仲男氏に伝えられたことによる。酒詰氏と同行した堅田　直氏は、遺跡発掘の必要性を痛感し、同志社大学考古学研究会とともに、同年12月に試掘調査が実施された。次いで、昭和38年5月には本格的な発掘調査が実施され、縄文時代前期から晩期までの土器が出土し、東日本の土器が若干含まれていることに気づかれた。ただし、最下層部で湧水が著しく、調査を断念したという。このため、昭和40年7月28日から8月10日まで、昭和38年のトレンチの東側に並行して、帝塚山大学考古学研究室の事業としてトレンチ調査が実施され、昭和38年の調査を補足する資料が得られた。2つの調査成果は、堅田　直氏によって昭和41年に『京都府丹後町平遺跡調査概要』としてまとめられ、「平式土器」の名とともに、広く知られるところとなったが、その後30年あまり、平遺跡はおろか、宇川地区での発掘調査が少なかったために、平遺跡を地域史の中でどのように位置付けるかは長らく不明のままであった。

平成8年度になって、「一般国道178号線丹後リゾート関連道路」(丹後半島周遊道路)の改良事業に先立ち、昭和38・40年度の調査地の隣接地が造成計画にかかることとなり、京都府土木建築部の依頼を受けて、当調査研究センターが発掘調査を実施することとなった。調査面積は約1,000㎡で、調査期間は平成8年8月26日から平成8年12月5日まで実施した。遺物が多量に出土したため、平成8年度は現地調査を優先して行い、平成9年度に概要報告を行うことになった。発掘調査及び整理にあたっては、丹後町教育委員会をはじめ、地元平地区や、作業員、補助員、整理員の方々に非常にご協力いただいた[(注1)]。また、発掘・整理現場にも、多くの方々に足を運んでいただき、多大なるご指導をいただいた。末尾ではあるが、記して感謝の意を表したい。

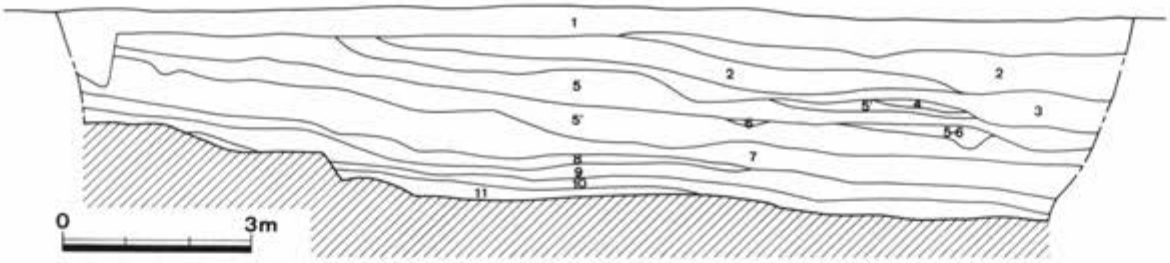
## 2．位置と環境(第1図)

平遺跡の周辺での発掘調査は少なく、3度にわたる平遺跡の調査以外の発掘調査は行われていない。丹後町上野小字カスガに所在する上野遺跡が知られる程度である。上野遺跡は、宇川右岸の河岸段丘に立地し、土器・石器・石棒などが採集されている[(注2)]。それ以外の遺跡は、『京都府遺跡地図』によれば、中世山城が記されているが、実態は不明である。ただし、平地区の南方には宇川の河岸段丘が発達しており、分布調査によって多くの遺跡が周知されることが期待されよう。




第1図　調査地位置図(1/25,000)

1.平遺跡　2.上野遺跡　3.平城跡　4.宇川上野城跡　5.宇川中野城跡　6.倉内城跡




第２図　昭和40年度の平遺跡の調査(土層断面図)

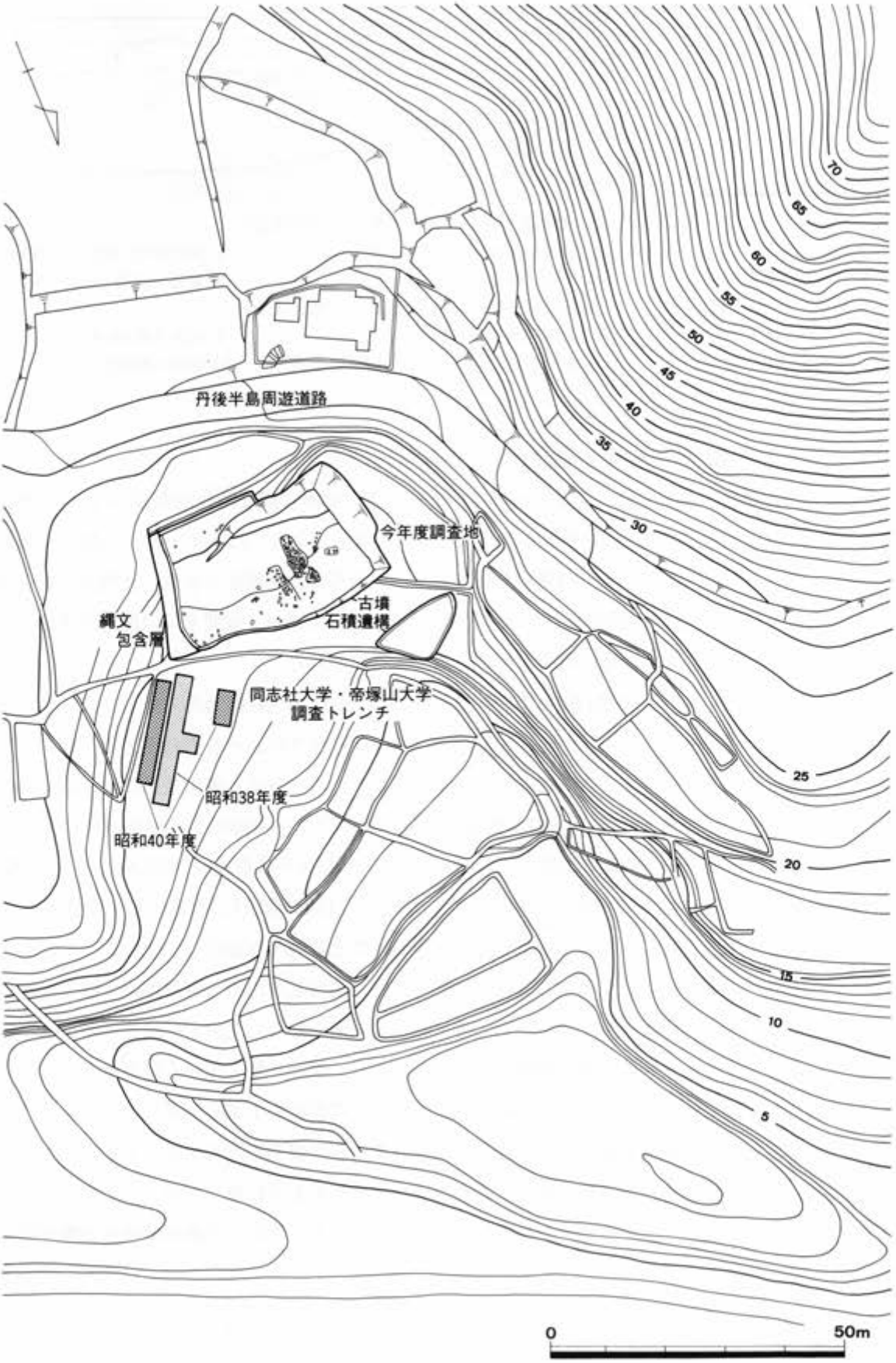
1.黒褐色砂層　2.淡黒褐色砂層(晩期：上層)　2.黒色砂層(晩期：下層)
3.灰黒色砂層(宮滝式)　4.黒色砂層(元住吉山式)　5.黄褐色砂層(中津―平式)
5-6.黒褐色砂層(平式)　6.灰白色～暗灰色砂層(黒木Ⅱ～船元式)
5′.黒褐色砂層(後期：上層)　5′.淡黒褐色砂層(下層)　7.灰黒色砂層(船元式)
8.黒色砂層(大歳山式)　9.含砕石黒色粘土層(北白川下層Ⅲ式)　10.含砕石暗褐色粘土層
11.含砕石黄褐色粘土層

## ３．　過去の調査と平式土器をめぐる見解(第２図)

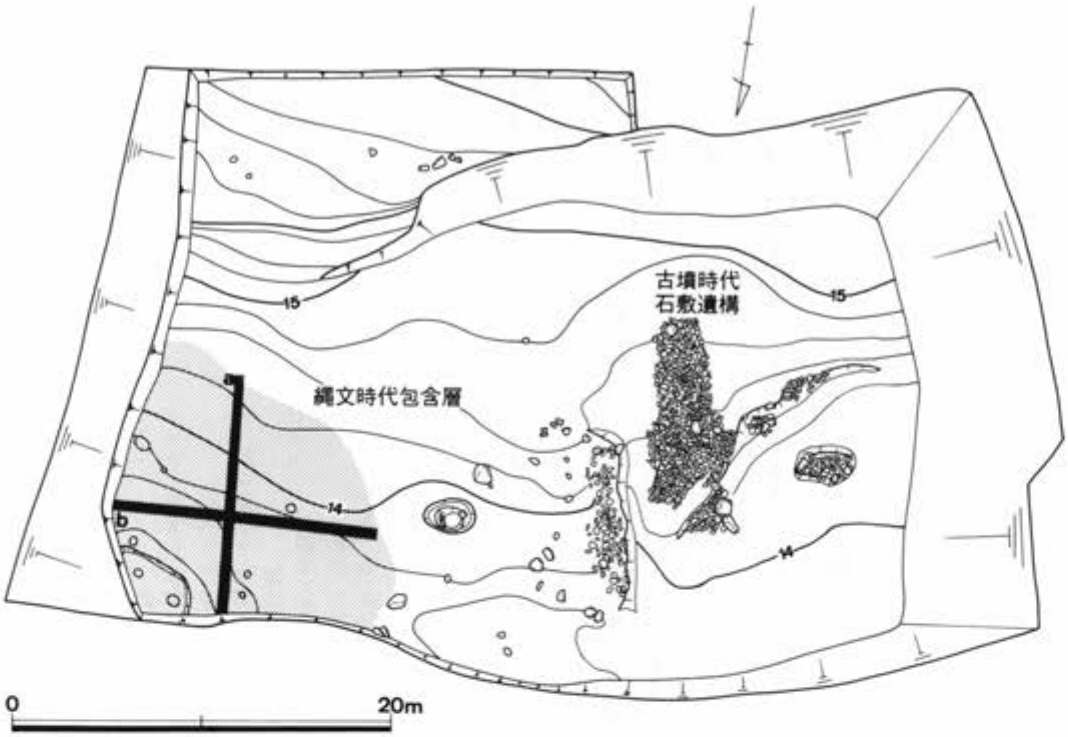
昭和38・40年度の調査では、深さ４ｍに及ぶ砂丘の包含層から縄文時代前期末(北白川下層Ⅲ式)から晩期(滋賀里式)にわたる多量の土器・石器・石製品、さらには弥生土器、土師器・須恵器などが出土した[注3]。この包含層は11層に分層された。旧地形は、北側から南側へと傾斜する含砕石黄褐色粘土層で、その堆積状況から、早期には遠かった海岸線が、前期末には海進か沈降作用によって海岸線が近づき、砂層の堆積をもたらしたと推定された。

また、土器については、前期(北白川下層Ⅲ式・大歳山式)、中期(船元式・里木Ⅱ式・平式)、後期(中津式・元住吉山Ⅱ式・宮滝式)、晩期(滋賀里式)が検出され、それぞれ平ＺⅠ・Ⅱ式、平ＣⅠ～Ⅲ式、平ＫⅠ～Ⅲ式、平ＢⅠ式の名が与えられた。この一方で、岡田茂弘氏は「縄文時代」(『日本の考古学』)で瀬戸内と近畿の土器編年を対照する中で平遺跡の土器の位置付けを行ったが[注4]、調査者である堅田　直氏と齟齬したために、特に中期末(平ＣⅢ式)と後期初頭(平ＫⅠ式)の土器編年について、議論を呼ぶことになった。また、今村啓爾氏は、平式土器の名を使っており[注5]、この名称が広く知られるようになったが、中期末の土器編年が深化していなかったために、便宜的なものに止まっている。次いで、泉　拓良氏は、京都府北白川追分町遺跡の土器を整理して、中期末の土器型式に北白川Ｃ式の名を与え、それを四期区分した北白川Ｃ式４期が平式に当たると位置付けている[注6]。ここでは、深鉢Ａ３類を主体とし、深鉢Ｂ類・浅鉢Ａ類がほとんど見られないことを特徴とする。次いで玉田芳英氏は、兵庫県片吹遺跡の土器を位置付ける中で平式土器に言及し、把手付浅鉢が共伴し、その背景には東日本からの要素の流入が想定されるとした[注7]。

その後、京都府浜詰遺跡の調査[注8]で平式土器の類例が知られるようになったが、その型式内容の理解については、いぜん、見解が分かれているのが現状である。近年、兵庫県城崎郡竹野町見蔵岡遺跡で多量の平式土器と、それに共伴する遺物が確認された[注9]。この遺跡では、石棒未製品なども検出されており、平式土器の実態がかなり明確になった。その中で、平式土器は、独立した安定した型式として捉えられている。




第３図　調査地周辺地形図(1/1,000)




第4図　調査トレンチ平面図(1/400)

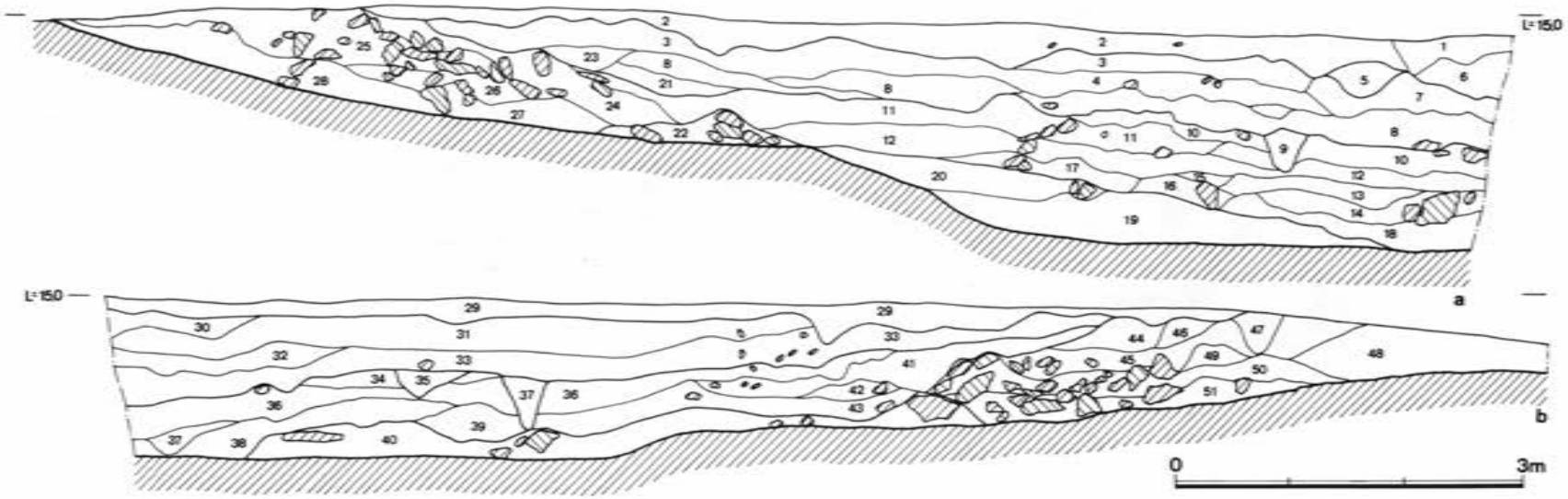
## 4.　縄文時代遺構の概要

**(1)遺構の配置**(第4図、図版第1)

平成8年度の調査地では縄文時代早期～晩期の包含層、古墳時代中期末～後期の石敷遺構、中世の水田跡(杭列)を検出した。縄文時代包含層の遺構は、砂丘土壌のために検出が容易ではなく、地山に掘り込まれた竪穴状遺構、貯蔵穴とピット、晩期の遺構面での埋甕及び石敷炉を数えるにすぎない。また、包含層は調査区の北東コーナー部に向かって厚さを増し、北に向かって漸次傾斜して堆積している。調査区西側は、砕石混じりの黄褐色粘質土がのびるが、それを掘り込んで古墳時代の石敷遺構が築かれている。また、中世の水田跡は、古墳時代石敷遺構が完全に砂で埋没した後に造成されたもので、ここでは南西から東側に向けて計6本の杭を検出している。水田の畦畔に伴うものと考えられる。

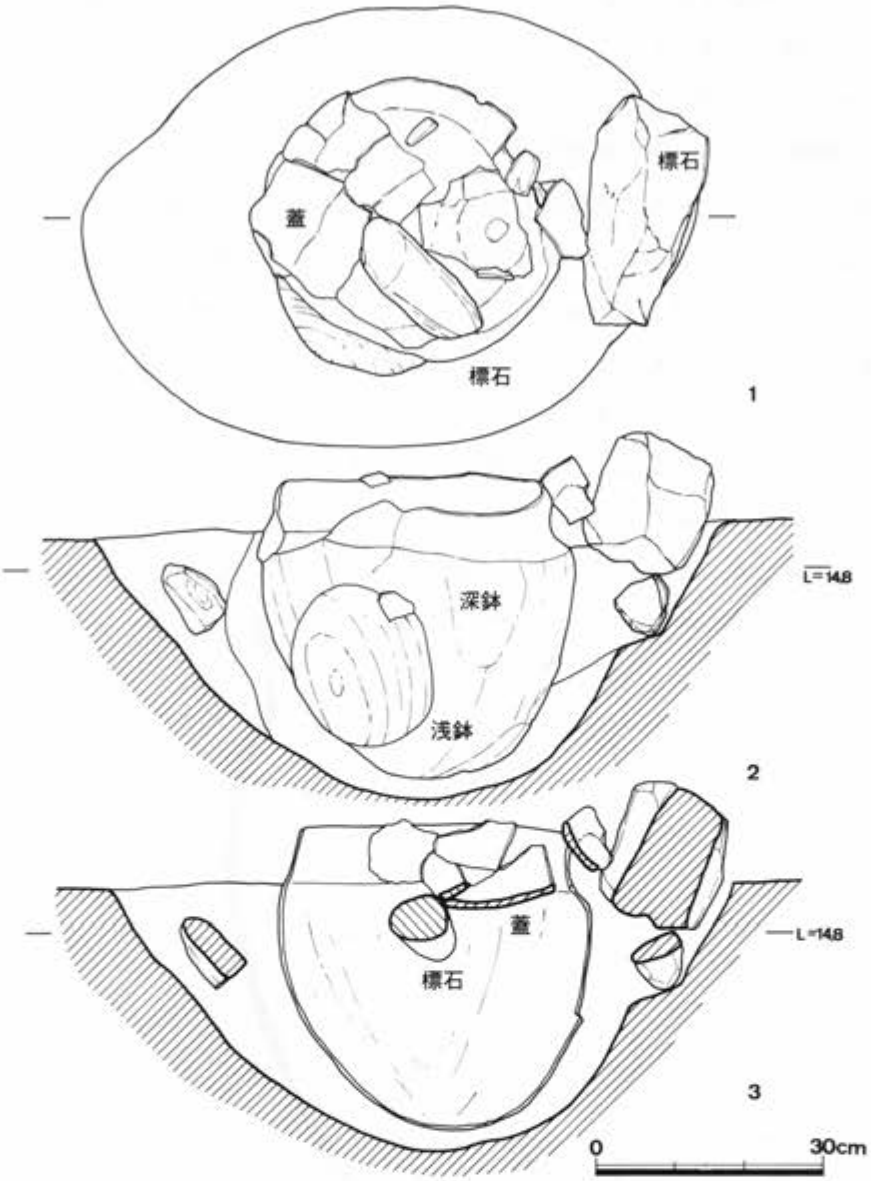
**(2)層位**(第5図、図版第2・3)

この調査区の地山は、過去の調査と同じく、人頭大の流紋岩の砕石を含む黄褐色粘質土である。ここは山腹の湧水が著しく、上方からの細粒砂が堆積する環境にある。平遺跡を構成する砂層は、海成砂層と同時に南側丘陵からの流入も大部分を占めている可能性がある。この砂層は、厚さ2.2mを測り、上層の黒色～黒褐色砂層(第5図2～8・29～33)と下層の暗褐色砂層(第5図10～18・34～39・41～46)とに大きく2大別される。黒色砂層は極めて細粒であり、植物遺存体を多量に含み、腐植がかなり進んでいる。一方、褐色砂層は黒色砂層と比較すると粗粒であり、礫などの砂以外のものも多く含む。この差は、砂丘が不安定＝形成途上であるか、安定＝形成終了であるかに反映しているようである。過去の調査との対応は、黒色砂層が過去の第2～4層に対応



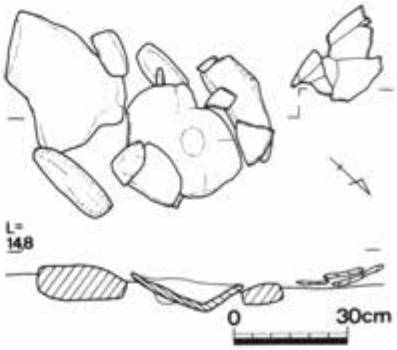

第５図　平遺跡土層断面図（ａ・ｂは第４図と対応）

1. 攪乱（黒色砂層）
2. 黒色砂層（きめが細かい）（晩期）
3. 淡黒褐色砂層
4. 灰黒色砂層（後・晩期）
5. 暗黒色砂層（晩期のピット）
6. 攪乱（礫層）
7. 黒褐色砂層
8. 淡黒褐色砂層
9. 黒褐色砂層（平式期のピット）
10. 黄褐色砂層（平式期）
11. 暗灰色砂層（船元式期？）
12. 淡黒褐色砂層
13. 灰黒色砂層（船元式期）
14. 暗黒褐色砂層
15. 淡黒褐色砂層ブロック
16. 灰黒色砂層（13と同一か？）
17. 暗灰黒色砂層
18. 淡黒色砂層
19. 含砕石暗褐色粘土層（地山風化土層）
20. 淡黒色砂層
21. 黄褐色礫ブロック
22. 暗褐色礫層
23. 暗黄褐色礫層ブロック
24. 暗黄褐色礫層（土石流）
25. 暗褐色礫層
26. 暗褐色粘質土層
27. 暗黒褐色砂層
28. 淡褐色砂層
29. 黒色砂層（晩期・２に対応）
30. 淡黒色砂層（後・晩期）
31. 灰黒色砂層（後・晩期）
32. 暗黒色砂層（後期）
33. 黒褐色砂層（後期）
34. 淡黒褐色砂層
35. 淡黒褐色砂層（平式期のピット）
36. 灰黒色砂層（船元式期）
37. 淡黒褐色砂層（平式期のピット）
38. 淡黒色砂層
39. 黒色砂層（大歳山・船元式期）
40. 含砕石暗褐色粘土層（地山風化土層か？）
41. 黒色混礫砂層
42. 淡黒褐色砂層
43. 黒色砂層（大歳山・船元式期）
44. 黒褐色混礫土層
45. 淡黒褐色土層
46. 褐色混礫土ブロック
47. 淡黒褐色砂層
48. 黄褐色礫層（地山風化土）
49. 暗黄色礫層ブロック
50. 暗褐色混礫土
51. 含砕石褐色土層（地山風化土層）




第６図　埋甕出土状況図(1/10)
1.平面図　　2.立面図　　3.断面図

する縄文時代後・晩期のものであるのに対し、褐色砂層が第２図の第５′～９層に対応する縄文前～中期の形成になる。上層と下層の遺物の混在は小さく、砂丘が安定した後は、遺構面が形成され集落が展開したと考えられる。各々の砂層は、ラミナ状の堆積境界の線を認めることができ、分層が可能である。だが、過去の調査のような型式別に単純な包含層と認めることはできず、砂丘の形成によって遺物の移動が大きかったことが想像される。



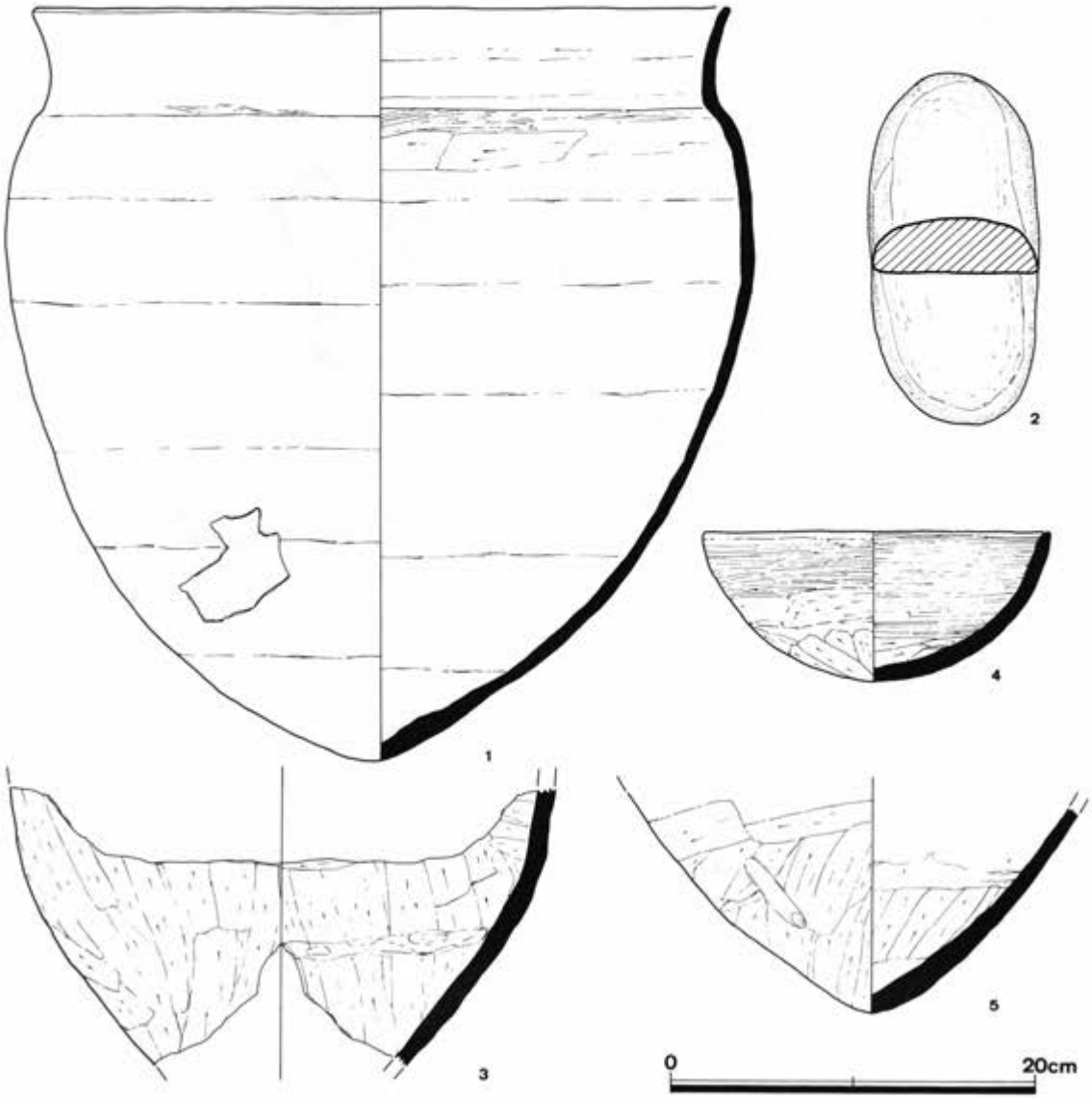

第７図　石組炉実測図(1/20)

また、過去のトレンチとの関連で注目される点は、過去の調査区が北から南へと傾斜しているのに対し、今回の調

査区は南から北へと傾斜する点である。このことから、平遺跡では、窪んだ地形に遺物とともに砂が流入して包含層が形成されたことがわかる。つまり、前期末～中期末にかけて砂丘がこの窪地に流入し、後期になり安定した居住に使われるといった地形変遷の状況がうかがえるのである。

**(3)埋甕・石組炉**(第６・７図、図版第４・５)

地表下20cmを測る部分で土器の大形破片が散乱し、石皿、埋甕、石組炉などが検出されたため(図版第５)、遺構面が想定された。時期は篠原式である。特に埋甕(第６図)は、高さ40cm程度の深鉢を正立の状態で、口縁部まで埋められている。この深鉢は、装飾が全く無く、内外面には煤が付着し、墓専用に作られたものではないと推定される。口縁部内面には同型式の深鉢の胴部下半を打ち割って、転用の蓋としたものが２点検出された。また、長さ19.2cm・厚さ2.8cmの偏平な板石を標石として使用しており、それが斜めに落ち込んでいた。深鉢内部は、周囲からの黒色砂層で充填されていたが、被熱したらしい骨片が10片ほど検出された。これは未鑑定で、埋甕に伴うかどうかも不明であるが、人骨であれば焼骨葬の可能性を示唆するものである。また、この




第８図　埋甕関連遺物(土器・石製品)実測図(1/4)

深鉢の胴部下方には、焼成後に拳大の孔が開けられ、それが椀形の浅鉢によって塞がれていた。

また、この面で石組炉２基を検出した(第７図)。内１基は、長さ20cm程度の棒状石材３点を組んだ上から尖底の深鉢底部を検出しており、石材は被熱していた。このことから、石組炉の可能性がある。この石組炉と埋甕は同一面であるが、住居内に営まれたとは考えられない。周辺に動物遺存体や大形土器片などが散乱しているので、いずれも屋外に設けられていたと考えられる。

**(4)埋甕に関連する遺物**(第８図、図版第４・11)

埋甕に関連する遺物として、完形深鉢１、深鉢胴部下半破片２、浅鉢１を数える。深鉢(１)は水平口縁で、口縁端部は面取りされている。口頸部はゆるく屈曲し、内面には二枚貝による条痕の調整が一部、消されずに認められる。また、わずかに接合痕が認められ、色調は明赤褐色を呈し、焼成は極めて良好である。浅鉢(３)は、外面下半に削り痕があるが、内面及び外面上半はていねいに磨かれている。色調は暗黄灰色で、軟質の焼き上がりである。蓋に使用された深鉢胴部片は、埋甕本体よりも厚い作りで、削り痕がそのまま残されている。両者とも、極めてよく似た作りである。特に、底部片(５)は、被熱痕跡及び煤が明確に認められ、実用(煮炊き)に供されたものであることがうかがえる。

丹後半島では、網野町十王堂遺跡、舞鶴市桑飼下遺跡などで埋甕が知られているが、それらに比しても、本例は大型でていねいである。

## ５．縄文時代遺物の概要

### (1)縄文土器

#### A．早期

**①押型文土器**(黄島式土器)　(第９図)

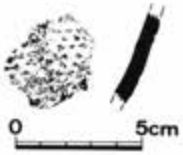
一辺３cm四方程度の小片で、黄褐色で固い焼きをしている。外面には方向が異なるポジティブな押型文を施す。粒は、径1.8cmを測る。単純に開く深鉢の胴部片と考えられるが、小片のために全形を想定し得ない。粒の大きさから黄島式土器と考えられるが、早期に属する土器片はこれのみである。

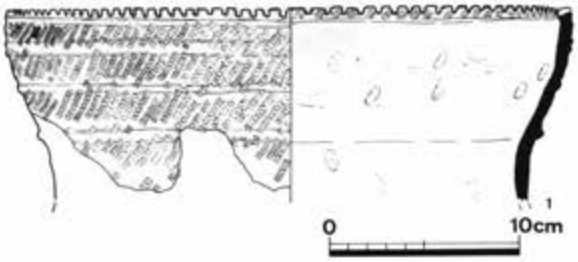
#### B．前期

**①北白川下層Ⅱ・Ⅲ式土器**(第10～12図、図版第10・13)

暗茶褐色の色調にC字形爪形文あるいは、特殊突帯文を施す薄手の土器で、すべて深鉢である。全形をうかがえる１以外は、小片が多いため、口縁部を中心に提示する。

第10図・第11図２～９は、暗黄褐色の色調で、密なC字形爪形文を施している。北白川下層Ⅱａ式に該当するが、




第９図　黄島式土器(1/3)　第10図　北白川下層Ⅱｃ式土器実測図(1/4)

第11図　北白川下層Ⅱａ・Ⅱｃ・Ⅲ式土器実測図(1/3)

文様からこの時期に当てられるものはこの８点を数えるのみである。器壁には爪圧痕を留めるものが多い。北白川Ⅱｃ式とⅢ式は区別が明瞭ではなく、挿図では一括して提示している。その器形は、①口縁部を肥厚させ、端部に凹凸の刻目を施した地文が縄文のもの(10～25・41～46)、②

第12図　北白川下層Ⅱｃ・Ⅲ式土器実測図(1/3)

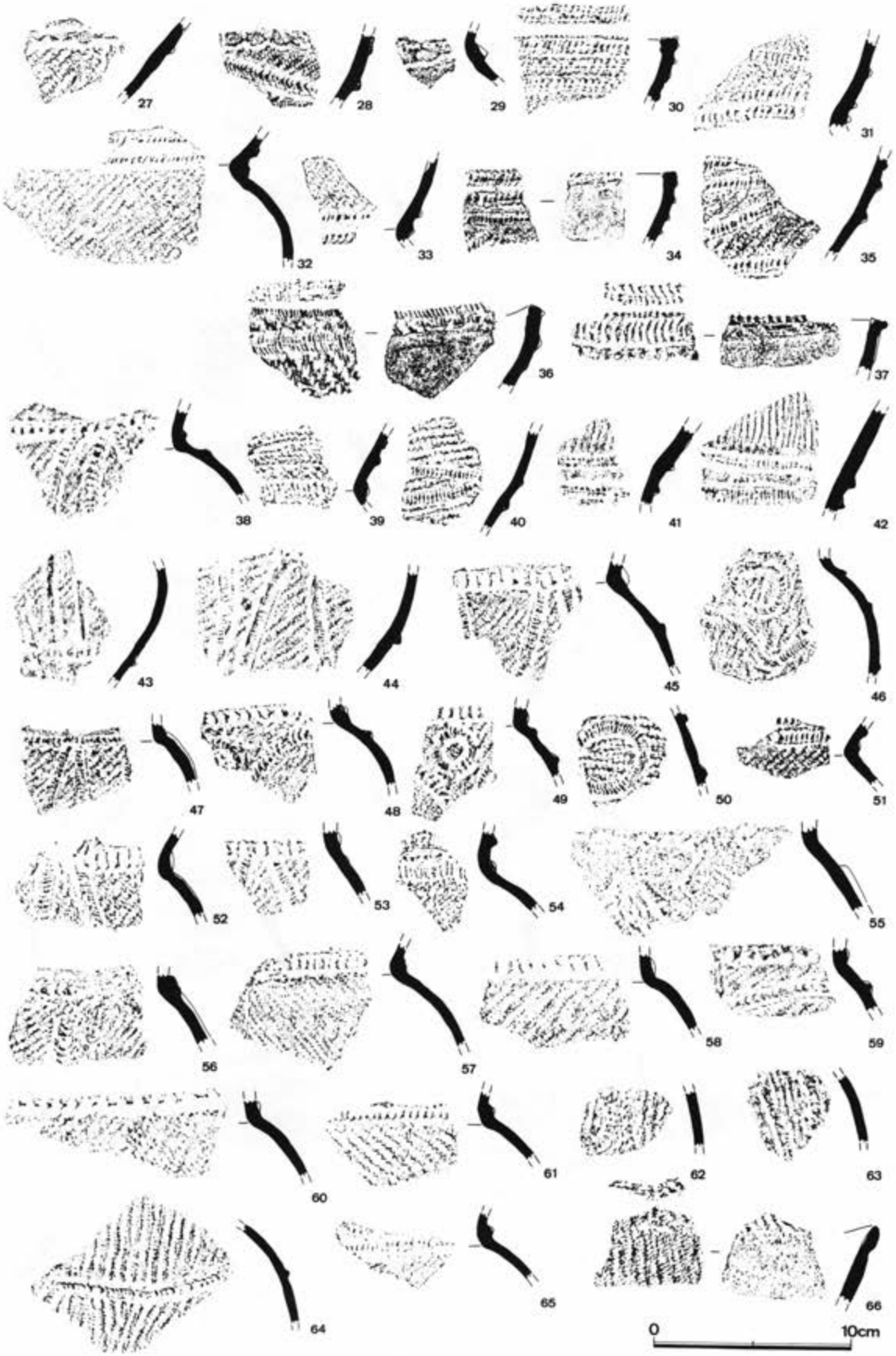
口縁部を刻まないが、端部から細身の特殊突帯文を貼り付けた、地文に縄文を持つもの(26～33)、③水平口縁で地文に縄文を持つもの(34)、④地文が無文で特殊突帯文を持つもの(39・47)に分類できる。①の形態の土器は、外面及び内面上端に縄文を転がした後、端部を密に刻んでいる。すべて水平口縁である。口縁上端付近から線状の細い突帯をめぐらせ、その上から縄文を施すものもある。②は波状口縁のものが多く、地文の上から突帯を貼り付ける点が1とは相違する。また、器形でも、27のように頸部が強く屈曲するものがみられ、ゆるやかに屈曲する①とは相異点が多いようである。③は、器形的には②と近いが、地文が羽状縄文のものである。特に、平遺跡で地文が羽状縄文のものは、水平口縁のものに限られている。④については、2点のみである。体部については、刻目を持つ特殊突帯を口頸部にめぐらせており、Ⅲ式に属するものを提示した。文様モチーフには、連弧文を施すものや円弧によって文様帯を区画したものが多い。

また、第15図に底部を図示したが、底部下端にまで縄文を転がしたものが多い。また、上げ底気味になるものと平底のものとがあり、上げ底のものは、底部下端が強く外側に突出する。7は底部内面の外周に沿って爪圧痕をめぐらせている。

②**大歳山式土器**(第13・14図、図版第14)

口縁端部の内外面に粘土を貼り付けて拡張し、その両側にΣ状に先端をカットした竹管を原体とする工具によって施文した土器である。色調は、暗灰褐色～赤褐色を呈するものが多く、北白川下層式のものよりも焼きがよく、ていねいな作りのものが多い。すべて深鉢である。平遺跡の大歳山式土器には、①波状口縁で、Σ状押圧突帯を口縁部と平行にめぐらせたもの(1～18)、②水平あるいは波状口縁で、刻目突帯を口縁部と平行にめぐらせるもの(19～21・30)、③水平口縁で、端部に垂下する突帯を持ち、口縁部に平行して貝押圧の突帯、連弧状にΣ状押圧の突帯文をめぐらせたもの(22～29)、④水平口縁で口縁端部にC字形刻目を持ち、口縁上端に沿ってC字形爪形文を持つもの(36・37)に大別できる。①は、単方向に傾斜する縄文を施した後、特殊突帯を貼り付けている。②は、平遺跡の大歳山式土器の破片中、最も多いが、2本の突帯を同時に貼り付けて施文したものと、1本ごと独立に貼り付けるものが認められる。但し、刻目突帯は口縁上端のみであり、その下の特殊突帯はΣ状押圧で施文している。③は、口頸部が強く屈曲する器形で、口縁上端と口頸部に水平にめぐらせた突帯に小型二枚貝の腹縁を上向きに押圧している。22～29は同一個体である。④は2点しかなく、平遺跡の大歳山式土器の中では特殊な位置を占める。Σ状押圧ではないので、大歳山式に含まれるかどうかは微妙であるが、口縁部を拡張して、端部を両面から施文することから大歳山式に含めることにした。平遺跡で認められる4類の大歳山式土器は、口縁部上端の突帯に、Σ状押圧突帯、刻目突帯、貝押圧突帯というヴァリエーションが見られるが、その下の連弧状モチーフはΣ状押圧突帯に統一されるようである。31～65は、頸部以下の体部破片である。そのモチーフは、肩部の湾曲部にΣ状押圧を施した波状文と円形文を加飾したものと、肩部の文様帯を直線的に区切るものとがある。両者は、口頸部に刻目突帯をめぐらせている。66は、全面縄文の土器で端部の拡張がみられないが、強い撚りから大歳山式土器と判断されるものである。第15図4は、大歳山式土器の底部と考えられる五角形底の破片で、外面

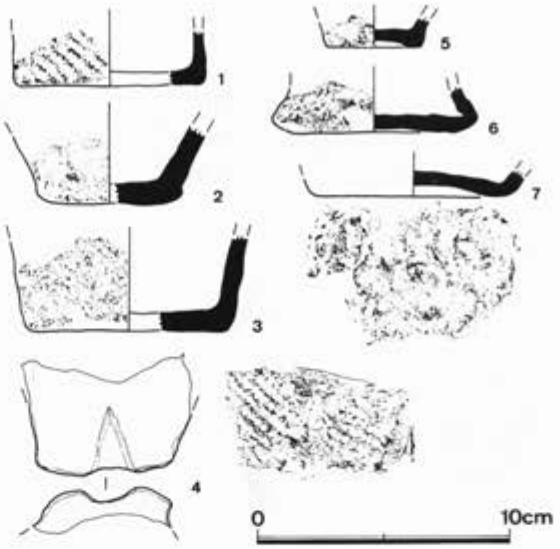
第13図　大歳山式土器実測図(1)　1/3




第14図　大歳山式土器実測図(2)　1/3

にはＲ１の縄文が認められる。底の突起と突起の間は強く指で押さえられている。大歳山式土器の底部片に当てられるものはこの１点のみである。

（河野一隆）




第15図　前期の土器底部実測図(1/3)

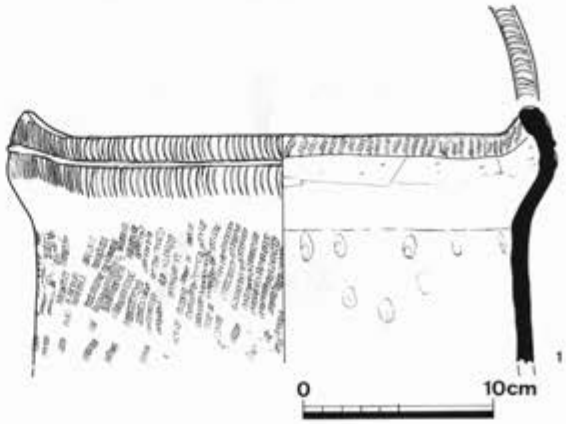
### Ｃ．中期

**①鷹島式土器**(第16・17図、図版第10・15)

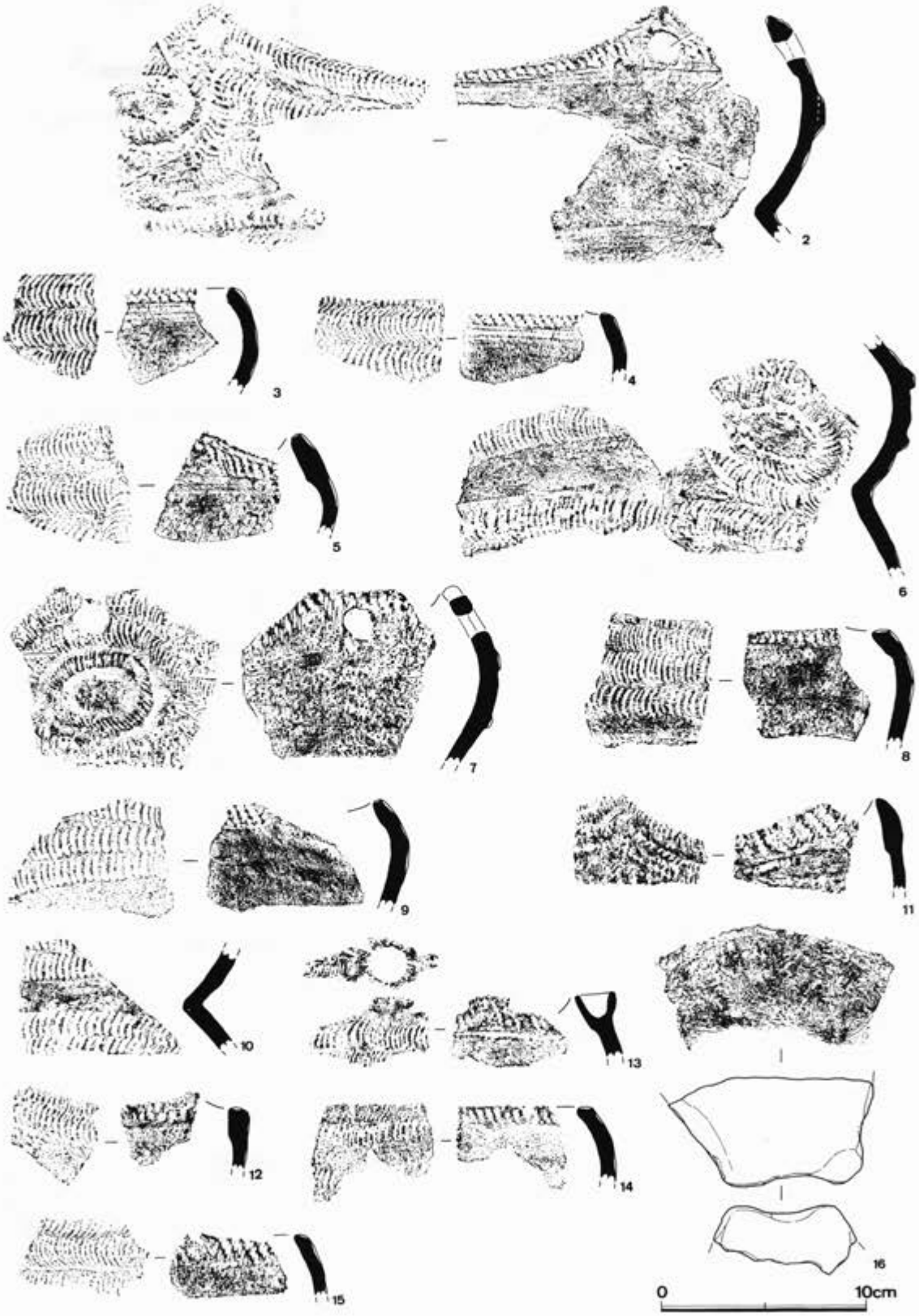
今回の調査では、鷹島式の土器片が一定量出土した。破片は16点(底部１点)、個体数は10点である。色調は淡赤褐色～黄褐色で、口縁上端に逆Ｃ字形爪形文を施し、外面胴部と内面上半に節の中にシワの見られない特殊な縄文を施す。器形は、胴部の強くくびれるキャリパー形を呈する。

１は、対向方向に三角形突起を持つ平縁のものである。結節隆帯上にＣ字形爪形文を２条施し、口縁上端には磨滅のため、はっきりとはわからないが、逆Ｃ字形爪形文を施している可能性がある。地文は、頸部以下と内面上半にＬＲ縄文を施す。頸部の屈曲が弱いが、鷹島式独特の撚りを用いており、ここでは鷹島式に入れた。しかし、三角形突起を持つ点や、頸部の屈曲が弱いことから、鷹島式の規範から離れている。２～６は同一個体であり、２つ山の波状口縁で、波頂部に２つの円孔を持つ。外面には円形隆帯を持ち、３条１単位のＣ字形爪形文を持つ。地文はＲＬ縄文である。７は２つ山の波状口縁で、波頂部に１つの円孔を持つ。２条１単位のＣ字形爪形文を持ち、地文はＲＬ縄文を施す。８は３条１単位のＣ字形爪形文を持ち、ＲＬ縄文を施す。９・10は同一個体で、波状口縁になると思われる。３条１組のＣ字形爪形文を施し、地文はＲＬ縄文である。11・12も波状口縁である。地文はともにＲＬ縄文を施す。13は酒杯状突起を持つ。端部には逆Ｃ字形爪形文を施し、地文はＲＬ縄文を施す。14・15は平縁である。ともにＲＬ縄文を施す。16は、五角形底の破片で、凹底である。ＲＬ縄文を施す。

この遺跡の鷹島式は、地文の範囲がすべて頸部以下であった。地文の撚りは、ＬＲ縄文が１点(１)のみで、ほかはすべてＲＬ縄文である。過去の平遺跡の調査では、鷹島式の出土は明記されていないが、平ＣＩ式(船元式)とした中に鷹島式の破片が含まれており、一定量、搬入されていたことが見込まれる。




第16図　鷹島式土器実測図(1)　1/4



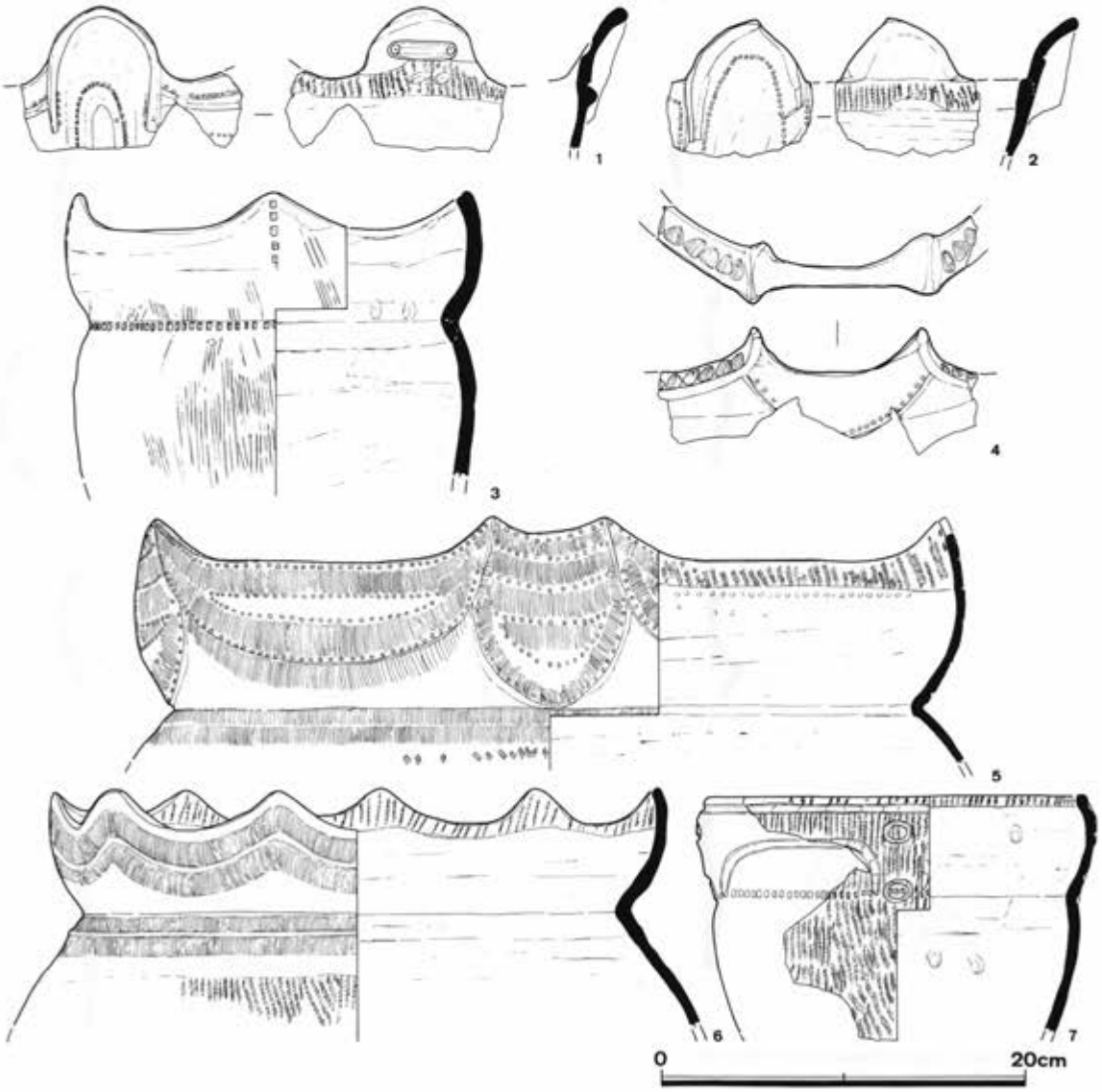

第17図　鷹島式土器実測図(2)　1/3

②**船元式土器**(第18～23図、図版第10・12・16・17)

船元式土器は、中期前葉の船元Ⅰ・Ⅱ式が主体で、中期中葉の船元Ⅲ式は1片のみ確認された。ここでは、便宜的に船元Ⅰ～Ⅲ式をまとめて分類する。なお、分類の編年的位置づけは、岡山県里木貝塚における間壁忠彦氏の分類[注10]、及び泉拓良氏の編年観[注11]による。

Ⅰ類　撚りの粗い縄文地で、口縁下にC字形爪形文を施す(5・6・8～12・18～38)。器形は、胴の強くくびれるキャリパー形を呈するものが主体である。縄文施文範囲は、一部、全面に縄文を施すものがあるものの、頸部以下に縄文を施すものが主体である。施文具の違いからa～f類に細分した。Ⅰ類は間壁氏の船元Ⅰ式A類、泉氏によると、Ⅰa類は第2様式a、Ⅰb～Ⅰf類は第2様式bに相当する。

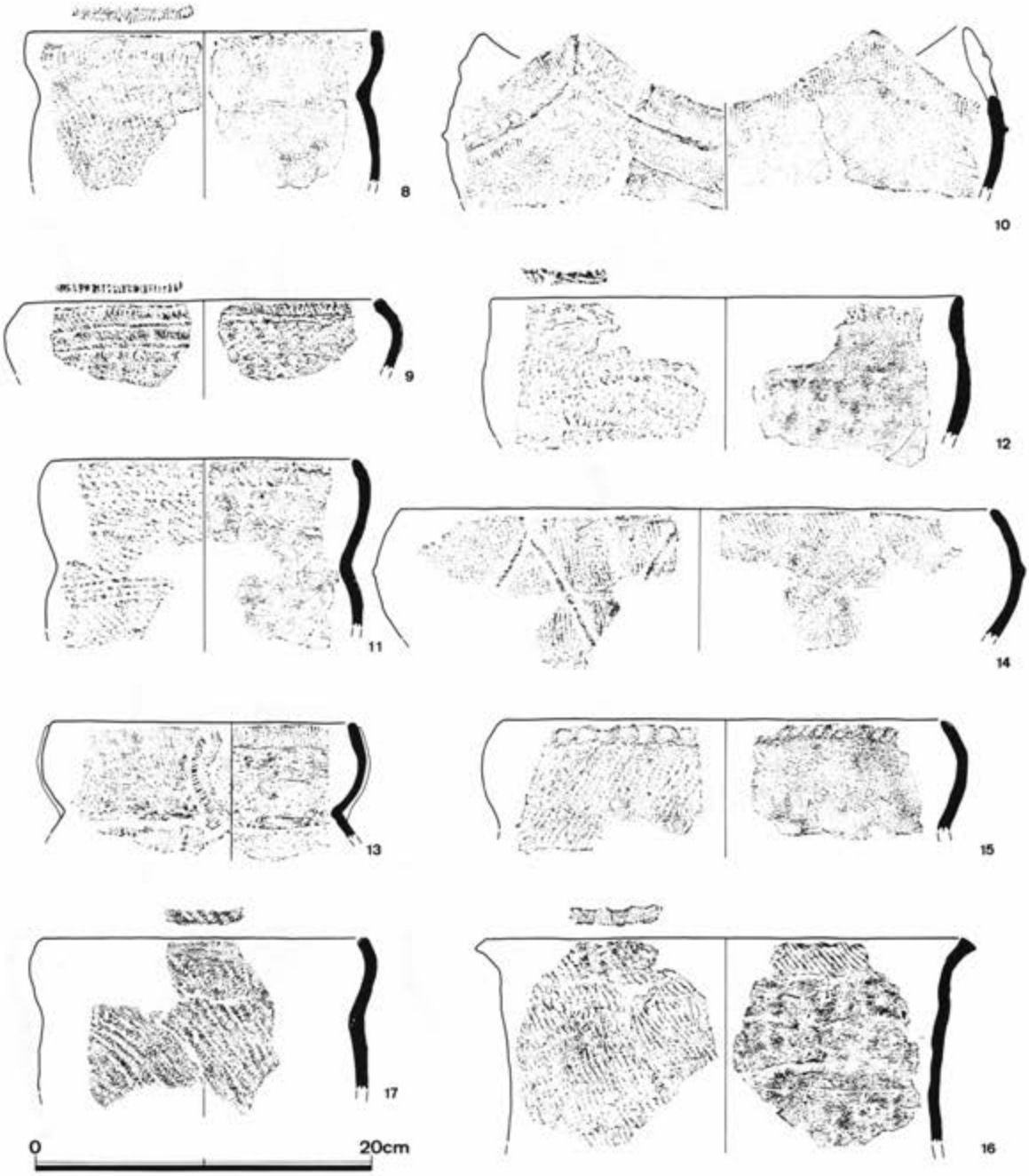
Ⅰa類　口縁下に幅の広いC字形爪形文(平均約12.0cm)を施す(6・8・9・18～25)。6は、頸部が強く屈曲する波状口縁で、口縁下に2条、頸部に2条のC字形爪形文を施す。地文はRL縄文である。8は口縁下に1条のC字形爪形文を施す。頸部にはC字形爪形文を施さない。地文




第18図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(1)　1/4

はＲＬ縄文である。９は、口縁下に２条のＣ字形爪形文を施す。地文はＲＬ縄文である。８・18～20・22・25は、口唇部を刻む。22・25は、同一個体である。なお、６の他、すべて頸部以下に縄文を施す。

Ｉｂ類　口縁下に幅の広いＣ字形爪形文と円形刺突を施す（５・10・26～31）。５・10とも、頸部が強く屈曲する波状口縁である。口縁下に沿って２条、頸部に２条のＣ字形爪形文を施し、円形刺突を口縁部のＣ字形爪形文にそって施す。５は、円形刺突を低い隆帯上に施す。５・10とも地文はＲＬ縄文で、頸部以下に施す。26は円形刺突の代わりに貝圧痕を、31は貝圧痕と竹管刺突を施す。




第19図　船元Ｉ・Ⅱ式土器実測図(2)　1/4

Ⅰｃ類　口縁下に幅の狭いＣ字形爪形文(平均約６㎜)を施す(11・12・32・33)。11は口縁下、頸部ともに２条、Ｃ字形爪形文を施す。端部は刻む。12は、口縁部が内湾して立ち上がる。Ｃ字形爪形文を連弧状に施す。11・12は、ともにＲＬ縄文で、全面に施す。32・33もＲＬ縄文を全面に施す。

Ⅰｄ類　口縁下に幅の狭いＣ字形爪形文と円形刺突を施す(34・35)。34は、Ｃ字形爪形文をγ状に施す。内面もＣ字形爪形文を施す。35は、口縁部が開く器形。口縁下に円形刺突を施し、Ｃ字形爪形文を連弧状に施す。34・35とも全面に縄文を施し、34はＲＬ縄文、35はＬＲ縄文である。

Ⅰｅ類　口縁下に幅の狭いＩ字形爪形文を施す(36・37)。36は、Ｉ字形爪形文を連弧状に施す。地文はＲＬ縄文で、おそらく頸部以下に施すものであろう。37は、口縁下と頸部にＩ字形爪形文を施す。地文は条痕文である。胎土が赤褐色で他の船元式と比べると異質である。36・37とも端部を刻む。

Ⅰｆ類　口縁下に幅の狭いＩ字形爪形文と円形刺突を施す(38)。38は、外反する波状口縁。円形刺突を押し引き、地文はＲＬ縄文で全面に施す。

Ⅱ類　口縁下に櫛状工具でロッキングし、円形刺突を加えるもの(39～48)。器形のわかる資料はないが、Ｉ類と同様に、キャリパー形を呈するものが主体であろう。縄文施文範囲は不明。隆帯の形状で、ａ・ｂ類に細分した。Ⅱａ、Ⅱｂ類は間壁氏の船元Ｉ式Ａ類に類似し、泉氏の第２様式ｂに相当する。

Ⅱａ類　櫛状工具でロッキングし、円形刺突を低い隆帯に施す(39～44)。39は、内面に指頭圧痕を施す。円形刺突を押し引く手法は、39～41・44に見られる。39～44は、すべてＲＬ縄文を施す。

Ⅱｂ類　櫛状工具でロッキングし、円形刺突を高い隆帯に施す(45～48)。45・46は、同一固体の可能性がある。円形刺突を２条直線状に施す。47・48も同一個体である。円形刺突を連弧状に施す。すべてＲＬ縄文を施す。なお、Ⅱｂ類は、山陰地方で多く見られる類型である。

Ⅲ類　撚りの粗い縄文地に円形刺突のみを施す(３・７・49～51)。器形は胴部のくびれの弱いキャリパー形を呈するものが多い。縄文施文範囲は全面である。隆帯の有無でａ・ｂ類に細分した。間壁氏によると、Ⅲａ類は船元Ⅱ式Ａ類の一部をなし、Ⅲｂ類は船元Ⅱ式Ｂ類の一部をなす。泉氏によると、Ⅲａ、Ⅲｂ類とも第３様式ａに相当する。なお、Ⅲ類は、近畿地方で一定量見られ、瀬戸内地方との地域差となりうる。

Ⅲａ類　低い隆帯の上半に円形刺突を施す(49・50)。49・50とも口縁下に円形刺突を１条めぐらせ、それ以下に隆帯を連弧状に貼り付け、その上半に円形刺突を施す。49・50ともＲＬ縄文を全面に施す。

Ⅲｂ類　隆帯を貼り付けず、直に円形刺突を施す(３・７・51)。３は、頸部に１条、口縁下に縦に１条、原体が角状の刺突を施す。地文は条線である。７は、胴部の少しくびれた器形で、円形刺突は押引手法である。地文はＲＬ縄文を全面に施す。51も同様の器形になる可能性が高い。円形刺突は押引手法である。地文は唯一、前段多条のＲＬ縄文である。

第20図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(3)　1/3

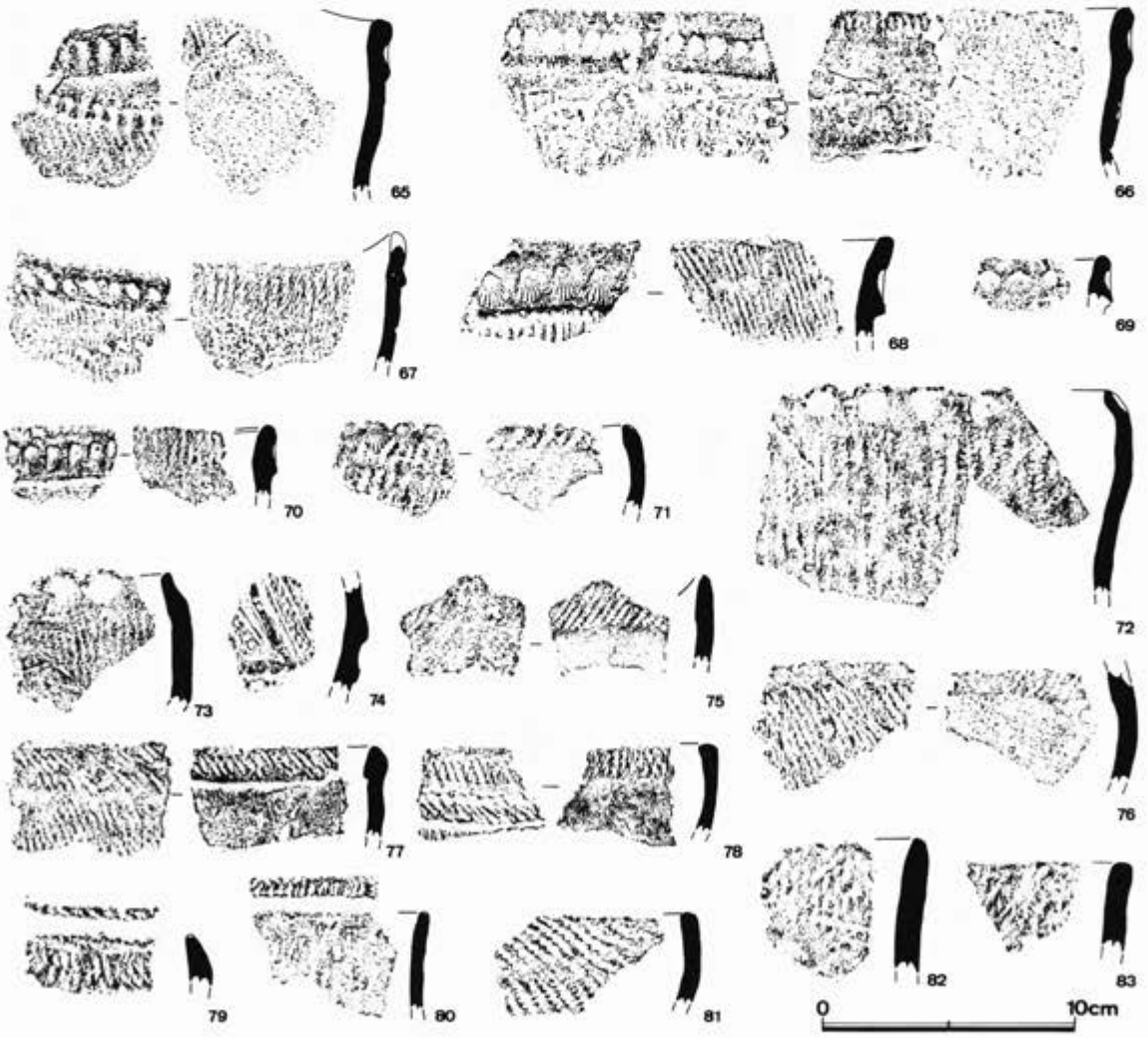
第21図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(4)　1/3

Ⅳ類　撚りの粗い縄文地で口縁下に隆帯を１条めぐらす土器(13・14・52～70)。器形は胴部のくびれたものが主体であり、縄文施文範囲は全面である。施文具の違いからａ～ｅ類に細分した。間壁氏の分類によると、Ⅳａ～ｃ類は船元Ⅱ式Ａ類に類似し、Ⅳｄ類は船元Ⅱ式Ｃ類に相当する。泉氏の編年観によると、Ⅳａ～ｅ類は第３様式ａ・ｂに相当する。

Ⅳａ類　口縁下に刻目隆帯を貼り付け、その上半、もしくは上下に円形刺突を施す(53～56)。52～54は、刻目隆帯の上半に円形刺突を施す。52はＬＲ縄文、53・54はＲＬ縄文を全面に施す。55・56は同一個体、刻目隆帯の上下に円形刺突を施す。また、円形刺突は垂下する。

Ⅳｂ類　口縁下に隆帯を貼り付け、その上半に円形刺突を施す(57・58)。57・58とも円形刺突は押引刺突による。地文は、ともにＲＬ縄文で、全面に施す。

Ⅳｃ類　口縁下に刻目隆帯を貼り付け、円形刺突を施さないもの(13・59～64)。13・59・61は、隆帯上に通常の刻目、60・62・63・64はナナメ刻目を施す。器形は、13の頸部が強く屈曲するキャリパー形、60・61・63・64が外反、もしくは外に開く器形を呈する。地文は、59～63がＲＬ縄文を全面に施す。13は、地文が内、外面とも条線を施す。64は、外面の口縁部に地文が無く、頸




第22図　船元式土器(74のみⅢ式、他はⅠ・Ⅱ式)実測図(1/3)

部以下と内面に条線を施す。

Ⅳｄ類　いわゆる素隆帯のもの(14)。14は、撚りの粗い縄文地に隆帯を鋸歯状に貼り付けており、地文はＲＬ縄文で全面に施す。

Ⅳｅ類　口縁を折り返して形成した口縁肥厚部に貝圧痕を施す(65～70)。65・66は同一個体。口縁下の文様は、65・66がΣ状爪形文を連弧状に施し、67が櫛状工具によるロッキングと連弧状に施した円形刺突、68がＩ字形爪形文である。地文は、69を除いて、すべてＲＬ縄文を全面に施す。

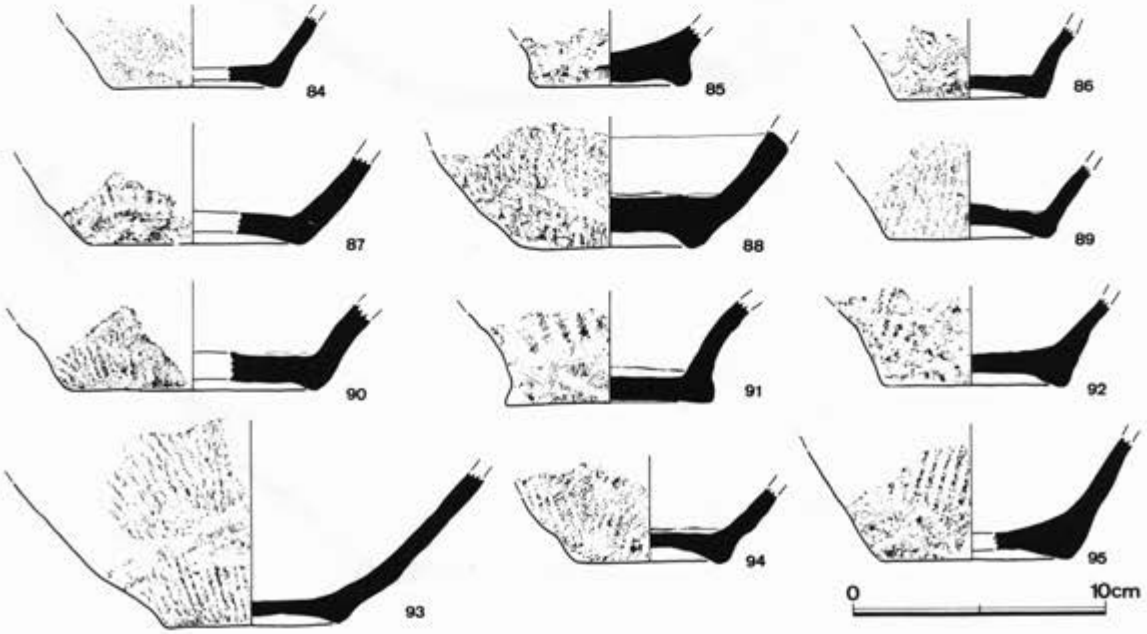
Ⅴ類　撚りの粗い縄文地で、口縁下に押圧を施す(15・16・71～73)。器形は主体となるものがない。縄文施文範囲は、全面である。施文具の違いにより、ａ・ｂ類に分類する。Ⅴａ類は、間壁氏の船元Ⅰ式Ｄ類に相当する。

Ⅴａ類　口縁下に貝圧痕を施す(15・16・71)。15は、胴のくびれが強いキャリパー形をなす可能性が高い。15・71とも地文はＲＬ縄文で、全面に施す。16は、外反する器形で、端部に貝圧痕を施す。地文は、無節のＲＬ縄文である。

Ⅴｂ類　口縁下に指頭圧痕を施す(72・73)。72は、胴のくびれが弱い器形で、地文はＲＬ縄文で、全面に施す。73も同様の器形になる可能性が高く、ＲＬ縄文を施す。

Ⅵ類　特異な突起があるものを一括した(１・２・４)。１・２は、グローブ形突起で口縁下に円形刺突をめぐらす。地文は、外面が不明で内面がＲＬ縄文を施す。他に類例を知らない。４は、Ⅳｅ類と類似するが、この種の突起は他に類例がないので、本類に含めた。

Ⅶ類　撚りの粗い縄文地に隆帯を貼り付け、両側に半截竹管による平行沈線文を施す(74)。74は、隆帯が三角区画文を描く。地文は、ＲＬ縄文を施す。間壁氏の船元Ⅲ式Ａ類、及び泉氏の第４様式に相当する。




第23図　船元Ⅰ・Ⅱ式土器底部実測図(1/3)

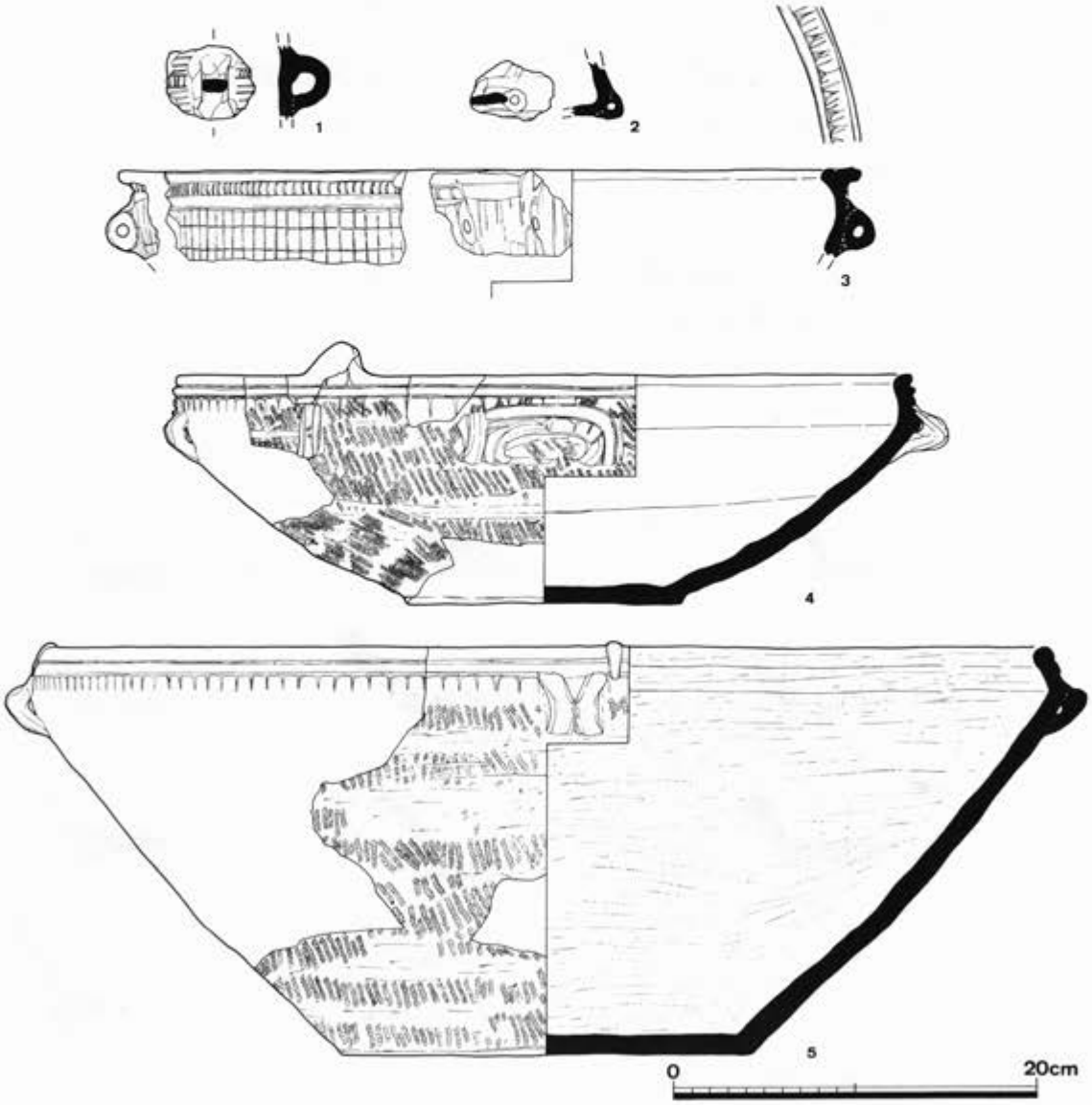
Ⅷ類　全面縄文のもの(17・75～83)。Ⅷａ類は、内・外面とも縄文を施す(75～78)。75のみＬＲ縄文で、他はＲＬ縄文である。Ⅷｂ類は、外面のみ縄文を施す(17・79～83)。これらは、すべてＲＬ縄文である。

Ⅸ類　船元式の底部を一括した(84～95)。出土状況からほぼ船元Ⅰ・Ⅱ式に当てはまる。すべて凹底である。84～95は、すべてＲＬ縄文を施す。

**③他地域系土器**(第24・25図、図版第10・25)

ここでは、中期の他地域の土器を一括して扱う。他地域の土器は、中期前葉の北陸系土器である新保式にほぼ限られる。出土点数は22点(底部４点)で、個体数は10点である。すべて掲載した。なお、破片のため、器種(深鉢・浅鉢)の区別が分かれる土器のみ器種を明記する。

１・２は、把手部分である。１は、ヘラ状工具による沈線を施す。３～５は、把手の付く浅鉢である。３は、口縁下に爪形文を１条施し、その下位にタテ方向に半隆起線文を施し、その後、



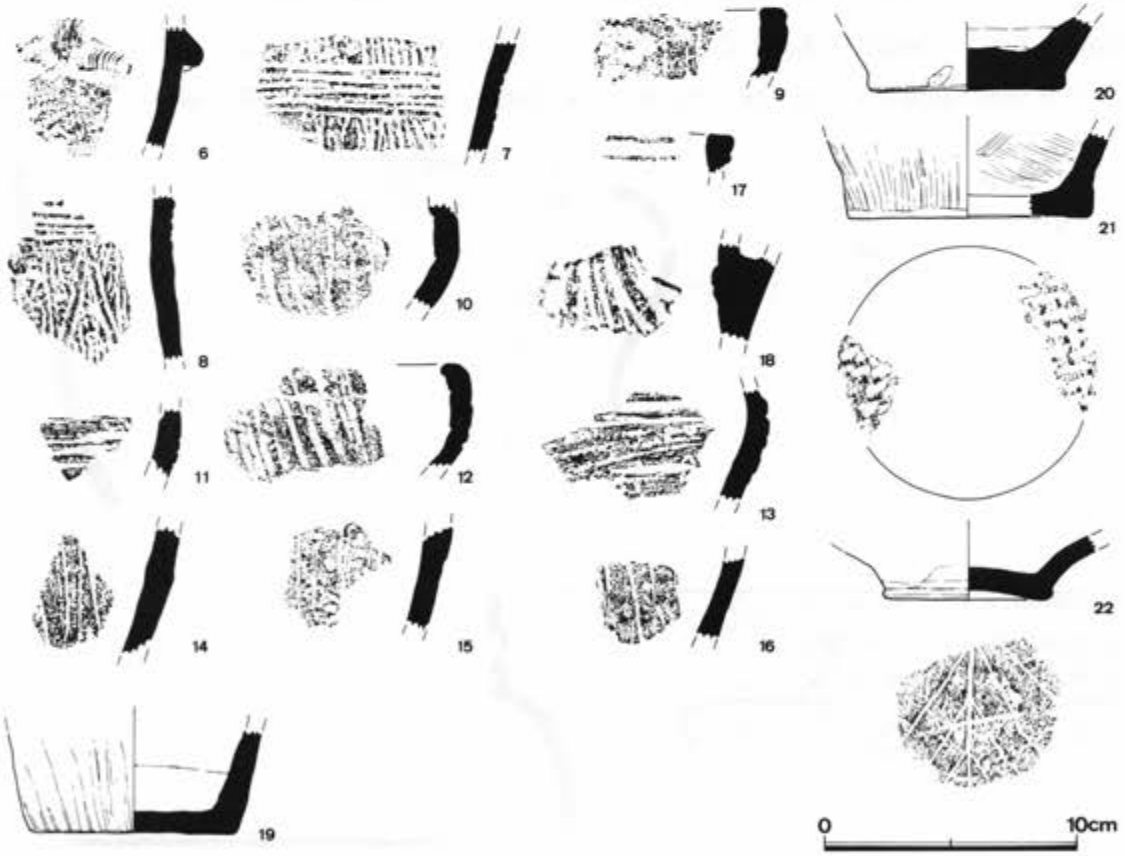

第24図　北陸系土器(中期前葉)実測図(1)　1/4

ヘラ状工具で正格子目文を作る。また、口縁上端を拡張させ、有抉蓮華文を施し、花弁内に軌軸文を施す。口縁上端を拡張させ、有抉蓮華文を施す土器は、他に福井県古宮遺跡、滋賀県粟津遺跡にみられる。4・5は、口縁下に半隆起線文、その下位に有抉蓮華文を施す。地文は、ともにＲＬ縄文である。3～5は、新保式の新段階に相当する。

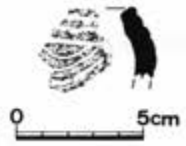
6は、断面蒲鉾形の隆帯にＣ字形爪形文を施す。地文はＬＲ縄文である。東海地方の北裏ＣＩ式になる可能性もある。7・8は同一個体である。深鉢で半截竹管による平行沈線を横方向に施し、その下位にも同様の工具で鋸歯状モチーフをめぐらす。地文は、撚糸文を施す。7・8は、新保式の古段階に相当する可能性がある。9～16も同一個体。ヘラ状工具で沈線を施す。また、内面に粘土紐接合痕が残る。9～17は、端部に面取りをし、17は口縁下に半隆起線文を施す。18は外面に、タテ方向に半隆起線文を施す。内面は磨滅のためはっきりしないが、有抉蓮華文を施している可能性がある。

19～22は、底部である。出土状況から判断して、おそらく新保式のものであろう。22は凹底で、他はすべて平底である。21は網代底、22は木葉痕が認められる。

新保式は、同一個体の7・8を除いておおよそ新保式の新段階に収まる。平遺跡では、鷹島式が一定量出土しているが、北陸系土器は、明確に新保式の古段階と識別できるものは出土していない。これは、北陸系土器が新保式の新段階で土器分布圏が最も拡大していき、中期中葉の上山田式で小地域の土器分布圏に変遷していく過程のなかで理解できる。また、搬入される土器は、




第25図　北陸系土器(中期前葉)実測図(2)　1/3




第26図　中期中葉～後葉の土器実測図(1/3)

本遺跡では、浅鉢が10個体中、少なくとも３個体を占め、一定量の割合を示しているのは興味深い。

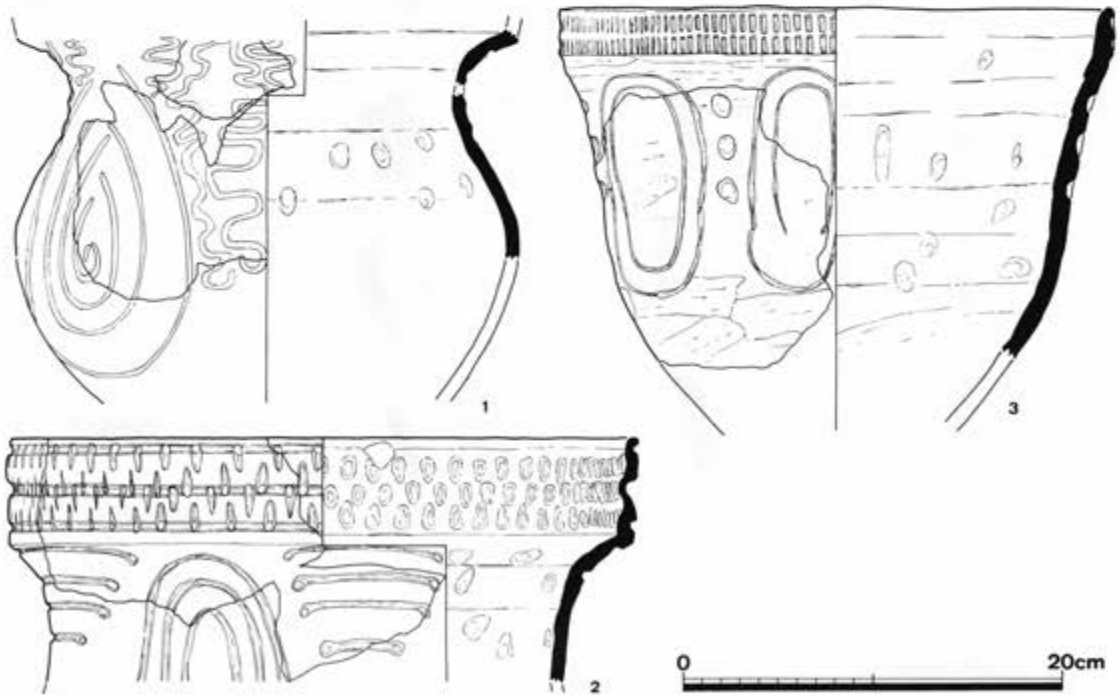
**④中期中葉～後葉の土器**(第26図)

半截竹管状工具による平行沈線文を施す。器形は、口縁部が内湾する可能性がある。型式名は不明だが、中期中葉から後葉にかけての時期になると考えられる。

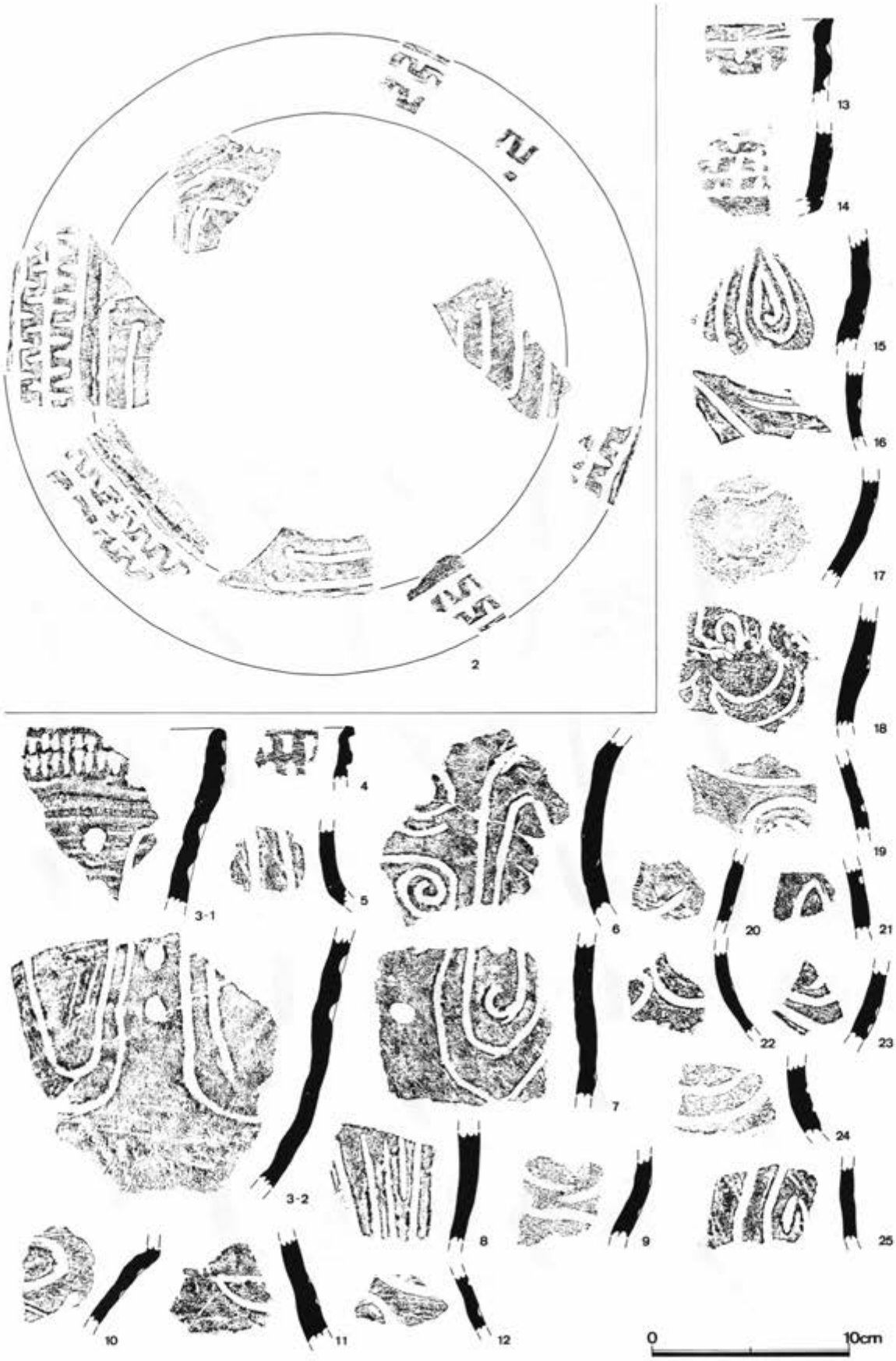
(可児直典)

**⑤平式(平ＣⅢ式)土器**(第27～30図、図版第10・18)

平遺跡を標識とする型式であるが、今回の調査での出土量はそれほど多くはない。だが、大型の破片が多いため、文様のモチーフが復原できる。また、無文の土器も共伴すると考えられるが、明確にはできなかった。有文の土器の内で、代表的なものを第27図に示したが、水平口縁で交互刺突を施し、胴部に渦巻き文あるいは紡錘状文を持つものと、屈曲する胴部をもつものとに大別されるようである。１は、胴の張る体部に渦巻き状の紡錘文を持つ。口縁部は欠失しているが、波状口縁になると考えられる。紡錘文間は波状の垂下文によって充填されている。２は、交互刺突を施した複合口縁部に同心円文と直線文で充填された胴部を持つ。交互刺突は、三本の沈線上に、外側と内側とが規則的に施されている。また、沈線及び刺突は内面にも強く突出する。３は、水平口縁に上下２段の刺突を持ち、胴部には二重の同心円を持つ。同心円間には３個の指による刺突を持つ。胴部外面はケズリによって調整され、内面には接合痕が明瞭に認められる。第28～30図は、主として胴部片である。これらはいずれも強い沈線で描かれ、内面にも強く突出している。15及び25は紡錘状文、16・18・22は垂下する波状文片で、紡錘状文の間に描かれたものと想



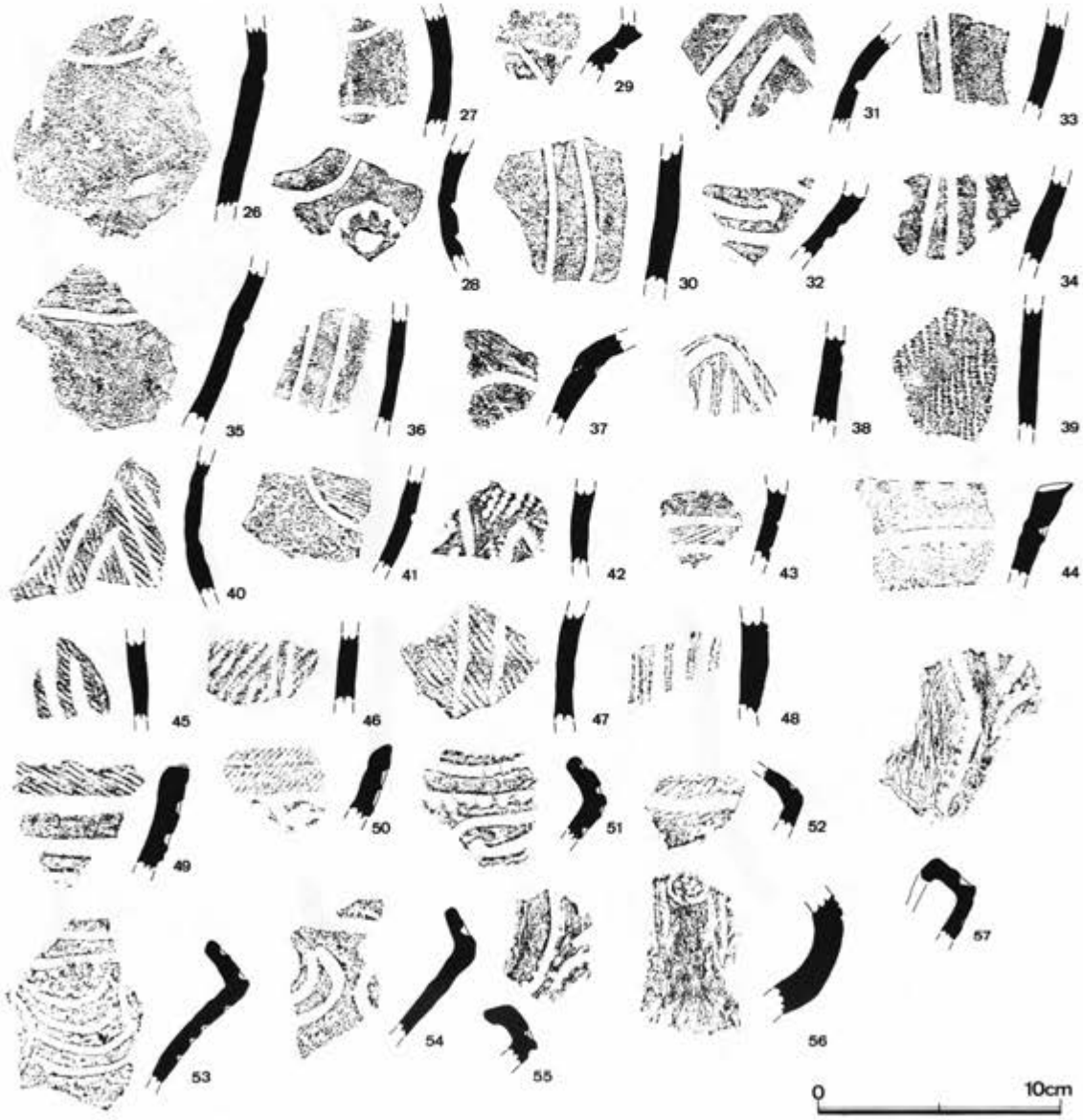

第27図　平式(平ＣⅢ式)土器実測図(1)　1/4



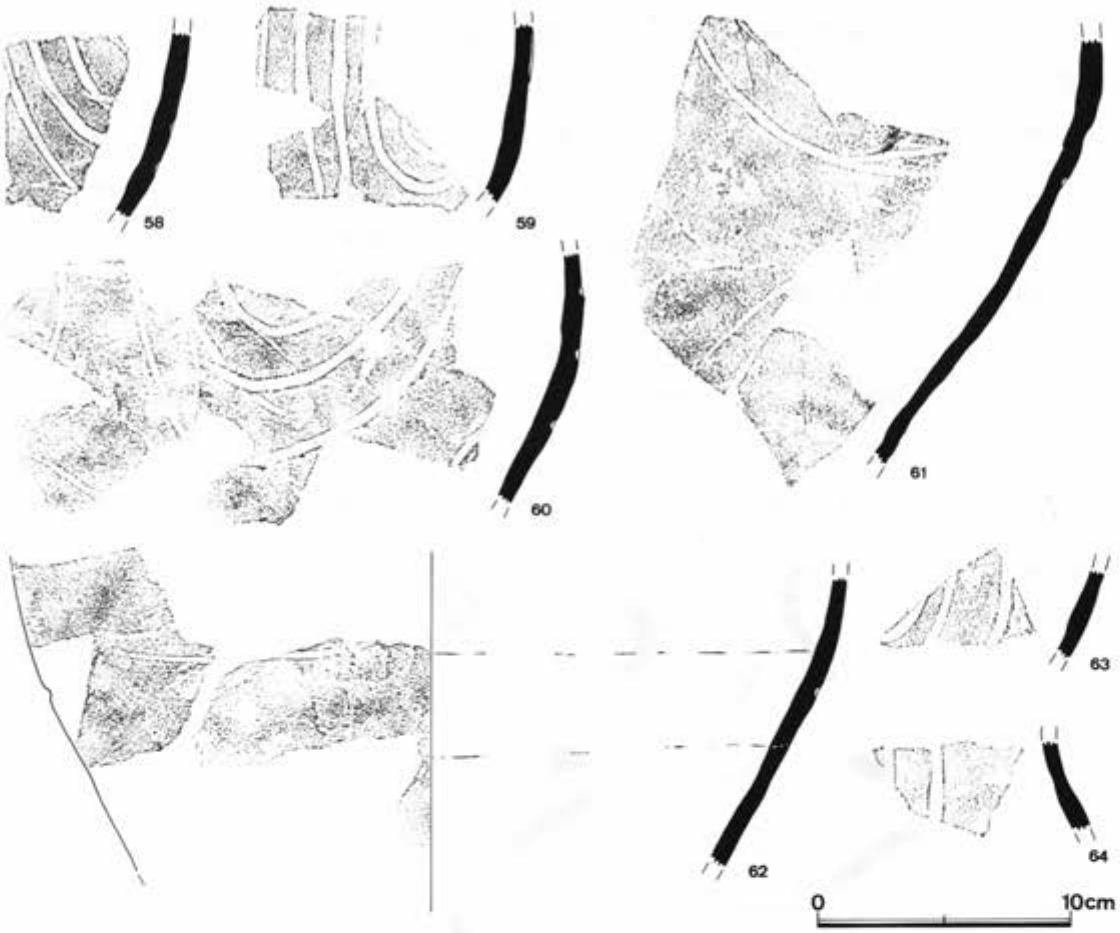

第28図　平式(平CⅢ式)土器実測図(2)　　1/3、2のみ1/4

定される。第29図は沈線文を描くものであるが、39以下は地文に縄文を転がしたもので、平ＫＩ式に該当するものである。しかし、出土点数が少なく、平ＣⅢ式との前後関係は決定できず、中津式に確実に該当する破片は見当たらなかった。51～55は、口縁端部を拡張して外傾する斜面を作ったもので、沈線によって波状文で加飾される。また、56は口縁部側面に付加される橋状把手と考えられる。また、55と57は同一個体の波状口縁に取り付く突起になると考えられる。また、18・19・24・55・57は、沈線内刺突を持つ破片で、この時期に該当すると考えられる。51と32は同一個体である。さらに、第30図は同一個体片と判断され、胴の張る体部に同心円文あるいは紡錘状文を線刻している。平式土器に該当する破片は以上であり、浅鉢の確実な破片は出土しなかった。

平式土器をめぐる諸問題は、前述のとおりであるが、最近、兵庫県城崎郡竹野町見蔵岡遺跡の良好な資料が公刊された。そこでは、多様な深鉢と同時に共伴する浅鉢が明らかにされ、平式土

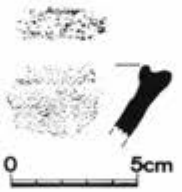



第29図　平式(平ＣⅢ式)土器実測図(3)　1/3




第30図　平式(平CⅢ式)土器実測図(4)　1/3

器が実態を持つ近畿地方北部独自の型式であると捉えられた。見蔵岡遺跡の平式土器には、平遺跡では見られない形態のものも含まれており、平式土器の地域的な位置づけは、今後の課題であろう。




第31図　後期前葉の土器実測図(1/3)

**D．後期**

**①後期前葉の土器**(第31図)

1点の小片だが、後期前半の土器がある。口縁部の小片で、端部を拡張したものである。しかし、ローリングによる磨滅が著しく、器面の調整は判別できない。

**②元住吉山Ⅰ・Ⅱ式・宮滝式**(第32～37図、図版第19・20)

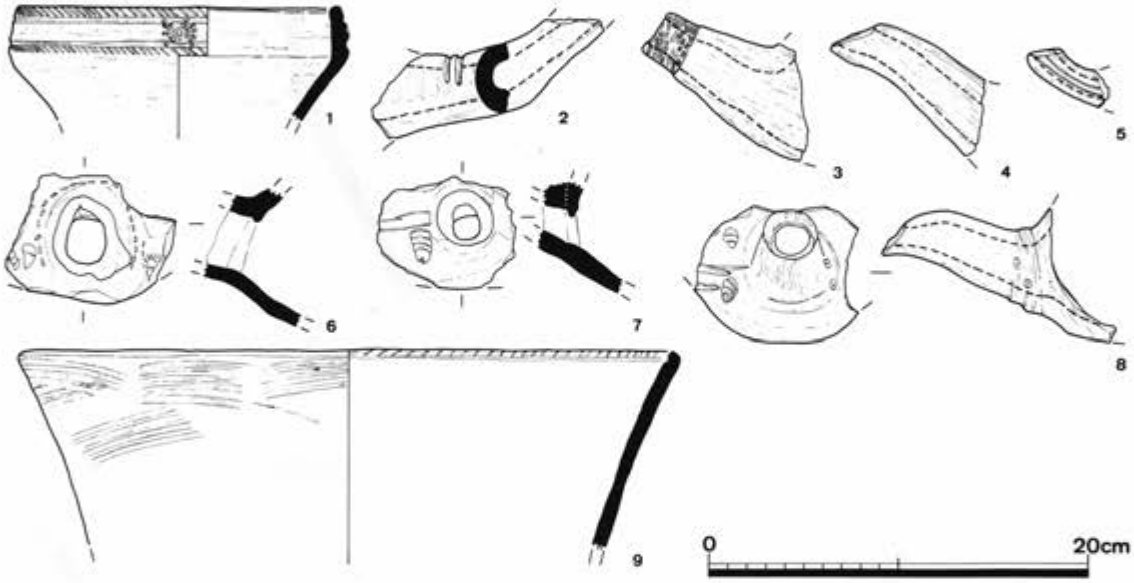
過去の調査で、平KⅡ式として元住吉山Ⅱ式の存在が知られていたが、今回の調査では元住吉山Ⅰ式との区別が困難なものも多い。このため、挿図では、沈線によって装飾されたもの(第32・34・35図)、凹線を施したもの(第33・36・37図)とに分けたが、細分に苦慮したため、まとめて提示する。なお、この時期の土器はていねいな研磨が特徴で、色調も黒褐色のものが多い。

第32図は、沈線によって装飾したもので、9以外は注口土器である。1は、ボタン状突起の上面に擬縄文を施文した屈曲する口縁部である。6～8は、注口部の付け根にヘナタリの側縁を押捺している。ただし、3は口縁端部に縄文帯を設けており、後期前半に該当する可能性がある。

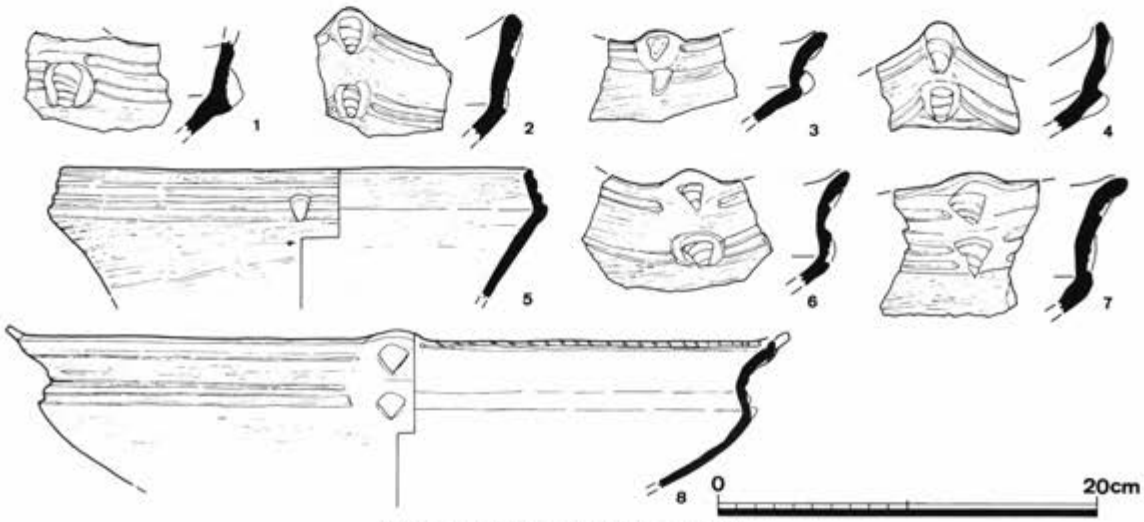
第33図は、凹線文土器群で図化できたものである。1～4・6・7は、波状口縁の波頂部にヘナタリを押捺し、4は平面形が方形となる。5は屈曲する深鉢、8は口縁端部の内面に右下がりの斜線帯を加えている。

第34図1～15は注口土器で、弧線によって囲まれた部分に擬縄文を施し、屈曲する。また、1・12はヘナタリ押捺によるボタン状突起を持つ。18～31は、口縁端部の内外面に沈線文を持つ。第35図33～52は、内面にのみ斜線帯文と沈線を施すが、地文の調整は巻貝条痕によるものが多い。また、深鉢内面の斜線帯を観察したところ、右下がりと左下がりの比率はほぼ同数という結果を得た。第36・37図は、凹線文系土器群であり、器形は屈曲して端部が外反するものと、直で終わるものとがある。器壁はていねいに研磨されており、幅広の凹線を施す。第36図65は深鉢片で、4段に扇状圧痕文を密に押捺していた。

平遺跡の注口土器は型式学的には、3を除いて元住吉山Ⅰ式に属するが、深鉢は元住吉山Ⅱ式

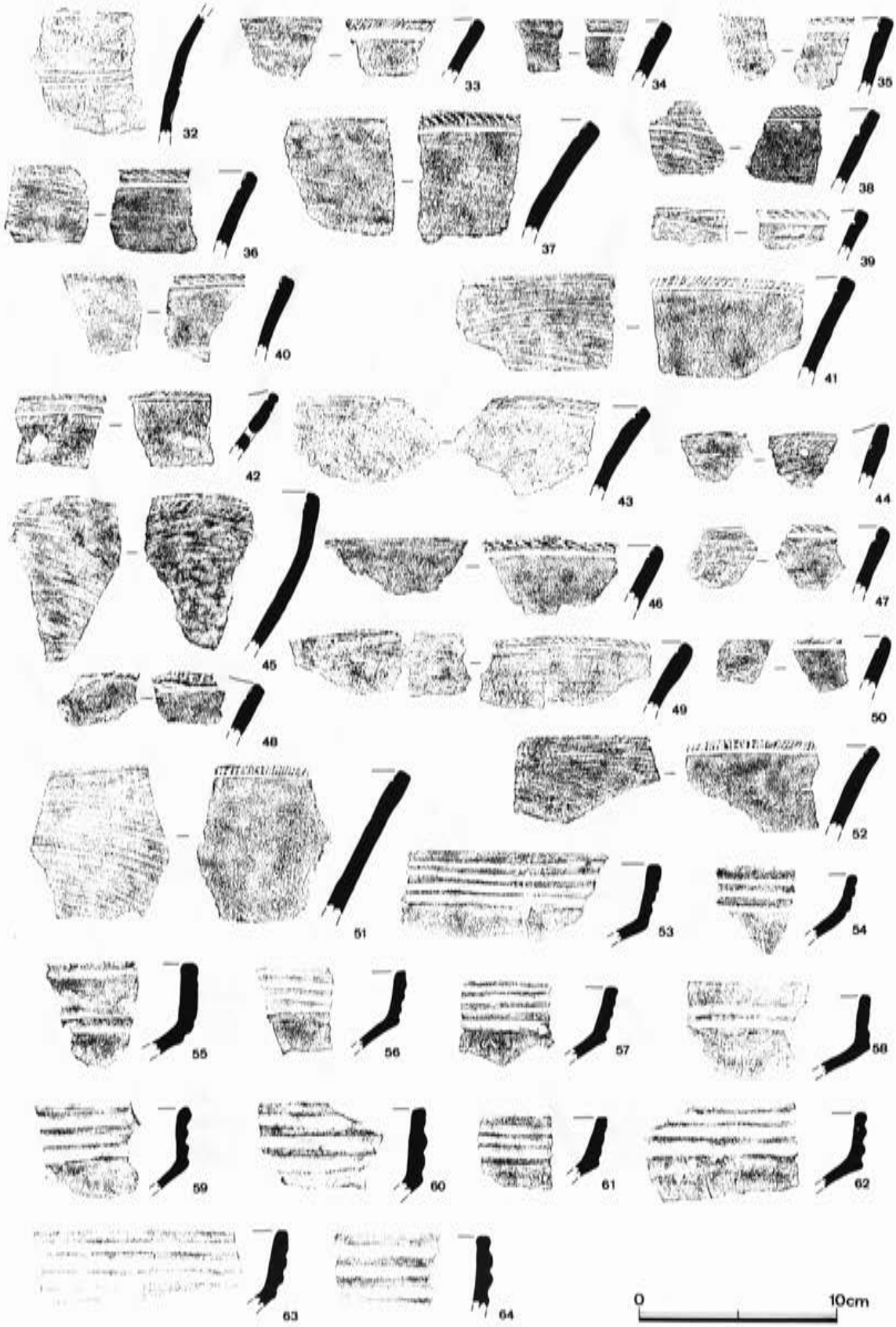



第32図　注口土器・深鉢(元住吉山Ⅰ・Ⅱ式)実測図(1/4)




第33図　凹線文土器群実測図(1/4)

第34図　元住吉山Ⅰ・Ⅱ式土器実測図(1/3)




第35図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(1)　1/3

第36図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(2)　1/3

の要素を持つものが主体である。これは、平遺跡では近畿地方中部の土器編年と齟齬していることを示しているのか、資料の増加をみて判断されねばならない。概して、量的には、元住吉山Ⅱ式～宮滝式に属するものが多そうである。

（河野一隆）

第37図　元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器実測図(3)　1/3

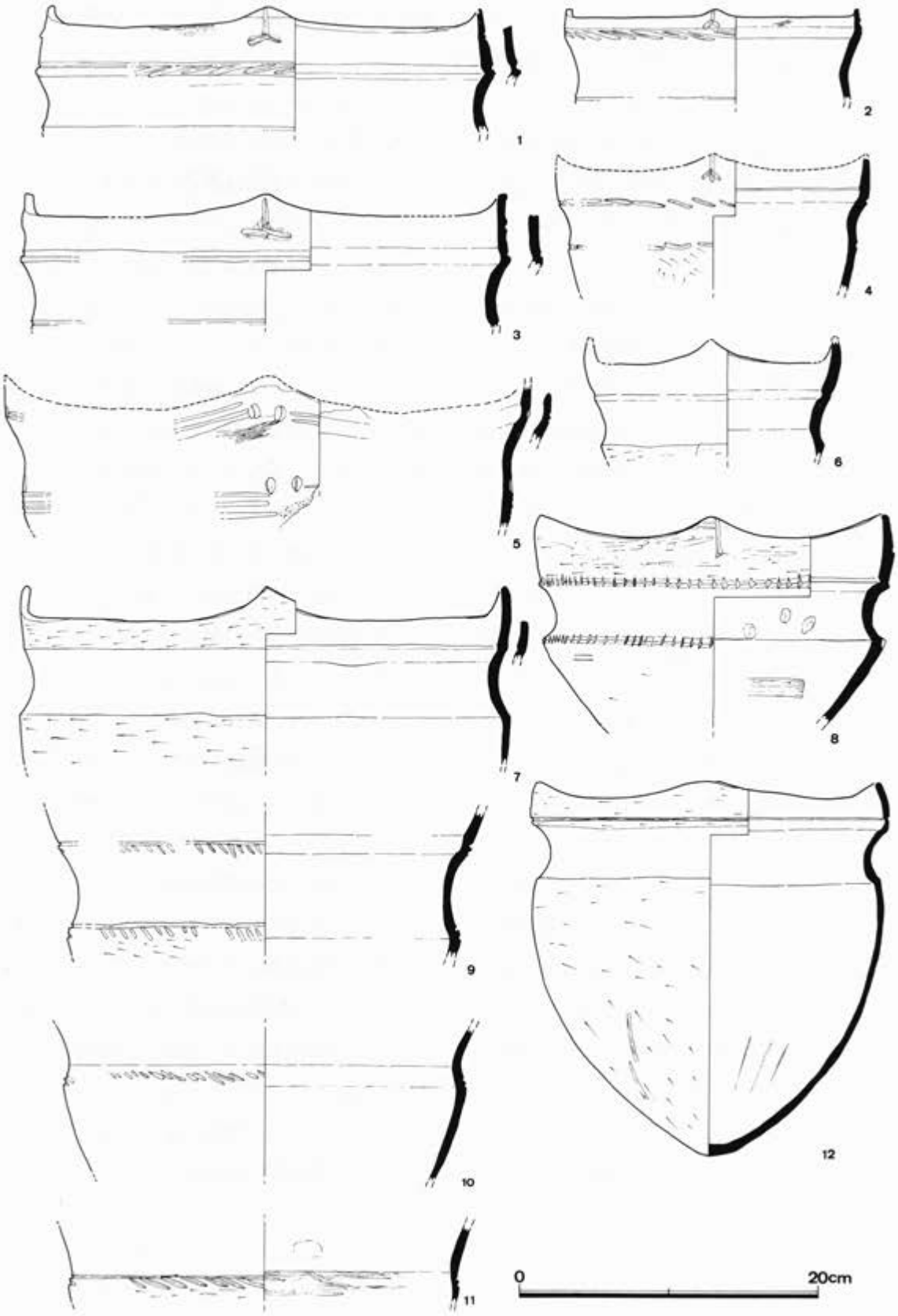
**E．後期末～晩期**

包含層の黒色砂層から出土した土器のうち、型式学的に後期末～晩期前葉の滋賀里式併行の土器と、晩期中葉の篠原式、それとこれらに伴うと思われる東日本系の土器に分けて説明する。

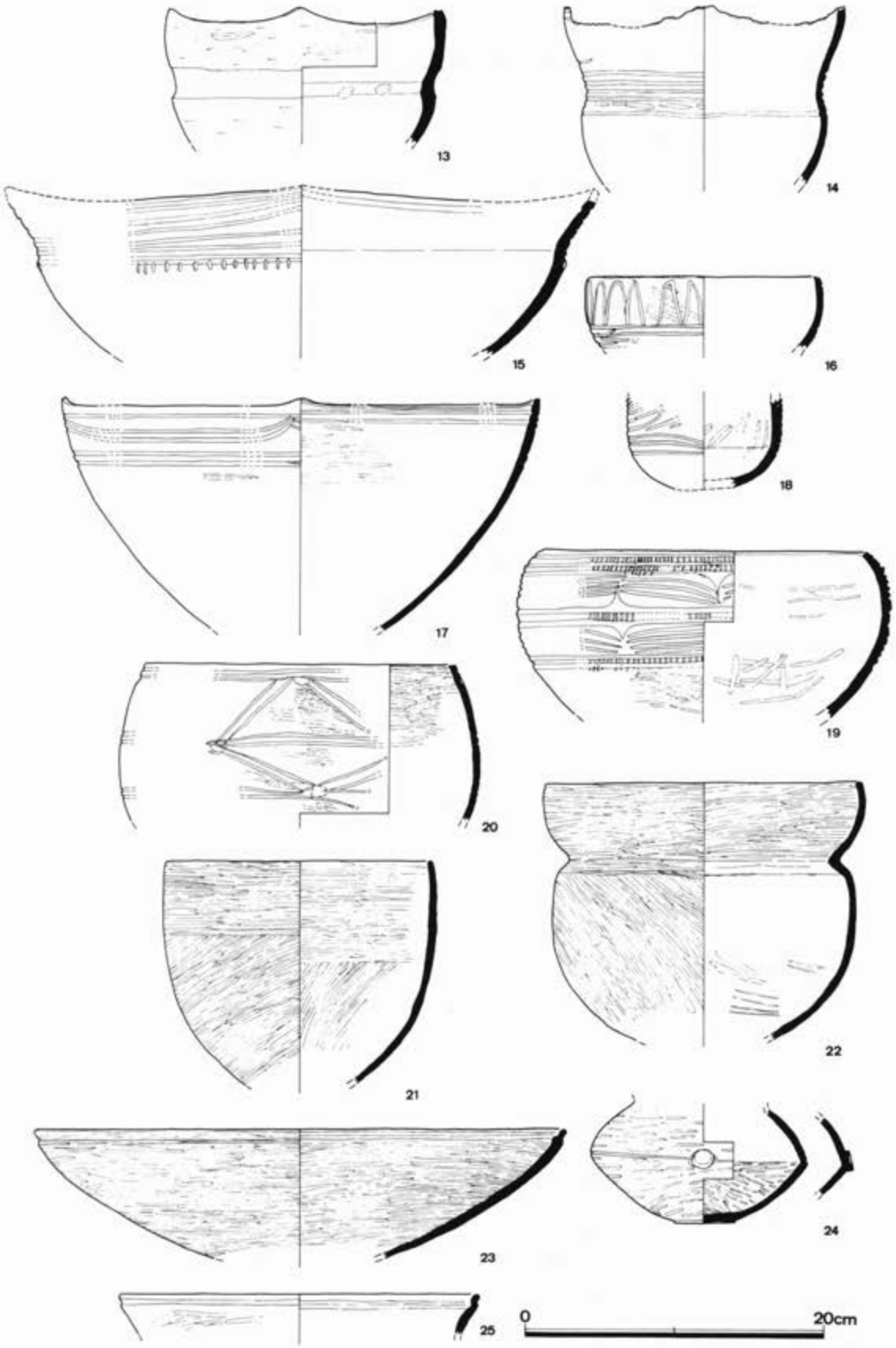
**①滋賀里式併行期の土器**(第38～41図、図版第10～12・21・22)

**a．深鉢A1類**　2段に屈曲するタイプ(1～12・26～28・30～34・41)。

2段に屈曲するタイプは口頸部界や頸胴部界の屈曲の度合いが強いものや弱いものがあるが、ここでは一括して扱う。波状口縁の土器が圧倒的に多く、波状の単位は確認できる限りすべて4単位である。外面の調整は、頸部はていねいなナデによるものがほとんどであり、口縁部や胴部にはナデによるもののほかに、ケズリによるものも多い。巻貝条痕も確認できるものはあるが、少量であり主体を占めない。内面はていねいなナデ調整が多く、口頸部界内面には強いナデや、抉り状の幅広の沈線を施すものがある。この技法は頸胴部界内面に用いることはない。また、口唇部は強いしっかりとした面取りを行うものが多い。この類は、非常に特徴的な文様を施すことが多く、波状口縁の波頂部に北陸の八日市新保Ⅱ式の山字文を模倣したと思われる逆T字状の文様を持ったり、口頸部界や頸胴部界に横走する沈線を切る形で、棒状工具や半截竹管状工具によって長い斜行沈線を連続的に施したりする。斜行沈線は左上がりのものが多い。逆T字状の文様は棒状工具などにより、|→L→⊥という順序で描いている。深く描くものが多く、中には土器の内面に粘土が盛り上がるものも見受けられる。1・3・30は、波頂部に深い逆T字状の文様を、口頸部界外面には横走沈線を施し、1・30はさらに斜行沈線を持つ。口頸部界内面に強いナデを施す。31も波頂部の文様はわからないものの同じ様相を呈している。2は、浅い逆T字状の文様を持ち、口頸部界の横走沈線を切っているのが確認できる。また、斜行沈線を時計回りの方向に連続して施す。4は、逆T字状にはなっていないが、やはり上記の範疇に含まれるものであろう。口頸部界、頸胴部界には連続する斜行沈線のみを持つ。胴部はケズリ調整を行い、口頸部界内面には抉り状の沈線を施す。斜行沈線のみのものは10にも見られる。5は、口頸部界に2条、頸胴部界に3条の半截竹管状工具による沈線が、また2個一対のツメ状の刺突を施し、口頸部界内面には強いナデを施す。6・7は、口頸部界内面に抉り状の沈線を持ち、外面調整はケズリが顕著に見られる。8は、波頂部にI字状の文様を、口頸部界や頸胴部界にはキザミ、口頸部界内面には抉り状の沈線を施す。口縁部はケズリの後に粗いミガキを、胴部内面は部分的に板ナデ調整を行う。12は、口頸部界のみ外面に横走沈線、内面に抉り状の沈線を施す。調整は、外面はケズリ、胴部内面に板ナデの痕跡が見られる。底部は尖底ぎみの丸底を呈している。26は、内外面に巻貝条痕による調整を行い、頸部がていねいにナデられていない。また、屈曲の度合いも弱く口唇部も丸い。より滋賀里I式的な様相をしていると思われる。頸胴部界には突起が付く。27は、口頸部界・頸胴部界に2条の沈線を施すが、縦位の沈線状の寸断文を持つ。28は、口縁部に2条、頸部に3条以上の沈線を、頸胴部界には押圧を施す。32・33は頸部であるが、文様を持っている。32は、3条の垂下する沈線の左右に刺突、頸胴部界には沈線が横走する。33は、2条沈線の山形文になると思われる。41は、肩部に半截竹管状工具による深く長いD字の刺突を連続して施し、




第38図　滋賀里式併行土器実測図(1)　1/4




第39図　滋賀里式併行土器実測図(2)　1/4

内面が盛り上がる。胴部調整はケズリであり、篠原式の可能性もあるが、屈曲の度合いが強いため、本類に含めた。

**b．深鉢Ａ２類**　頸部が短く、内面が２段に屈曲しないタイプ(13・35～39)

外面は、ゆるく２段に屈曲しているように見えるが、内面は外面に対応して屈曲しない。口唇部は、面取りを行うものもあるが、Ａ１類に比べて丸いものが多く、全体的に作りが粗い。この類に文様を持つものはない。時期的に後出する可能性もある。13は、短い頸部にていねいなナデ調整を行うが、口縁部と胴部はケズリ調整である。37は、ナデによりほとんど消されているが、口縁部と胴部の調整に小さな二枚貝条痕、もしくは板ナデを用いている。38は口縁部内面にミガキを、39は胴部外面に37と同様な小さな二枚貝と思われる条痕調整を行い、内面はヨコ方向の板ナデで調整する。

その他、上記に入らないものとして14・29・41がある。14は、頸胴部界に半截竹管状工具によって多条沈線と斜行沈線を施す。口唇部にはＯ字キザミを施し、篠原式の可能性もある。調整は全面ナデである。29は、全体の器形は不明であるが、口縁部に３条の沈線を施す。

**c．深鉢Ｂ類**　砲弾形のタイプ(40)

無文の砲弾形の深鉢は大量に出土しているが、プロポーションなどによる時期の判別は困難である。ナデ、巻貝条痕、二枚貝条痕、ケズリによる調整のものがあるが、確実に当該期のものと判断できるのは、巻貝条痕によるものである。40は、外面に巻貝条痕、内面は原体が不明だが細く深めのスジが多く確認できる。その他、ナデやケズリ調整のものも一部は含まれると思われる。

**d．浅鉢Ａ類**　口縁が大きく外反するタイプ(15・42～44)

15・42は、粗製で波状口縁を呈する。15は弧状の山形文、42は弧状の反転山形文をそれぞれ３条沈線により施している。15は、肩部にキザミを持ち、口縁内面に沈線を施す。43は精製で、口縁外面に押圧による凹みを頂点とする二条沈線の山形文、内面には沈線を施す。44は、口縁内面に２条沈線を施す。

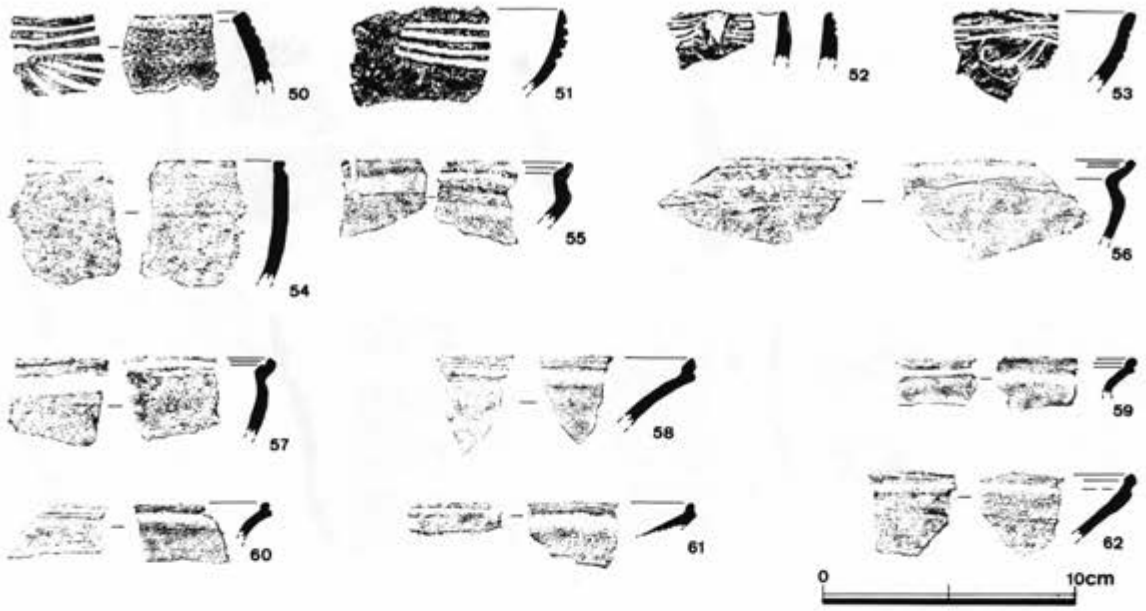
**e．浅鉢Ｂ類**　波状口縁で短い頸部を持ち、口縁が内湾ぎみに開くタイプ(45・46)

45は、波頂部から４条沈線が垂下し、口頸部界に２条沈線が横走する。46は、口縁部に沈線による網目状の文様が施される。

**f．浅鉢Ｃ類**　椀状のタイプ(16～20・50～54)

口縁付近は、内湾するものが多く、文様部分の沈線はミガキ調整をていねいに行いつぶれているものも多い。16は、下向きの弧状沈線が連続し、体部下半には粗雑な平行沈線を施す。内面には炭化物が付着している。17は内湾せず、小さな波頂部を持つ。外面には半截竹管状工具による弧状の山形文を、内面には３条の沈線が横走し、波頂部で最上部の沈線が口縁部に沿って上向きの弧状となる。18は、粗雑な沈線による反転山形文を施す。19・50は、いわゆる櫃原式文様を持ち、文様部分の沈線はミガキによって一部つぶれている。50は、内外面とも赤彩の痕跡が確認できる。20は、押圧による凹みを頂点とした山形文が多段化し反転山形文になる。52は、小さな波

第40図　滋賀里式併行土器実測図(3)　1/3




第41図　滋賀里式併行土器実測図(4)　1/3

頂部下の押圧による凹みに向かって、３条沈線が引かれる。53は、粗雑な上向きの弧状沈線が連続すると思われる。内面には炭化物が付着する。54は、口縁部に１条の半截竹管状工具による沈線がめぐり、内外面の調整は粗いミガキである。時期的に後出する可能性もある。

**g．浅鉢Ｄ類**　深手の砲弾形のタイプ(21)

本類は時期が決めにくく、例示した21も他の時期のものである可能性がある。内外両面にていねいなミガキ調整を行い、外面口縁部付近はヨコ方向、胴部は右上がりである。

**h．浅鉢Ｅ類**　口縁が短く外反するタイプ(23・55～57)

口縁内面には抉り状の沈線を施すものが多いが、56の口唇部は粘土が内側にめくれ、折り返し状となっている。55は、小さな波頂部と、その直下の肩部に縦位の棒状の刺突を施す。

**i．浅鉢Ｆ類**　長く外反する口縁に短い立ち上がりを持ち、外面に１条の沈線を持つタイプ(58～62)

内外面ともミガキによる調整を行い、口唇部は丸い。59・62は内面にも沈線を持つ。62は立ち上がりが弱くなっている。この類は時期的に後出する可能性が高い。

上記のほかに、いわゆる橿原式文様を持つ47～49は、全体の器形を推定しにくいが、47は丸い体部に外反する口縁を持つと思われる。内外面黒色で、ていねいなミガキ調整を行う。内面には赤彩の痕跡が確認できる。48はおそらく胴部が屈曲する器形、49は47と同じ器形か、浅鉢Ｃ類になると思われ、文様部分はミガキによりつぶれている。また、22は頸部で一度くびれる器形で、内面には強い稜を形成している。ていねいなミガキ調整を行い、胴部内面に一部二枚貝条痕が確認できる。24は、器種そのものが不明であるが、口縁部は上に立ち上がると思われる。屈曲する肩部に１条の沈線を施し、上面を凹ませた円形の突起を持つ。底部は浅い凹底である。

以上が後期末～晩期前葉の滋賀里式併行の土器であるが、これまで知られていた近畿地方の滋賀里式[注12]と比較すると、浅鉢はほとんど共通するものの、深鉢は多くの点でちがいを指摘できる。

それは、屈曲するタイプでは波状口縁が圧倒的に多いことや、波頂部に逆T字状の文様、口頸部界や頸胴部界外面に斜行沈線を持つこと、それに調整にケズリを採用していることなどである。また、当該期の近畿地方の深鉢の底部はほとんどが凹底であるのに対し、第38図12のような丸底を呈するものもあり、注目される。ここで挙げた土器群は、浅鉢の特徴から見て、かなりの時期幅を持つと思われ、当該期の西日本は、凹線文土器の広域的な様式が分裂し、小土器圏ごとに分立することがすでに指摘されている[注13]が、今回の調査は近畿地方においても、北部では滋賀里式とは異なる土器群が存在したことを明らかにしたことで重要な意義を持つ。新たな型式名をつける必要性があると思われるが、細分などの問題を含めて、今後に譲りたい。

②**篠原式土器**(第42～45図、図版第11・12・23)

a．**深鉢A類**　肩部で屈曲し、口頸部が外反するタイプ(1～7・30・31)

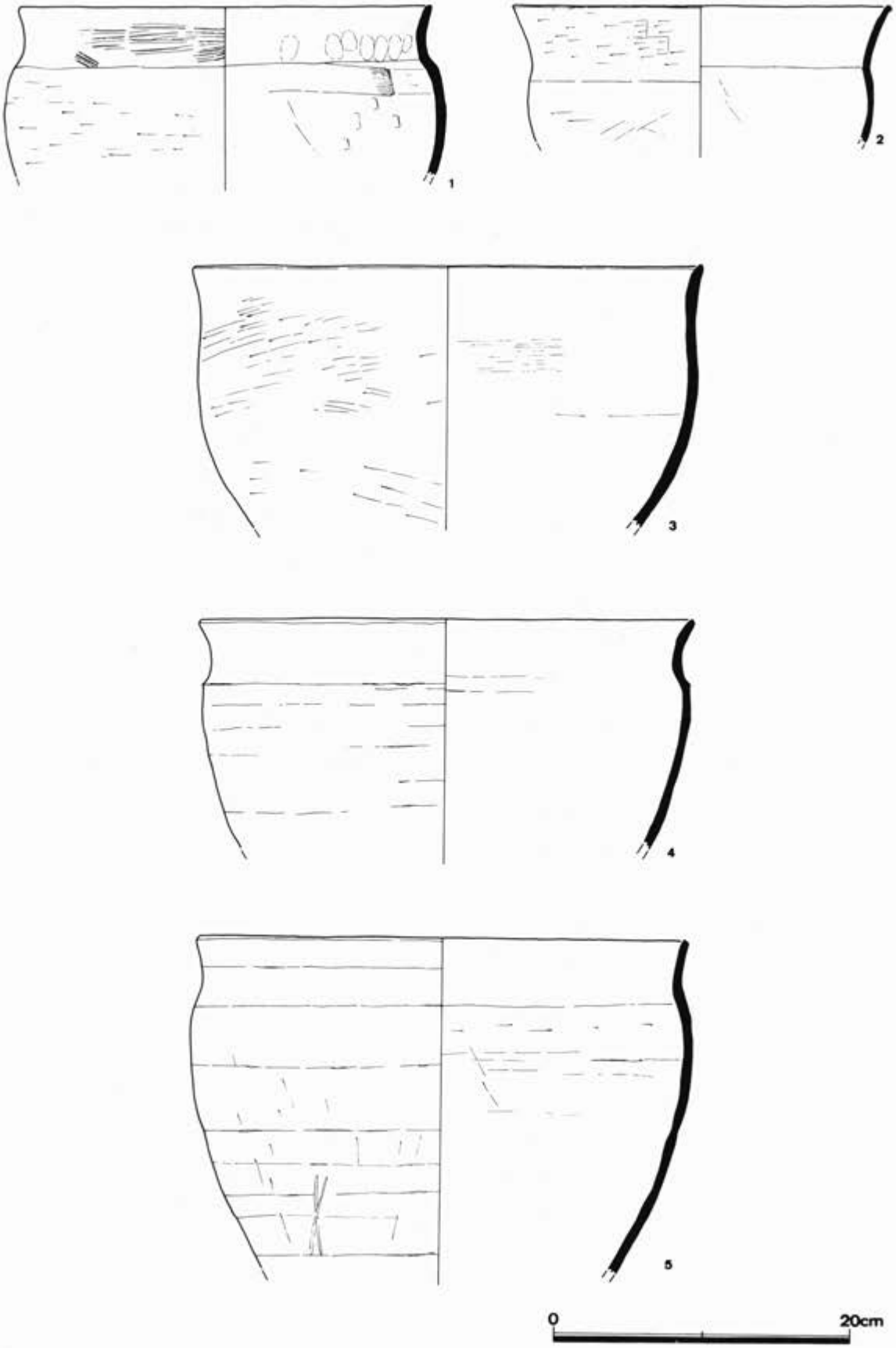
頸部外面の調整は、ナデが主体であり、二枚貝による(1)、ケズリによる(2)もあるが、これらは少数である。胴部外面は、ほとんどがケズリ調整であり、内面はほとんどがていねいなナデ、もしくは板ナデによっている。また、口唇部にキザミを施すものも一定量存在し、O字状のキザミが最も多い。口唇部の形状は、面取りを行うものもあるが、丸いものが多い。2の頸胴部界内面には、粘土を接合したためか、もしくは胴部のナデ調整の際の粘土のはみ出しかは判断できないが、段になっている。3は、屈曲の度合いが弱く、胴部のケズリが一部頸部に及ぶ。4～6の胴部外面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。4は頸胴部界に、頸部のナデの際にはみ出した粘土が胴部にかぶっているのが確認できる。口唇部はしっかりとした面取りを行い、その際のはみ出した粘土が口縁部にかかっている。7の胴部は、軽いケズリの後に原体は不明であるが、細いスジのつくナデを、頸胴部界内面は、一部二枚貝条痕によって調整する。口唇部には横長のO字キザミを施す。30の胴部は確認できる範囲では粗いミガキ調整を行っている。31は両面ナデ調整で、口頸部内面には下にケズリの痕跡が確認できる。口唇部には横長のO字に近いD字キザミを施す。

b．**深鉢B類**　砲弾形のタイプ(8～10・32)

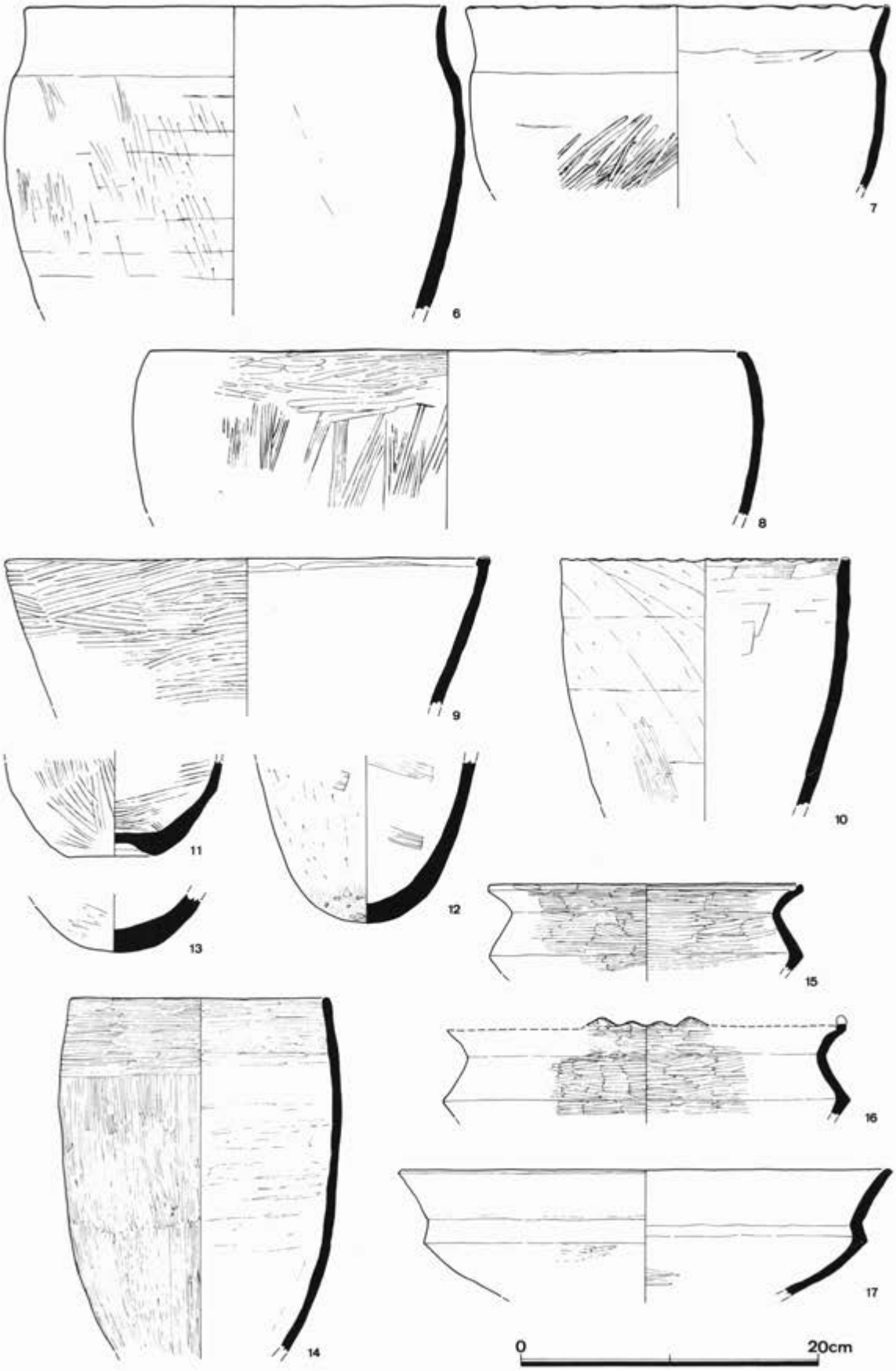
滋賀里式併行の土器の項でも説明したとおり、このタイプのものは多数出土しているが、帰属時期を決めにくい。篠原式のものは調整がケズリ、二枚貝条痕、ナデのものが該当すると思われる。8は、やや内湾ぎみの器形である。胴部にはタテ方向の二枚貝条痕を、口縁部にはヨコ方向の大きい単位のミガキ調整を行う。口唇部は面取りを行い、部分的に粘土が内側へ押しやられている。9の外面は二枚貝条痕、8と同様口唇部は面取りを行い、粘土が内側へはみ出す。10は、外面は軽いケズリ、その後部分的にナデによって調整する。部分的に粘土紐の痕跡が確認できる。内面調整は、ヨコ方向の板ナデで、特に口縁部で強く行っている。口唇部にはO字キザミを施す。32は、外面には軽いケズリ、口唇部には逆D字キザミを施す。

c．**深鉢底部**(11～13)

底部も多く出土しているが、深鉢B類同様、帰属時期を決めにくい。凹底、丸底、尖底に近い丸底や平底など、各種存在する。11は凹底で、内外面ともに調整は二枚貝条痕を、底面はナデ調




第42図　篠原式土器実測図(1)　1/4




第43図　篠原式土器実測図(2)　1/4

整を行う。他の凹底の底面中央部には、使用によると思われる磨滅がしばしば認められる。12・13は丸底であり、外面調整は軽いケズリ、12は部分的に板ナデを用いており、底面は使用によると思われる磨滅が見られる。内面にも板ナデ調整を行う。

**d．浅鉢A類**　胴が張り、口縁部がゆるやかに外反するタイプ(15・16・38)

胴部の張る部分は、稜を持って屈曲する。内外面ともにていねいなミガキ調整で、口縁内面に抉り状の沈線を持つ。16は、内面は黒色で、口縁部にB突起を持つ。

**e．浅鉢B類**　口縁部が長く外傾するタイプ(17・18・34・35)

内外面ともていねいなミガキ調整を行い、17は口頸部下端に抉りによる段を持つ。18・34・35は、口縁内面に抉り状の沈線を持つ。18は、肩部内面に粘土紐接合痕が確認できる。35は、口縁部に横長の突起を持ち、内面は黒色である。

**f．浅鉢C類**　口縁部が短く外傾するタイプ(19)

本類に該当するものは19の一点のみである。肩部に粘土の接合痕が確認でき、内外面ともに強い稜を持つ。調整は、内外面ともにていねいなミガキであり、外面にはススが付着している。

**g．浅鉢D類**　胴が張り、短い口縁が付くタイプ(20・21・36・37・39)

内外面とも調整はていねいなミガキによるものが多いが、胴部上半内面はミガキを行わず、ケズリ痕を残すものも多い。胴は、張りが強いものや弱いものがあり、また張りだす部分が丸いもの、強く屈曲して稜を持つものなどがある。20は胴部、口縁部ともに稜を持って屈曲し、胴部上半内面はケズリ痕が残る。21は、胴部は稜を持って屈曲するが、口縁部は外反する。胴部に粘土紐の接合痕が確認できる。36も、胴部は屈曲、口縁部は外反するが、胴部上半に段を持っている。37は、胴部は丸く張るが、口縁部は屈曲して開く。口縁部内面には抉り状の沈線を持つ。39は、他に比べて胴の張りが弱く、口縁部内面に抉り状の沈線、胴部内面も部分的に沈線を持つ。

**h．浅鉢E類**　深手の砲弾形をしたタイプ(14・33)

滋賀里式併行の項でも説明したとおり、この類は帰属時期が決めにくい。14は、外面は口縁部付近がヨコ方向のミガキ、胴部はタテ方向のミガキ、内面はヨコ方向のミガキを行う。33は、内外面ヨコミガキ、口縁部にはB突起を持ち、内面には2条の沈線を施す。

**i．浅鉢F類**　椀、鉢状のタイプ(23～28)

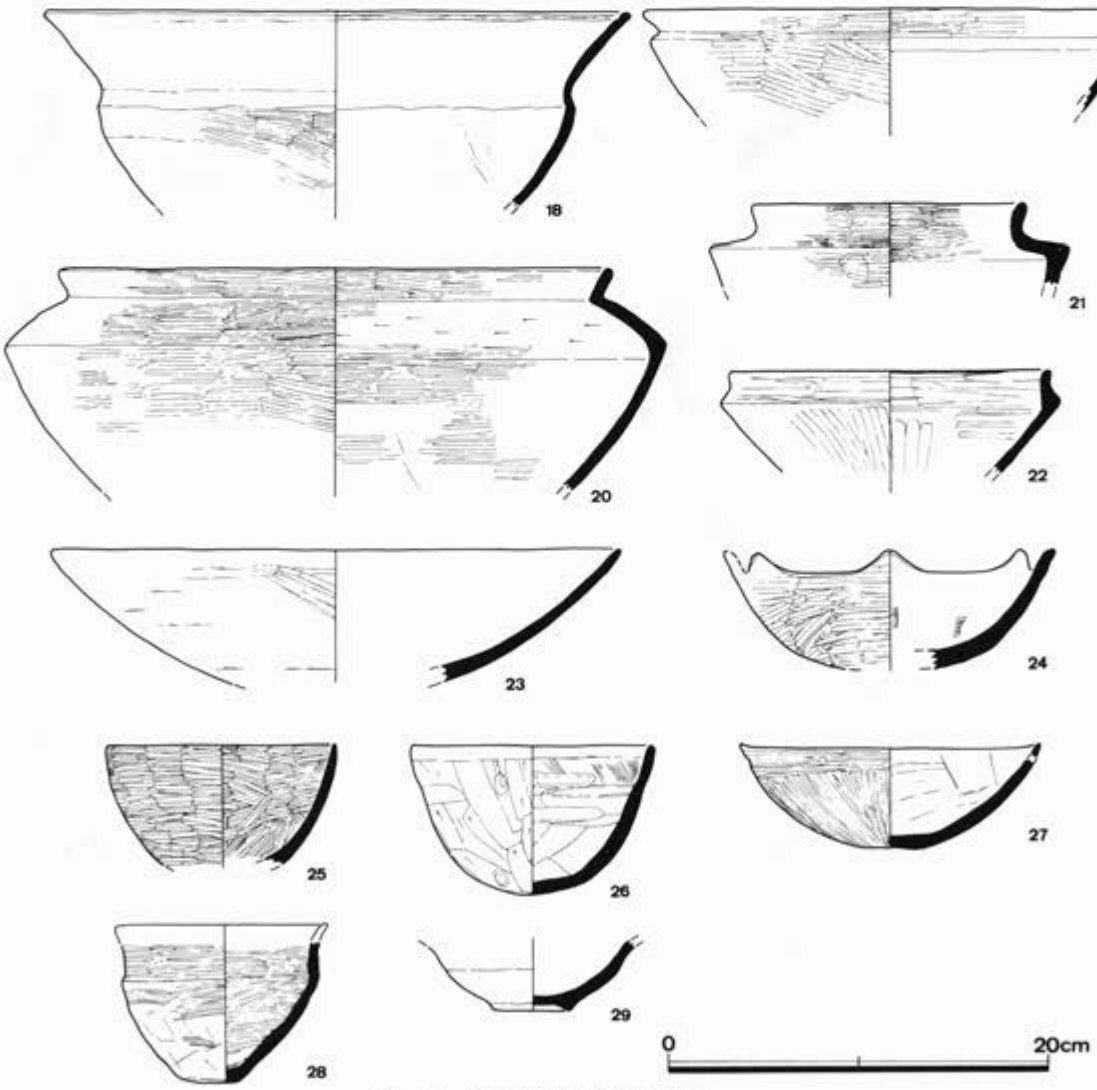
23は皿状を呈し、調整はナデが主体で部分的にミガキを行っている。外面には粘土紐の痕跡が残る。24は、推定で6単位の波状口縁、外面調整はミガキ、内面は部分的に板ナデを行う。26は、外面調整はケズリが主体で、部分的にタテ方向の二枚貝条痕を、内面は粗いミガキと板ナデによっており、全体的に作りが粗い。27は、外面がケズリの後ミガキ、内面は板ナデの後ミガキによる調整で、小さな突起を持ちその下に焼成前に穿孔を行う。28は、外面胴部はケズリ、頸部はナデで、肩部で屈曲する器形で浅鉢よりはむしろ小型の深鉢とするべきかもしれない。底部は平底であり、胴部への立ち上がりはゆるやかである。

上記以外の浅鉢には22・29・40・41がある。22・40は、逆「く」字状の器形を呈し、22は胴部はタテ方向の粗いミガキを、口縁部と内面にはヨコ方向のミガキによる調整を行い、屈曲部断面

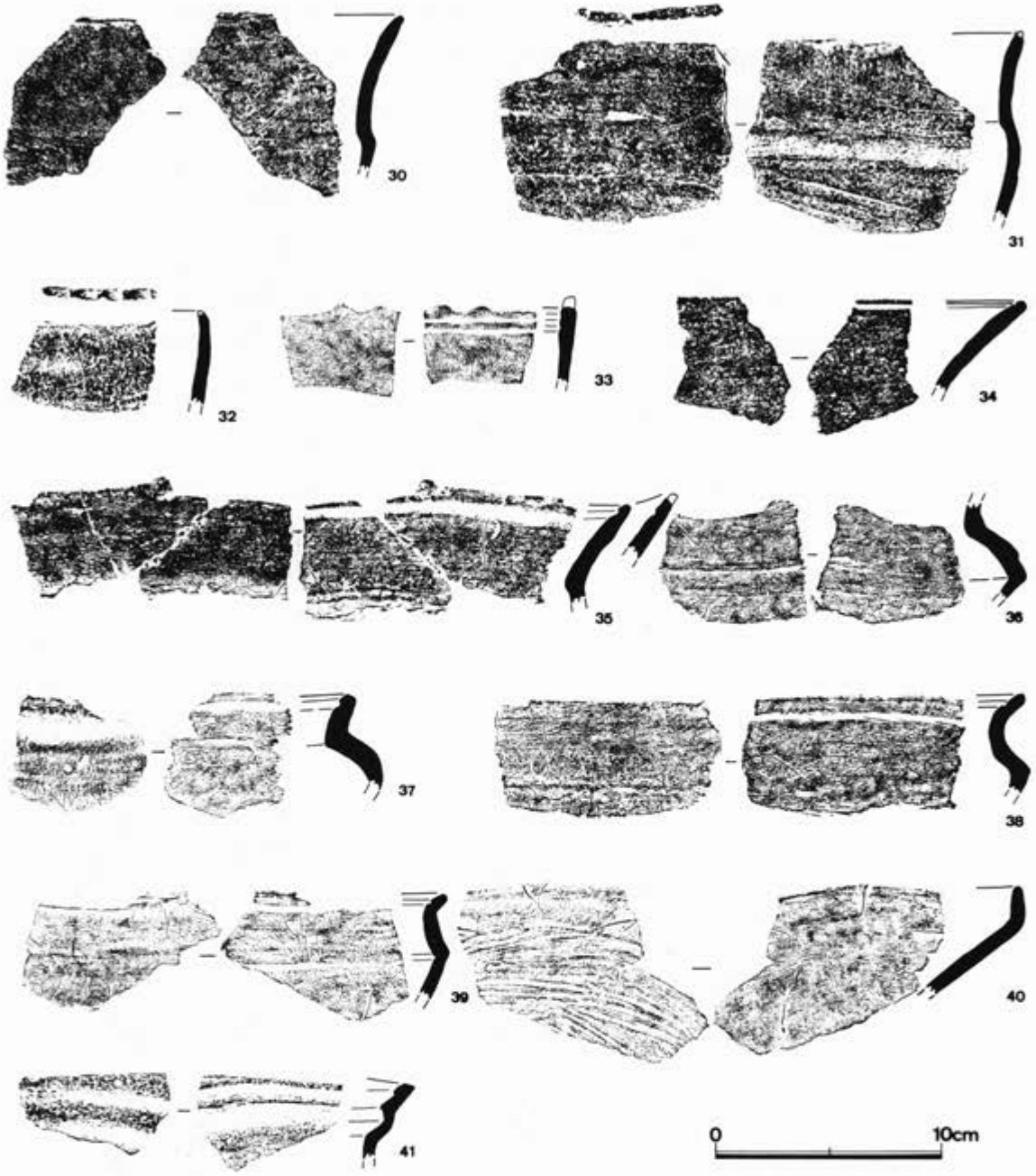
には粘土紐の接合痕が確認できる。40は、胴部に二枚貝条痕調整を行う。これらは、時期的に下る可能性がある。29は、全体の器形は不明であるが、少し屈曲した後に外反すると思われる。凹底で、底面も胴部もミガキ調整を行う。41は、鍵形口縁で外面の屈曲はゆるやかである。内面には炭化物が付着している。

以上が晩期中葉の篠原式の土器であるが、篠原式に該当する土器は堅田　直氏の調査概報では明記されておらず、平遺跡の存続時間を考える際にも今回の調査は重要な意義を持つ。土器は、浅鉢を見る限りでは、篠原式中段階のものが主体を占めると思われる。篠原式新段階に特徴的である、口縁部が玉縁状を呈する浅鉢は一点も出土していないにもかかわらず[注14]、深鉢の篠原式新段階の特徴である頸部のナデ調整や丸底は多く見られる。このことから、近畿地方北部が篠原式中段階にいち早くこれらの新しい様相を導入、もしくは生み出した可能性があることを指摘できる。底部の丸底化の開始は、滋賀里式併行の土器(第38図12)に見られるように、かなり古い段階から起こっている可能性も考えておきたい。

なお、深鉢で晩期後葉の突帯文土器と明確に判断できるものは出土していない。




第44図　篠原式土器実測図(3)　1/4




第45図　篠原式土器実測図(4)　1/3

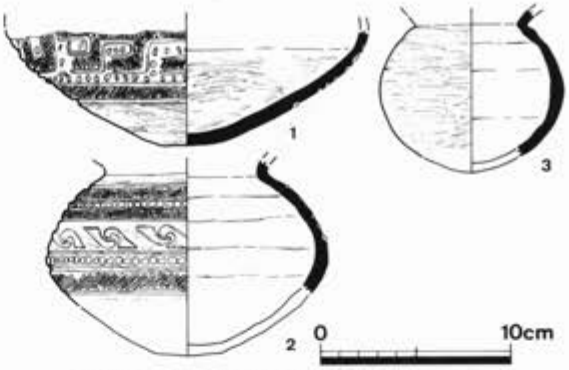
③**東日本系の土器**(第46・47図、図版第10・24)

ここでは、当該期に併行すると考えられる東日本系の土器を一括して扱う。小さな破片が多いため、器種や時期が特定できないものも多い。

4の深鉢は、ＬＲの縄文を持ち、口縁部と胴部上半に浅い凹線状の沈線が複数本横走する。凹線状の沈線の中はていねいにミガキ調整をしており、縄文が一部擦り消される部分も確認できる。外面の一部と内面には巻貝条痕と思われるもので調整を行い、焼成後の穿孔も確認できる。後期後葉の可能性も高い。

1・2・5～11・13・14・18・19・21は、北陸系である。そのうちの5～8・10・11・13は、八日市新保式と思われる。5・7は、波状口縁の浅鉢。内外面の調整はていねいなミガキである

が、外面にはススが付着する。5は口縁部に連結三叉文、7は平行沈線とX字状文を持つ7の波頂部は、複数本の平行沈線を切る形で一本の縦位沈線を施す。6は、全体の器形は不明であるものの、連結三叉文を持つ。8は、突起の一部と考えられ、連結三叉文を持つ。また、赤彩の痕跡が確認できる。10・11・13は、平縁の浅鉢である。10は、口縁部の平行沈線文を4本の縦位短線で区切る。胴部には沈線が斜めに走る。調整は両面ナデで、内面には炭化物が付着する。11は、直口口縁の口唇部に2条の平行沈線と縦位の短線を施す。調整は、両面ともていねいなミガキである。13は、口縁内面が肥厚し、口唇部に1条の沈線と凹みを持つ突起を持つ。内外面の調整はていねいなミガキである。



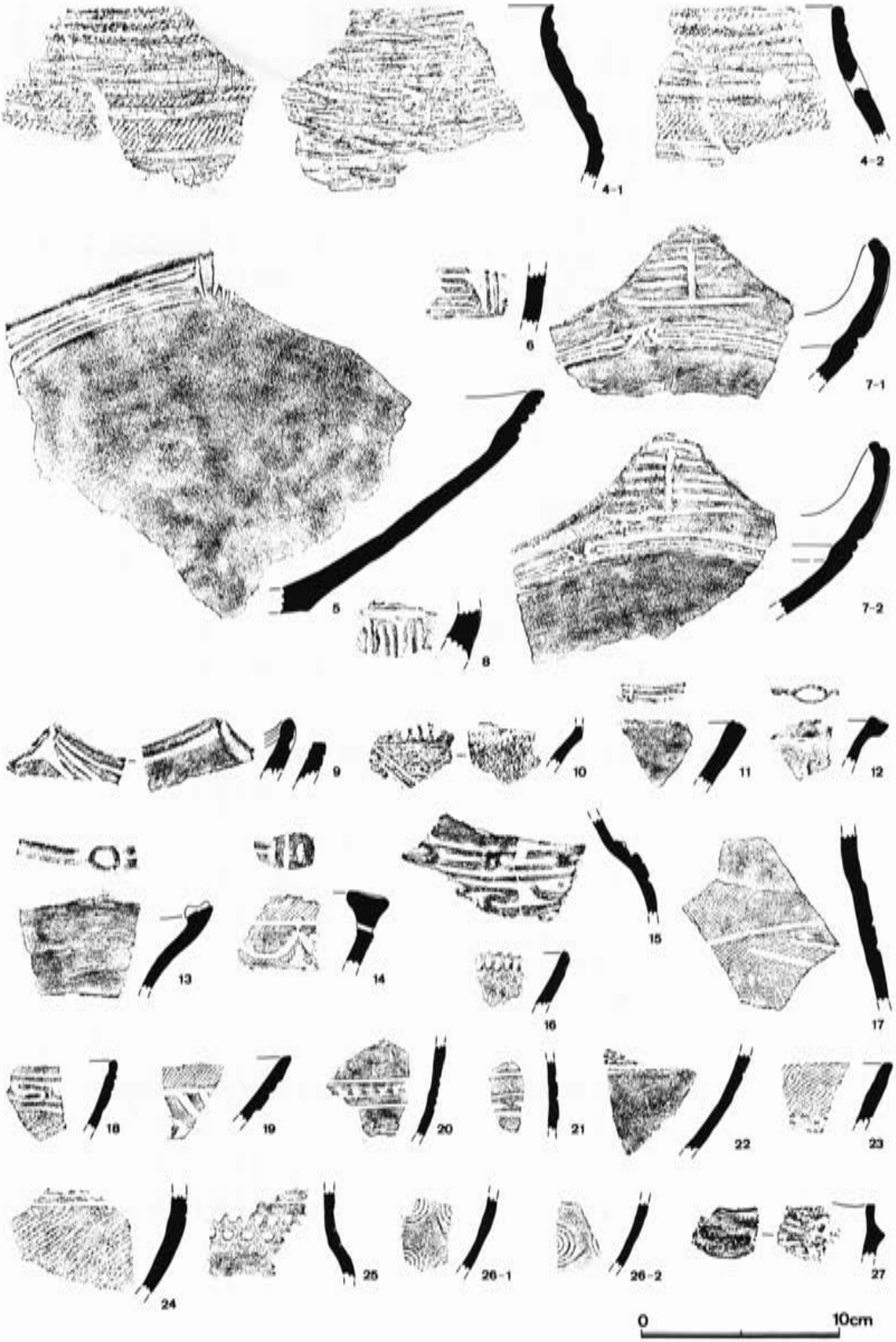
第46図　東日本系土器実測図(1)　1/4

1・9・14・19は、御経塚式と思われる。すべて内外面ともていねいなミガキ調整を行う。1は、充填によるLRの縄文帯と列点帯とが直角に入り組む文様を持つ。列点は、半截竹管状工具によると思われる。9は、波頂部に三叉状の文様を持ち、内面には非常に浅い2条沈線を持つ。14は、浅鉢で口唇部に連結三叉文と縦位沈線を持つが、縦位沈線の部分が肥厚する。外面はLRの縄文帯を持ち、赤彩の痕跡がある。焼成前に穿孔を施す。19も浅鉢と思われ、LRの縄文帯と沈線を持つ。

2・18・21は、中屋式と思われる。2は、胴部にLRの縄文帯と、二条沈線間に連続押し引き刺突文を施し、入り組み三叉文を持つ鉢である。外面には赤彩の痕跡が確認でき、無文部分にはミガキ調整を行う。内面は粗いナデで、粘土紐の接合痕が確認できる。18は、口縁部に鍵手状の文様、胴部にはLRの縄文を持つ。口縁部内面には1条の浅い沈線を施す。内外面とも調整はていねいなミガキである。21は、LRの縄文帯の間に連続する刺突を施す。外面はミガキ、内面は粗いナデによる調整で、外面には赤彩の痕跡が確認できる。

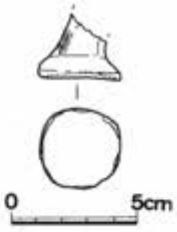
15は、亀ヶ岡式系の壺で、胴部に羊歯状文風の文様を持つと考えられる。頸部にはヨコ方向のていねいなミガキ調整を行うが、内面は粗いナデである。

その他は帰属型式をはっきりと特定することができない。3は壺であるが、頸胴部界には段を持つ。胴部は、先にケズリ調整を行った後にミガキ調整を行う。また、赤彩の痕跡が確認できる。内面は粗いナデで、粘土紐の接合痕が確認できる。12は、深鉢の口縁部で、波頂部に凹み状の押圧を施す。16は、粗製の深鉢で、口唇部にキザミ、口縁部外面に刺突を施す。内外面ともナデ調整である。17は、LRの縄文が施され、その部分には赤彩の痕跡が確認できる。無文部分と内面にはていねいなミガキ調整を行う。20は、2条の平行沈線間に、平行沈線と縦位の短線を組み合わせた文様を持つ。この部分には赤彩の痕跡が確認できる。外面は黒色で、調整はていねいなミガキである。22は、小さな円形刺突が密に施される文様を持つ。25も、円形刺突を持つが、22に




第47図　東日本系土器実測図(2)　1/3

比べて大きく間隔が広い。深鉢の肩部と思われる。23は、口縁部にＬＲの縄文を施し、内面の調整はていねいなミガキである。24は、平行沈線下に撚糸文が施されており、中期の可能性もある。26は、流水状の文様を持ち、弥生土器の可能性もある。27は、波状口縁で砲弾形の深鉢と思われるが、口縁外面は突帯状を呈する。口唇部は面取りを行い、調整は外面がナデ、内面はよくわからないが二枚貝条痕と思われる。突帯文土器の可能性もあるが、形態からみてその可能性は低い。



第48図　土製品
実測図(1/3)

以上が後期末～晩期中葉と考えられる東日本系の土器であり、帰属型式が不明なものも多いが、北陸の土器が多いようである。胎土は肉眼で観察するかぎりでは在地の土器と分別することができないものの、搬入されたものが多いと思われる。

④**土製品**(第48図)

その他、後期末～晩期中葉に伴うものとして一点の土製品が出土している(第48図)。残存部分のみからはスタンプ状土製品とも思われるが、柄の部分が斜めに取り付く点が気になる。スタンプの面の部分は直径3.1cmである。凹状を呈しており、ていねいなミガキ調整を行う。柄の部分にもタテ方向のミガキが確認できる。

(宮地聡一郎)

**(2)石器・石製品**

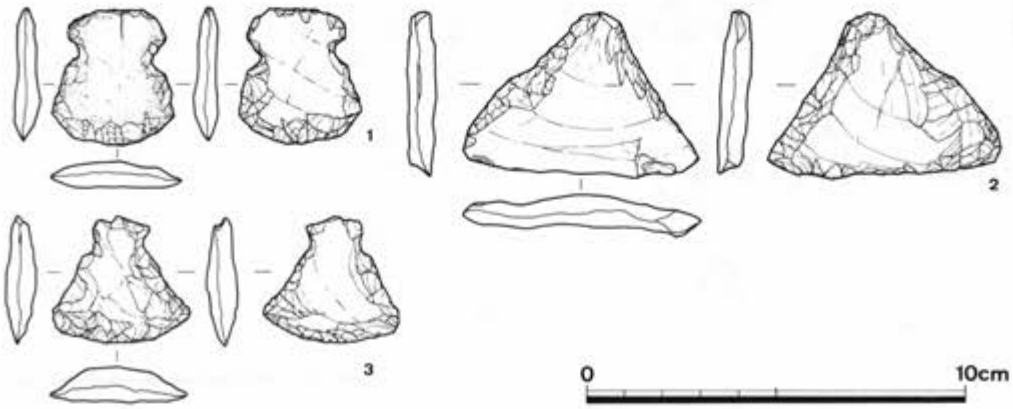
今回の調査では、土器とともに、石器・石製品も出土した。その種類には、石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錘(礫石錘・有溝石錘・切目石錘)・掻器・楔形石器・礫刃器・敲石・磨石である。

①**石匙**(第49図、図版第28)

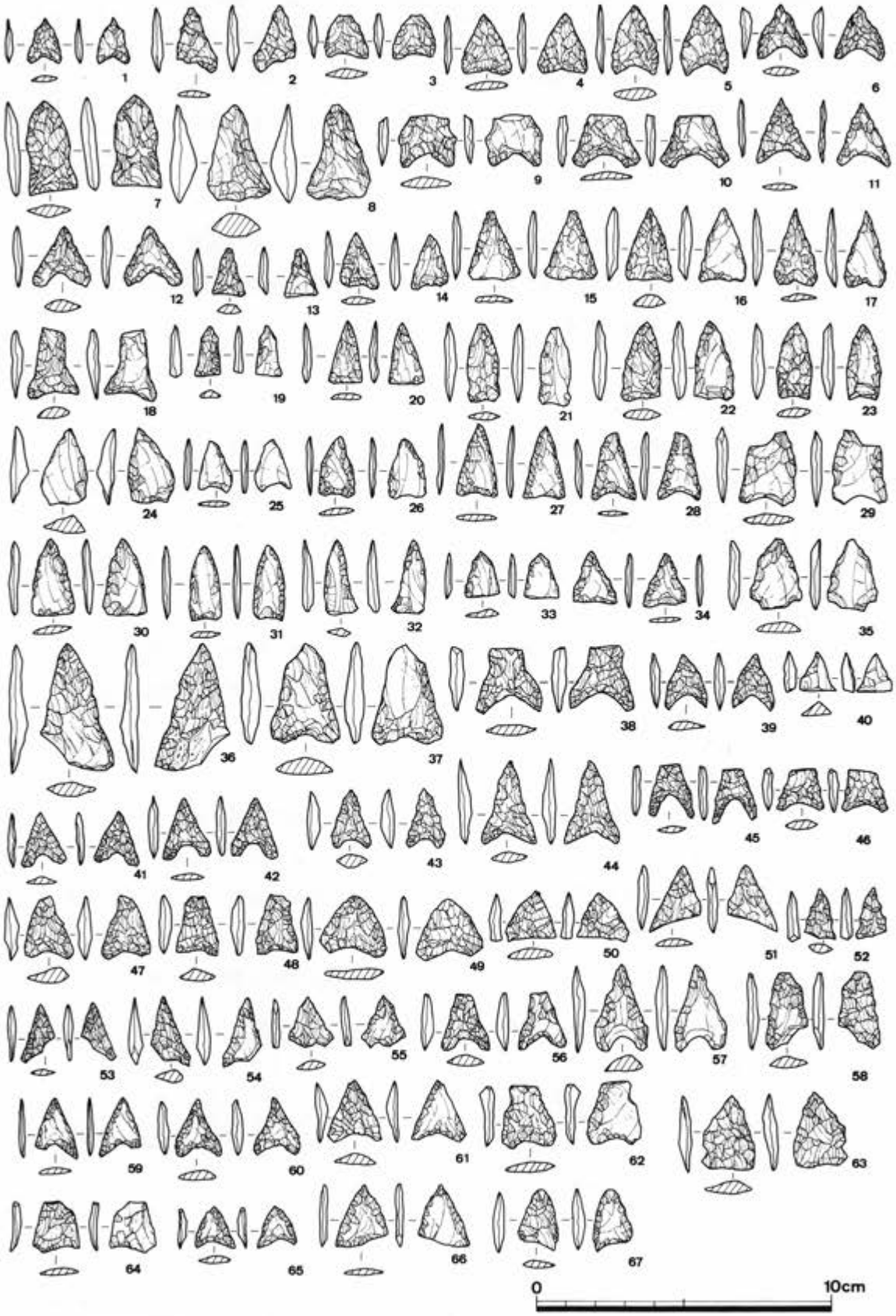
安山岩製のもの２点、流紋岩製のもの１点を数える横型の石匙である。いずれも大きく主剥離面を残し、刃部は両面からていねいに調整されている。また、１は片面に原石面を止めているが、把手部はていねいに作出されている。２は、三角形の剥片の測縁に調整を加えた石匙である。

②**石鏃**(第50図、図版第27)

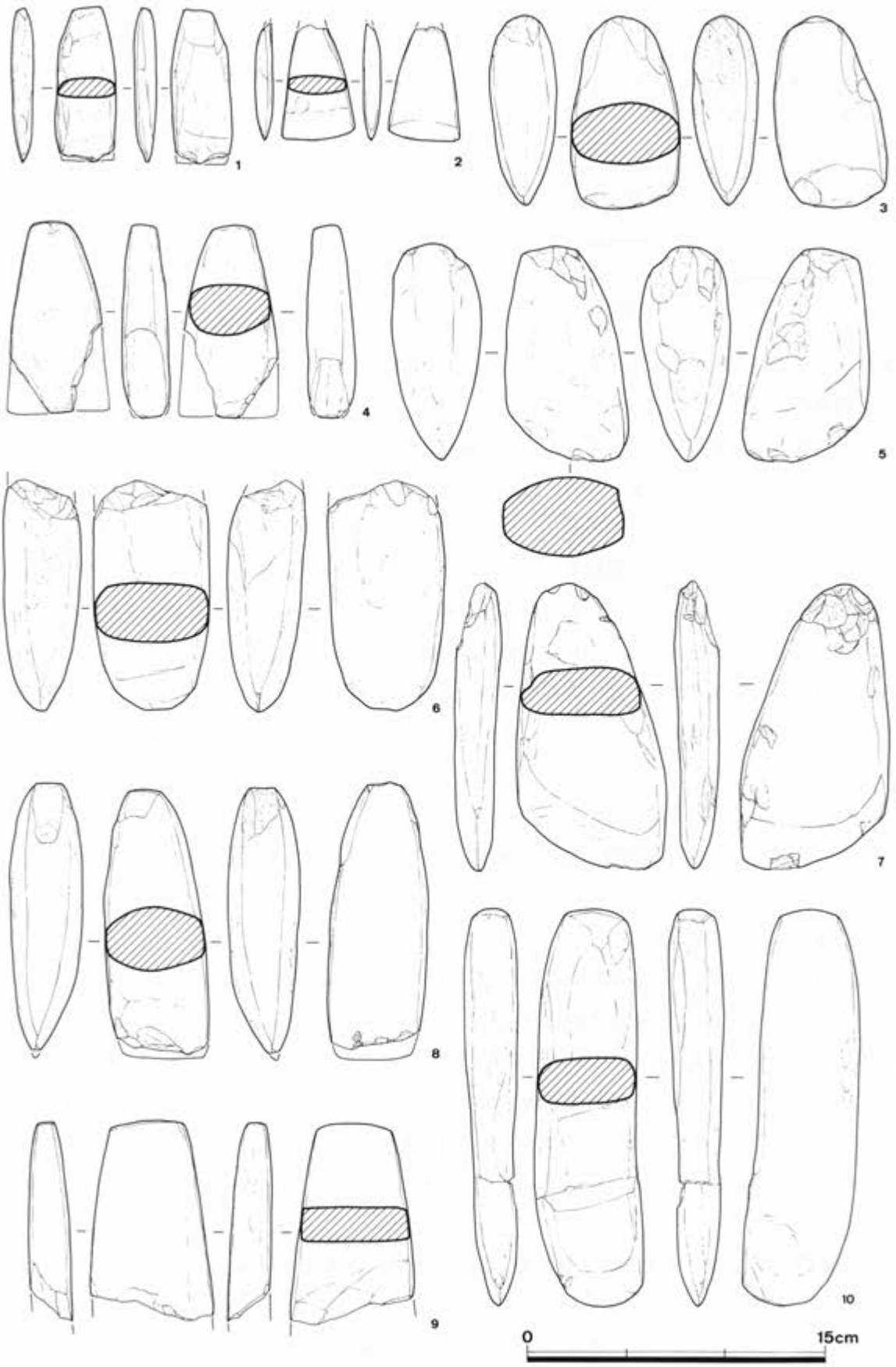
石鏃は総数67点が検出された。１～35は安山岩製、36～38は凝灰岩製、39～62・64～67は流紋



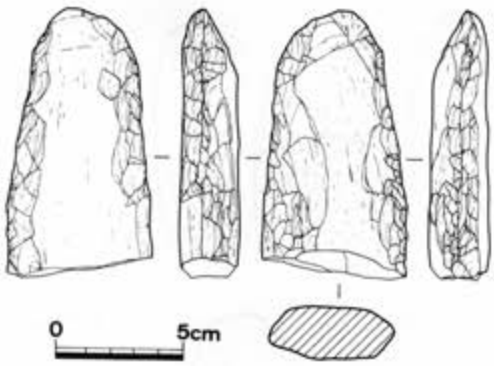
第49図　石匙実測図(1/2)




第50図　石鏃実測図(1/2)




第51図　磨製石斧実測図(1/3)



第52図　打製石斧実測図(1/3)

岩製、63は赤チャート製である。表面の調整には、主剥離面を残して側縁を両面から調整するものと、両面をていねいに調整して淡い鎬を作出するものとがある。また、形態には、方形で凹基部を持つもの、長さが幅の2倍近くに達する細長いもの、大型で五角形に近いものがみられる。これらの石鏃は、前期～晩期のものが混在しており、明確に分離はできないが、両面調整の小型で基部の刳り込みが大きな鏃は中期、側縁を調整した剥片鏃は後・晩期のものと考えられる。また、36は、基部の加工が不十分で、未製品の可能性がある。

③**磨製石斧**(第51図、図版第26)

縦型・横型の磨製石斧が検出されており、縦型斧の中には木製品加工用に使用された石ノミもあるようだ。石材には流紋岩、砂岩、珪質岩、蛇紋岩などがある。そのほとんどは、基部及び刃部の先端が使用により欠失している。また、横型斧は刃部の一方が研ぎべりしたものが多い。また、7と10は川原石の転石の側縁を加工して石斧としたものである。9は、蛇紋岩製の石斧の基部片で、稜角を鋭く調整したていねいな作りである。また、2も同質の石材を使用しており、刃部には使用に伴う擦痕がある。これらの蛇紋岩製磨製石斧は、晩期に北陸地方から搬入された可能性が高い。磨製石斧は、中期～晩期のものが混在して出土したが、中期以前のものは、細長く、薄い作りのものが主体であるのに対し、後・晩期のものは寸詰まりの形態で厚みを持った作りのものが目立っている。

④**打製石斧**(第52図、図版第26)

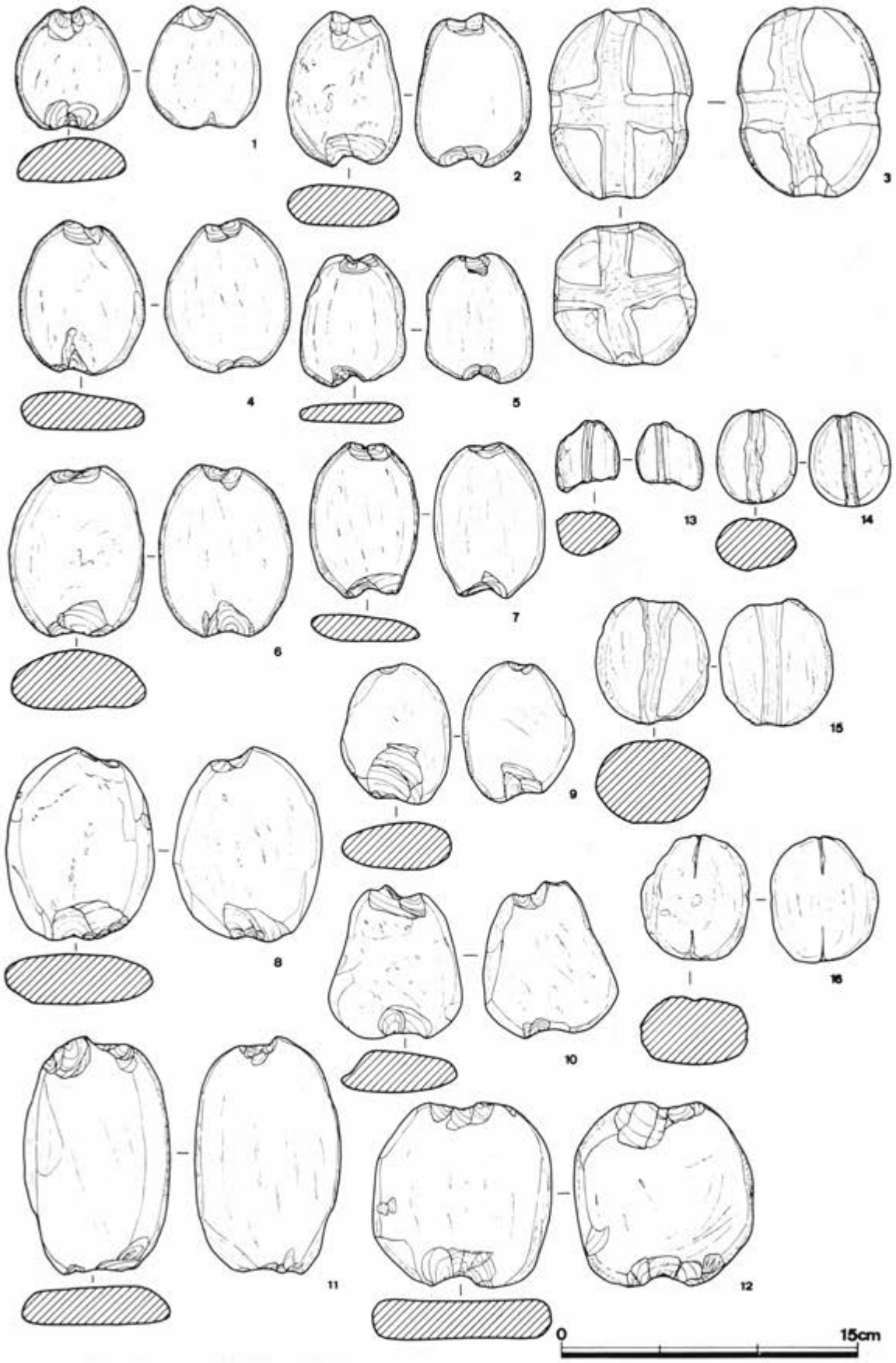
1点のみであるが、打製石斧の基部が出土している。流紋岩の測縁を両側から加工しており、刃部は欠失している。

⑤**石錘**(第53図、図版第25)

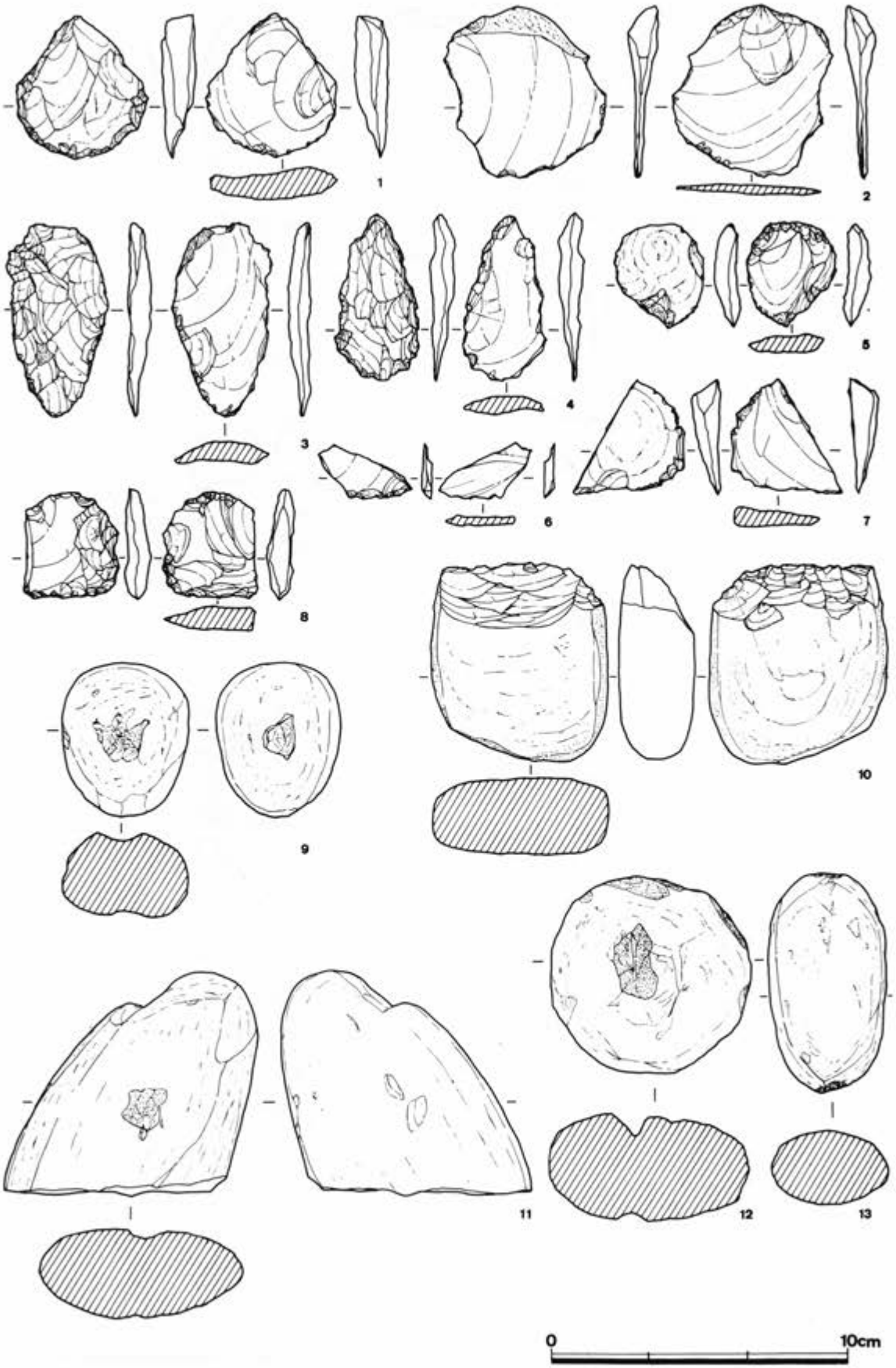
礫石錘・有溝石錘・切目石錘が見られるが、ほとんどが礫石錘である。礫石錘には大小あるが、偏平の石材をすべて主軸の両端を両側から打ち欠いている。有溝石錘は、石錘の主軸に沿って溝を切っており、3のように、「十」字形に溝を設けたものもある。切目石錘は、16点のみであるが、中央が淡く窪んでおり、敲石を石錘に転用したものと思われる。ただし、切目は刻線程度と微かであり、実際の紐掛けに供されたかどうかは判断できない。石錘については、前期～後期のものが出土している。礫石錘は、時代を通じて出土しているが、有溝石錘は中期前半以後に伴うようである。

⑥**不定形石器**(掻器・楔形石器・礫刃器・敲石・磨石)　(第54図、図版第25・26)

鏃・斧・錘以外の、石核を調整した不定形のツールをここでまとめておく。1～4は掻器で、端部を両面から調整したもの、あるいは使用によって剥離したものである。すべて流紋岩製である。5～8は楔形石器で、端部に微細な調整を加えている。ただし、この中には石鏃の石核も含

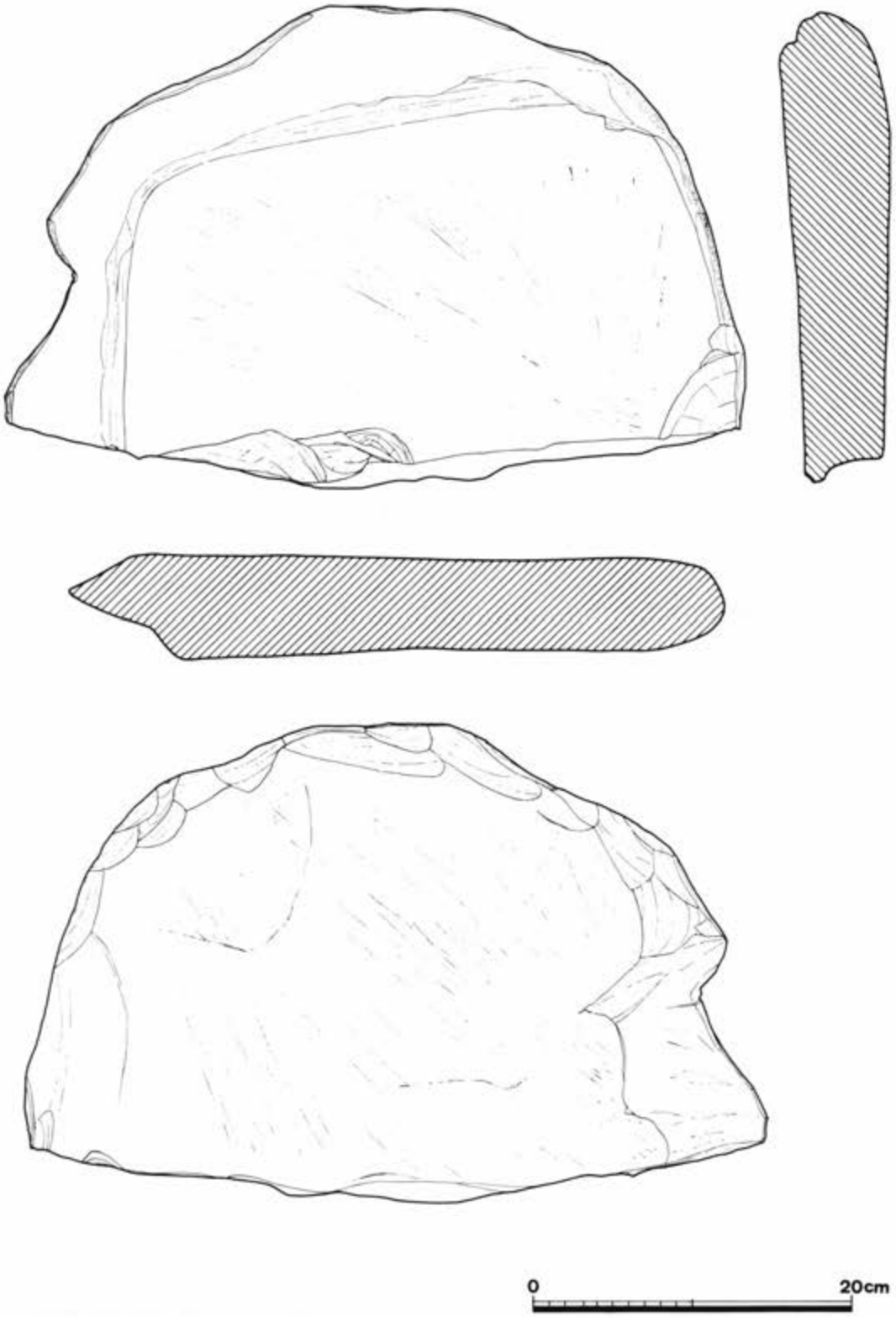



第53図　石錘実測図(1/3)

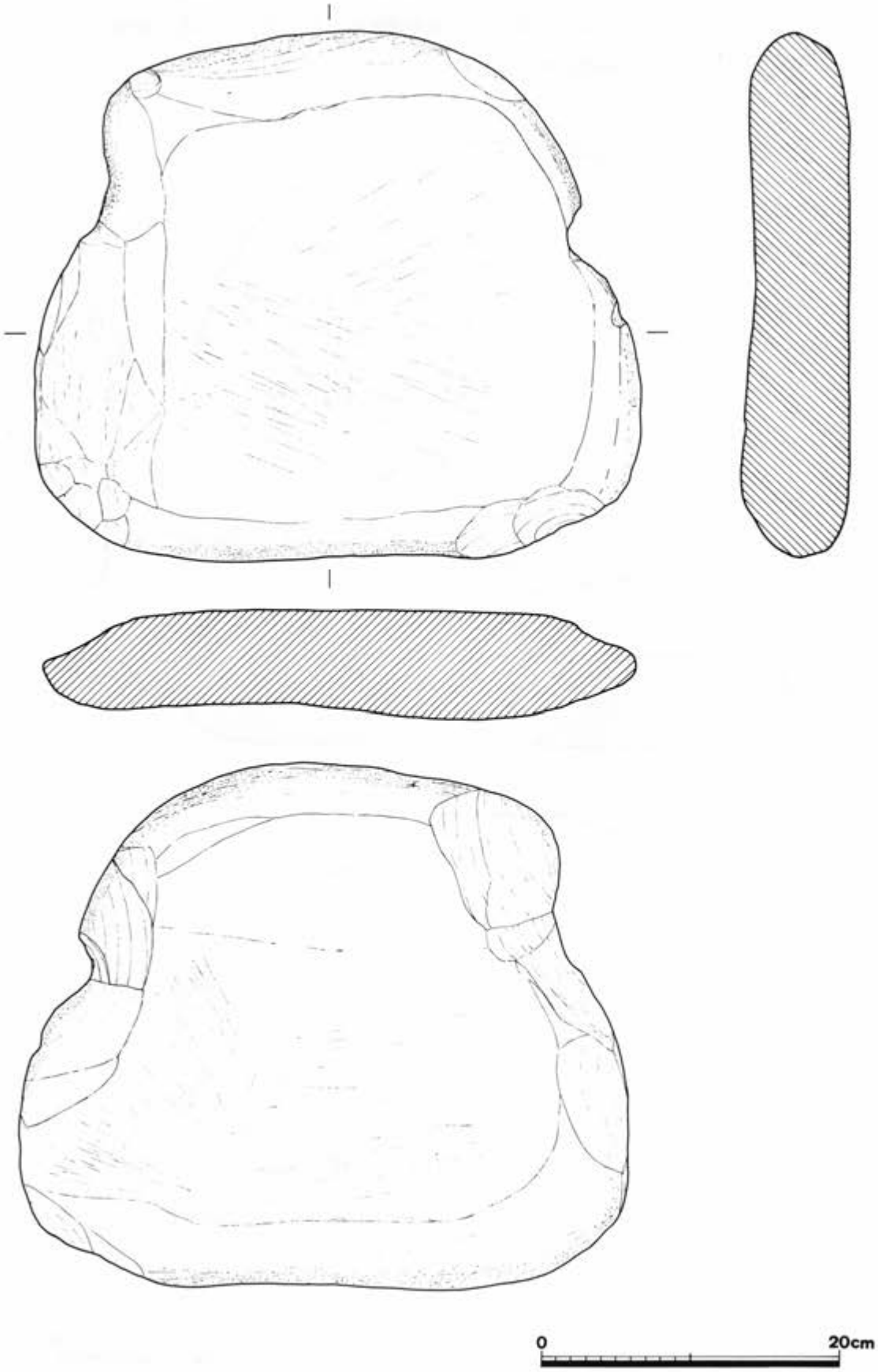



第54図　削器・楔形石器・礫刃器・敲石・磨石実測図(1/2)

まれていようが区別が難しい。6が安山岩製である以外は、流紋岩製のものが主体となる。10は、礫刃器で1点のみが出土した。偏平な転石の一端を両面から打ち欠いている。後期のものである。9・12は敲石で、円形の石材両面の中央部が敲打によって窪んでいる。11は磨石として使用され

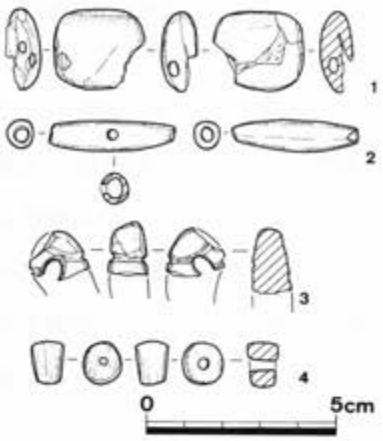



第55図　石皿実測図(1)　1/4




第56図　石皿実測図(2)　1/4

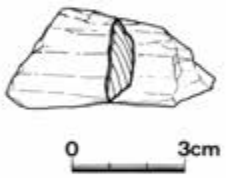
たものであるが、それほどの使用痕は観察されない。また、13は乳棒状の石材の端部に敲打及び磨滅痕があり、植物などの磨り潰しに使用されたのであろう。不定形石器は、今回の調査で出土した石器類で最も多量に出土したが、明確な整理ができず、代表的なものを提示するに留めている。



第57図　玉類実測図(1/2)

⑦**石皿**(第55・56図)

晩期(篠原式)の遺構面から2点の石皿を検出した。いずれも川原石などの転石を加工している。第55図は半円形を呈する石皿であり、両面に使用痕が認められるが、一方は使用面が台状に作出されている。これには、人為的に打ち欠いた跡があり、石皿の一部分を小型の石器として再利用した可能性が考えられるまた、第56図は、両面の磨り面のほぼ中央部に、不定方向の研磨痕が認められる。側縁は打ち欠きによって調整されている。



第58図　赤漆塗板
実測図(1/2)

⑧**玉**(第57図、図版第28)

4点を検出したが、1は中期前半のもの、その他は晩期に該当するものである。1は黒色で、側面に孔を設けた平玉であり、一方には穿孔を一旦失敗したあとで、開け直されている。2は、軟玉の長軸に沿って片面穿孔された土錘状の玉で、それに直交する方向に小孔を穿っている。3は、獣形勾玉の頭部片で、孔を中心に2条の刻線を持つが、尾部の形状は不明である。瑪瑙製と考えられる。4は、軟玉製の小玉で、偏平である。片面穿孔である。

**(3)木製品**

①**木製品**(赤漆塗り板)　(第58図、図版第28)

長さ5.5cm・幅2.7cm・厚さ0.7cmを測る三角形の木板片で、片面に赤色の漆膜が遺存する。漆膜は厚くしっかりしており、濃赤色を呈する。板目材であり、湾曲は全くない。これは、方形容器の小片であった可能性がある。晩期に帰属すると判断される。

## 6.　古墳時代の調査

**(1)遺構の概要**(第59図、図版第6)

古墳時代の遺構(第59図)は、傾斜と同一方向に掘られた溝とその周囲の人為的な集石から構成され、長さ13m・幅12mを測る。この集石は「V」字状に突出した部分が最も厚く、それ以外の部分は疎らである。さらに、その前面の溝には砂利を敷き、溝を隔てた向かい側には巨石を据えている。石材は、円磨度の高い川原石が密に敷かれており、宇川から搬入されたと考えられる。溝は、水が流れた痕跡はなく、滞水状態にあったようで、黒褐色の粘質土壌が堆積していた。遺物は集石部上面からは少なく、溝埋土の下層出土のものがほとんどで、2か所の土器溜まりを検出している(図版第8-(5)・(6))。これらの土器はローリングを受けておらず、時期的にも限定

されるという状況から、溝周辺から投棄されたと想定される。また、この遺構は北に向かってゆるやかに傾斜して築かれており、北側の斜面下方に流出した状況でほとんどの遺物が出土した。

この遺構の性格は、現在のところ、見解の一致を見ていない。海岸沿いに立地する礫を使用した遺構としては、長崎県原ノ辻遺跡で検出されたような、港に伴う施設とも考えられるが、標高が高く、船付き場などの可能性は低い。また、船付き場に向かう道の可能性もあろう。あるいは、後述するように、遺物では高杯が多く、丹塗り土器・ミニチュア土器・土玉・桃核の存在から、祭祀的性格が強いという特徴をうかがうことができる。いずれにしても、礫敷きの遺構という点から、祭祀的な色彩の強いことが指摘できよう。

また、土錘が存在することは、その祭祀が海洋の生産活動と関連したことを物語っているようである。

第59図　古墳時代の石敷遺構実測図(1/80)

(2)出土遺物

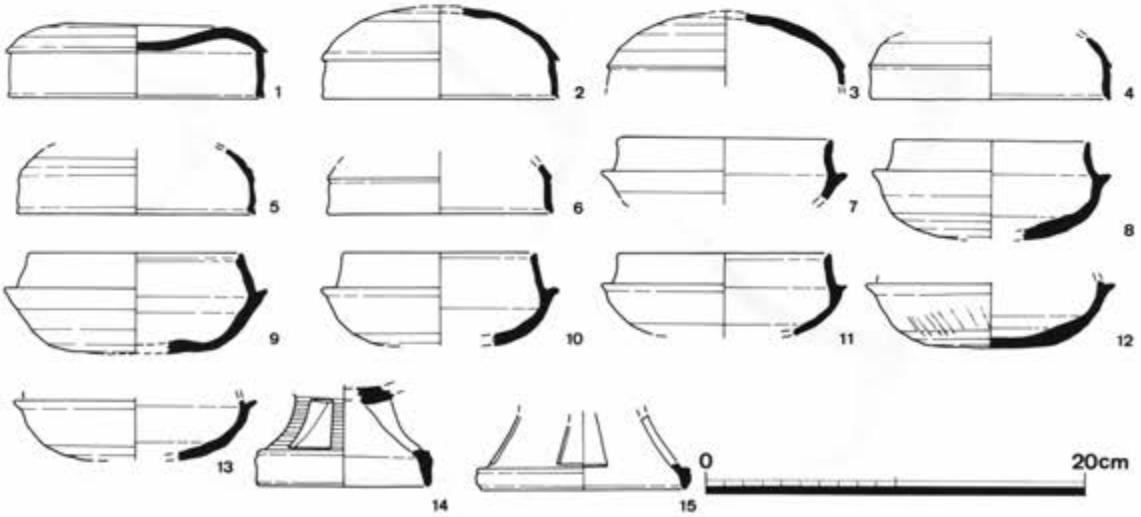
①須恵器・土師器(第60～62図、図版第29・30)

この遺構から出土した遺物は、土師器・須恵器を主体とする土器類、土錘・土玉などの土製品、桃核やクルミなどの植物遺体などが、整理箱20箱前後であり、古墳時代中期後半に限定される。その概要は次のとおりである。

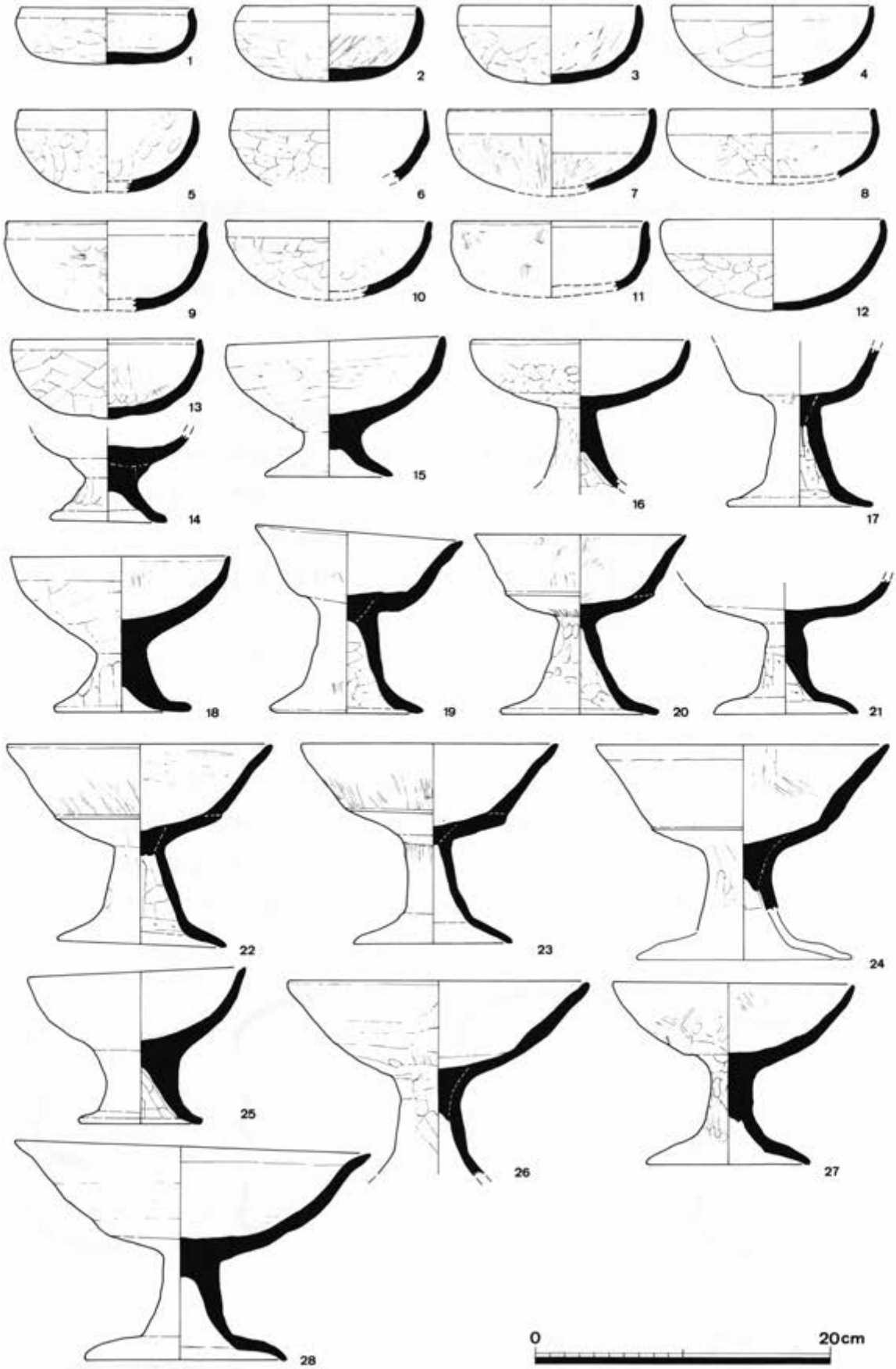
須恵器(第60図)は、蓋杯10点・高杯2点・甕1点があり、『陶邑古窯址群』の編年[注15]によればTK23型式に該当する。1は肩部の稜を鋭く作り、天井部に丸みを持たず、やや古相を呈する。12の杯身は、外面に右下がりの刻線を持つ。高杯では、14が3方、15が4方の方形透かしを持つ。土師器(第61・62図)の器種は、高杯42点、椀24点、壺5点、甕8点、ミニチュア土器8点、甑1点を数え、圧倒的に高杯が多い。完形個体は少なく、意図的な破砕が行われた可能性もある。しかも、高杯3点(15・18・21)と椀1点(12)は内・外面に赤色顔料を塗布している。高杯は、杯部に稜を持つものと椀形のものがあり、脚―杯部を連続整形して、円盤充填をしたものが主体である。椀には、外面を板ナデによって整形し、ミガキやハケによって調整したものも見られる。壺は2点あり、31は複合口縁気味に作られており、外面はハケ調整である。35は、大型の甕で煤の付着が認められるが、胴部下半にはミガキが認められる点が特異である。32は、把手付鍋であるが、この時期ではやや珍しい器種である。34は、口縁部を欠失しているが、甑であり、7孔を持つと想定される。移動式竈は、破片だが、炊口にそって貼り付け突帯を持つもの、あるいは掛け口の下端にタガ状突帯をめぐらせたものの破片がみられる。

②土製品・石製品(第63図)

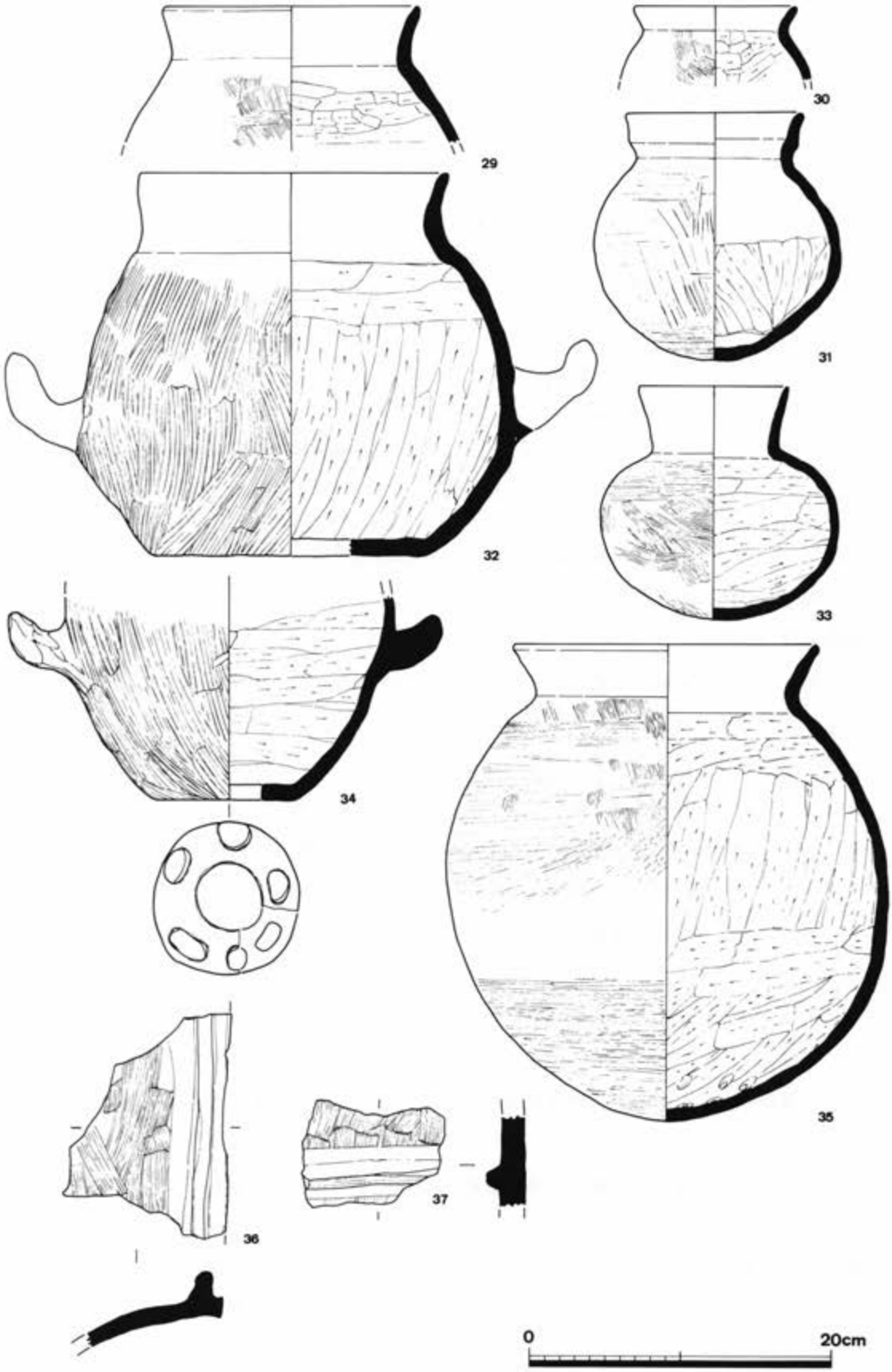
土製品には、土錘5点、土玉1点がある。土錘には、棒状のもの3点、球状のもの1点を数える。ミニチュア土器は、立ち上がる口縁部の壺形のものと椀形のものがあり、内面の一部に板ナデ痕が見られる以外は、手捏ねによる整形が主体である。土錘は、いずれも棒に粘土を巻き付けており、指頭圧痕が明瞭に残る。土玉は、赤褐色を呈する焼きの硬いもので、粘土球に穿孔し、焼成したものである。また、これら以外に植物遺体は桃核1点、クルミ2点がある。その内、ク



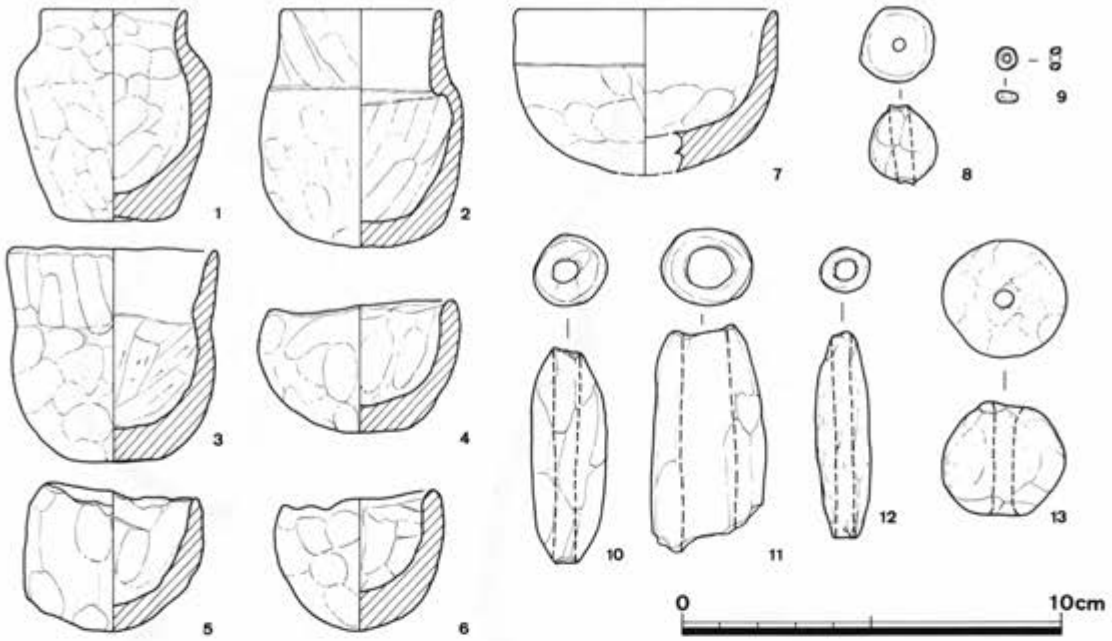

第60図　須恵器実測図(1/4)




第61図　土師器実測図(1)　1/4




第62図　土師器実測図(2)　1/4




第63図　ミニチュア土器・土錘・土玉・白玉実測図(1/2)

ルミは側面にノネズミによる貫孔が認められる。それ以外では、松毬10点が溝中から出土したが、これが当時の人為的な投棄かどうかは不明である。

**③製塩土器**(第64図)

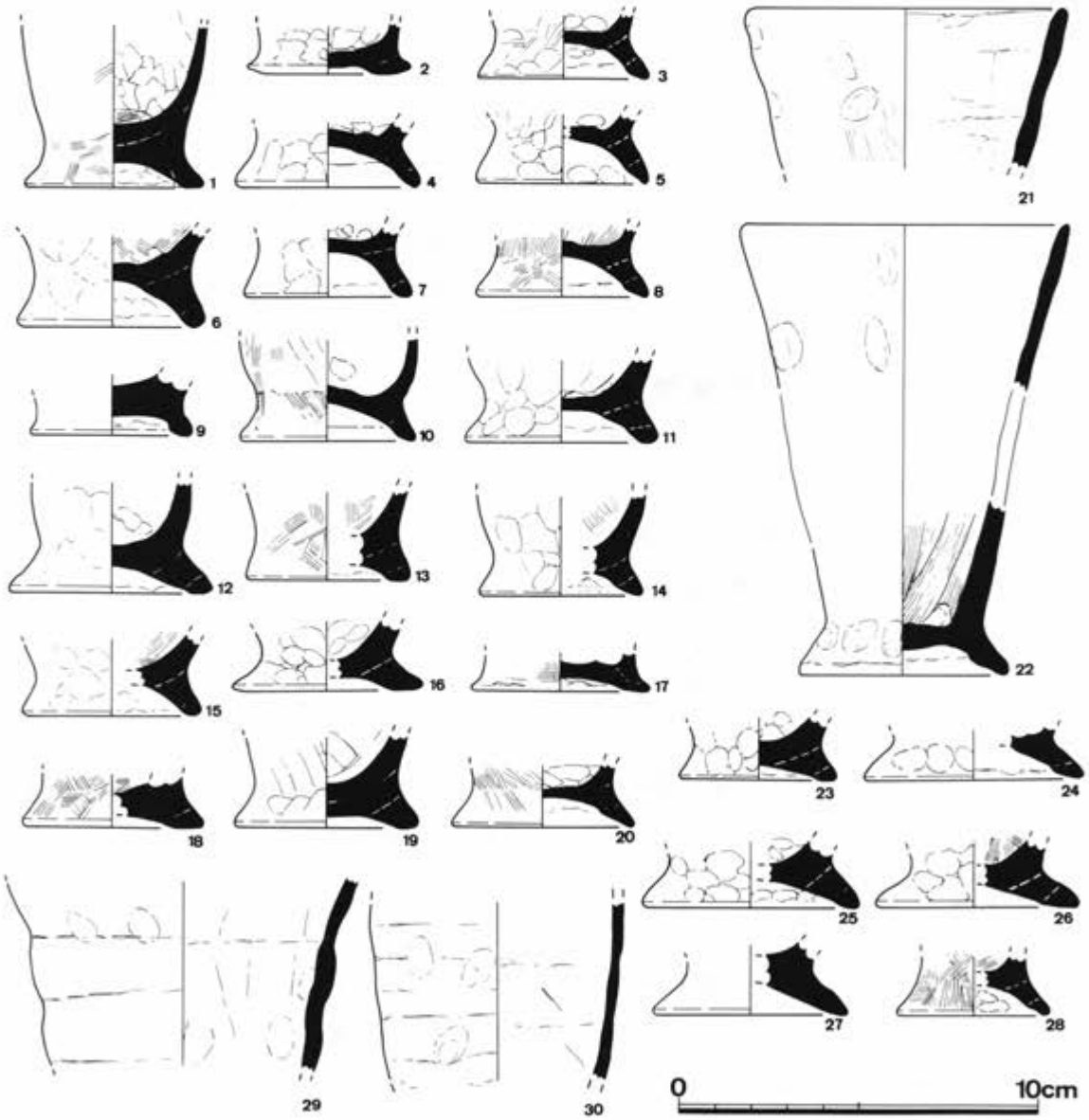
この遺構からは44点の製塩土器が出土した(第64図)が、脚台付の宇川型製塩土器が30点、丸底の小型砲弾形で若狭の浜彌Ⅱａ式に相当するものが１点、口頸部が強く屈曲する能登式製塩土器(棒状脚付深鉢形土器)が１点であり、宇川型が主体となる。この宇川型製塩土器は、全形がうかがえる資料は少なく、ほとんどが脚台のみであったが、非常に斉一的なつくりをしている。全形は、径５～5.5cm程度の倒盃形底部から直線的に立ち上がる杯部とで構成され、高さ12.5cm程度のタンブラー形である。色調は、外面が被熱してピンク色になっているが、杯部内面は灰白色を呈する。胎土は砂礫の混入が非常に少なく、均質である。製作技法は、脚―杯部を一体に成形して底部を円盤充填するものと、丸底の杯部に輪状粘土を付加して脚台部を作るものとがあるが、量的には後者が多い。また、脚台部内外面は指頭によって整形するが、内面に粘土紐痕を残すものが多い。杯部の内・外面調整はナデが主体だが、13点は完全にはハケが消されずに残っていた。特に、ナデ調整のみのものでも、内面底部付近には工具の当たりが観察できる個体が多く、この土器は、手捏ねではなく、ハケなどの工具による製作が基本であったようだ。被熱の状況は、脚台内・外面が端部から赤化しており、脚台を埋め込むのではなく、石組炉のように脚台内面にも被熱が及ぶ状況で使用されたことが想定される。

**④製塩土器の系譜**

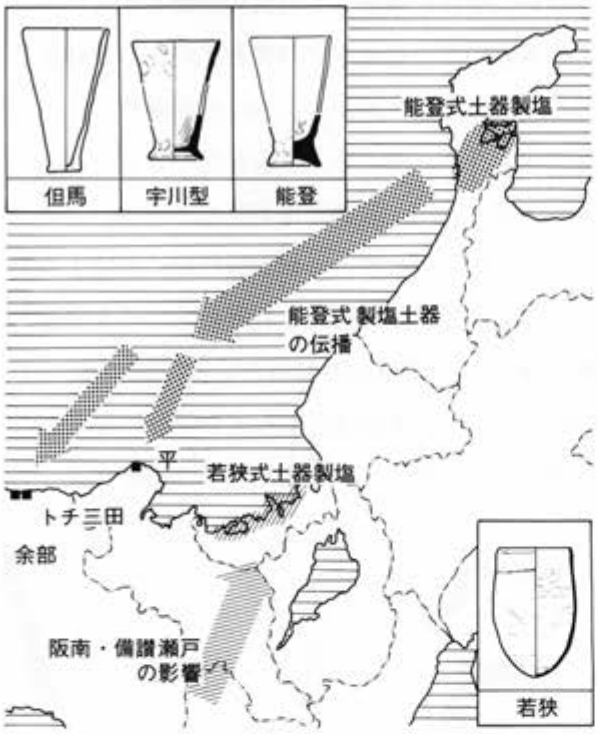
宇川型製塩土器は、同時期の若狭や大阪南部の製塩土器とは著しく異なっている。これらの地域では脚台を持たない丸底砲弾形のものが主体であり、それに先行する古墳時代前期～中期前半の倒盃形製塩土器では杯部が大きく内湾する。したがって、杯部が直線的に立ち上がる宇川型は、

これらの地域の影響下に成立したとは考えられない。今回の調査でも若狭の浜彌Ⅱａ式が出土したが、これは外面を指頭調整して粘土紐痕を留めるもので、焼成も宇川型と比較すると硬質である。形態だけに着目すれば、和歌山の目良式製塩土器に類似するが、これは外面調整にタタキを使用した弥生時代後期のもので、時期的な隔たりが大きい。そこで、５世紀後半～末に倒盃形脚台を持ち、宇川型製塩土器に類似した形態をもつ地域として、能登半島が想起される。

能登半島の土器製塩は、戸澗幹夫氏によれば[注16]、弥生時代終末期の月影式併行期に開始する。その製塩土器は、石川県七尾市祖浜遺跡出土例のような大型倒盃形脚台を特徴とし、ハケ調整された暗赤褐色で砂礫混入度が高い。だが、５世紀後半には小型脚台の製塩土器(戸澗氏分類によるⅣａ類)が斉一的に登場し、七尾市庵製塩遺跡群のように、富山湾沿岸地域を中心に安定した製塩技術が確立するという。この製塩土器は、砂礫混入度が低く、ヘラ状工具及び指頭によって調




第64図　平遺跡出土の製塩土器実測図(1/2)
1～28.宇川型　　29.能登型　　30.浜彌Ⅱａ(若狭)

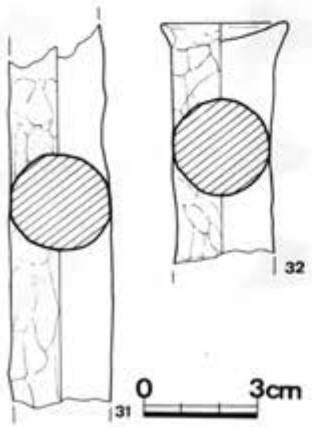



第65図　5世紀後半の日本海岸に見る製塩土器の二者

整するなど、宇川型製塩土器とその特徴ならびに盛行時期が合致し、脚台部の底径も極めて近い。その後、能登では棒状脚の大型製塩土器へと移行するが、その破片とみられる土器が、今年度の平遺跡の調査でも出土したことは示唆的である。以上の検討から、宇川型製塩土器とは土器製塩の盛行地帯である若狭を飛び越えて、能登半島から直接もたらされたか、あるいは、その影響下に丹後半島で成立した製塩土器と考える(第65図)。これが能登式製塩土器の搬入かどうかは、慎重にならざるを得ないものの、全国的にみても能登半島と最も関連が強いことは否めないようである。さらに、その候補地を絞るならば、能登半島内で最も製塩遺跡が濃密な七尾湾岸か、丹後半島に最も近い外浦沿岸であろう[注17]。

## 7.　その他の時代の遺構と遺物

縄文・古墳時代以外の遺物として、備前焼大甕片、青磁片、黒色土器片などが出土している。また、平安時代の製塩土器である塩浜式の支脚2点(第66図)が出土した。断面円形で手捏ねによる整形である。これらの遺物に伴う遺構は明確ではないが、中世には杭列による水田造成がなされており、それに伴う集落が調査地外にある可能性が想定される。

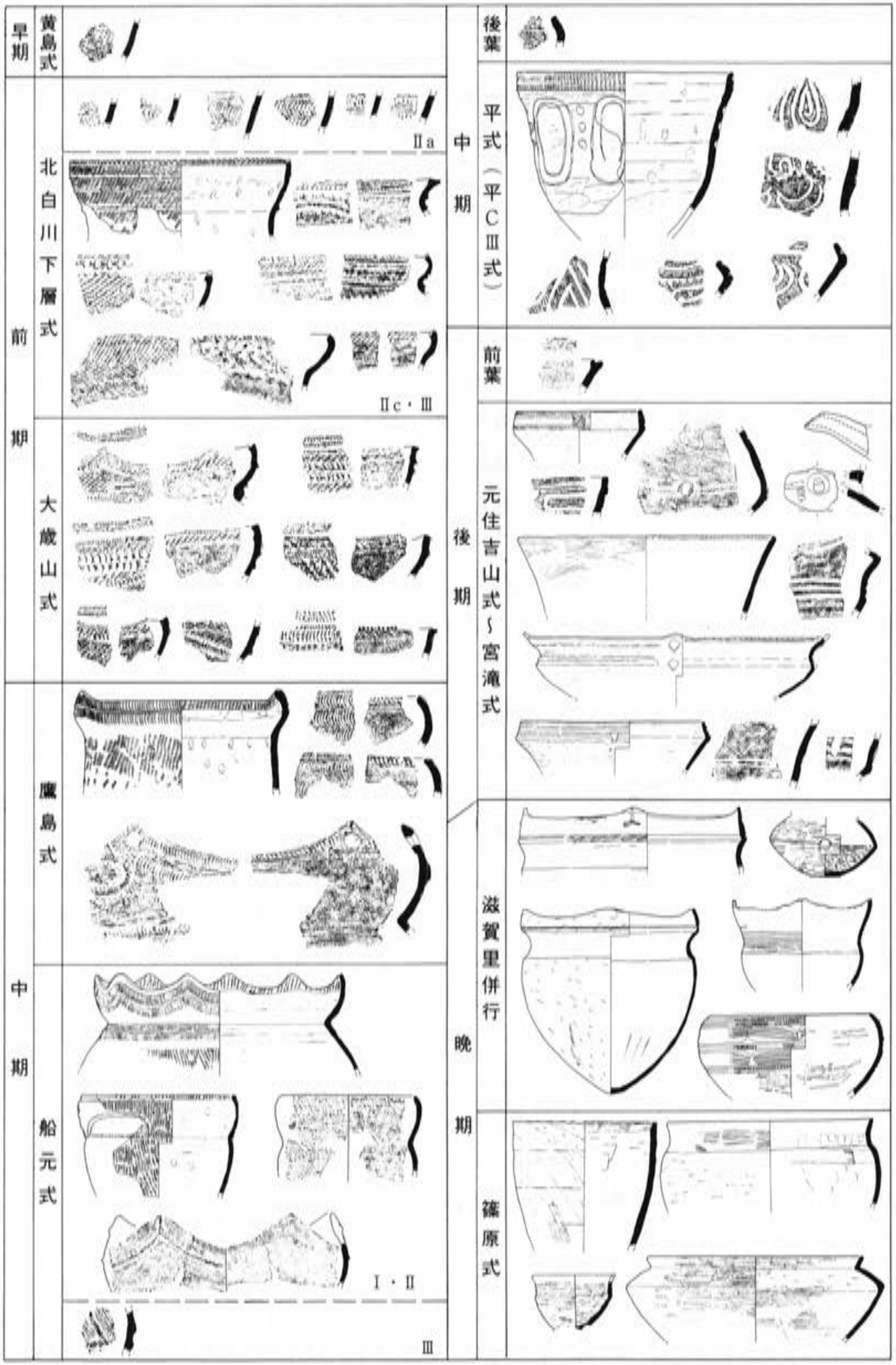



第66図　製塩土器実測図
(塩浜式)　1/2

## 8.　まとめ

平成8年度の平遺跡の発掘調査では、縄文時代・古墳時代の多量の遺物が出土し、多くの問題点が提起された。その個別的な説明は先述のとおりであるが、最後に、その成果について、まとめておくことにしたい(第67図)。

まず、縄文時代包含層の調査では、先行する昭和38・40年度の調査を補足する資料と同時に、若干の相違点もみられた。平遺跡は、北白川下層Ⅲ式から晩期まで継続すると見られていたが、1点ではあるが早期後半(黄島式)の土器があり、北白川下層Ⅱa及びⅡc式も存在する。特に、丹後半島の海岸部での押型文土器の出土は珍しく、平遺跡への居住の開始が早期にさかのぼる点と併




第67図　平成８年度調査による平遺跡の土器編年（図は1/8、拓本は1/6）

せて注意すべき点であろう。前期前半の土器は、今回の調査では皆無であったが、平成８・９年度の舞鶴市浦入遺跡の調査では、海岸沿いからこの時期の土器が出土しており、将来的な出土も見込まれよう。そして、前期後半の北白川下層Ⅱｃ式段階から遺物の定量的な出土をみ、石器類も伴うようになってくる。今回の調査では、この時期の明確な遺構は見られなかったが、近接地域に存在していたことは確実である。続く、大歳山式も北白川下層Ⅲ式までの発展を継承するように、遺物量は増加するが、今回の概報では一部を触れるだけにした。

平遺跡の縄文時代集落が最初の画期を迎えるのが、中期前半である。今回の調査では、鷹島式が定量的に出土したことが注目されるが、その中に、北陸的な要素を持った鷹島式の深鉢がある。この北陸地方からの文化要素の流入は、次の船元Ⅰ・Ⅱ式段階になっていっそう顕著となり、新保式の浅鉢も見られるようになる。しかし、船元Ⅰ・Ⅱ式段階に新保式の浅鉢が伴うことは、滋賀県粟津遺跡などの調査によって、気付かれてきた点である。ただ、粟津遺跡では、新保式と同時に東海地方の北浦ＣⅠ式が伴うが、平遺跡では、可能性のある破片１点を除いて、明確なものはない。また、石製品では平玉１点がこの時期であり、活発な他地域との交流の中でもたらされた可能性も指摘できよう。

船元Ⅰ・Ⅱ式に後続する土器の出土は極めて少なく、船元Ⅲ式に当てられるもの１点、及び中期中葉～後葉に該当する土器１点を数える程度であった。ところが、先行調査では、里木式の出土が認められ、かつ隣接地でもあることから、偶然、出土が見られなかったとする方がよかろう。ともあれ、中期後半の平遺跡の状況は、今回の調査では言及できる資料に乏しい。

再び、平遺跡の詳細が明らかとなるのは、中期末の平式(平ＣⅢ式)土器の時代である。平式土器をめぐる論争は、繰り返し述べてきたが、今回の調査では残念ながら平ＫⅠ式とされる、縄文地に沈線で加飾する土器の出土が少なく、明確な先後関係に言及することはできない。もっとも、層位に着目すると、平式を含む層で褐色砂層から黒色砂層へと転換している。この砂層の色調の変化の背景には、砂丘の形成と安定といった、この時期に地形的な環境の変化があったことが想定される。これが平遺跡の第２の画期である。平式土器そのものについては、いくつかのモチーフを明らかにできた。この平式(平ＣⅢ式)が実態のある独立した型式かどうかを議論する時、今回の出土量はあまりに少ないが、中期末の北近畿を議論する場合には避けて通れない問題であることは疑いない。

後期に入ると、平遺跡では土器の出土量が急に減少する。特に、後期初頭～前半の土器が少なく、今回の調査では、磨滅の著しい破片１点のみであった。北近畿では縁帯文土器成立期の布勢式の広がりが見られるが、平遺跡ではそれが及ばなかったのか、他の地点に集落が営まれたのかは不明である。

後期後半になって、再び多量の土器が見られるようになる。それは、元住吉山Ⅰ式後半期に始まるようである。平遺跡では、元住吉山Ⅰ式のモチーフを描いた注口土器が見られるが、深鉢は元住吉山Ⅱ式的な要素を持つものが主体である。本概要では、元住吉山Ⅰ式・Ⅱ式・宮滝式の分別に苦慮したため、後期後半の土器をまとめて提示せざるを得なかったが、近畿地方中央部と北

部との型式のクロスデーティングの必要性が痛感される。

後期末～晩期前葉になると、近畿地方中部の滋賀里式とは異なる特徴を有する土器群が、北部では見られる。それは、①深鉢の屈曲するタイプのものには波状口縁のものが多い、②波頂部に逆T字の文様を有する、③口頸部や頸胴部の境界に斜交沈線をもつ、④調整にケズリを採用するといった特徴が指摘できる。これらの特徴のいくつかは、北陸地方との交流によって生み出された可能性が想定され、ここに平遺跡の第3の画期を見ることができよう。また、この時期には、北陸地方からの八日市新保式・御経塚式の搬入が認められる。

続く、晩期中葉の篠原式段階では、埋甕や石敷炉、石皿などの遺構も検出され、集落の一部に取り込まれていたことは確実である。特に、埋甕は大型で、蓋・標石を備えた手厚いものであり、胴部下半の穿孔を別の浅鉢で押さえるといった細工も見られる。これが平遺跡の第4の画期と見ることができる。また、篠原式土器そのものについては、篠原式中段階のものが主体となるにも関わらず、新段階の特徴である頸部のナデ調整や丸底を備えている。

以上、平遺跡の縄文時代集落の変遷を調査成果にしたがって、4つの画期として総括した。早期後半に始まる平遺跡の居住は、間隙を持ちつつも継続し、突帯文土器の時代を迎えることなく、晩期中葉で終焉する。その後、弥生時代前期の土器片が、先行調査では出土しているが、弥生時代の平遺跡での人々の状況は不明な点が多い。

古墳時代の平遺跡は、中期後半に築かれた石敷遺構と祭祀的色彩の強い遺物群が特徴である。その意義についてはここでは繰り返さないが、縄文時代以来の北陸地方との交流が古墳時代にも認められ、それが宇川型製塩土器という独自の生産用具の創出につながったことは、特記してもよかろう。

以上、平遺跡の発掘調査からは、きわめて大きな成果を得ることができた。この概要でも論じつくせているかは疑問だが、今まで発掘調査があまり行われていなかった宇川地区に、極めて重大な遺跡が存在したことが明確となった。今後の調査・研究の必要性を提起して、ひとまず結びとしておきたい。

（河野一隆）

注1　平成8年度の平遺跡の発掘調査に係る調査参加者、調査協力者は次の通りである。
（調査参加者）奥田栄吉・上田奈智子・大江千晴・角江強司・島本正三・吉田正治郎・井上昭朗・小林宏和・池田金次郎・岡田せつ子・岡田幸子・奥田寿美恵・柏原克二・酒井英子・酒井善仁・坂本芳雄・寺岡久代・川戸よし枝・田中　梢・田中智代美・富岡武司・小島孝修・宮地聡一郎・可児直典・岡本　洋・椹木敬太
（調査協力者）堅田　直・泉　拓良・都出比呂志・石野博信・家根祥多・加藤賢二・千葉　豊・西田泰民・瀬口眞司・鈴木康二・岡田憲一・松井敬代・岡田十一・増田　馨（順不同・敬称略）

注2　長谷川達「京都府北部の縄紋遺跡(2)」（『太爾波考古論集』　両丹考古学研究会）　1997

注3　堅田　直『京都府丹後町　平遺跡発掘調査概要』　帝塚山大学考古学研究室　1966

注4　岡田茂弘「縄文時代」（『日本の考古学』Ⅱ　河出書房新社）　1965

注５　今村啓爾「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第67巻第２号　1977
注６　泉　拓良・家根祥多「北白川追分町出土の縄文土器」(『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1985
注７　玉田芳英「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」(『片吹遺跡――一般国道２号太子・龍野バイパス建設工事に伴う発掘調査―』　兵庫県龍野市教育委員会)　1985
注８　千葉　豊・林　和廣ほか『浜詰遺跡発掘調査概要』　網野町教育委員会　1993
注９　松井敬代『見蔵岡遺跡発掘調査概報』　竹野町教育委員会　1997
注10　間壁忠彦・間壁葭子『里木貝塚』(『倉敷考古館研究集報』第７号　倉敷考古館)　1971
注11　泉　拓良「船元・里木土器様式」『縄文土器大観』Ⅲ　中期Ⅱ　1989
注12　加藤　進・丹羽裕一ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』　湖西線関係遺跡発掘調査団　1973
注13　家根祥多「晩期の土器　近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』４　雄山閣)　1981
注14　家根祥多「篠原式の提唱」『縄紋晩期前葉―中葉の広域編年』文部省科学研究費(総合Ａ)研究成果報告書　1994
注15　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966
注16　戸淵幹夫「能登式製塩土器―型式分類とその変遷―」『北陸の考古学』　石川考古学研究会　1983
注17　河野一隆「丹後半島最古の製塩土器の発見」(『京都府埋蔵文化財情報』第63号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1997

# ２．国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 平成８年度発掘調査概要

## はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している、丹後国営農地開発事業(東部地区)に伴い、平成８年度に実施した５遺跡の内の２遺跡の調査概要である。他の３遺跡については、すでに平成８年度に報告している。

これらの調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所からの依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。今回報告するのは、竹野郡弥栄町に所在する奈具岡南古墳群とシミズ谷城跡Ａ・Ｂ・Ｂ′地点の調査である。同城跡Ａ・Ｂ・Ｂ′地点は、調査用に便宜的につけたもので、『京都府遺跡地図』によれば、Ａ地点はシミズ谷城跡の隣接地であり、Ｂ地点は小屋ヶ谷城跡に相当し、Ｂ′地点はその隣接地に当たる。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第１係長伊野近富、同主任調査員竹原一彦、主査調査員岡崎研一、同調査員柴　暁彦・河野一隆、同調査補佐員橋本　稔の６名が担当した。本概要の執筆は、各遺跡の調査担当者が分担した。

調査期間中、猛暑・極寒の中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員、補助員、整理員として作業に従事していただいた。また、調査に当たっては、弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得られ、現地でも多くの方々のご協力とご指導を賜った[(注1)]。改めて感謝の意を表したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(伊野近富)

## 位置と環境

丹後半島の中央を貫く竹野川の中流域に弥栄町、峰山町がある。この町境の丘陵上に大田南古墳群がある。この２号墳から後漢鏡である画文帯環状乳神獣鏡が出土した。これは鈕が龍の形状をしたもので、中国四川地方の特徴ではないかとの見解がある。また、同５号墳から方格規矩四

付表１　平成８年度国営農地開発事業に伴う発掘調査(今回報告分のみ)

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 担当者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 奈具岡南古墳群 | 京都府竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡 | 平成８年４月11日～同９年１月30日 | 調査第１係長　伊野　近富<br>主任調査員　竹原　一彦<br>主査調査員　岡崎　研一<br>調査員　河野　一隆<br>調査補佐員　橋本　稔 |
| 2 | シミズ谷城跡 | 京都府竹野郡弥栄町堤小字平野・シンズ | 平成８年５月７日～同年９月６日 | 調査第１係長　伊野　近富<br>調査員　柴　暁彦 |

第68図　調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 奈具岡南古墳群　2. 奈具岡北古墳群・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡　3. 奈具遺跡
4. 奈具墳墓群・奈具古墳群　5. 銚子山古墳　6. 普甲古墳群　7. 宮の森古墳群
8. ニゴレ古墳　9. 遠所遺跡　10. 坂野丘遺跡　11. 下後古墳群
12. 太田古墳群(矢田城跡)　13. 吉沢城跡　14. 芋野城跡　15. シミズ谷城跡A地点
16. シミズ谷城跡B地点(小屋ヶ谷城跡)　17. シミズ谷城跡C地点(堤城跡・愛宕神社古墳群)

神鏡が出土した。これには「青龍三年(西暦235年)」との銘文が刻まれてあり、邪馬台国が魏に使いを送った景初三年(西暦239年)の直前であることから、魏から贈られた銅鏡百枚のうちの一つではないかとの見解もでた。

このほか、弥栄町溝谷２号墳では鋸歯文を施した銅鏡１枚が出土した。また、今年度調査中の弥栄町愛宕神社１号墳では７～８片に破砕された銅鏡(二神二獣鏡か四獣鏡)が出土した。これらの主体部は、舟形木棺、箱形石棺、礫床をもつ長大な箱形木棺、礫床をもたない長大な箱形木棺というように、別々の構造をしている。

中期古墳になると、朝鮮半島原産の陶質土器(もしくは日本で生産したその模倣型も含まれるか)が多量に出土した弥栄町奈具岡北１号墳や、鉄製甲冑や舟形埴輪、椅子形埴輪が出土した弥栄町ニゴレ古墳などが有名である。また、弥栄町オテジ谷古墳では素環頭大刀１本が出土した。なお、発掘調査はされていないが、全長105mの前方後円墳である弥栄町黒部銚子山古墳もある。

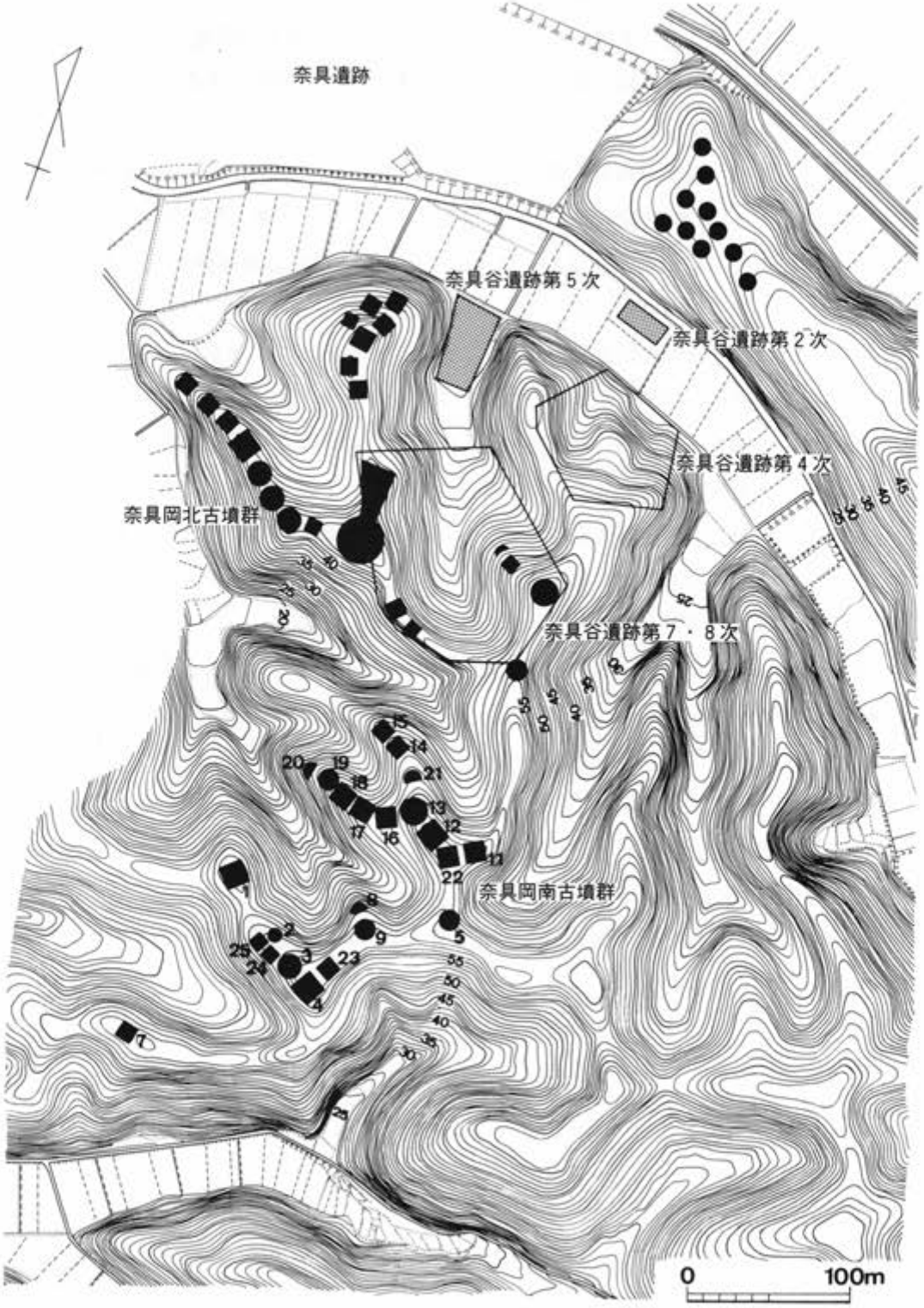
後期古墳としては、弥栄町太田２号墳がある。直径32mの円墳で、埴輪が多数出土した。弥栄町宮の森古墳群では鉄鏃、鉄剣、土師器、須恵器などが出土した。

大規模な古墳群の調査としては、24基を調査した遠所古墳群がある。その内の14基が木棺墓で、４基が竪穴系横口式石室である。また、奈具岡北古墳群では６基を調査した。前述した１号墳は、全長60mの前方後円墳で、盟主墳である。他は、円形あるいは方形墳で小規模である。弥生時代の墳墓と重複しており、古墳時代に属するのは、３号墳(中期初頭頃)、７号墳の３基である。今回、報告する奈具岡南古墳群は、これらに南接する丘陵上にある。

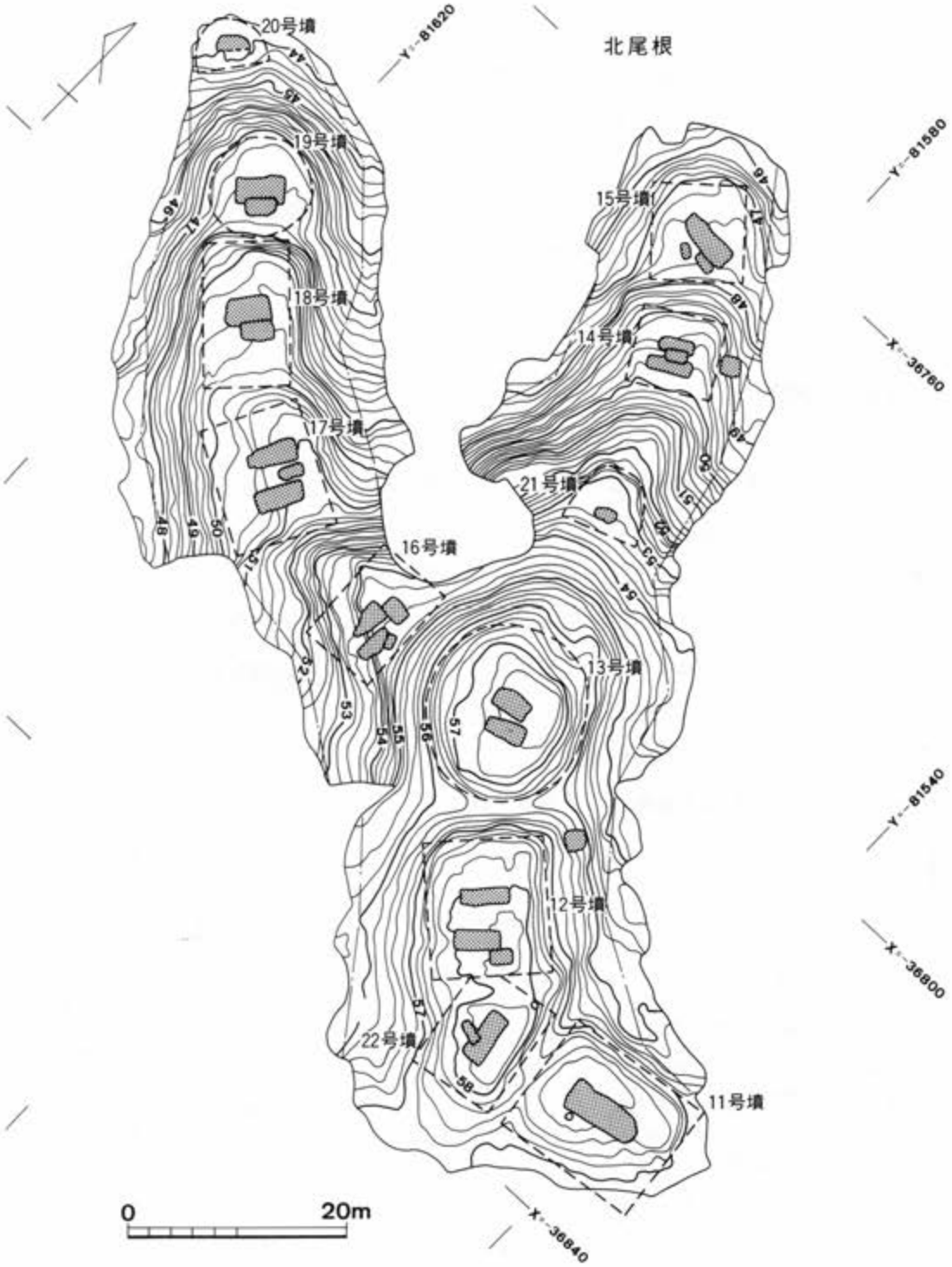
中世に関してはあまり調査例はないが、大田南古墳群と重複する地点に、矢田城跡がある。掘立柱建物跡などが検出されている。また、溝谷古墳群のある丘陵は、調査前は城跡と考えられていたところである。さらに、愛宕神社１号墳も、調査前は堤城跡と考えられていたが、調査の結果、古墳と判明した。『丹後旧事記』によれば、堤城跡は松田越中守が天正年間に居城したという。また、永正年間の丹後一色氏と若狭武田氏との争いの際には、武田方がここまで攻め込んだという(『三重県白井家文書』)。

以上、今回報告する古墳時代の奈具岡南古墳群と、中世のシミズ谷城跡Ｂ地点とに関連する同時代の遺跡について紹介した。

(伊野近富)




第69図　奈具岡南古墳群位置図




第70図　奈具岡南古墳群地形測量図(1)

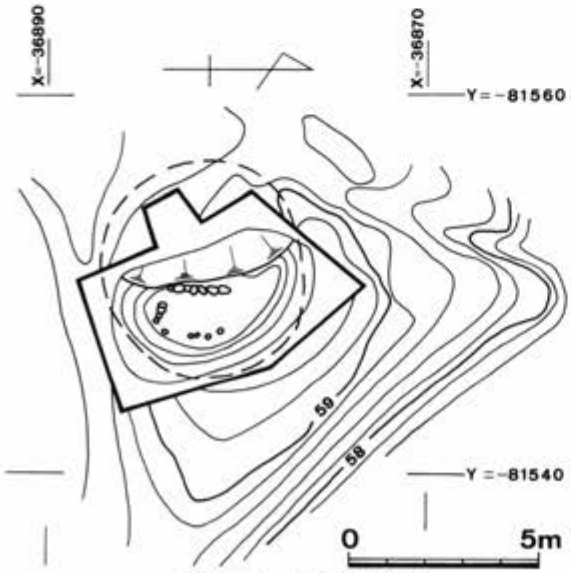
# (1) 奈具岡南古墳群

## 1．はじめに

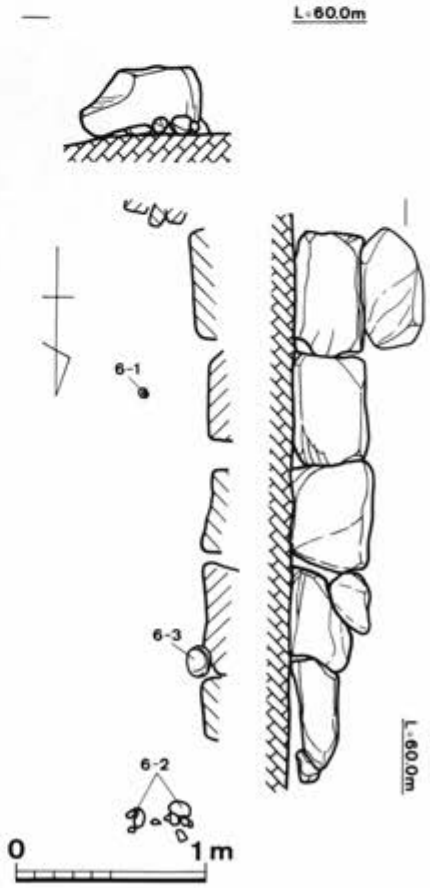
奈具岡南古墳群は、弥栄町の平地の東端部に張り出した標高60m(最高所)の低位丘陵上に位置し、これまでに尾根稜線上に展開する23基の古墳が確認された。古墳は、奈具岡北古墳群に繋がる南北方向の主尾根と、東から西方にのびる３本の支尾根上に分布する。調査の便宜上、各尾根に対し北から順に北尾根・中尾根・南尾根の名称を与えた。北尾根には５号墳・11～22号墳の13基が展開する。中尾根には北尾根間との境付近に認められる小規模な尾根を含め、１～４号墳・８号墳・９号墳・23～25号墳の９基の古墳が展開する。南尾根上には古墳が少なく、唯一７号墳が築かれている。

## 2．北尾根の調査

北尾根(第70図)は、主尾根から北西方向にのび、中程から先端方向にかけて「Y」字状に分岐している。二股に分岐した尾根部は、ゆるやかに北西方向に下り、明瞭な墳丘をもたない階段状古墳８基(14～21号墳)が築かれている。このうち、北に位置する小支尾根上には14号墳・15号墳・21号墳の３基、南側の小支尾根上には16～20号墳の５基が、それぞれ連続して築かれている。一方、主尾根に近い南東側は、ほとんど高低差のない尾根稜線上に５基の古墳(５号墳・11～13号墳・22号墳)が築かれている。この稜線上の古墳は、尾根筋を横断する区画溝・盛り土



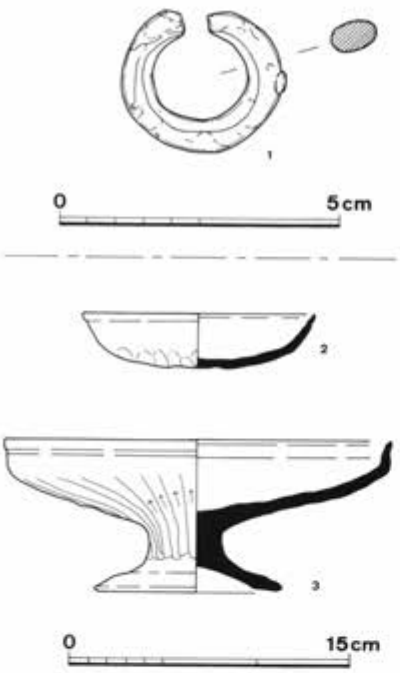
第71図　５号墳地形図



第72図　５号墳石室実測図

などによって明瞭な墳丘をもっている。稜線上の５基の古墳のうち５号墳と11号墳は、平成６・７年度に調査を終えたものであるが、併せて今年度報告に含めている。

(竹原一彦)



第73図　５号墳出土遺物実測図

(1) **５号墳**(第71・72図)

**①墳丘**　他の古墳とは独立して立地する横穴式石室墳で、径７ｍを測る円墳である。石室は、一側壁の基底石が確認されたのみで、当初の石室の詳細な規模、及び形態を推定することは困難であるが、長さ６ｍ前後の無袖式石室の可能性がある。開口方向は、Ｎ－２°－Ｗである。副葬品には、須恵器杯身１、土師器(大型椀１、小型椀２、赤彩高杯１)、銅芯金張の耳環１がある。また、石室外から、須恵器杯Ｇ蓋と身各１、甕１が出土しているが、これらは石室の破壊によるものの可能性がある。これらの遺物で、時期の隔たるものはなく、単次葬墓であった可能性がある。築造時期は、７世紀中葉に比定できる。また、羨門に向かって右側の２ｍが遺存するのみであるが、縦積みによるものである。

５号墳は、奈具岡南古墳群で最も新しい時期の古墳である。竹野川右岸では、新ヶ尾東古墳群などの横穴式石室が知られているが、７世紀以降の古墳は不明である。５号墳は、遺存が不良であるが、単次葬墓・外護列石・南開口などの点に、終末期古墳の要素が指摘される。

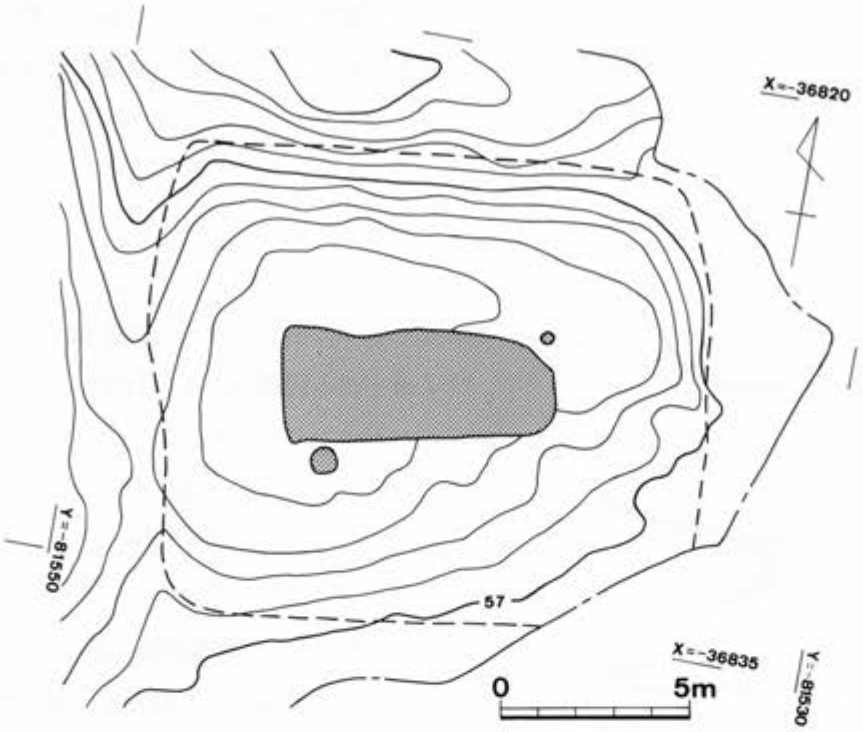
**②出土遺物**(第73図)　すべて石室内から出土した副葬品である。１は、銅芯金張の耳環である。径2.9cmを測り、断面形は楕円形である。２は、土師器小型椀で、底部付近にケズリを施す。３は、赤彩高杯で、脚部はケズリによって調整される。

(2) **11号墳**(第74図)

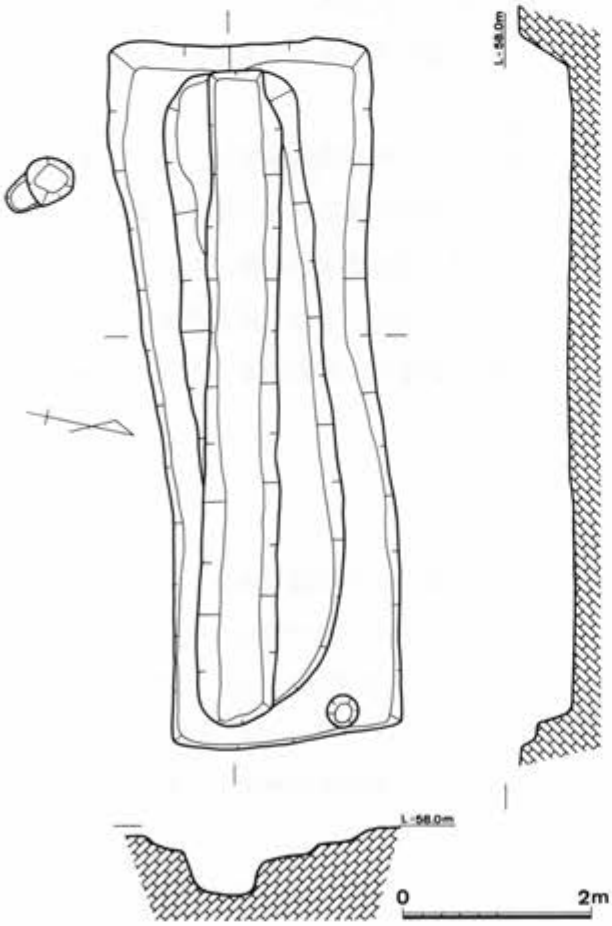
北尾根に位置する短辺約14ｍ・長辺約17ｍを測る木棺直葬の長方形墳である。

**①墳丘**　西側は地山を削り出し、東側は部分的に盛り土を施すことで墳丘を造っている。また、西側墳丘裾部は、明確に造り出すことで、集落(奈具岡遺跡・奈具遺跡)側からの視覚的効果を高めている。

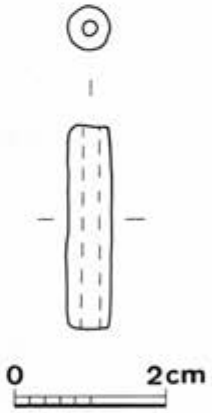
**②埋葬施設**(第75図)　主体部は、墳丘主軸と平行して１基の木棺を直葬する。長さ約７ｍ・東側幅約2.4ｍ・西側幅約2.8ｍを測る箱形木棺である。また、木棺主軸に沿って、径20cm前後のピット２点を検出したが、棺の据え付けに関連するものかもしれない。棺内には副葬品はなく、墓壙内の東側小口から１点の緑色凝灰岩製の管玉１点を検出した。また、墳頂ならびに墳丘斜面からは土師器壺２点以上、小型丸底壺２点以上が出土しており、小型丸底壺の形態からみて、築造




第74図　11号墳地形図




第75図　11号墳主体部実測図




第76図　11号墳出土遺物実測図

時期を4世紀後半～5世紀前半に絞り込むことができる。また、土師器壺の1点は埴質の大型のものであるが、内面に火を受けている。

③**出土遺物**(第76図)　緑色凝灰岩製の管玉1点を墓壙上面で検出した。多孔質で軟質の石材に穿孔したもので、長さ2.7cmを測る。

(河野一隆)

(3)22号墳(第77図)

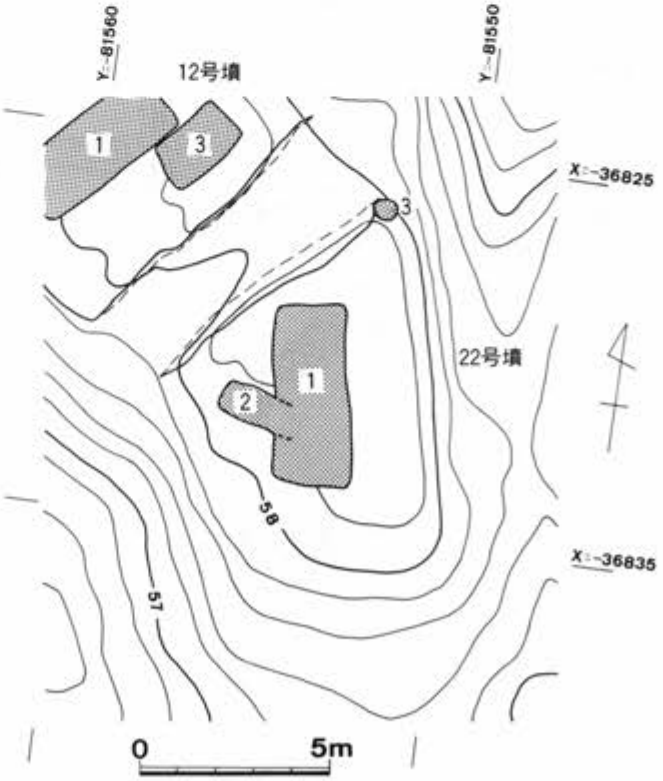
主尾根と支尾根の分岐部にあり、5号墳の北約35mに位置する。また、東側には区画溝を介して11号墳、支尾根稜線上の北西側は浅い区画溝を介して12号墳が隣接する。墳丘は、地山削り出しと盛り土を併用し、方形の墳丘を整えている。墳頂部の標高は約58.2mを測る。

①**墳丘**　墳丘は長辺約11.0m・短辺約8.0mを測る。墳丘の西隅は隣接の12号墳に伴う区画溝によって切られている。墳丘高は、南東部側で約0.8mを測る。墳丘の北西側には22号墳に伴う区画溝は存在しない。古墳築造時は、北西側の墳丘区画はあまり重要視されていなかったとみられる。

②**埋葬施設**(第78・79図)　22号墳では3基の埋葬施設が存在した。墳頂部の平坦面に2基の埋葬施設(木棺直葬)、墳丘北東隅の斜面に1基の壺棺が存在する。墳頂部の2基の埋葬施設は切り合い関係にあり、第2主体部が第1主体部を切っている。

**第1主体部**(第78図)　墳頂部の中心に位置する中心主体部である。長方形の墓壙は地山を二段に掘り下げた、いわゆる二段墓壙の掘形をもつ。墓壙掘形は、全長約4.8m×幅約1.0m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央部には木棺埋納壙が穿たれている。また、棺側部の平坦面は四周をめぐらず、長軸両横にのみ存在する。この木棺埋納壙は、全長約4.3m×幅約0.9m×深さ約0.4mを測る。木棺埋納壙の形状から、使用された木棺は「H」形木棺と判断される。また、棺底面には小口板をはめ込む浅い溝(小口溝)が2か所存在する。両小口溝の間隔は約1.7mを測る。小口溝の両端が木棺埋納壙の側面にまで達していないことから、小口板は木棺の側板の内側に入るものである。木棺埋納壙と小口溝の間隔から、木棺の板材幅は8cm前後と判断する。木棺主軸の方位は、ほぼ真北である。棺の底面はほぼ平坦である。小口部は北側がわずかに高いことから、被葬者の頭位は北側と判断する。出土遺物として、掘形埋土の上部から緑色凝灰岩製の管玉1点が出土した。第2主体部と切り合い関係にあり、第1主体部が先行する。

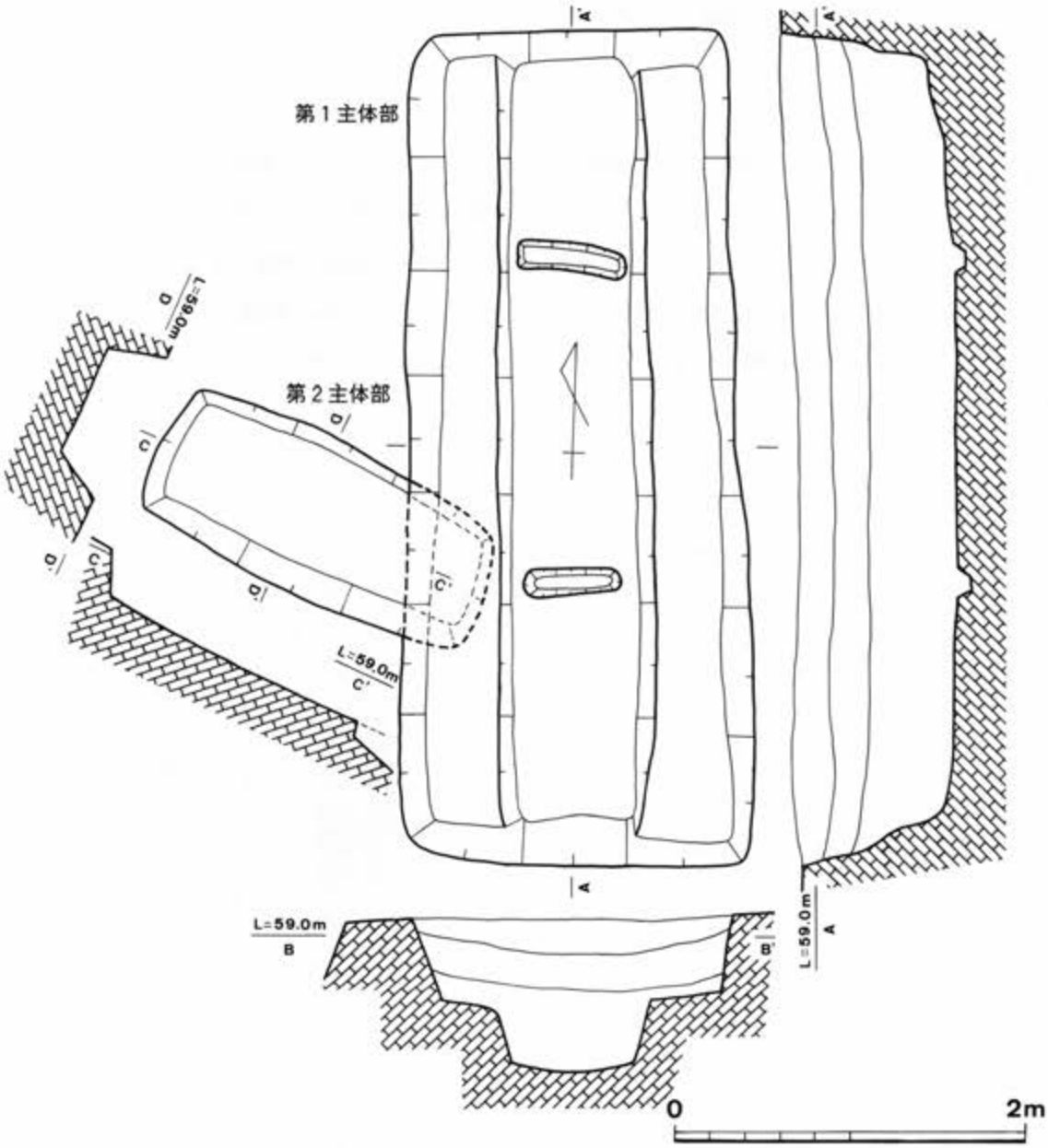
**第2主体部**(第78図)　第1主体部の西南部の一部を切っている。墓壙は単純墓壙であり、平面形は長方形を呈する。墓壙底に木棺痕跡は認められない。第1主体部の掘削途中で掘形を検出したため、



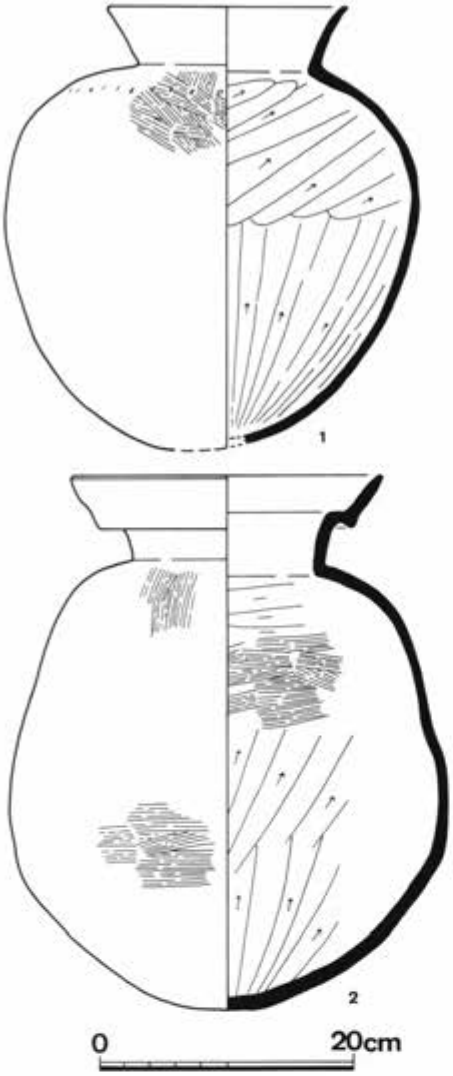
第77図　22号墳地形測量図

主体部の全長は不明である。墓壙規模は、検出部分で全長約1.7m×幅約0.9m×深さ約0.35mを測る。掘形の底面は平坦であることから、箱形木棺が使用されたと判断する。墓壙底は、北西側が南東部に対してやや高いことから、被葬者の頭位は西側と判断する。墓壙の主軸方位は北から西に約65°振っている。棺内に副葬品はみられない。

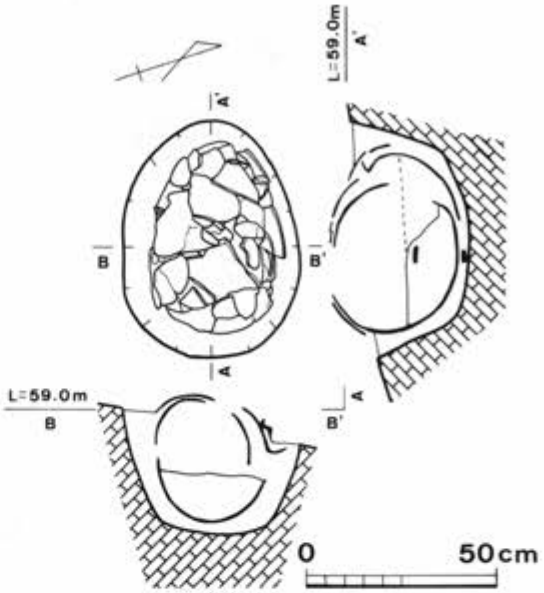
**第3主体部**(第79図)　墳丘の北東隅、墳頂部平坦面からやや下がった斜面部で検出した埋葬施設(壺棺)である。墓壙掘形の平面形は楕円形を呈し、全長約0.65m×幅約0.45m×深さ約0.35mを測る。棺には土師器の壺2個を転用している。やや大型の壺は頸から上部を欠いて横たえて棺本体としている。やや小振りの壺は大きな破片に打ち欠き、棺本体の口縁部破片とともに棺の蓋及び被覆材としている。墓壙の主軸方位は、北から西に約72°振る。壺棺内部には細かい粒子の




第78図　22号墳主体部実測図




第80図　22号墳壺棺使用土器実測図




第79図　22号墳壺棺実測図

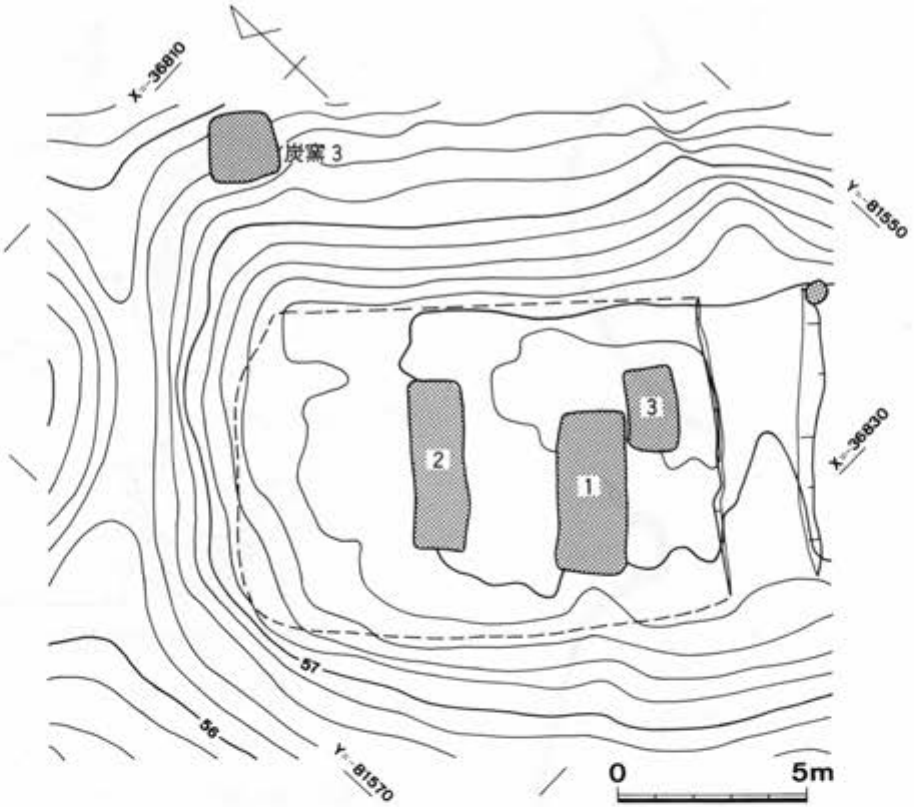
土砂が半分近く堆積していたが、骨・歯牙・遺物などは検出できなかった。

**③出土遺物**(第80図)　22号墳に伴う遺物として、第１主体部から管玉１点、第３主体部の棺として利用された土器２点が出土している。管玉は、緑色凝灰岩製である。風化が激しく図化不能であったが、出土時点では長さ約２cm×直径約７mmを測った。壺１は、棺の覆いとして使用された。約８割の破片が出土したが、底部を含む残り２割の破片は失われている。口径約19.0cm・推定器高約35cmを測る。口縁部は単純口縁であり、球形の体部は上部に最大幅をもつ。体部外面はハケ目調整し、肩部にヘラ状工具による刺突文を１条めぐらせる。体部内面はヘラケズリする。壺２は、棺本体として使用されていた。二重口縁壺であり、口径約24.8cm・器高約42.5cmを測る。ほぼ直立する頸部は、上端部で大きく外反し、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。丸底の体部は下膨れしたピーマン形を呈し、最大幅は体部下半にある。体部外面の調整は、上半部がタテハケ、下半部はヨコハケである。体部内面にはヘラケズリを施すが、上部途中はヨコハケである。

**(4)12号墳**(第81図)

尾根頂部にあり、22号墳と13号墳に挟まれている。墳丘の高まりは、22号墳と共有するが、12号墳に伴う浅い溝が22号墳の墳丘を切っている。また、北西側の13号墳とは深い溝によって大きく区画されている。墳丘の最高所は標高約58.2mに位置する。

**①墳丘**　長方形を呈する墳丘は地山削り出しによって整形される。墳丘は長軸約14.5m×短軸



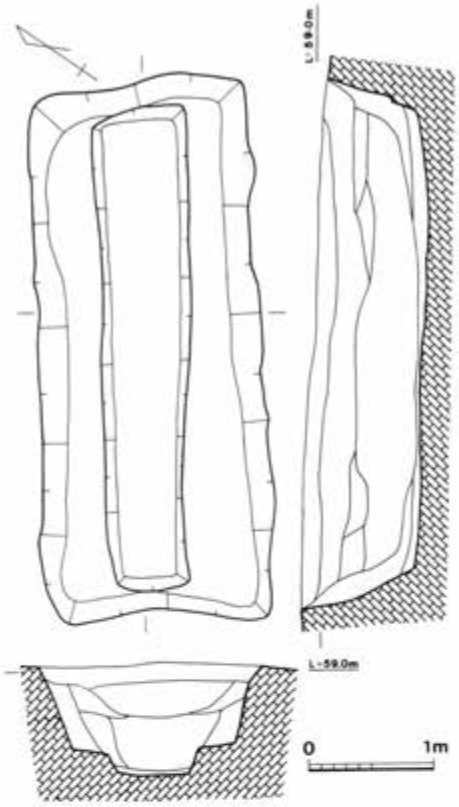

第81図　12号墳地形図

約12.5m、墳丘高は13号墳間区画溝底部から約1.5mを測る。墳頂部の平坦面で主体部を3基検出するとともに、北斜面部で炭窯1基を検出した。なお、炭窯に関しては後でまとめて記述する。

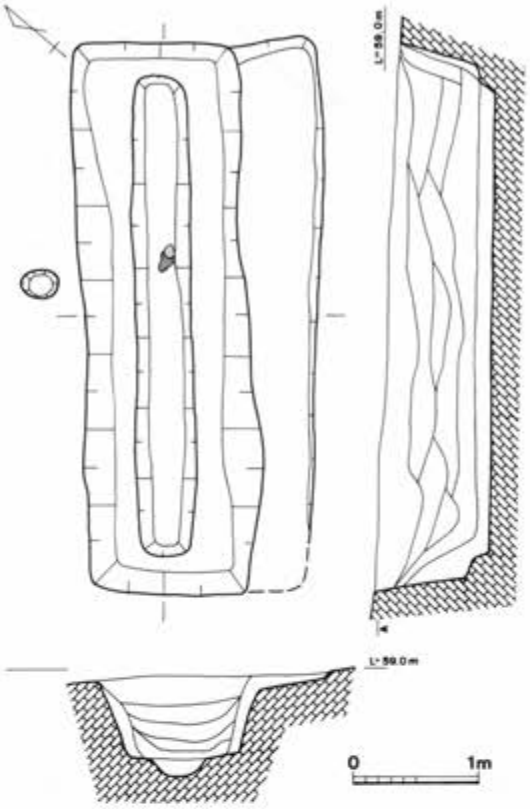
②**埋葬施設**　墳丘主軸に対して直交する主軸の主体部3基を検出した。墳丘平坦面の中央付近に2基、東部に1基(小型)の配置状況である。いずれも木棺直葬である。

**第1主体部**(第82図)　墳頂部平坦面の中央西側で検出した埋葬施設である。墓壙掘形は、長方形を呈する二段墓壙である。墓壙は、墳丘主軸に対して直交する。墓壙掘形は、全長約4.4m×幅約1.8m×深さ約0.65mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれている。木棺埋納壙は、墓壙掘形の小口部に接し、棺の両側部に幅30～50cmの平坦面が認められる。木棺埋納壙は、全長約3.9m×幅約0.7m×深さ約0.2mを測る。木棺埋納壙の形状から、箱形木棺が使用されたと判断する。また、木棺埋納壙は、北東側が南西部に対してやや幅広であることから、被葬者の頭位は北側と判断する。木棺埋納壙の主軸方位は北から東に約53°振る。棺内に副葬品はみられない。

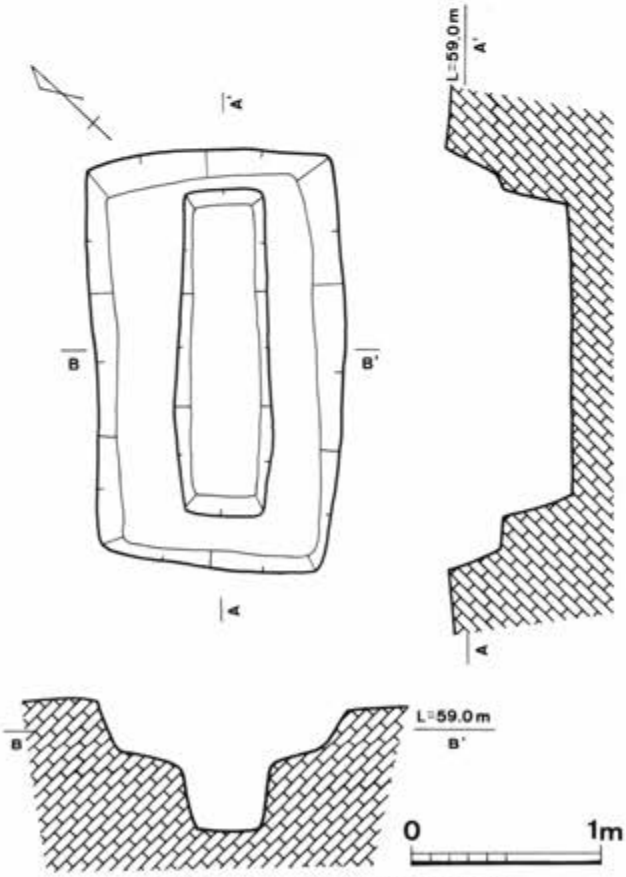
**第2主体部**(第83図)　墳頂部の中央やや北西側にあり、第1主体部とは約2.4mの間隔を開けて並列する。第1・第2主体部の墓壙は、墓壙南東部の小口ラインをほぼ直線的に合わせていると判断する。二段墓壙の掘形は長方形を呈し、全長約4.4m×幅約1.3m×深さ約0.6mを測る。墓壙掘形の南東側に浅い掘形が認められたが、墓壙掘削の途中段階で規模などの変更が行われた痕跡と判断する。墓壙底中央に木棺埋納壙が穿たれている。木棺埋納壙の四周には墓壙底の平坦面が残る。木棺埋納壙は、横断面が半円形を呈し、小口の縦断面が直線的に立ち上がることから、




第82図　12号墳第1主体部実測図



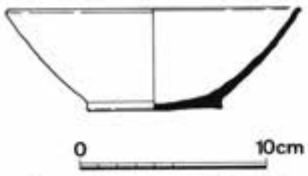

第83図　12号墳第2主体部実測図




第84図　12号墳第3主体部実測図

割竹形木棺が設置されたと判断する。木棺埋納壙は、全長約3.5m×幅約0.5m×深さ約0.14mを測る。棺底面は水平である。棺の中央やや北東部にわずかながら朱の散布が認められる。朱の検出位置から、被葬者の頭位は北側と判断する。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約48°振る。棺内に副葬品はみられない。

**第3主体部**(第84図)　比較的小形の埋葬施設であり、墓壙は並列する第1主体部の東隅に近接している。二段墓壙の掘形は、全長約2.2m×幅約1.35m×深さ約0.35mを測る。墓壙底中央に木棺埋納壙が穿たれ、埋納壙を取り巻く四周に平坦面を残す。木棺埋納壙の形状から箱形木棺が使用されたと判断する。木棺埋納壙は全長約1.7m×



第85図　12・13号墳間溝出土遺物実測図

幅約0.5m×深さ約0.35mを測る。棺底面は平坦で水平である。被葬者の頭位は不明である。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約48°振る。棺内に副葬品はみられない。

**③出土遺物**(第85図)　墳丘・埋葬施設から古墳に関連する遺物の出土はみられない。ただ唯一、12・13号墳間の区画溝埋土上部から平安時代前期の須恵器の出土をみた。底面に糸切り痕を残す円板高台の椀である。口径約16.2cm×器高約5.4cmを測る。

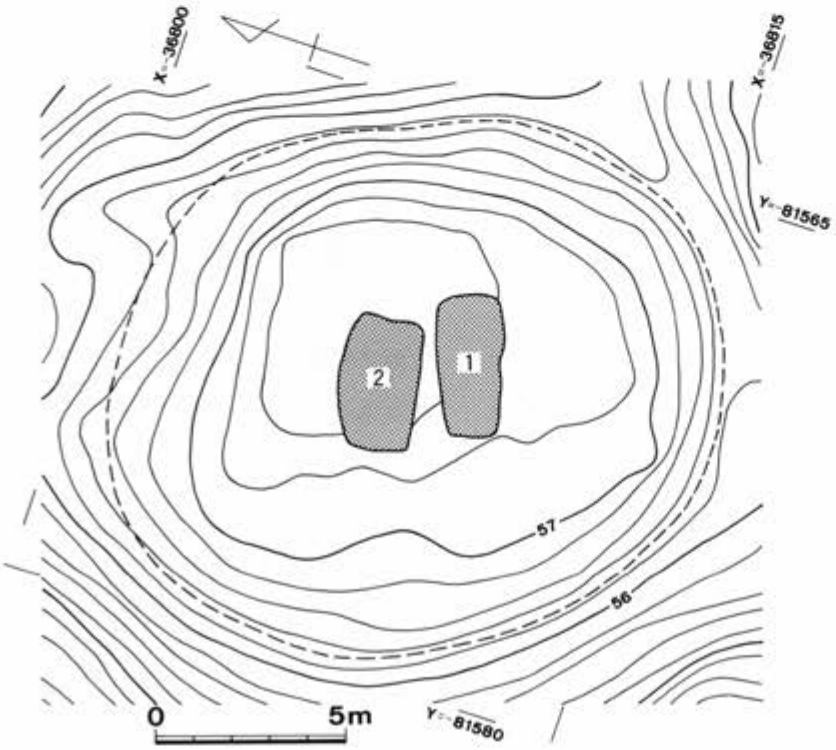
**(5)13号墳**(第86図)

丘陵頂部に築かれた古墳のうち、最も先端に位置する円墳である。墳丘頂部の標高は約57.4mを測る。

**①墳丘**　墳形はやや楕円形を呈する。墳丘の南東部は12号墳と共有する区画溝をもつ。墳丘の長軸は約16.5m、短軸は約14.0mである。墳丘高は、区画溝底面から約1.2mを測る。地山削り出しによって墳丘を整えている。

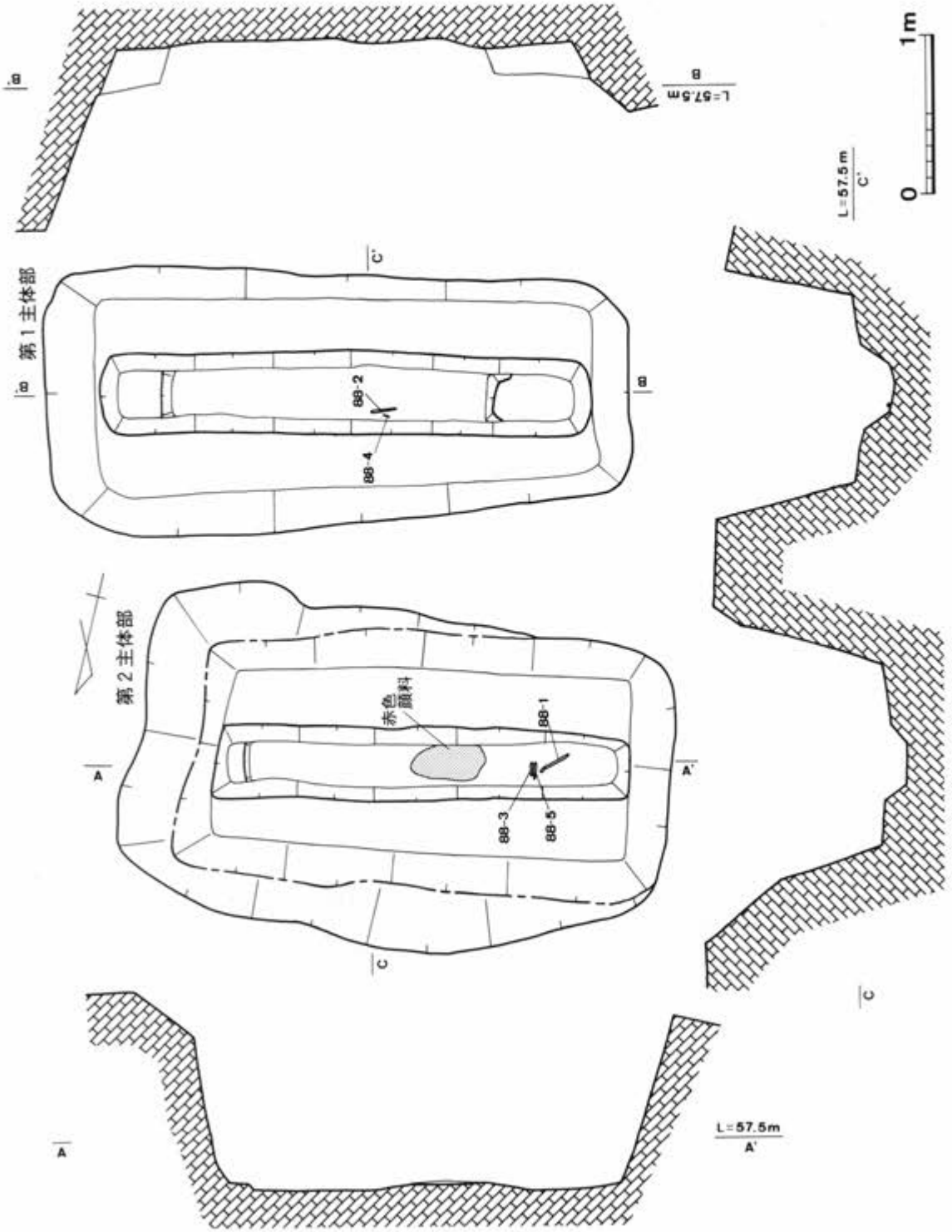
**②埋葬施設**(第87図)　墳頂の中央部から並列する木棺直葬の主体部2基を検出した。

**第1主体部**　2基の埋葬施設のうち南側の主体部である。墓壙は二段墓壙であり、平面形は長方形を呈する。墓壙掘形は、全長約3.7m×幅約1.7m×深さ約0.9mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれている。木棺埋納壙の両側部に平坦面をもつ。木棺は、木棺埋納壙の断面形状から割竹形木棺と判断している。木棺埋納壙は、全長約3.1m×幅約0.5m×深さ約0.2mを測る。また、木棺埋納壙の両小口に裏込め土を確認したことから、木棺の全長は約2.0mと判断される。棺底面は、ところどころに起伏が認められ、東小口側が西側に対してやや高くなることから、被葬者の頭位は東側と判断する。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約78°振る。副葬品として棺内の東部から鉄製工具2点(刀子・鉋)が出土した。

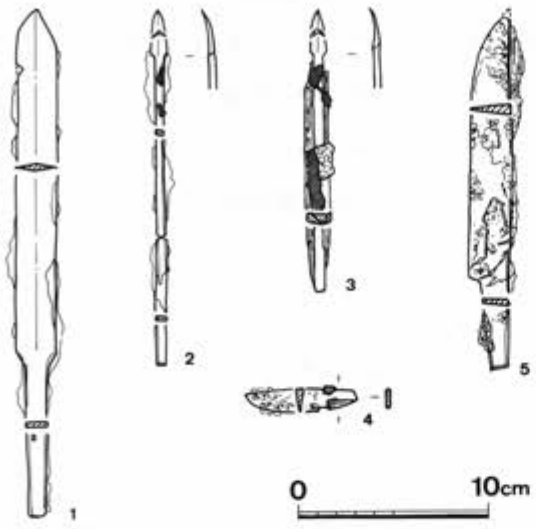


第86図　13号墳地形図

**第２主体部**　第１主体部のやや北西側に位置し、0.5～１ｍの間隔を開けている。墓壙は二段墓壙であり、長方形を呈する。墓壙壁は、直線的で急角度で掘り下げられるが、上端部付近は傾斜角が鈍くなる。墓壙掘形は、全長約3.5ｍ×幅約2.2ｍ×深さ約1.15ｍを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれ、両側面部に平坦面を残している。棺底面が平坦であることから、箱形木棺が使用されたと判断する。木棺埋納壙は、全長約2.6ｍ×幅約0.5ｍ×深さ約0.15ｍを測る。木棺




第87図　13号墳主体部実測図




第88図　13号墳出土遺物実測図

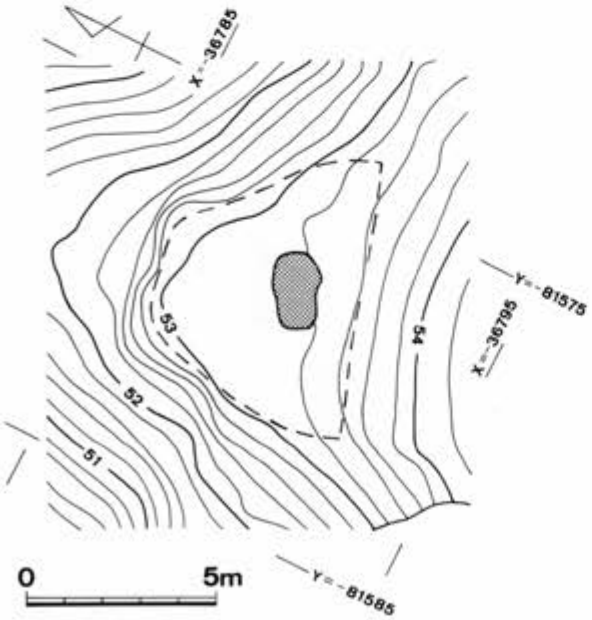
埋納壙の主軸方位は、北から東に約77°振る。棺内の中央やや西側で比較的広範囲に朱の散布が認められた。被葬者の頭位は西側と判断する。また、朱のさらに西側から副葬品として鉄器3点(剣・刀子・鉇)が出土した。

③**出土遺物**(第88図)　2基の主体部から副葬品とみられる鉄製品の出土があった。第1主体部では鉇(2)と刀子(4)、第2主体部から鉄剣(1)・鉇(3)・刀子(5)が出土した。

鉄剣は全長約26.9cm、剣身部の長さは約18.3cmを測る。平たく細長い柄部の中央付近に方形の目釘孔をもつ。鉇(2・3)は、刃部長が2cm前後、基部付近の幅が約0.8～1.0cmを測る。刃部の外反度合いはわずかである。ともに柄部には木質が残る。さらに、布目痕跡が存在することから、鉇は布巻きであったことが明らかである。刀子(4)は、極めて小型の刀子である。全長約6.0cm、刃部の長さは約3.8cmを測る。柄部には木質が残っている。刀子(5)は、大型の刀子である。切先を欠いている。残存長約18.5cmを測る。刃部の長さは約14.3cmと推測される。

(6)**21号墳**(第89図)

13号墳から北東に派生して下る尾根筋の途中(標高約53m付近)にある階段状古墳である。尾根筋の地山を削って平坦面を造り出すことから、墳丘は存在しない。墓域と判断される平坦面は半円形に近く、東西方向の長軸約7.5m×南北方向の短軸約6.0mを測る。平坦面中央のやや南側から、木棺直葬の主体部1基を検出している。主体部の主軸は、尾根筋に直交する。



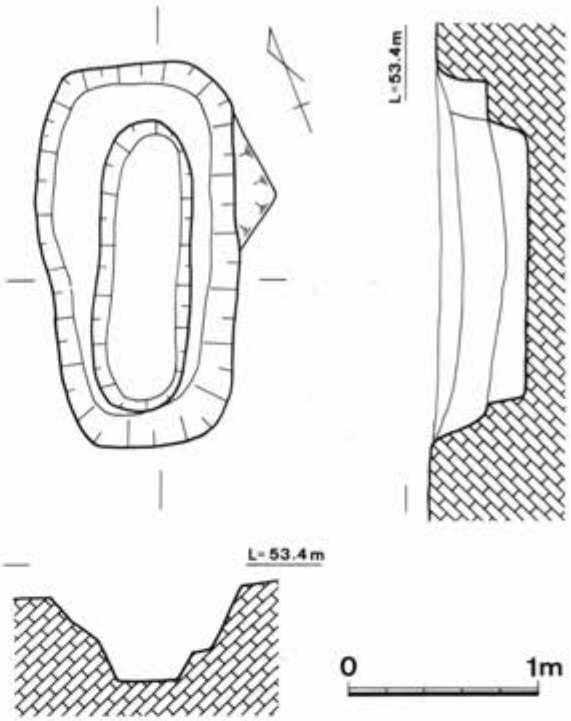

第89図　21号墳地形図

①**埋葬施設**(第90図)　墓壙は二段墓壙である。墓壙掘形は、角が丸みをもった長方形を呈し、全長約2.0m×幅約1.1m×深さ約0.35mを測る。木棺埋納壙は、墓壙底の中央付近にあるが、片方の小口が墓壙底の端に片寄っている。木棺埋納壙の両小口部は丸みが強く、平面形は偏平な楕円形を呈する。縦断面にみる小口は、傾斜角が大きく直線的に下がることから、割竹形木棺が

使用されたと推測する。木棺埋納壙は、全長約1.5m×幅約0.45m×深さ約0.2mを測る。棺底は平坦で、南小口部が北側に比べやや高いことから、被葬者の頭位は南側と判断している。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約25°振る。

②**出土遺物**　古墳平坦面・斜面・主体部とも遺物の出土はみられない。

(竹原一彦)



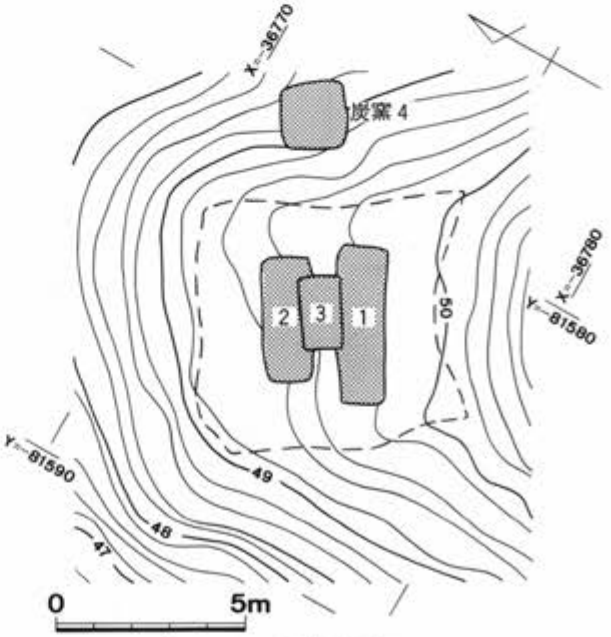
第90図　21号墳主体部実測図

(7)**14号墳**(第91図)

21号墳と同一尾根上にあり、21号墳の下部標高50～51m付近に位置する。階段状古墳である。一辺約6～7m規模の方形を呈する平坦面中央に、3基の埋葬施設を検出した。いずれも木棺直葬である。また、古墳の北東斜面から炭窯1基を検出した。

①**埋葬施設**(第92図)　平坦面のほぼ中央から並列する3基の主体部を検出した。切り合い関係から、中央に位置する小型の第3主体部が最も新しい主体部である。第1・第2主体部の先後関係は不明である。

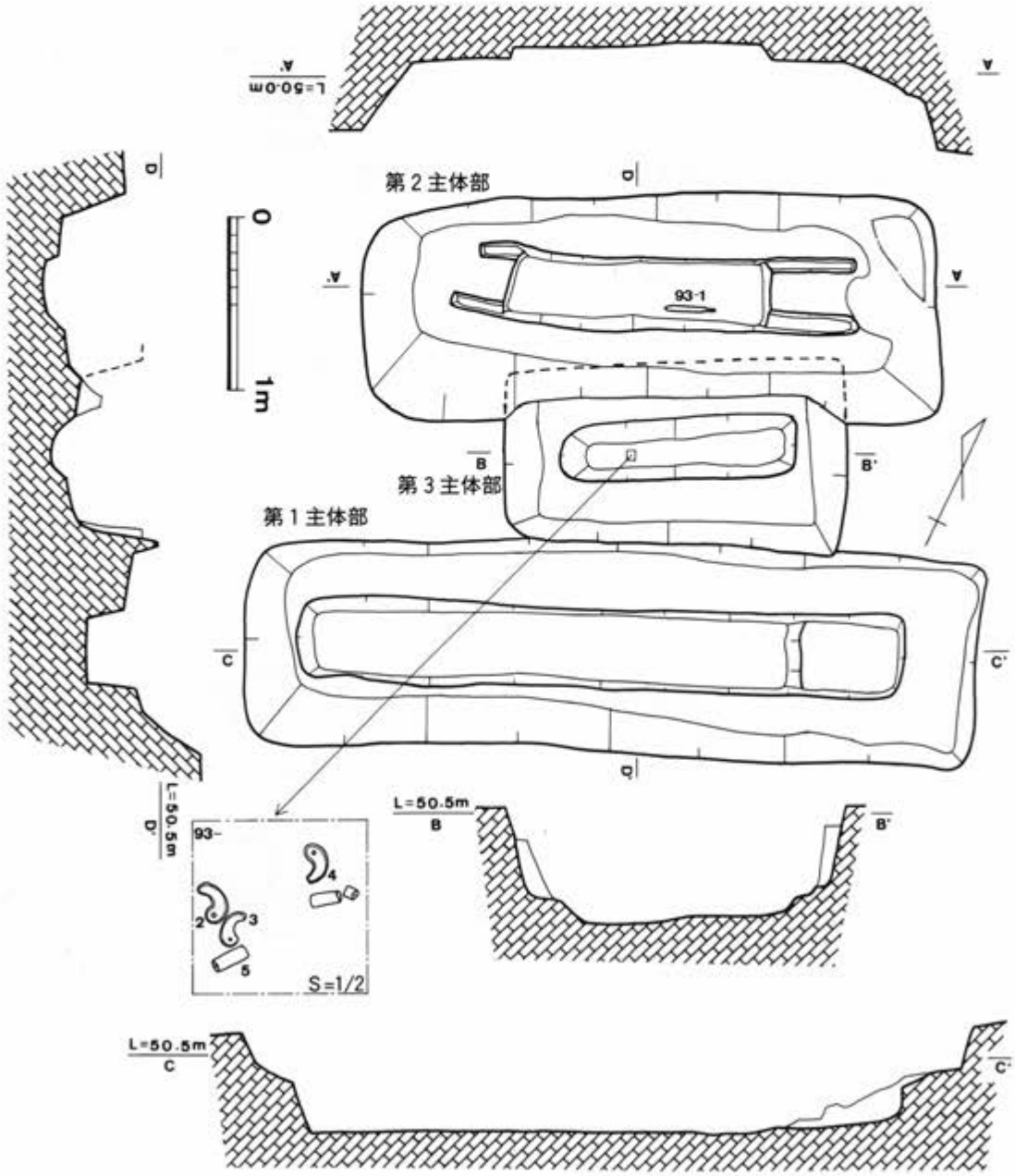
**第1主体部**　中央やや南東部に片寄って検出した主体部である。3基の主体部のうち最大の墓壙掘形をもつ。墓壙は二段墓壙であり、掘形は細長い長方形を呈する。墓壙規模は、全長約4.2m×幅約1.2m×深さ約0.3mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれるが、一方の小口部は墓壙底の端に片寄る。木棺埋納壙は長方形であり、全長約3.5m×幅約0.5m×深さ約0.3mを測る。墓壙底は平坦で、東小口が西側に対してやや高い。西側小口部に棺の腐朽に伴って崩れた裏込め土が存在したことから、木棺の全長は掘形よりやや短くなると判断される。木棺埋納壙の形状から、箱形木棺が使用されたとみている。被葬者の頭位は東側と判断する。



第91図　14号墳地形図

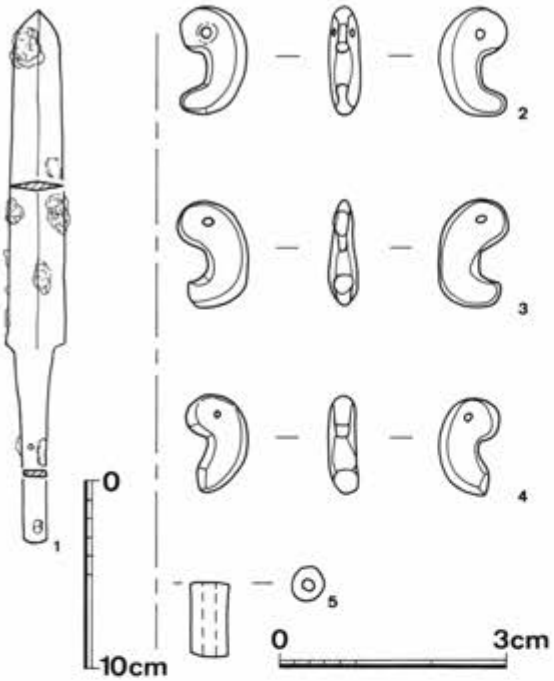
木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約66°振っている。棺内に副葬品はみられない。

**第２主体部**　平坦面中央のやや北西側にあって、第１主体部とは約0.7mの間隔を保って並列する。墓壙は二段墓壙であり、掘形は長方形を呈する。墓壙掘形は、全長約3.3m×幅約1.3m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央に小口部の形状が「H」形の木棺埋納壙が穿たれる。木棺埋納壙は、全長約2.3m×幅約0.4m×深さ約0.1mを測る。木棺埋納壙の底面には、主室部分と判断する中央付近が約５cm下げられている。主室部分は、全長約1.5mを測る。このような状況から、小口板は棺の底面上に直接置かれていたと判断する。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約68°振っている。副葬品として、鉄剣１本が棺内の中央やや東側、南側の側板に接して出土した。鉄剣は、切先を西側に向けていることから、被葬者の頭位は東であると判断する。




第92図　14号墳主体部実測図

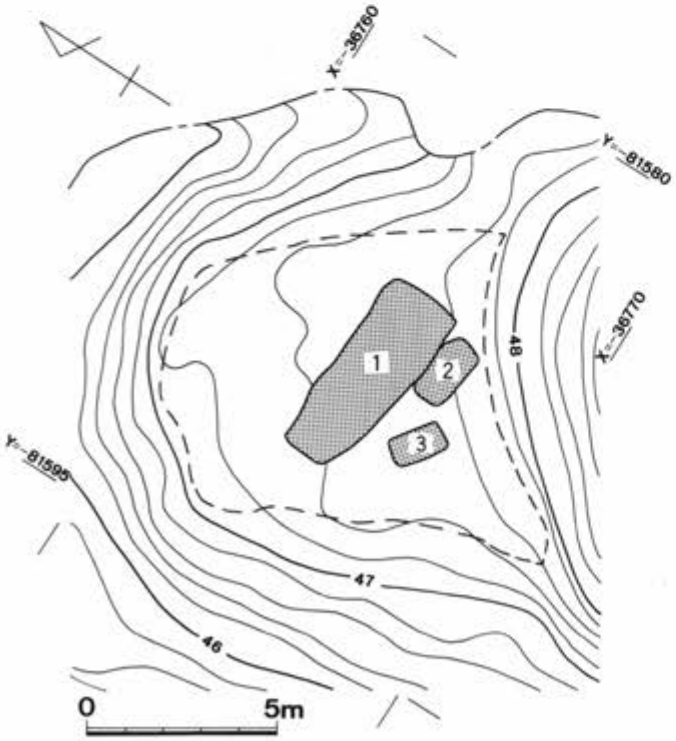
**第３主体部**　第２主体部の掘削段階で、墓壙の壁面に第３主体部の存在を確認した。第３主体部は、第１・第２主体部の間に位置する。周辺の再精査を実施したところ、第１・第２主体部を掘形が切っていることを確認した。墓壙掘形は二段墓壙である。墓壙掘形は長方形を呈し、全長約2.0m×幅約0.9m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央に全長約1.35m×幅約0.35m×深さ約0.1mの木棺埋納壙が穿たれる。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約60°振る。木棺埋納壙の形状から、舟形木棺が使用されたと判断する。副葬品として、棺内の中央やや西側から勾玉３点・管玉２点が出土した。玉類の出土位置から、被葬者の頭位は西側と判断する。



第93図　14号墳主体部出土遺物実測図

②**出土遺物**(第93図)　鉄剣(１)は、第２主体部出土である。全長約28.0cmを測り、剣身部の長さは約17.6cmである。剣身の最大幅は関部にあり、3.2cmを測る。関部は斜めである。柄部は関から先端部にかけて幅を減じていく。柄の中心からやや先端側に円形の目釘孔が存在する。

勾玉・管玉は、第３主体部の出土である。勾玉２～４は滑石製である。偏平な表裏面には平坦面を広く残し、周縁部は粗い調整で終わる。全長は1.2～1.4cmである。管玉(５)は、緑色凝灰岩製である。直径約５mm×長さ約１cmを測る。第３主体部では管玉がもう１点出土しているが、風化が激しく図化できない。現地では直径約５mm×長さ約２cmを確認している。



第94図　15号墳地形図

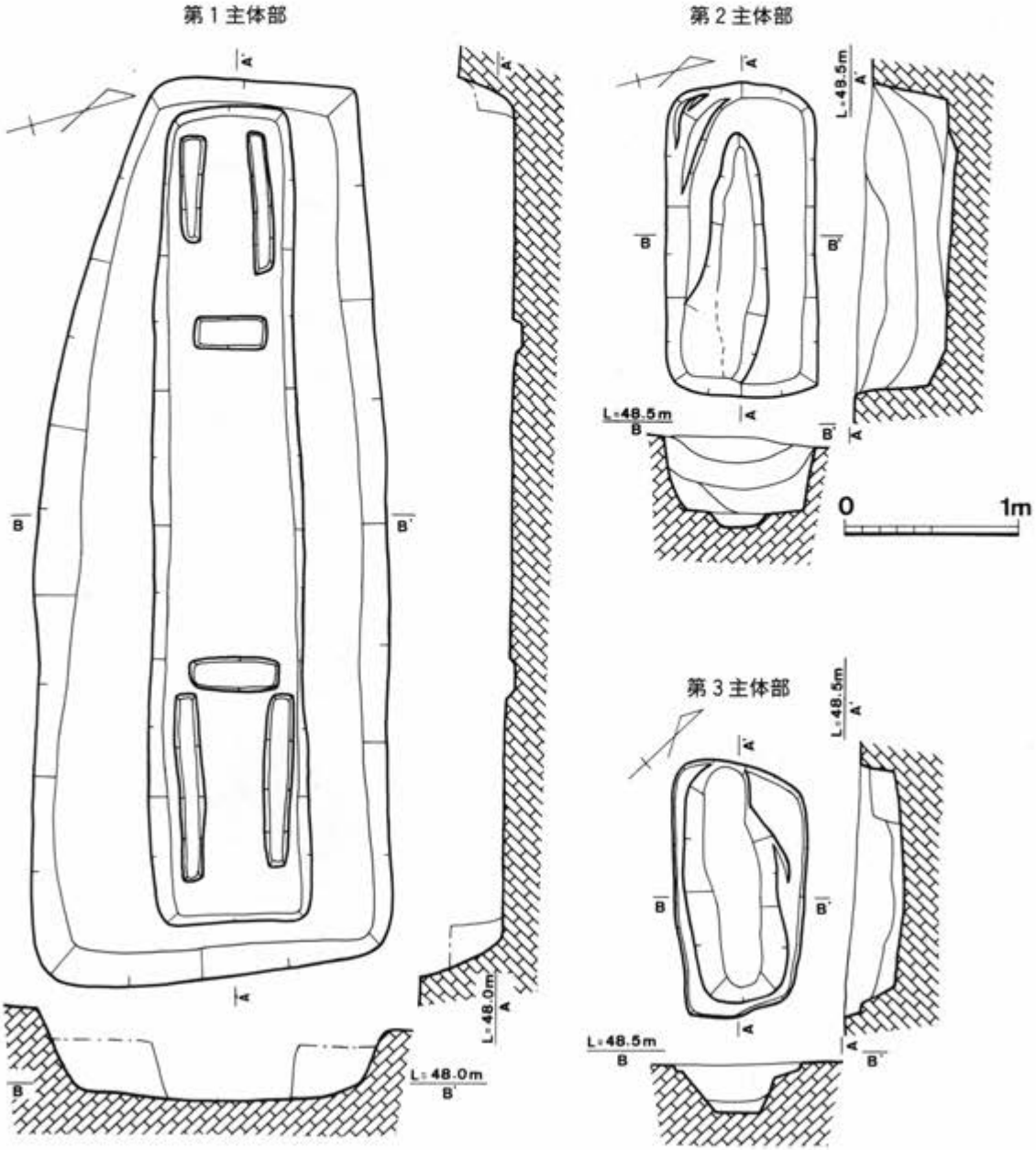
**(8)15号墳**(第94図)

14号墳の下部、標高48～49m付近に位置する階段状古墳である。一辺約７～８m規模の方形を呈する平坦面中央か

ら、3基の埋葬施設を検出した。いずれも木棺直葬である。

①**埋葬施設**(第95図)　平坦面の中央に大型の中心主体部1基、その南側に小型の主体部2基が存在する。古墳平坦面と3基の主体部は軸線が異なり、主体部の軸線は平坦面の軸線に対して斜向する。3基の主体部のうち、第1・第2主体部は、ほぼ東西方向の主軸方位をもつ。

**第1主体部**　墓壙掘形は単純墓壙であり、長方形を呈する。墓壙は、全長約5.2m×幅約2.1m×深さ約0.5mを測る。墓壙の中央で木棺痕跡を確認した。裏込め土の状況から、木棺規模は全長約4.7m×幅約0.9m×深さ約0.3mと判断する。木棺の主軸方位は、北から西に約74°振る。棺の両小口部にのみ側板溝・小口溝が確認できた。小口溝の間隔は、溝の内側で約1.8mを測る。両小口溝は長さが同一でなく、東側は約0.5m、西側が約0.4mと異なる。この小口溝の状況から、




第95図　15号墳主体部実測図

頭位は東側と判断する。

**第２主体部**　第１主体部の南東に位置し、掘形はかろうじて切り合わない。墓壙掘形は長方形であり、二段墓壙である。墓壙掘形は、全長約1.8m×幅約0.85m×深さ約0.4mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれる。木棺埋納壙は、全長約1.4m×幅約0.35m×深さ約0.1mを測る。木棺埋納壙の小口部は丸みが強く、縦断面も傾斜することから、舟形木棺が使用されたと判断する。棺底部は、西側小口部に対して東側が高いことから、被葬者の頭位は東側と判断する。木棺埋納壙の主軸方位は北から西に約76°振る。

**第３主体部**　第１主体部の南に位置する。墓壙は二段墓壙である。検出した掘形は、全長約1.5m×幅約0.8m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の平坦面はわずかであり、木棺埋納壙の掘形が大部分を占める。木棺埋納壙は、全長約1.4m×幅約0.55m×深さ約0.25mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から西に約54°振る。木棺埋納壙の形状から、割竹形木棺が使用されたとみられる。木棺埋納壙の西側小口部に裏込め土が存在したことから、木棺の長さは約１m程度と判断する。棺底部は平坦であるが、中央付近が最も下がる。木棺埋納壙の小口幅は、南東側の幅がやや広いことから、被葬者の頭位は南側とみている。

**②出土遺物**　３基の主体部に伴う副葬品の出土はみられないが、墳丘西側斜面の調査で土師器の破片が出土している。遺存状況が悪く図化できないが、布留式の甕であった。

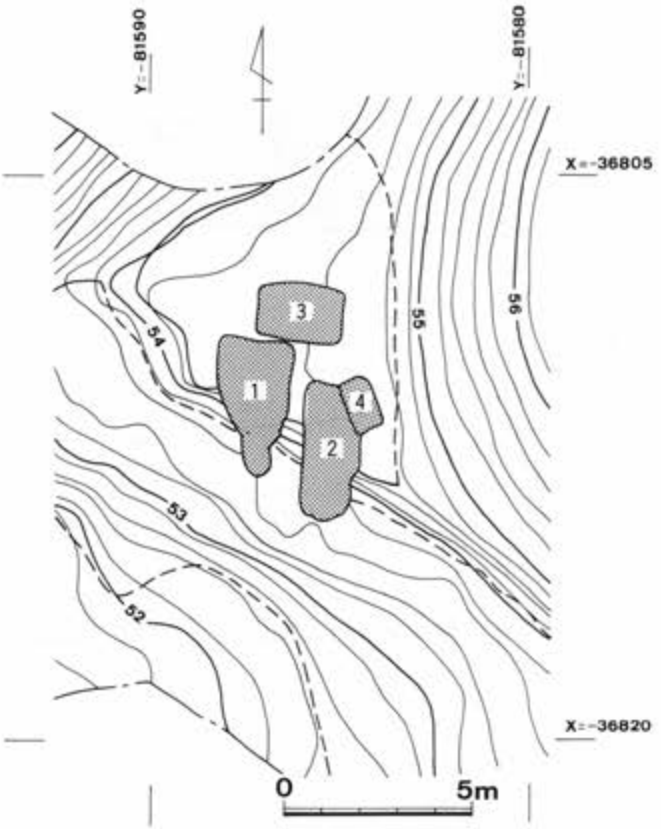
(橋本　稔・竹原一彦)

**(9)16号墳**(第96図)

13号墳から東方向に下降してのびる尾根上にあり、13号墳の直下に位置する階段状古墳である。平坦部の標高は約54.5m付近に位置する。平坦面上で４基の埋葬施設を検出した。いずれも木棺直葬である。古墳平坦面の南半部分は、後世の段階で大きく削平されている。平坦面の規模は８m前後と推測する。

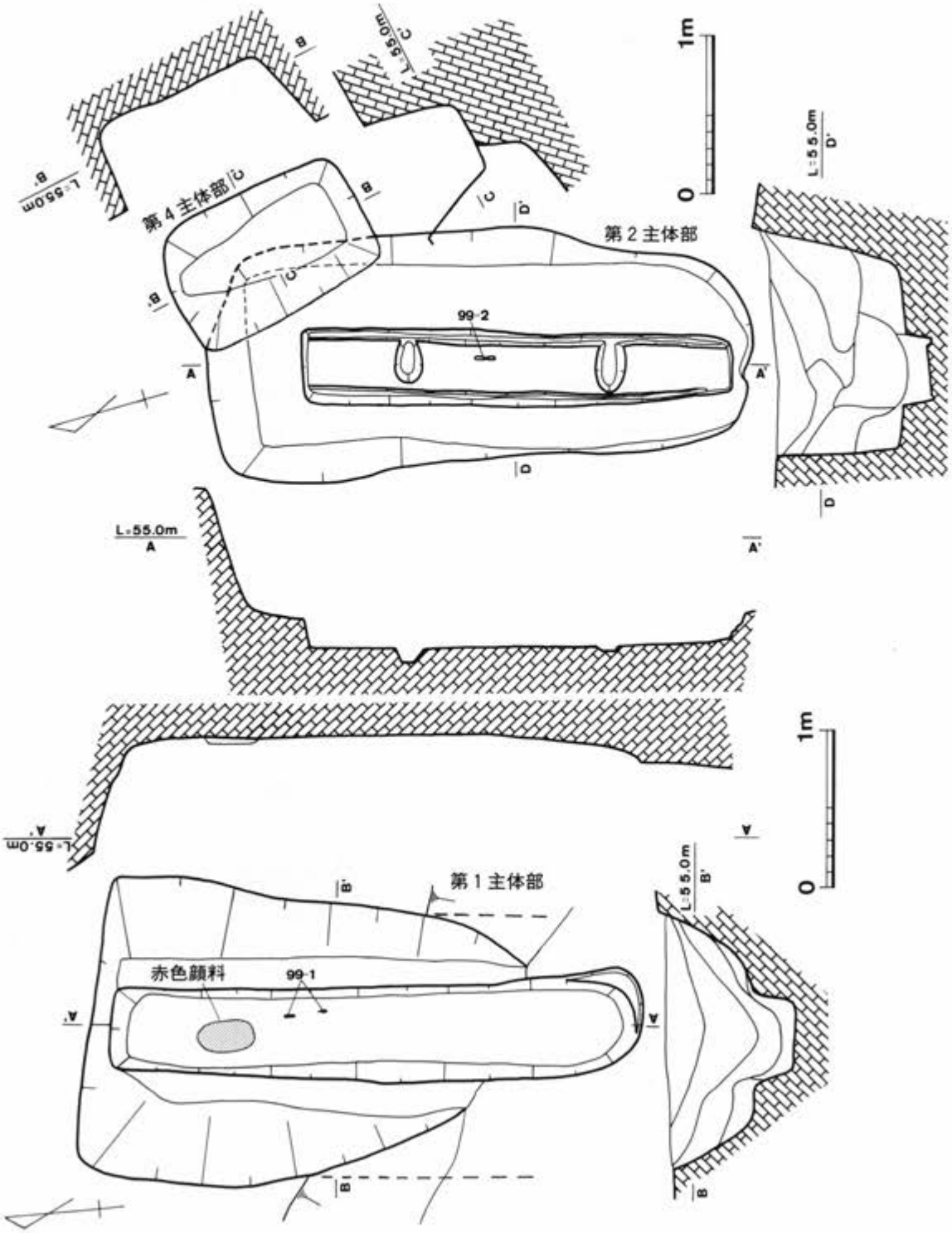
**①埋葬施設**　平坦面の中央に２基の大型埋葬施設(第１・第２主体部)があり、その北側に中規模の第３主体部が存在する。小型墓壙の第４主体部は、平坦面の東端部にあり、第２主体部の一部を切っている。

**第１主体部**(第97図)　中心主体部




第96図　16号墳地形図

と考えられる埋葬施設である。墓壙は、掘形の南半部分を失っているが、長方形の掘形と推測する。二段墓壙である。検出した木棺埋納壙の状況から、墓壙の全長は約3.7mと推測する。また、墓壙掘形は幅約1.9m×深さ約0.55mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれ、側面の両横に平坦面が残る。埋葬施設のうち、木棺埋納壙は完存しており、全長約3.4m×幅約0.6m×深さ約0.25mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約6°振る。棺底面は平坦であるが、小

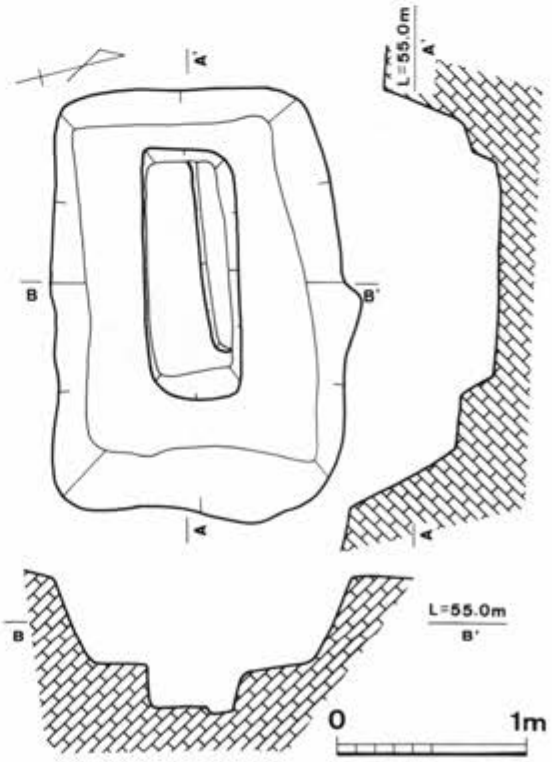



第97図　16号墳主体部実測図

口部分では南側が北側に対してやや高くなる。小口掘形の形状は、北側が直線的であるのに対し、南側は丸く仕上げている。木棺埋納壙の形状から舟形木棺が使用されたと判断するが、箱形木棺の可能性も否定しきれない。棺内の北側中央付近に朱の散布(20cm×35cm)が認められる。検出した朱の位置関係から、被葬者の頭位は北側と判断する。副葬品として、朱の南側でなおかつ棺の東側側板に近い位置から、刃部を欠いた鉇1点が出土した。鉇は2破片に折れ、約20cm離れて出土した。ただ、鉇の刃部に関しては、棺内を精査しても出土していない。

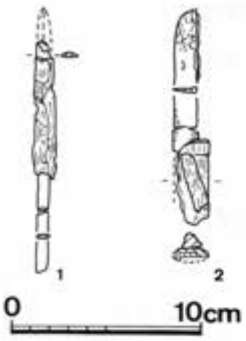
**第2主体部**(第97図)　第1主体部の南東側に位置し、約0.6mの間隔を保って並列する。両主体部の墓壙掘形は、第2主体部の北側小口ラインが第1主体部から約1.6m南に位置する。墓壙掘形は二段墓壙であり、南半部分の墓壙上部は失われている。墓壙掘形は、全長約3.8mと推測する。また、掘形幅約1.5m×深さ約1.0mを測る。棺底面の中央に木棺埋納壙が穿たれる。墓壙底の平坦面は全周をめぐる。木棺埋納壙は、全長約2.75m×幅約0.5m×深さ約0.2mを測る。「H」形の組合式木棺が使用されたとみられ、底面に側板溝と小口溝が存在する。主室と考えられる両小口溝の内側は、約1.2mの間隔を測る。小口溝は南側が北側に対して長いことから、被葬者の頭位は南側と判断する。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約17°振る。副葬品として刀子1点が出土した。刀子は、棺内の中央からやや北に片寄って、東側側板に接する状態で出土している。

**第3主体部**(第98図)　第1主体部の北東側に近接して存在するが、切り合い関係はもたない。主軸方位は第1・第2主体部と異なり、東西方向にとっている。墓壙は二段墓壙であり、短い長方形を呈している。墓壙掘形は、全長約2.3m×幅約1.6m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれる。墓壙底の平坦面は全周する。木棺埋納壙は、全長約1.3m×幅約0.5m×深さ約0.2mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、西から北に約10°振る。木棺埋納壙の北側側面には側板溝が存在するが、他の3面には認められない。木棺埋納壙の形状から、箱形の組合式木棺が使用されたと判断する。平坦な棺底部は南側が北に対して高く残ることから、被葬者の頭位は南側と判断する。副葬品はみられない。木棺埋納壙の規模から被葬者は小児の可能性が高い。



第98図　16号墳第3主体部実測図

**第4主体部**(第97図)　第2主体部の北東隅を切っている。当初は存在が判明しないまま第2主体部を掘削したが、墓壙壁面に第4主体部の掘形を確認した。再度、面的に精査を



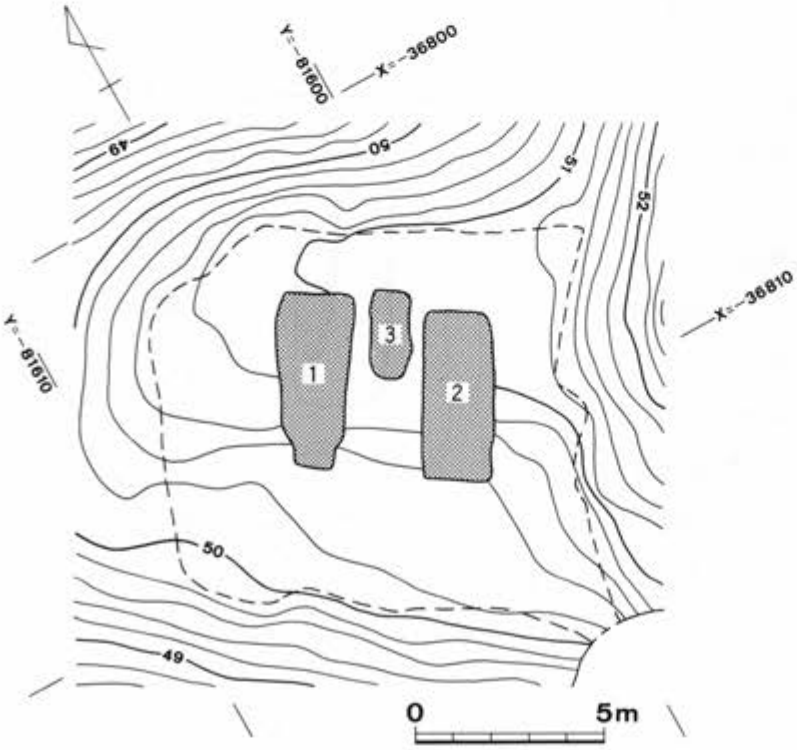
第99図　16号墳出土遺物実測図

実施したところ、第２主体部を切る小型の墓壙（第４主体部）を検出した。墓壙は単純墓壙であり、長方形を呈していると判断する。墓壙掘形は、全長約1.3m×幅0.8m前後×深さ約0.5mを測る。墓壙底の形状から、細長い台形を呈する箱形木棺が使用されたとみる。棺底部は、北側小口部が南に対してやや高い。頭位側と判断する南側小口部の幅は約0.4mを測る。主軸方位は、北から西に約11°振る。副葬品はみられない。墓壙規模から、被葬者は小児と判断する。

②**出土遺物**（第99図）　副葬品として、第１主体部から鉇１点、第２主体部から刀子１点が出土した。鉇（１）は、刃部の大部分を欠いている。柄部には木質がよく遺存している。柄部の全長は11.5cmを測る。刀子（２）は、柄部を含め残存長が約11.3cmであり、刀身部は全長7.6cmを測る。柄の木部が特に良好なことから、関の形状については不明な点が多い。柄は、刀身の峰より大きく外側に張り出す。柄口は峰側が角を立てるのに対し、刃部側はゆるやかな曲線を描いている。柄口と柄部の境にはわずかな段差が設けられている。柄の樹種は不明であるが、白木の柄である。また、柄の木部には他の木質（棺材か？）が銹着している。

**(10)17号墳**（第100図）

16号墳の西隣りの下段に位置する階段状古墳である。平坦面の標高は51m付近に存在している。16号墳と同じように、古墳平坦面の南半部分が後世に大きく削られている。古墳は、地山削り出しと一部盛り土で整形していることから、当初は墳丘が存在した可能性が高いと考えている。平坦面は方形で一辺が11m前後の規模と推測する。古墳平坦面の中央付近から並列する３基の埋葬施設を検出した。

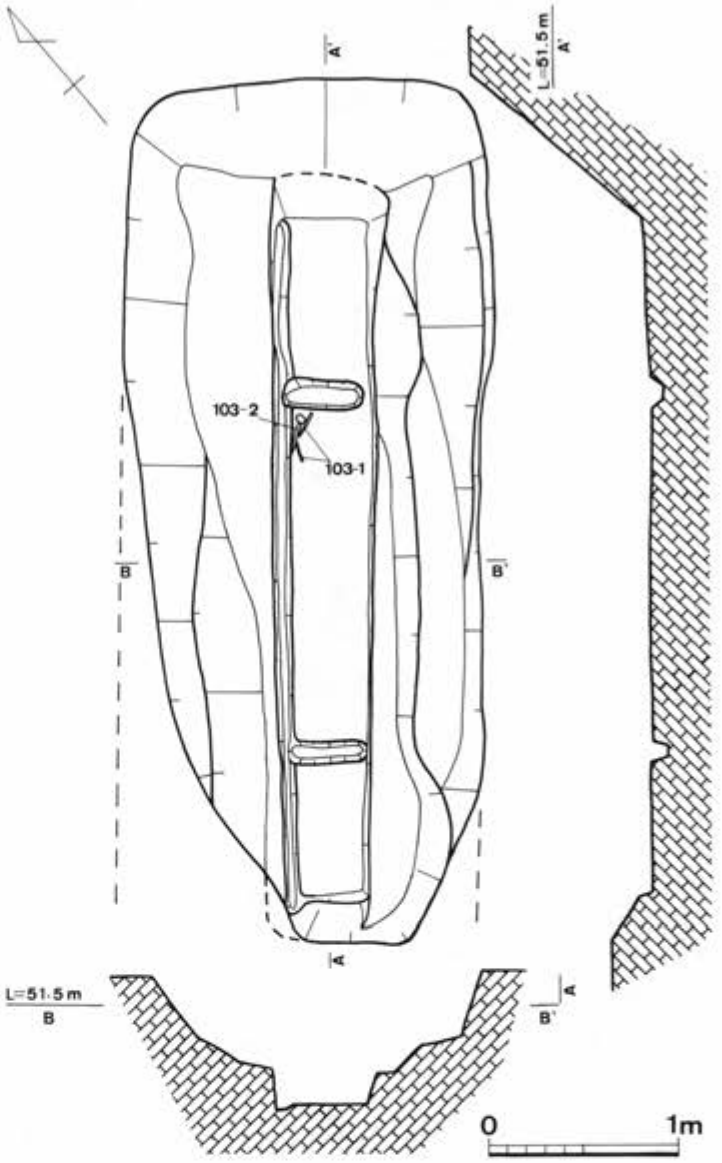


第100図　17号墳地形図

①**埋葬施設**　３基の並列する主体部は、古墳平坦面の軸線に方向をそろえているだけでなく、北側となる小口部分の掘形ラインを東西方向でほぼそろえている。ほぼ同一

規模の大型主体部を東西に振り分け、その間に小型の主体部を配置している。３基とも木棺直葬である。

**第１主体部**(第101図)　２基の大型主体部のうち西側に位置するものである。第２主体部に比べ、わずかに大きな墓壙掘形をもつ。墓壙の南半部は失っているが二段墓壙であり、長方形の掘形をもつ。墓壙掘形の全長は約5.0mと推測する。掘形幅約1.9m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれる。墓壙底の平坦面は、木棺埋納壙の両側に認められる。木棺埋納壙は、全長約3.6m×幅約0.5m×深さ約0.2mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約41°振る。棺底面は平坦で、棺側板溝と小口溝が存在する。「H」形の組合式木棺が使用されており、小口溝によって区画された主室の全長は約1.7mを測る。棺底部は水平である。南側の小口溝が北側に対して長いことから、被葬者の頭位は南西側と判断する。副葬品として、北側小口溝と西側側板溝の接点付近主室内から、鉇１点・鑿１点が出土した。

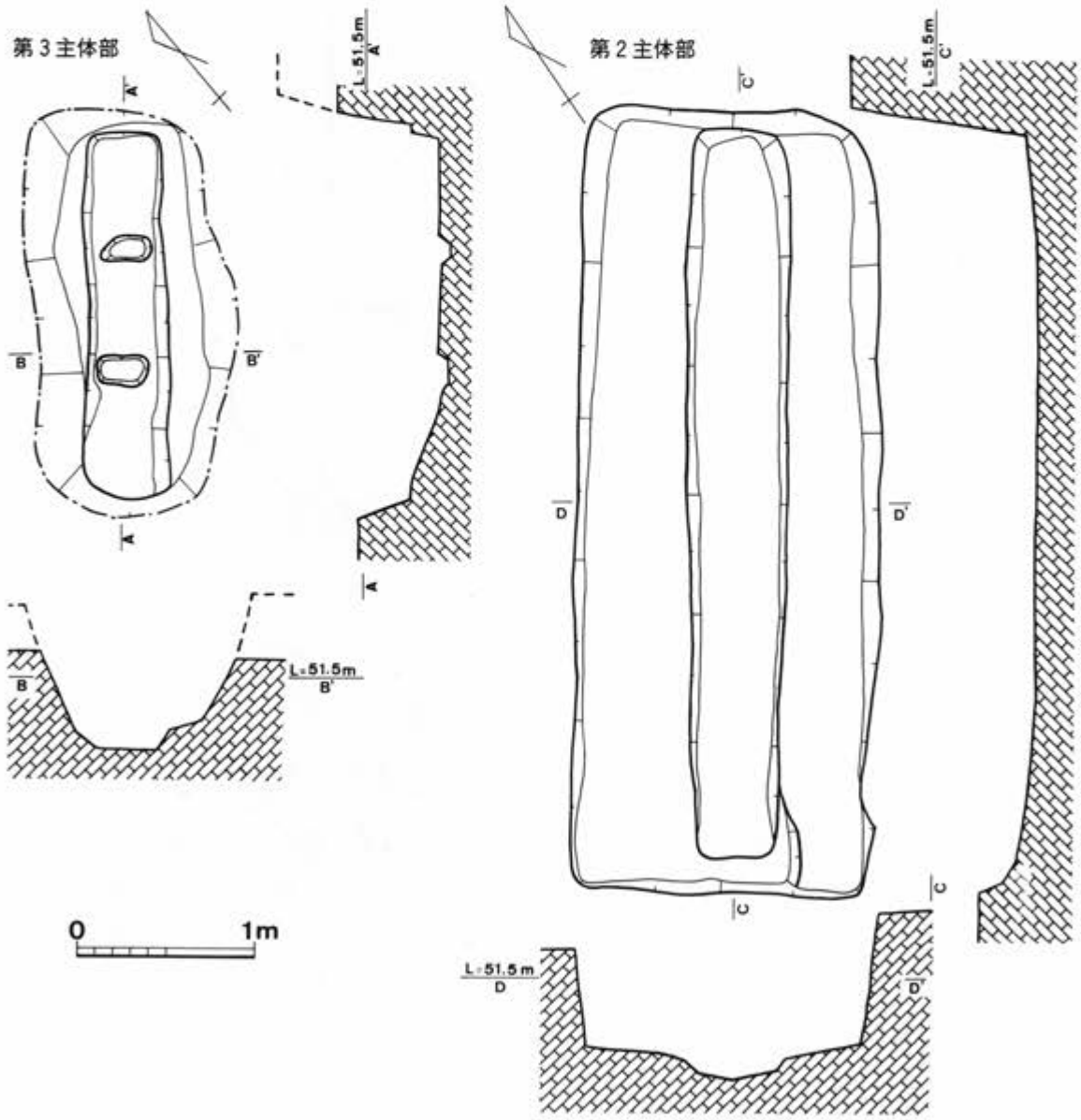


第101図　17号墳第１主体部実測図

**第２主体部**(第102図)　第１主体部の東側に位置し、両主体部は約1.6mの間隔を開けて並列する。墓壙掘形は二段墓壙であり、長方形を呈する。墓壙掘形は、全長約4.4m×幅約1.7m×深さ約0.85mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれる。墓壙底の平坦面は、木棺埋納溝の両側に認められる。木棺埋納壙は、全長約4.1m×幅約0.6m×深さ約0.15mを測る。木棺埋納壙の形状から、割竹形木棺が使用されたと判断する。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約34°振る。木棺埋納壙の幅は、北小口側が南側に対してやや広がることから、被葬者の頭位は北東側と判断する。副葬品はみられない。

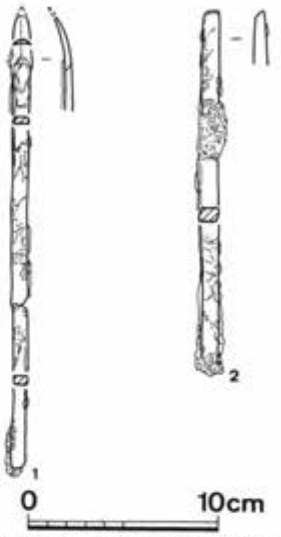
**第３主体部**(第102図)　第１・第２主体部の間に位置し、ほぼ均等な間隔を保っている。第

1・第2主体部の検出面で精査を繰り返したが、掘形ラインが明確につかめず、約30cm掘り下げた段階で掘形を確認することができた。墓壙掘形は二段墓壙であり、平面形はやや蛇行した長方形を呈している。検出面での墓壙掘形は、全長約2.2m×幅約1.3m×深さ約0.4mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれる。墓壙底の平坦面は、木棺埋納壙の両側にみられる。木棺埋納壙は、全長約2.1m×幅約0.45m×深さ約0.15mを測る。棺底面は平坦で、中央部に2か所、小口溝が存在する。小口溝の存在から「H」形の組合式木棺が使用されている。両小口溝間の主室は全長約0.53mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は北から東に約42°振る。棺の底面は、南側小口溝から北側は水平であるが、小口溝の南側は南方向に地山面がゆるやかに立ち上がっていく。小口溝は、南側が北側に対して長いことから、被葬者の頭位は南側と判断する。副葬品はみられない。棺の主室の長さから、被葬者は小児と判断する。




第102図　17号墳第2・第3主体部実測図

②**出土遺物**(第103図)　第1主体部から副葬品として鉇と鑿の出土をみている。鉇(1)は、全長24.1cmを測る。刃部の切先は欠けている。刃部の断面形は内反りであり、三日月様の断面形態をもつ。刃部は、基部から切先にかけて大きく外反している。外反角度は約23°である。柄部は偏平な方柱形を呈し、長さは20.8cmを測る。柄部には木質がわずかながら認められる。鑿(2)は完形品であり、全長は19.0cmを測る。片刃の刃部は9mmの幅を測る。また、刃部の傾斜角は約56°である。柄部には木質がみられないことから、柄を除いた鉄部のみを副葬していたと判断する。



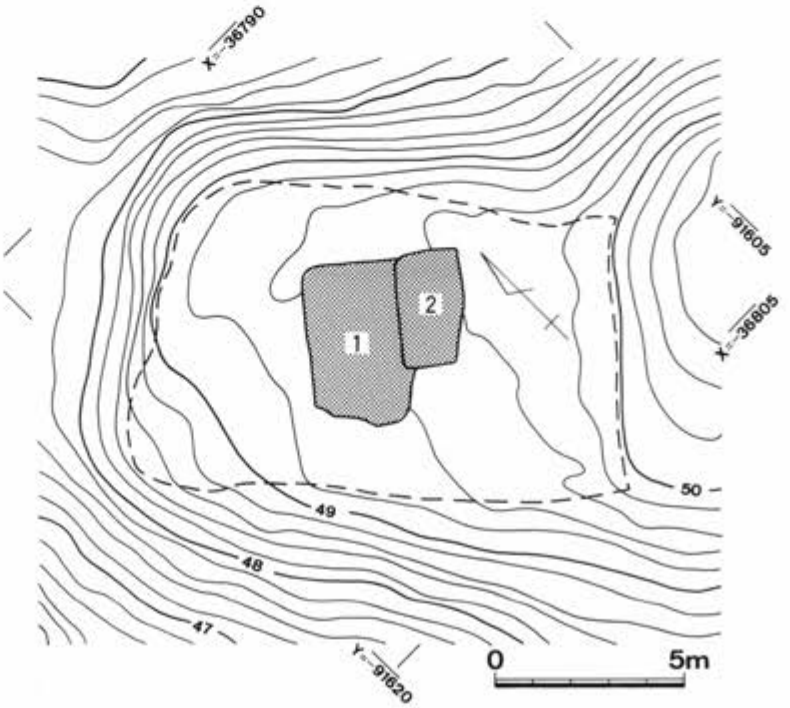
第103図　17号墳第1主体部出土遺物実測図

(11)**18号墳**(第104図)

17号墳の北西側下段において隣接している階段状古墳である。長方形に削り出された平坦面は、長辺約12.0m×短辺約8.0mを測る。平坦面の標高は、およそ49～50m付近にある。古墳平坦面の中央から、切り合う2基の埋葬施設を検出した。

①**埋葬施設**(第105図)　2基の埋葬施設は、古墳平坦面の長軸に直交する主軸をとっている。平坦面のほぼ中央に中心主体部(第1主体部)を設け、やや小型の主体部(第2主体部)が第1主体部の東端部を切っている。2基の埋葬施設はいずれも木棺直葬である。

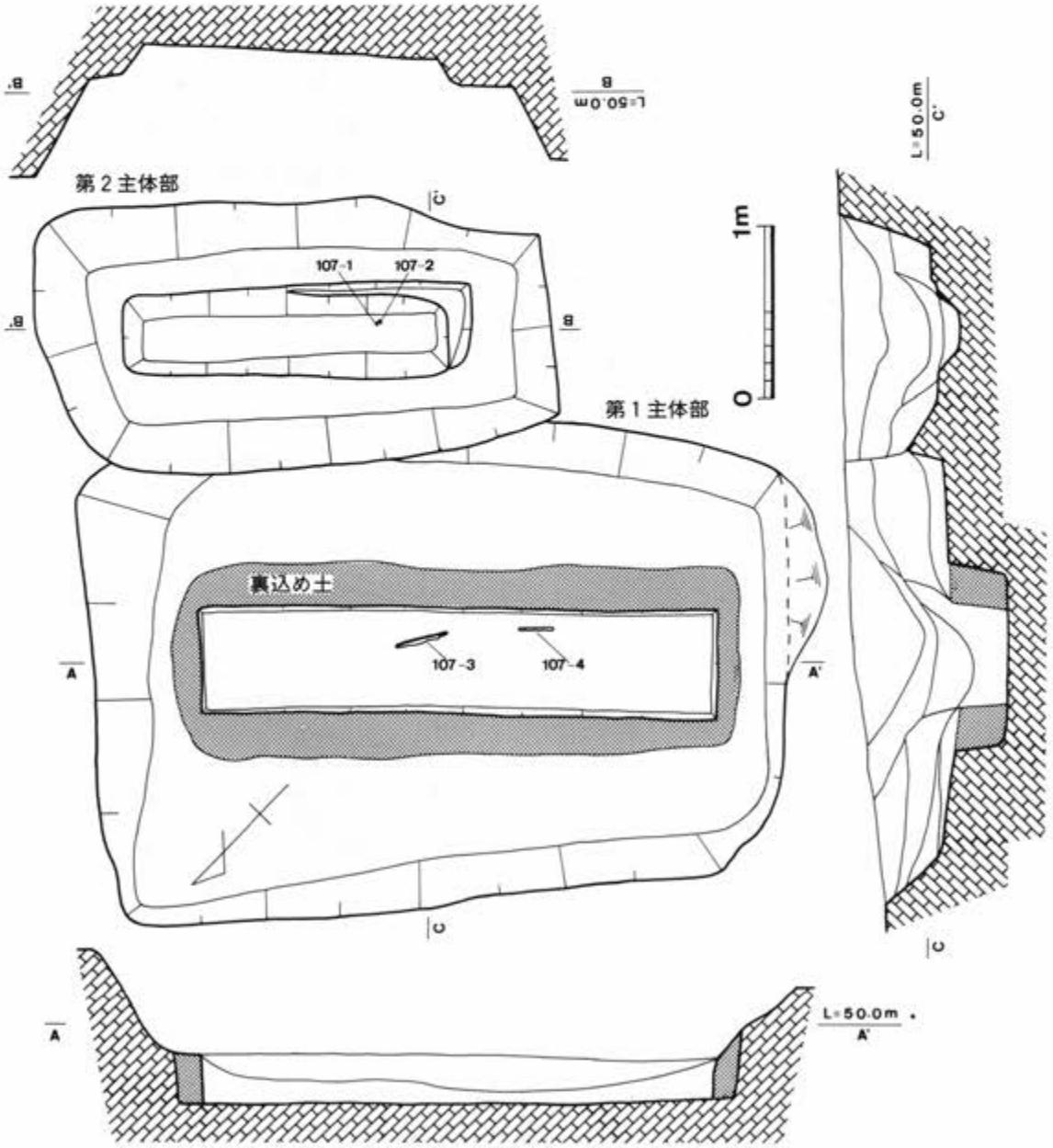
**第1主体部**　古墳平坦面の中央に位置する中心主体部である。墓壙掘形は二段墓壙であり、幅の広い長方形を呈している。墓壙掘形は、全長約4.1m×最大幅約2.8m×深さ約0.6mを測る。墓壙中央に木棺埋納壙が穿たれ、墓壙底の平坦面は全周をめぐる。木棺埋納壙は長方形を呈しており、全長約3.25m×幅約1.1m×深さ約0.3mを測る。木棺埋納壙検出面の精査によって、棺痕跡と棺を取り巻く裏込め土を検出した。木棺痕跡は全長約2.95m×幅約0.6mを測る。木棺痕跡の主軸方位は、北から東に約47°振る。棺底部は平坦で南側小口が北側に対してやや高いことから、被葬者の頭位は南西側と判断する。木棺痕跡の形状から、箱形木棺が使用さ



第104図　18号墳地形図

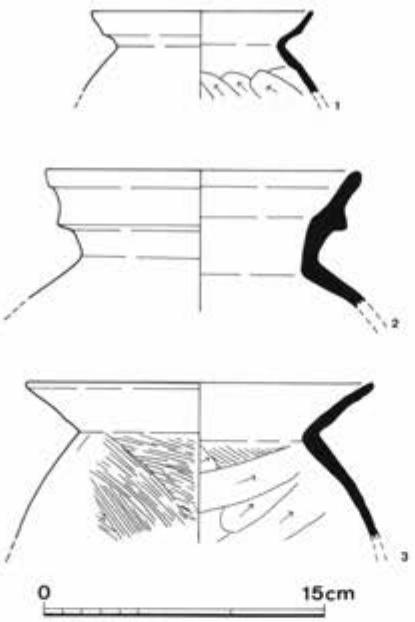
れたと判断する。棺内中央部の東側側板付近から副葬品の出土をみている。副葬品として中央やや北側から鉄剣１点、剣から南側約40cm離れて鉇１点が出土した。鉄剣は、切先を北側小口方向に向けるが、棺の内側方向に振れている。鉇は、東側側板に平行しており、側壁から約10cm離れて出土した。

**第２主体部**　第１主体部墓壙掘形の東隅付近の上端を切って墓壙が掘り込まれている。掘形は二段墓壙であり、主軸は第１主体部とほぼ同じである。墓壙掘形は全長約3.0m×幅約1.5m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が存在し、墓壙底の平坦面は全周をめぐる。木棺埋納壙は、全長約1.9m×幅約0.5m×深さ約0.15mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約45°振っている。埋納壙の横断面は丸く、小口部分の縦断面は斜めに傾斜する。棺の形態は、




第105図　18号墳第１・第２主体部実測図

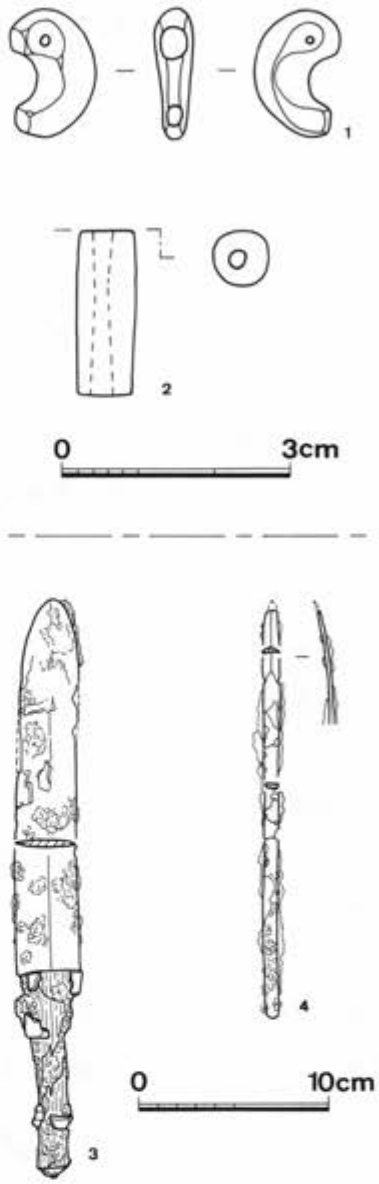
舟形木棺とも思えるが、傾斜度がきついことから、割竹形木棺が使用されたと判断する。棺底部は南小口側が高く、北小口方向に向かって大きく下がることから、被葬者の頭位は南側と判断する。棺内から副葬品として玉類が出土している。玉は勾玉と管玉各１点であり、南側小口から約0.4m内に入った地点の東側側板近くから出土した。




第106図　18号墳墳丘部出土遺物実測図

②**出土遺物**(第106・107図)　第107図(１～４)は、主体部に伴う副葬品である。また、第106図にみえる土師器は、墳丘斜面部分の調査で出土している。

玉類(１・２)は第２主体部、鉄器３・４は第１主体部の出土である。勾玉(１)は、滑石製である。偏平に近い体部の背は「C」字状に丸くていねいに仕上げられる。全長は1.7cmを測る。管玉(２)は、緑色凝灰岩製である。太身の管玉であり、長さ2.2cm・直径７mmを測る。両面穿孔を行っている。




第107図　18号墳主体部出土遺物実測図

鉄剣(３)は、全長約30.6cmを測る。両刃の刃部は長さ約19.6cm、柄口付近の幅は3.2cmである。柄部には柄の木質が良好に残っている。柄は、柄口・柄部分の形状が明瞭に残っている。柄口は、端部から約3.6cmまでの間が次第にやや狭くなる形状をもち、断面は長楕円形を呈する。柄部分は、柄口と柄部の境に小さな段が付き、柄自体は細身に仕上げている。柄部は楕円形であり、長軸が約2.0cm、短軸が約1.4cmである。さらに柄の表面には、およそ４mm間隔で細い筋彫りをめぐらせる。一部に残る柄表面の観察から、柄部分はゆるやかに波打つ(凹凸)形状であったとも考えられる。柄部分の長さは約6.8cmを測る。柄尻部分は鉄の柄身から外れるところから、木部は残っていない。端面の観察では柄部材とは別材の柄尻が付いていたとみられ、一部に平滑な端面が残っていた。鉈(４)は、切先を欠いているが、残存長約21.7cmを測る。刃部は細長く、断面は内反りである。刃部は、基部から切先にかけてやや外反する。外反角度は約12°である。

土師器甕(第106図)は、18号墳の北側斜面の流土層から出土している。一定の範囲内に散乱した出土状況から、これらの土器は18号墳の平坦面から転落したのではないかと判断している。図化できた3点の甕は、いずれも布留式併行期に属している。1・2は、いわゆる二重口縁甕に含まれる。口径は、甕1が11.9cm、甕2は17.0cmを測る。甕(3)は、単純口縁である。口径は18.7cmである。

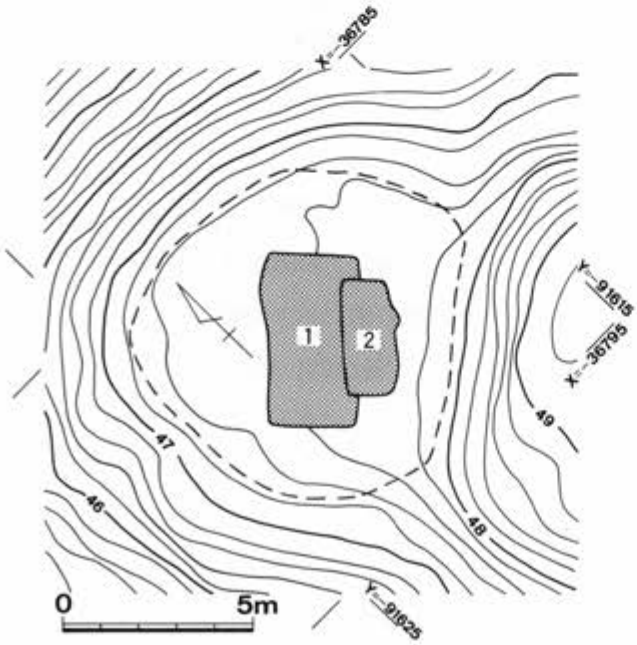
これらの土器は、葬送儀礼に伴う遺物と判断される。これらの土器の年代観から、18号墳の築造は、4世紀後半と判断される。

(12)19号墳(第108図)

18号墳の北西側の下段に隣接する階段状古墳であって、標高約47.5m付近に位置している。そのすぐ下には20号墳があり、それが北尾根の最北端の古墳である。ところで、階段状古墳の場合、平面形は方形もしくは半円形を呈することが多いが、この19号墳は尾根筋の斜面(18号墳側)を大きく削り込むことで、円形に近い平坦面を削り出している。平坦面の規模は、直径約8.5mを測る。平坦面のほぼ中央から、切り合い関係にある大・小二つの埋葬施設(第1・第2主体部)を検出した。

①**埋葬施設**(第109図)　平坦面の中央に大型の中心主体部(第1主体部)が存在している。また、小型の第2主体部は、第1主体部の墓壙南東壁を切っている。第1・第2主体部は、ほぼ同一の主軸方位をもっており、尾根筋に対しては直交する形態をとる。2基の埋葬施設は、ともに木棺直葬である。

**第1主体部**　平坦面中央にあり、位置・規模などから中心主体部とみられる。墓壙掘形は二段墓壙である。掘形の平面形は、幅広な長方形を呈し、全長約4.6m×幅約2.6m×深さ約0.5mを測る。墓壙底の中央には木棺埋納壙が穿たれている。木棺埋納壙の周囲を取り巻く平坦面は、両側面部では幅約0.4～0.7mであるのに対して、小口部では0.1m前後でしかない。木棺埋納壙は、全長約3.6m×幅約0.7m×深さ約0.3mを測る。平坦な棺底面には、2か所に小口溝が設けられている。小口溝の存在から、木棺にはいわゆる「H」形をした組合式木棺が使用されたと判断している。木棺の主軸方位は、北から東に約28°振る。主室と考えられる両小口間は約1.75mを測る。小口溝は、南側が北側に対してやや長いこ

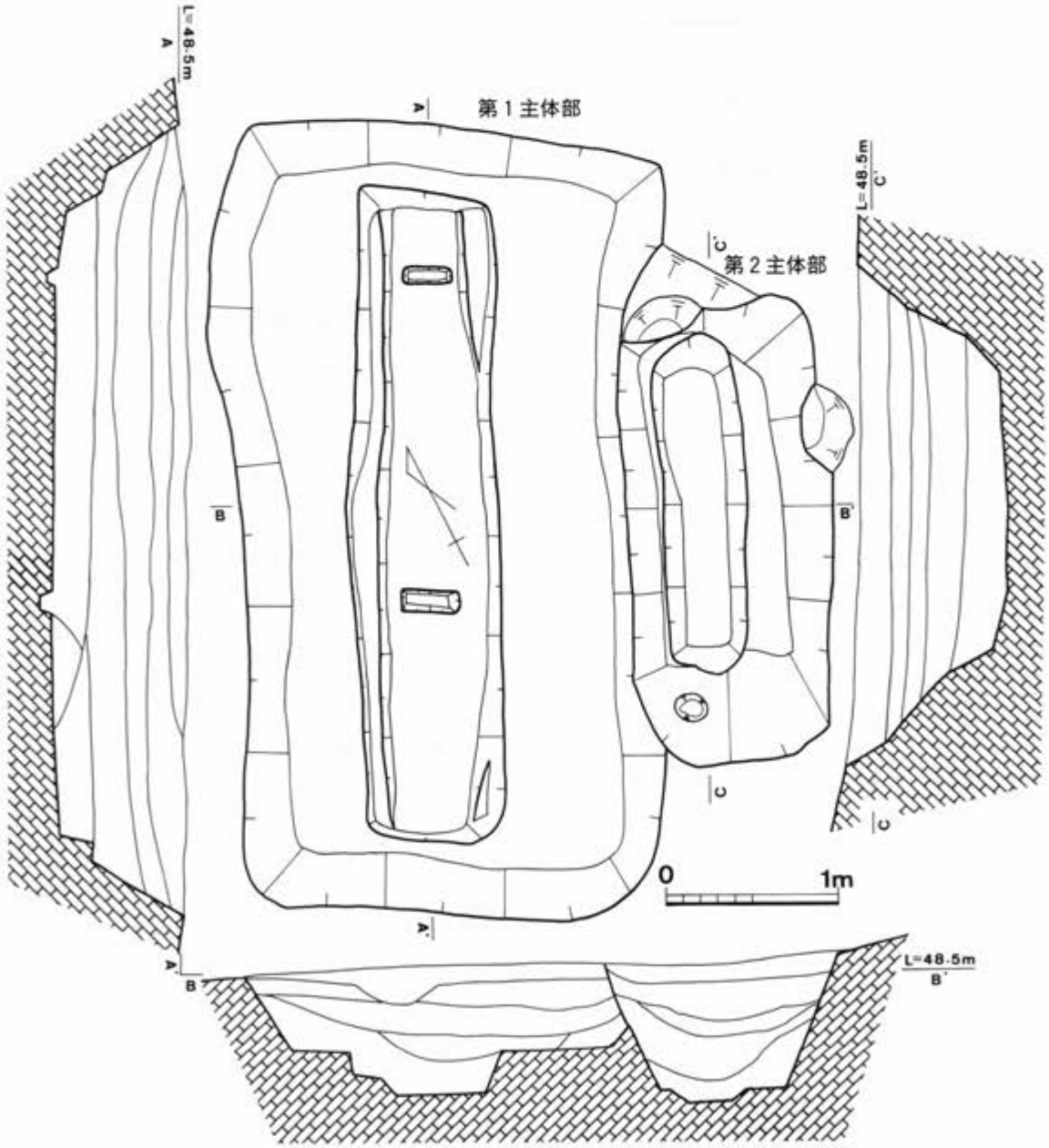


第108図　19号墳地形図

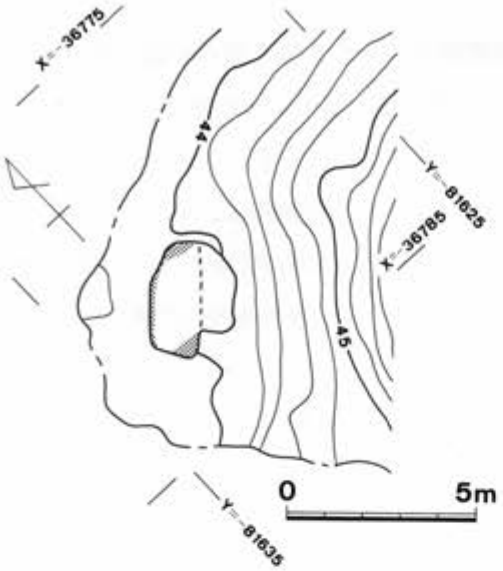
とから、被葬者の頭位は南側と判断している。

**第２主体部**　第１主体部の東側にあり、第１主体部掘形の東側上端を切って設けられている。墓壙掘形は、いわゆる二段墓壙である。墓壙掘形は、隅丸長方形のような形態を呈し、全長約2.8m×幅約1.2m×深さ約0.8mを測る。なお、墓壙の深さは、ほぼ第１主体部と同じである。墓壙底にはやや西側に片寄って木棺埋納壙が穿たれている。木棺埋納壙は、全長約2.0m×幅約0.5m×深さ約0.1mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から東に約24°振る。木棺埋納壙の形状から、舟形木棺の使用が推測できる。棺底部は、北側が高いことから被葬者の頭位は北側と判断する。

**②出土遺物**　古墳平坦面・斜面・主体部とも遺物の出土はみられない。




第109図　19号墳第１・第２主体部実測図

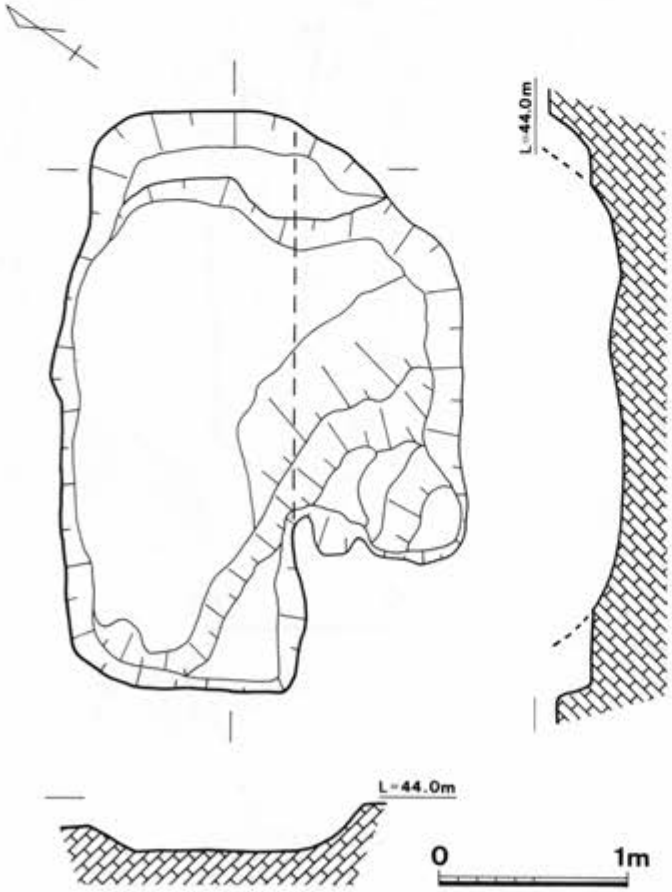


第110図　20号墳地形図

(13)20号墳(第110図)

支尾根先端に位置する階段状古墳である。16号墳から20号墳まで連続して古墳が築かれてきた支尾根筋は、20号墳北西部を境として急激に下降する。古墳として削り出された平坦面は半月状を呈し、基部の長さは約7.0m×短径約5.0mを測る。平坦面は標高約44m付近にあり、中央部から木棺直葬の主体部1基を検出した。主体部の主軸方位は尾根筋に直交する。

①**埋葬施設**(第111図)　平坦面中央から木棺直葬の主体部を1基検出した。主体部は、大きな樹木の根によって中央部が大きく壊されていた。主体部は、墓壙の周縁部分がかろうじて遺存していたにすぎない。墓壙は単純墓壙であり、全長約3.1m×幅約1.3m×深さ約0.25mを測る。墓壙の形状から、箱形木棺が使用されたと判断する。墓壙の主軸方位は、北から東に約57°振る。副葬品はみられない。



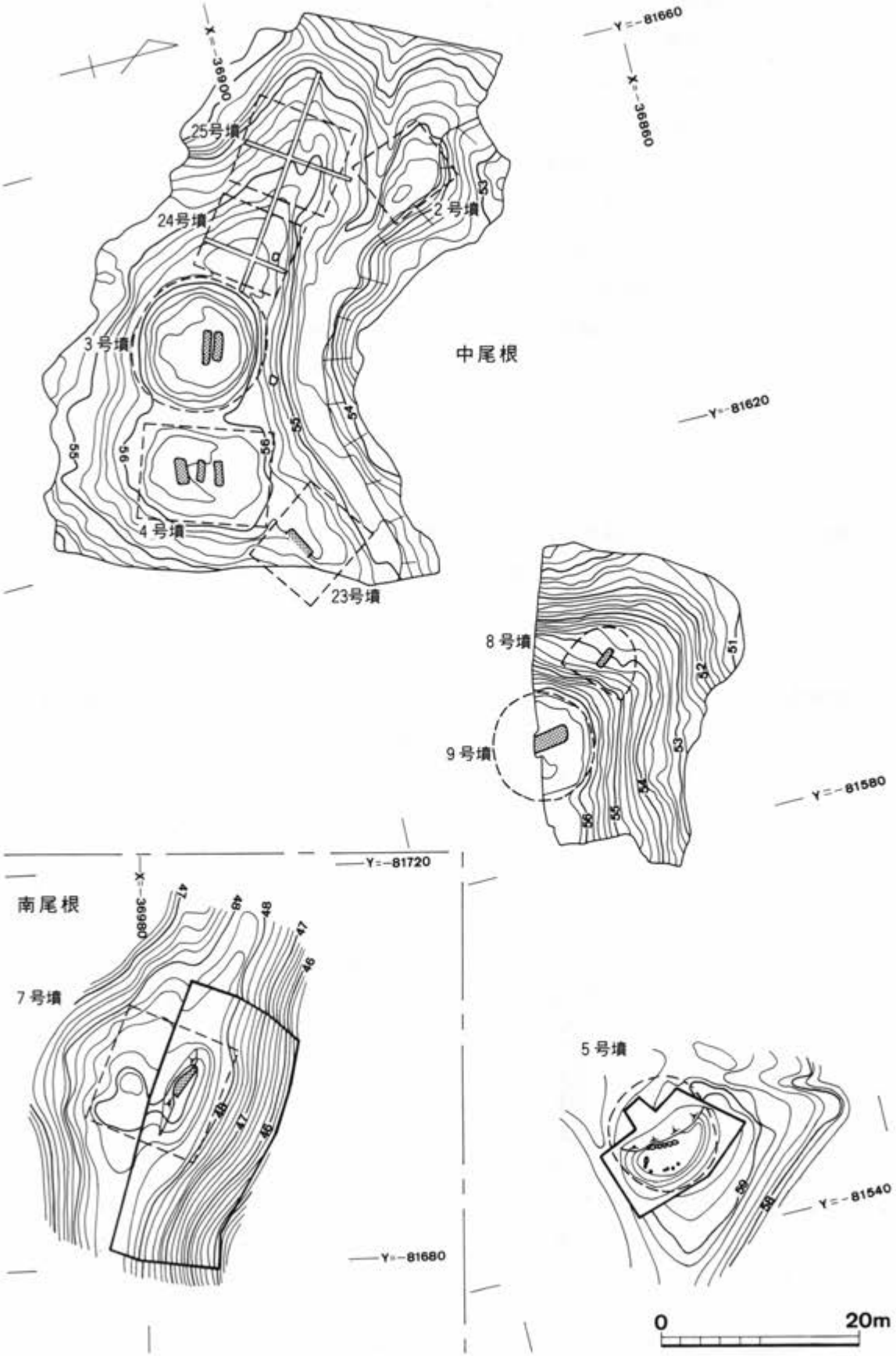
第111図　20号墳主体部実測図

②**出土遺物**　古墳平坦面・斜面・埋葬施設とも、遺物の出土はみられない。

(竹原一彦)

### 3．中尾根の調査

中尾根(第112図)は、奈具岡南古墳群の中央部に位置する低丘陵で、やや弓なりに西方に派生する。また、主尾根を介して続く北尾根近くには小さな支尾根筋も存在している。丘陵尾根筋上には、その地形などから4～5基の古墳が存在すると考えられ、調査を行った。その結果、埋葬施設を検出した明確な古墳としては、3・4・23号墳の3基を確認した。尾根筋上は、後世に削平を受けているため、23号墳の墳丘と4号墳の墳頂部が半壊状態であった。その




第112図　奈具岡南古墳群地形測量図(2)

他、２・24・25号墳については、墳丘は存在したが埋葬施設はすでに失われていた。また、北側に位置する急峻な支尾根上には、８号墳・９号墳の２基の古墳が築かれている。

２号墳は、南側は後世の林道によって明確でないが、北側が円形にめぐることから、径８ｍの古墳であった可能性が高い。24・25号墳は、３号墳から北西に連なる古墳と思われたが、主体部は現存しなかった。しかし、両古墳間には区画溝と思われる浅く掘られたくびれ部が存在していたことから、２基とも古墳であった可能性が高いと考える。区画溝の規模は幅約１ｍ・長さ約10ｍを測り、24号墳は一辺9.0ｍ前後、25号墳は一辺10ｍ前後の規模であったと推定する。

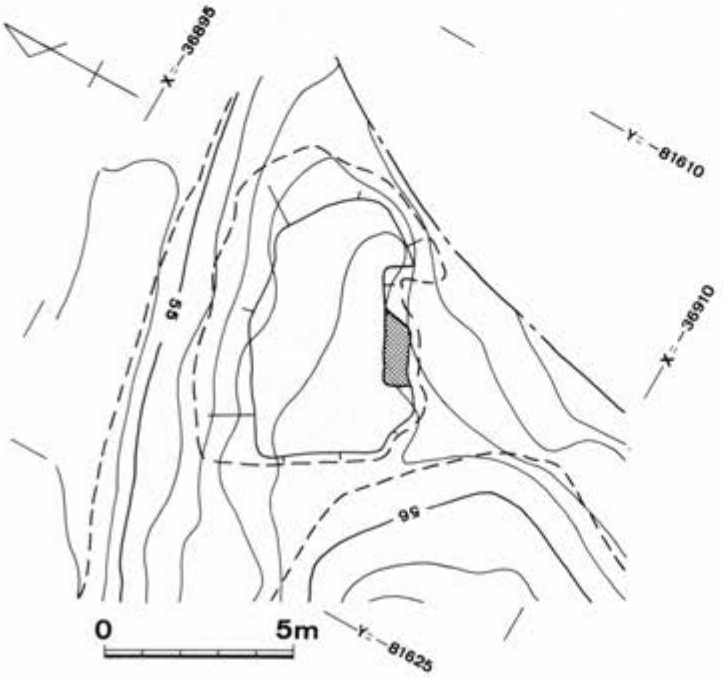
この丘陵先端部には一辺20ｍ×16ｍを測る１号墳が位置し、弥栄町教育委員会の調査の結果、主体部３基が確認されている。副葬品としては鉄剣・鉄斧・鏃先などの共伴遺物が出土し、５世紀前半の築造と考えられている。

以下、主体部を検出した３・４・23・８・９号墳について記す。

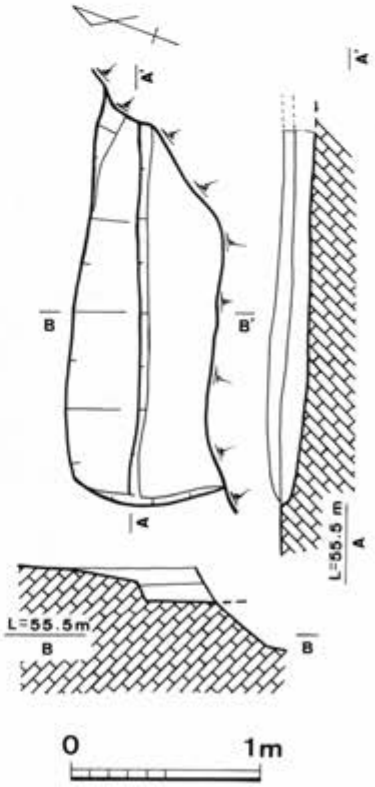
(1)**23号墳**(第113図)

①**墳丘**　中尾根筋とする丘陵基部に築かれた古墳である。後世の削平によってその墳形は定かではないが、測量図から見る限り、方墳であったと考える。確認した古墳の規模は、短辺約６ｍ・長辺約8.5ｍ・高さ約0.8ｍを測る。主体部は林道によって半壊状態で、１基確認した。主体部を中心に反転すると、一辺約10ｍの方墳であったと推定される。

②**埋葬施設**(第114図)　地山を掘り込んだ二段墓壙であった。主体部の南半分と東側が林道によって削平されていたため、規模は不明である。墓壙の確認規模は、長さ約2.2ｍ・幅約8.5ｍ・深さ約0.1ｍであった。主体




第113図　23号墳地形図




第114図　23号墳主体部実測図

部の主軸方向は、北から東に約68°振る。棺痕跡の検出には至らなかった。土坑床面の傾斜角度から、西向きに埋葬されたと思われる。

**③出土遺物**　主体部内から遺物は出土せず、時期は不明である。

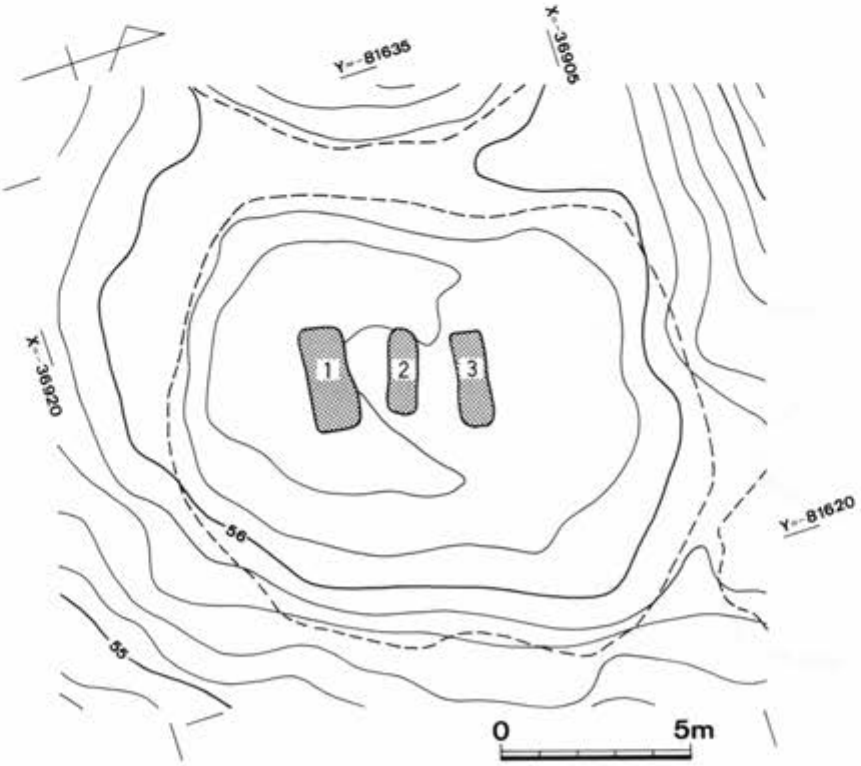
(2) **4号墳**(第115図)

**①墳丘**　4号墳は、西には3号墳と、南西には23号墳と隣接する古墳である。墳頂部がかなり削平されていたため、非常に残りの悪い主体部を3基確認している。主体部は平行に築かれていた。墳丘を断ち割った結果、古墳は盛り土されていることがわかり、主体部の遺存状況を考えると、築造時にはかなりの盛り土によって築かれていたと考えられた。調査時には、盛り土の一部が墳丘南側に流出していた状況がうかがえた。古墳は南北方向に長く、長辺約14m・短辺約12m・高さ約1mを測る。

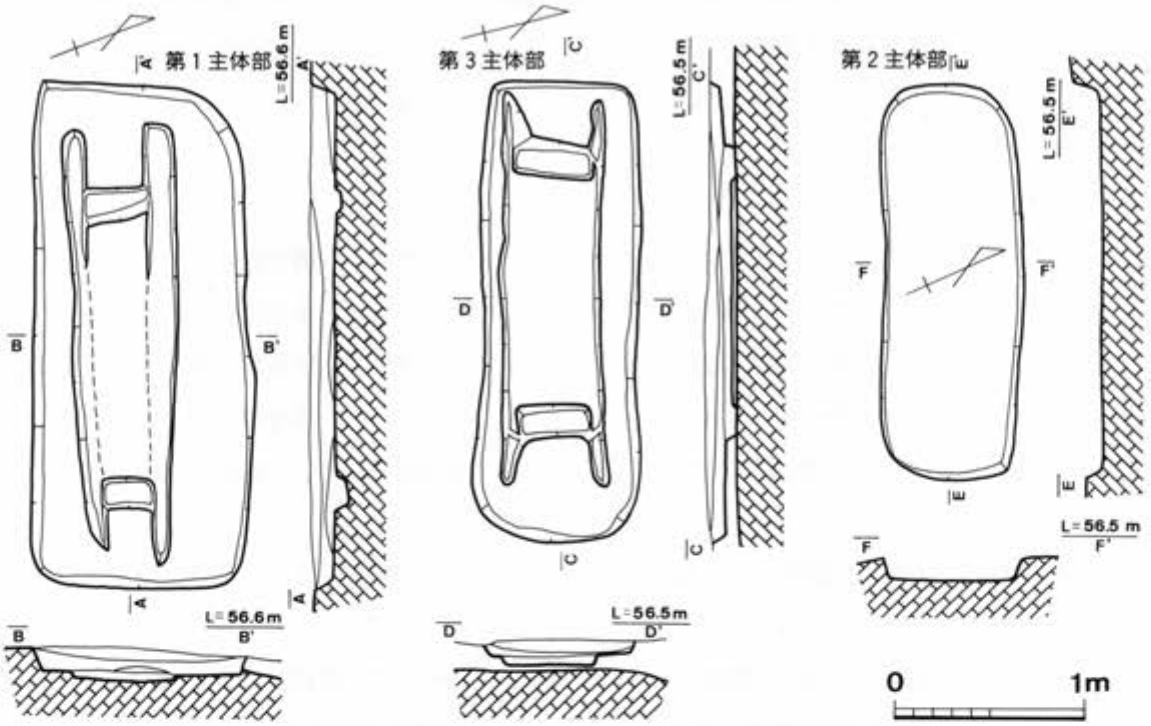
**②埋葬施設**(第116図)　墳頂部で3基の主体部を検出し、南側から第1・第2・第3主体部と呼称する。

**第1主体部**　墓壙は、地山(一部盛り土)を掘り込んだ素掘りで、長辺約2.7m・短辺約1.2m・深さ約0.15mを測る。墓壙中央で「H」形の組合式木棺の痕跡が確認できた。主軸は、北から西に約72°振る。木棺規模は、長さ約2.2m・小口部幅約0.4mを測る。棺内及び墓壙内から遺物は出土しなかった。

**第2主体部**　非常に残りが悪く、地山を掘り込んだ墓壙を検出した。規模は、長辺約2.1m・




第115図　4号墳地形図

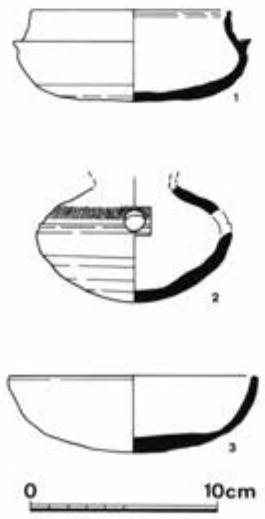



第116図　4号墳第1～3主体部実測図

短辺約0.65m・深さ約0.15mを測る。墓壙の主軸方位は、北から西に約76°振る。棺痕跡は確認できなかった。遺物は、出土していない。

**第3主体部**　墓壙は、盛り土を掘り込んだ二段墓壙で、長辺約2.4m・短辺約0.8m・深さ約0.15mを測る。墓壙中央で「H」形に組み合わせた木棺痕跡が確認できた。主軸は、北に対して西へ約76°振る。木棺規模は、長さ約2m・小口部幅約0.4mを測る。棺内及び墓壙内から遺物は出土しなかった。

**②出土遺物**（第117図）　主体部内からは遺物は出土しなかったものの、墳丘の一部が流出したと考えられる墳丘南側から、須恵器杯身1点・土師器杯と、3号墳間の区画溝から須恵器甕1点が出土した。




第117図　3・4号墳間溝出土遺物実測図

須恵器杯身（1）は、体部が弧状で、後円部には受け部を伴う。口縁端部内側には1条の凹線がめぐる。底部外面はヘラケズリを施す。器形からTK10併行期のものと思われる。須恵器甕（2）は、底部はやや尖り、口縁部は欠損していた。体部上半部には波状文を施し、底部外面はヘラケズリしていた。その器形からTK10併行期に該当すると思われる。土師器杯（3）は浅手で、口縁端部は平坦である。器壁はかなり磨滅していた。

これら少量の遺物から、4号墳は6世紀中頃に築造されたと考える。

(3) **３号墳**(第118図)

３号墳は、４号墳の西隣りにあり、さらに西には24号墳がある。この尾根の古墳群は、方墳が主体であるのに対して、３号墳のみが円墳である。

①**墳丘**　径約13.5m・高さ約1.3mを測る円墳である。墳丘は盛り土で築かれており、墳頂部は後世に削平を受けていた。

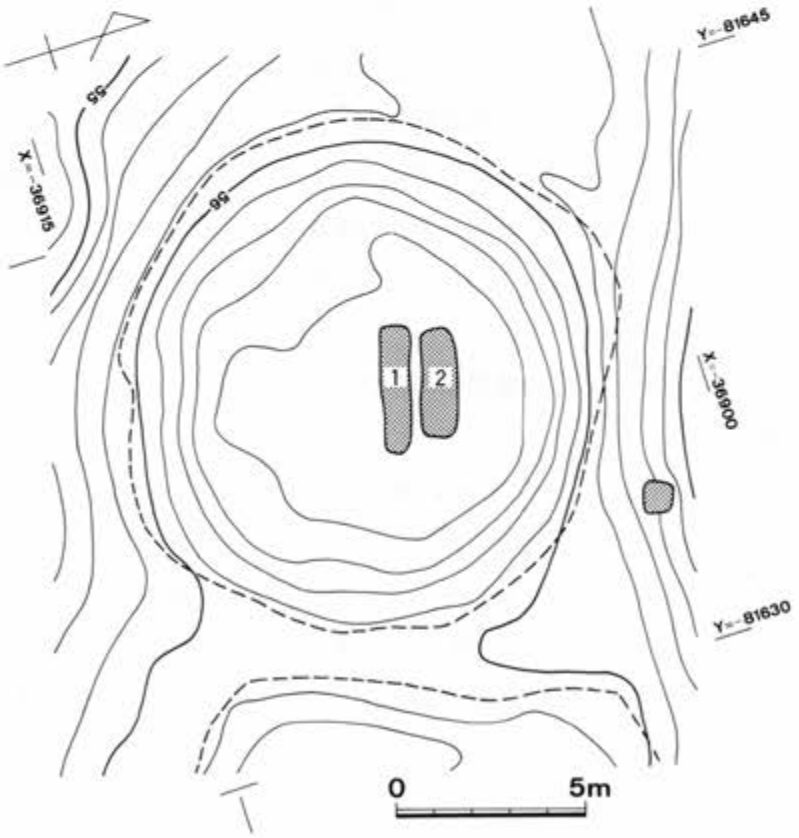
②**埋葬施設**(第119図)　主体部は、墳頂部北半部の中央とやや北寄りで、平行した形で２基検出している。墳頂部中央寄りの主体部を第１主体部と呼称し、北寄りの主体部を第２主体部と呼称した。

**第１主体部**　盛り土を掘り込んだ素掘りの墓壙で、長辺約3.35m・短辺約0.8m・深さ約1.7mを測る。主軸方位は、北から西に約68°振る。墓壙内からは、鉄鏃24点(第121図１～24)・鉄刀１点(第121図25)・刀子１点(第121図29)・鉇１点(第121図28)・鎌１点(第121図30)・鑿状工具(第121図27)などの鉄製品が出土した。土器の副葬品はなかった。

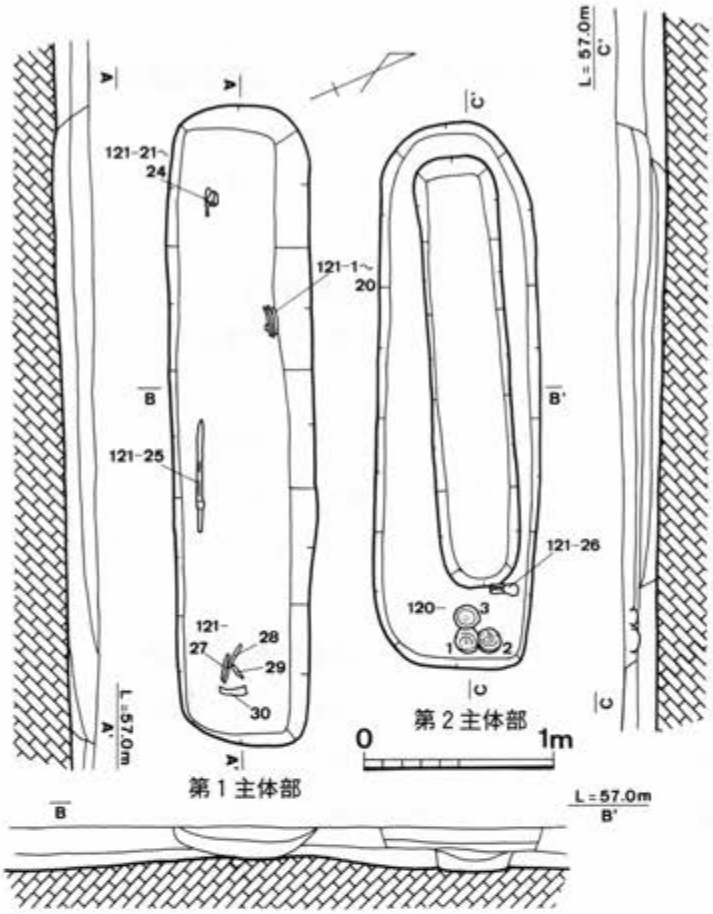
**第２主体部**　第１主体部の北側に隣接する形で検出した木棺直葬墓である。墓壙は、盛り土を掘り込んだ二段墓壙で、長辺約2.9m・短辺約0.9m・深さ約0.23mを測る。下段の規模は、長辺約2.3m・短辺約0.4mを測り、主軸方位は北に対して西に約73°振っている。棺内には遺物はなく、棺東側の短側板の付近で、鉄斧１点(第121図26)、須恵器杯蓋１点(第120図１)・杯身２点(第120図２・３)が出土している。埋葬時期は、墓壙の切り合い関係がないため明らかではないものの、墓壙内埋土の土色などから、第１主体部とほぼ同じ時期であったと考える。

③**出土遺物**(第120・121図)　第１主体部からは、鉄鏃24点・鉄刀１点・刀子１点・鉇１点・鎌１点・鑿状工具１点が、第２主体部からは須恵器杯身２点・杯蓋１点・袋状鉄斧１点がそれぞれ出土した。

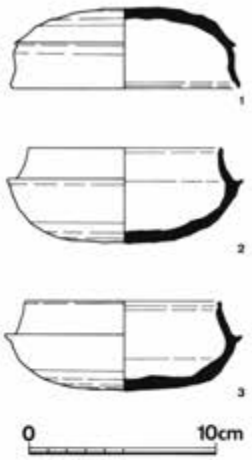
**須恵器杯身**(第120図２・３)　体部は弧状で、口縁部に受け部を伴う。底部外面はヘラケズリを施す。器形の特徴から、




第118図　３号墳地形図




第119図　3号墳第1・第2主体部実測図




第120図　3号墳主体部
出土遺物実測図(1)

TK10併行期のものと考えた。この土器をもって、3号墳は6世紀中頃の古墳であると考える。

**鉄製品**(第121図)　鉄鏃は、第1主体部から出土しているが、墓壙西端からは、21～24の平根式鉄鏃3点・腸抉柳葉形鉄鏃1点が出土しており、また1～20の長茎の鉄鏃は墓壙北側からまとまって出土した。鉄鏃1～20は、ほぼ全長14～17cm・鏃身長3cmを測る。平根式鉄鏃(21・23)は、鏃身部が鉄剣状をなしなだらかであり、腸抉端は下方に尖る。また、大きく外下方に尖る腸抉を有した鉄鏃(22)もある。24は、平面腸抉柳葉形・断面平造りの鏃身を持つ。

鉄刀(25)は、全長57cm・刃長42cm・刃幅2cmを測る。刃部に、部分的に木質が残っており、鞘に入って埋葬されていた。

袋状鉄斧(26)は、この鉄製品のみが第2主体部から出土した。全長14cm・刃幅6cm・厚さ2cmを測る。

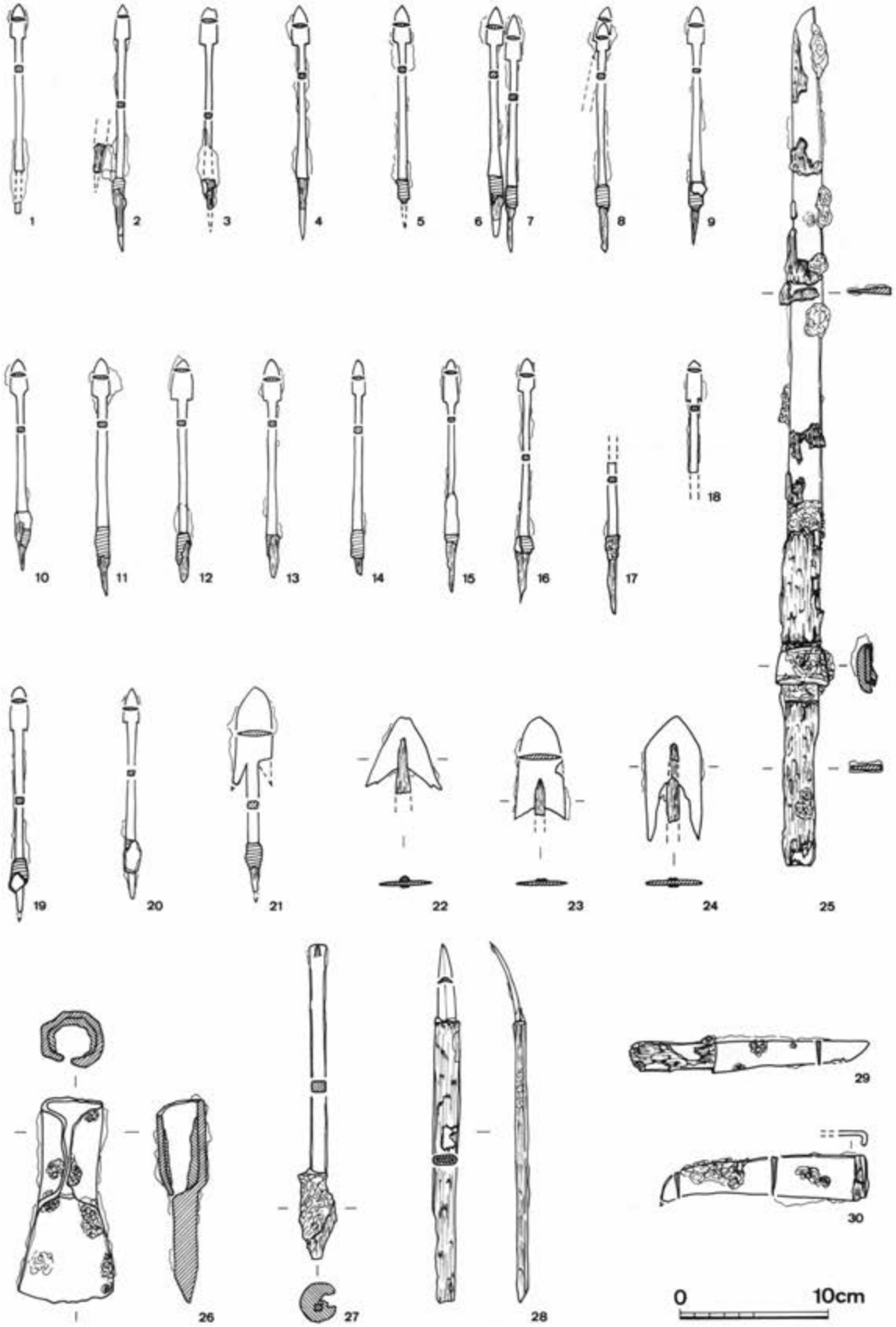
鑿状工具(27)は、全長21cm・刃幅1.2cm・茎部は14cmを測り、断面方形であった。柄部は円形を呈し、木質が厚く巻かれていた。

鉋(28)は、全長24cm・刃長5cmで、平坦な柄が装着されている。

刀子(29)は、全長17cmを測り、刃と茎からなる。刃長は10cmであった。

鎌(30)は、曲刃鎌で、刃部に対し90°の折り返しでもって柄に装着されていた。全長14cm・刃幅2.2cmを測る。刃先を見る限り、よく使用されたものと思われる。

(岡崎研一)



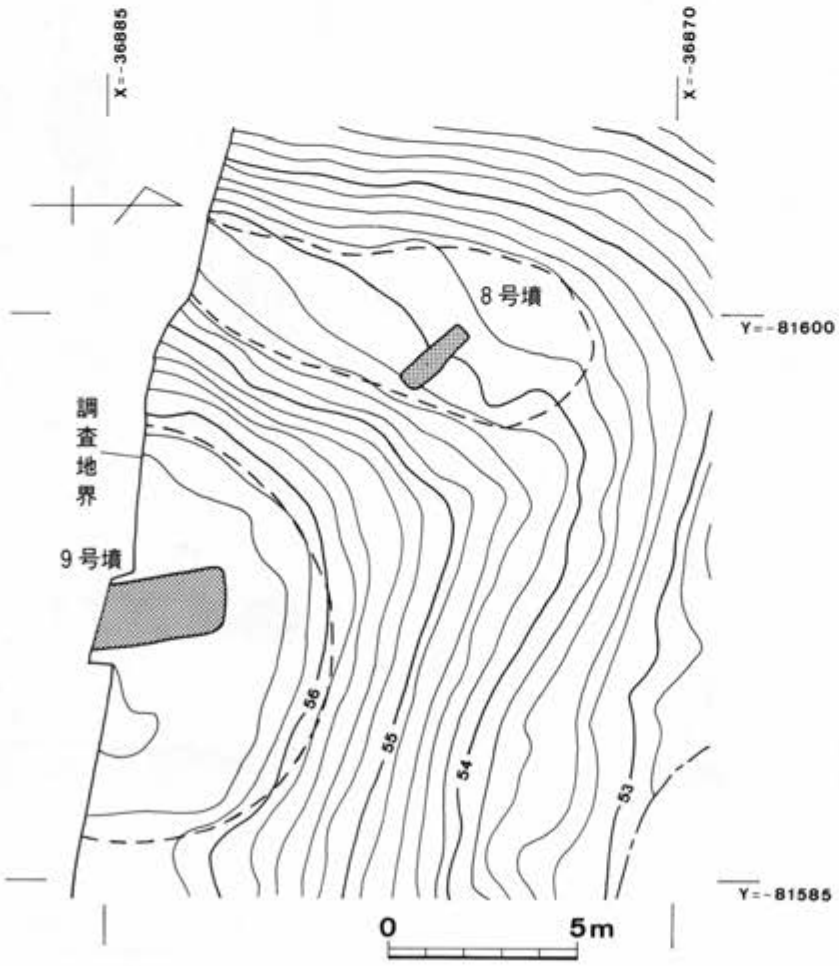

第121図　3号墳主体部出土遺物実測図(2)

(4) 9号墳(第122図)

尾根の最高所に位置する古墳である。墳頂部の標高は約57m付近にある。墳形は円墳である。同じ丘陵稜線上では、北東約40m離れて5号墳、南西に約20m離れて23号墳がそれぞれ位置している。農地造成界が古墳の中央部を横断することから、今回の調査は造成範囲となる古墳北半部分が対象となった。

①**墳丘**　墳丘は、地山削り出しと盛り土によって円形の墳丘を整えている。墳丘は、直径約11.0m×墳丘高約0.6mの規模を測る。墳丘の外周部に溝などの施設は認められない。

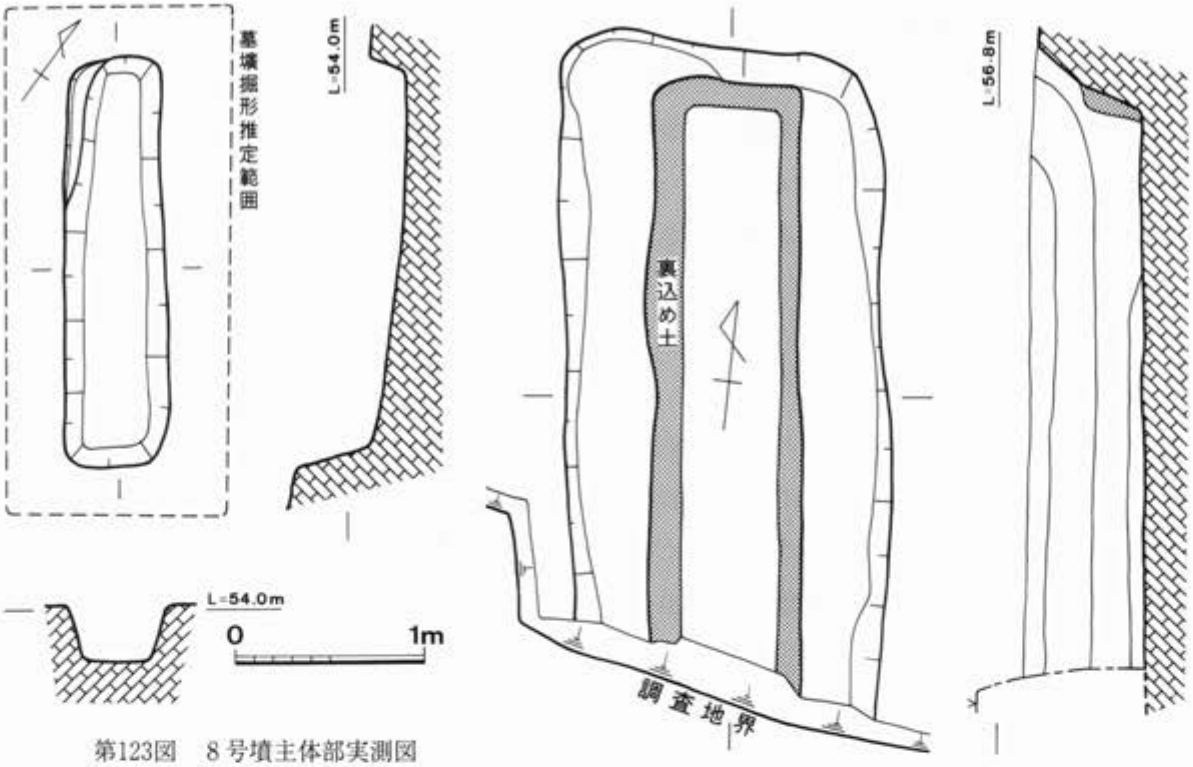
②**埋葬施設**(第124図)　墳頂部中央から木棺直葬の主体部1基を検出した。主体部は、南端部が調査範囲外に位置することから、全容を明らかにはしていない。墓壙掘形は二段墓壙である。墓壙平面形は長方形を呈する。墓壙規模は、検出長約3.7m×幅約1.75m×深さ約0.3mを測る。墓壙底の中央に木棺埋納壙が穿たれている。墓壙底の平坦面は、木棺埋納壙の両横に認められる。また、墓壙底の平坦面は水平でなく、中央の木棺埋納壙に向かってゆるやかに下がる傾斜が認められる。木棺埋納壙は、検出長約3.2m×幅約0.8m×深さ約0.3mを測る。埋納壙内の木棺痕跡から、箱形木棺の使用が明らかになった。木棺の主軸方位は、北から西に約7°振る。棺底面は、北側がやや高いことから、被葬者の頭位は北であったと推測する。副葬品はみられない。



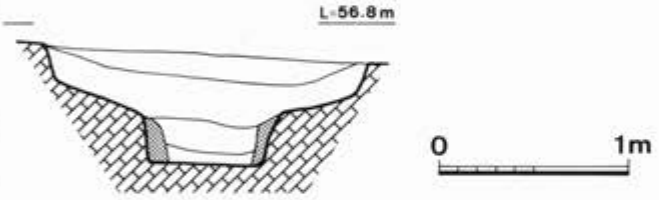

第122図　8・9号墳地形図

調査対象範囲内ぎりぎりまで調査したが、主体部の南部は調査地外に及んでいることが判明した。主体部は、大部分の調査を終え、副葬品の出土もないことから、調査地外に残る主体部南端部について、それ以上の調査を実施していない。

③**出土遺物**(第125図)　主体部に伴う遺物の出土はみていないが、墳丘部分の調査で土師器1点の出土を



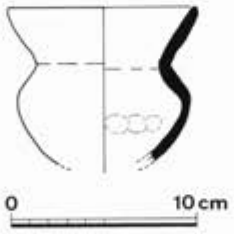

第123図　8号墳主体部実測図




第124図　9号墳主体部実測図

みている。図化した土師器は小型丸底壺であり、古墳北東斜面部から出土したものである。壺は、胴部径に対し口径が大きく、口径は約10.1cmを測る。体部は丸みが強いが、やや肩が張っている。風化が進行しているため、器表面の調整は不明である。体部内面に指頭圧痕がみられる。

墳丘部から出土した土器は、葬送儀礼に伴って使用されたと推測される。この土器の年代観によって、9号墳は4世紀後半の築造と判断してよかろう。




第125図　9号墳出土遺物実測図

(5) **8号墳**(第122図)

北尾根と中尾根の境付近、西に向かってのびる小規模で急峻な尾根筋上に築かれた階段状古墳である。尾根の最高所には9号墳が存在し、8号墳はその下段に位置する。古墳の平坦面は、後世に大きく削平を受けており、現況は往時の姿を止めていない。後世の削平面は、8号墳から23号墳方向にほぼ水平にのびている。現時点での平坦面の標高は約54m付近に位置する。古墳の平坦面は半円形と推測され、規模は5m前後と判断する。平坦面の南東隅から木棺直葬の主体部1基を検出した。主体部の主軸方位は、尾根筋とほぼ同一である。

①**埋葬施設**(第123図)　検出した主体部は1基であり、木棺埋納壙のみを検出した。墓壙自体

は、すでに後世の削平で失われている。他の古墳の調査例から、墓壙掘形は二段墓壙であったとみている。木棺埋納壙は、全長約2.15m×幅約0.55m×深さ約0.3mを測る。木棺埋納壙の主軸方位は、北から西に約38°振る。木棺埋納壙の形状から、箱形木棺が使用されたと判断する。棺床面は強い傾斜をもっている。尾根の高所側となる南小口側が北小口に対して約20cm高いことから、被葬者の頭位は南と判断する。

②**出土遺物**　平坦面・斜面・埋葬施設とも遺物の出土はみられない。

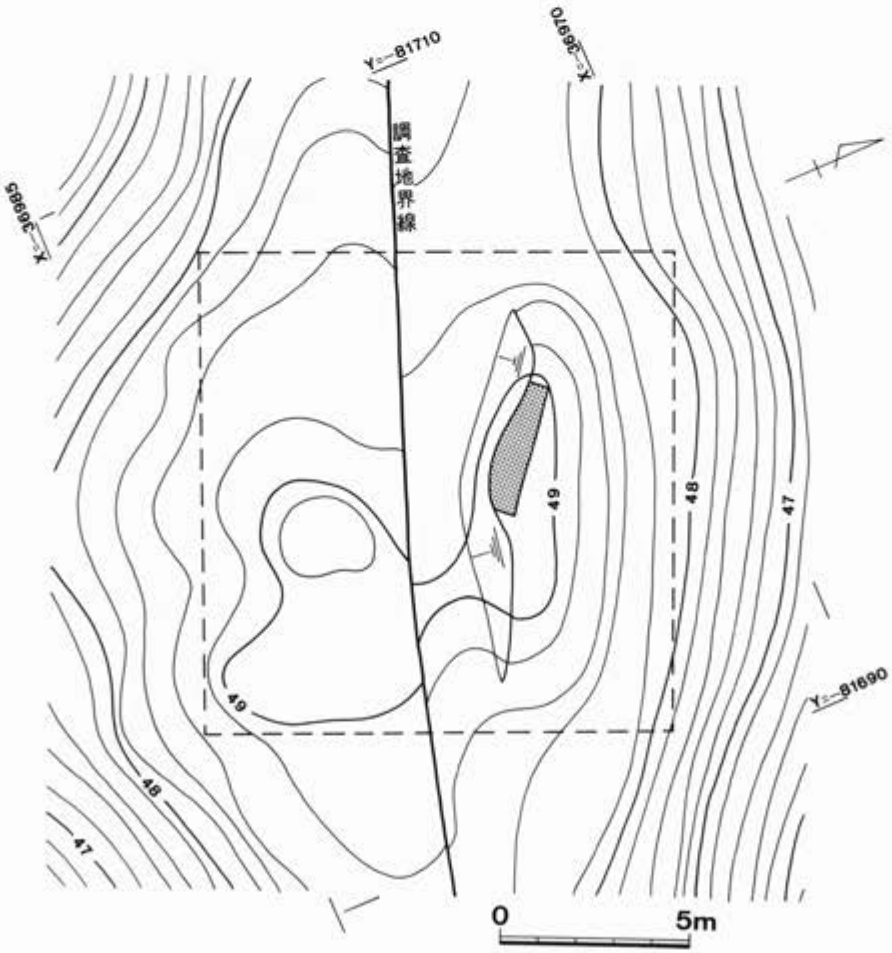
（竹原一彦）

### 4．南尾根の調査

南尾根（第112図）は、中尾根の4号墳付近から南西方向に派生する尾根である。この南尾根には、当初隣接する2基の古墳（6・7号墳）の分布が周知されていた。調査の結果、尾根先端側に位置する6号墳は存在せず、6号墳とした古墳状隆起は後世の林道開削に伴う土盛りの可能性が高い。7号墳については、埋葬施設を検出したことから古墳と判明した。

**(1) 7号墳**（第126図）

尾根稜線上にある単独で築かれた古墳であり、墳頂部の標高は49m付近に位置する。中尾根の

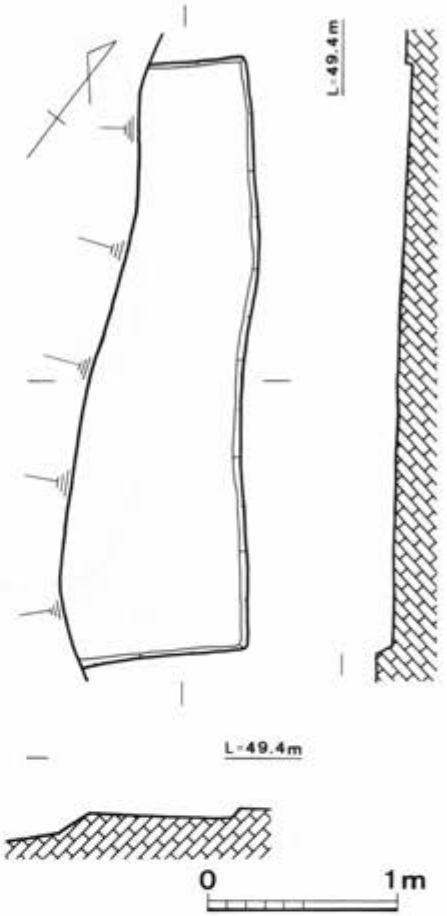



第126図　7号墳地形図

４号墳とは約100m離れた位置関係にある。尾根稜線上には現在も利用されている林道が通り、７号墳の中央部も大きくその影響を受け墳丘が南北に分断されている。農地造成界が古墳の中央を東西に走り、調査対象範囲は古墳の北半部分となった。

**①墳丘**　林道などによって、墳丘は築造当時の姿を止めていない。墳丘は、地山削り出しと盛り土によって整えられていたと判断する。調査地の現状で見る限り、等高線のめぐり方から方形墳の可能性が高く、一辺約12mの規模と推測する。調査対象地外に残る墳丘からみて、墳丘高は１mを越えていたと判断する。

**②埋葬施設**(第127図)　墳頂部の中央からやや北に片寄って、木棺直葬の主体部１基を検出した。墓壙は上部が大きく削平されているとともに、南西側は林道で大規模に壊されている。検出分でみる限り、墓壙掘形は、全長約3.1m×検出幅約1.0m×深さ約5.0cmを測る。墓壙自体は、長方形の単純墓壙であり、箱形木棺が使用されたと推測する。墓壙底は、南東小口側が高いことから、被葬者の頭位は南側と判断する。墓壙掘形の主軸方位は、北から西に約40°振る。他の古墳の調査例から、調査対象地外にも埋葬施設が存在する可能性が残る。



第127図　７号墳主体部実測図

**③出土遺物**　墳丘・主体部から、遺物の出土はみられない。

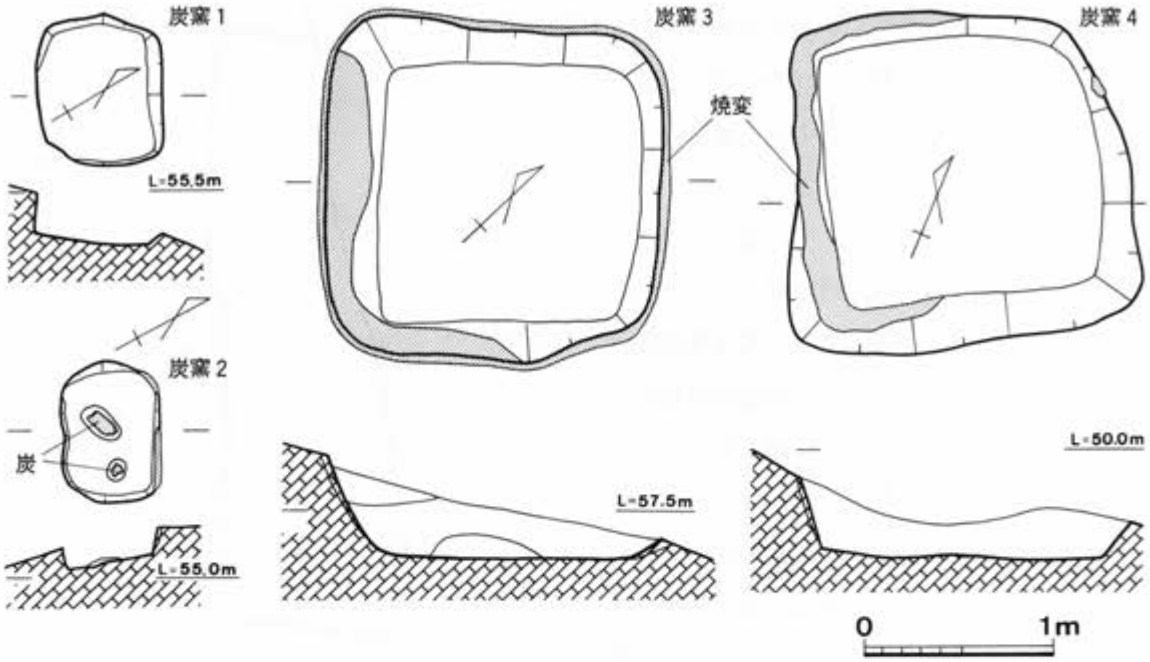
(橋本　稔・竹原一彦)

**(2)その他の遺構**(第128図)

今回の調査では、古墳時代に属する遺構のほか、時期不明ながら炭窯遺構を検出した。炭窯は都合４基あり、近接することなく、それぞれが単独で存在する。いずれも、古墳の墳丘部分の調査で検出した。炭窯は、その規模によって大小に大別できる。１mを越える大型の炭窯は北尾根に、１m未満の小型の炭窯は中尾根に分布している。

**炭窯１**　３号墳の北側墳丘斜面で検出した小型の炭窯である。ほぼ方形を呈する窯体は地山を掘り込んで築いている。窯体の規模は、一辺0.7～0.8mであり、深さは地山面から約0.2mを測る。底面はほぼ水平である。壁面・底面に顕著な被熱・焼土面はみられないが、細かな炭化材と薄い灰層が堆積していた。

**炭窯２**　24号墳の北側墳丘斜面で検出した小型の炭窯である。窯体は、地山を掘り込んで築かれている。平面形は、やや丸みのある長方形を呈する。窯体は、長辺約0.75m×短辺約0.5m、




第128図　炭窯実測図

地山面からの深さは約15cmを測る。窯壁の一部に橙褐色の被熱変色が認められた。底面は平坦であるが、斜面側に向かってやや下がる傾斜をもっている。底面上には灰層が存在したほか、長さ20cmほどの炭化材(炭)が少量出土した。

**炭窯3**　12号墳の北側斜面で検出した大型の炭窯である。窯体は、地山を掘り込んで築かれている。窯体の平面形はほぼ正方形に近い。窯体の規模は、一辺約1.9mを測る。深さは、最もよく残る地山上面から約0.5mを測る。底面は、平坦で水平である。強い火力を物語る明橙褐色の焼土面が南壁の2面に広がり、被熱による土色変化は全周に認められ、被熱は窯体内部(3～5cm)にまで及んでいる。底面には灰の堆積が厚く(2cm前後)認められた。

**炭窯4**　14号墳の北側斜面で検出した大型の炭窯である。規模・形状は、炭窯3とほぼ同一である。窯壁は、西半部分に焼土面が広がるが、窯体内の被熱による土色変化は一部にとどまる。

(竹原一彦)

## 5．まとめ

奈具岡南古墳群は、今回の調査によって総数23基で構成される古墳群であることが判明した。古墳は、4世紀後半から6世紀中頃までの間次々に古墳が築造され、一時中断した後、7世紀中葉に比定される5号墳の築造をもって終焉を迎える。

今回の調査では、現時点で確認されている奈具岡南古墳群のすべての調査を終えたことになる。そのことを踏まえて古墳群をみていくと、いくつかの特質が見いだされる。以下、その特質について述べてみたい。

**古墳群**　奈具岡南古墳群の古墳をみると、特に傑出した古墳は存在せず、それらはいずれも小

規模で極めて等質的であることが知られる。北尾根・中尾根・南尾根に分かれてはいるが、多くの古墳は北尾根・中尾根に集中し、尾根ごとの古墳は近接して築かれている。

古墳群の時期に関しては、すべての古墳に土器の副葬・供献がみられないことから、個々の古墳に年代を与えることが困難である。北尾根に展開する古墳では、古墳時代終末期の５号墳を除き、いずれも古墳時代前期後半～中期中頃(４世紀後半～５世紀前半)にかけて築造されたものである。土器によって築造時期が押さえられた古墳として、11号墳・14～16号墳・18号墳・22号墳の６基が挙げられる。中尾根では、北尾根に近い９号墳から４世紀後半～５世紀前半の丸底壺の出土をみている。また、３号墳・４号墳では陶邑ＴＫ10併行期の須恵器の出土から、６世紀中葉の築造が明らかである。南尾根の７号墳は、主体部の規模・形状から後期の築造と判断してよかろう。

奈具岡北古墳群の調査では、弥生時代中期の墳墓と古墳時代前期～中期の古墳の造営が確認されている。このことから、古墳は奈具岡北古墳群を含む丘陵の北部側から築造が開始され、時間経過とともに次第に丘陵南部へと築造場所が変遷していったことがうかがえる。

**埋葬施設**　奈具岡南古墳群では、一墳一葬の古墳はわずかであり、多くの古墳は家族墓の域を出ない一墳多葬(２～４基)の形態をとっている。北尾根に展開する古墳時代前期～中期に属する古墳の埋葬施設は木棺直葬であり、大規模な墓壙(二段墓壙)を地山面に穿ち、箱形・「Ｈ」形・割竹形・舟形などの多彩な木棺の使用、副葬品の内容などは弥生墓と全く変容していない状況がみてとれる。

この地域では古墳時代となっても、それ以前の弥生時代の墓制を強く引き継ぐ傾向にある。弥生時代の方形台状墓(一墓多葬)の系譜を引くものであり、奈具岡南古墳群もその例に違わない。奈具地区では、これまでに12基の弥生墓(中期～後期)が調査され、奈具岡北古墳群の中にも弥生墓３基が含まれている。弥生時代末から古墳時代前期前半にかけて時間的断絶があるが、奈具岡南・奈具岡北古墳群の被葬者は奈具墳墓群の造墓集団と強い繋がりをもった集団とみてよかろう。

埋葬施設では木棺直葬墓でみるかぎり、墓壙形態における画期が中期末～後期前半段階に認められる。古墳時代前期から中期では「死者を深く埋葬する」意識の元で、地山面を大きく掘り下げた大規模な墓壙を穿っている。後期段階の３号・４号墳にみる墓壙は地山を大きく掘り下げることなく、墓壙・木棺とも極めて小型化する。また、一方ではそれまで副葬品に乏しかった棺内に多数・多種の鉄製品が副葬されるようになり、新たに墓壙内に土器の供献が見られるようになる。弥栄町教育委員会調査の奈具岡南１号墳では中間形態的な墓壙をもつ埋葬施設が調査されていることから、１号墳と３・４号墳の築造の間に墓制の変質及び画期が訪れたと判断される。

弥生時代から古墳時代後期まで続いた木棺直葬を主体とした墓制は、後期末段階でその終焉を迎える。畿内系の横穴式石室を構築する５号墳は、終末期古墳と認識されるものである。この時点でもって、在地色の強い墓制は解体していったと判断される。

奈具岡南古墳群の埋葬施設の特質を挙げるならば、鉄器の副葬と頭位に共通性がみられる。前期～中期の古墳では、多くの主体部に遺物の出土がない中にあって、鉄剣と鉇・鑿・刀子などの

工具の副葬が特に目を引く。副葬された３本の鉄剣は抜き身のまま副葬されている。鉇については、鉄器を副葬した９基の主体部のうち、２/３の６基の主体部に計６本の鉇が副葬される。また、うち半数の３本の鉇は、布巻きによる副葬である。

被葬者の頭位については、方墳の軸線(尾根軸線)に直交もしくは併行にとるものが多く、特に直交関係の方位をとるものが優位である。全体的な傾向として、頭位は東西方向に向けるものが多い。古墳の主体部のうち、円墳の13号墳と方墳ながらも軸線に対して斜交関係にある15号墳に、東西方向の頭位を強く意識した配置状況がうかがえる。隣接の奈具岡北古墳群や、竹野川を挟んだ対岸の大田南古墳群・ニゴレ古墳でも東西頭位の埋葬施設の配置が指摘されている。奈具岡南古墳群も尾根軸線よる規制がありながらも、東西方向の埋葬施設の配置意識は変わっていないようにみられる。これは、古墳造営時点で頭位を意識した尾根の選地が行われていた可能性がある。頭位に関しては、丹後半島でも野田川流域では南北軸優位の傾向にあることから、大きくみても水系ごとに個性を持った墓制の存在を示すものであろう。今後の周辺地域での調査の進展によって、地域間・集団間の個性及び関係が次第に明らかにされていくと期待される。

奈具岡南古墳群の被葬者集団は、いずれも等質的で特に傑出したものがみられない。また、一墳多葬の家族墓においてもその等質的な要素に変化はあまり認められない。ただ、15号・18号・19号墳においては、家長とみる大型埋葬施設を古墳の中央部に設け、周囲に小型の埋葬施設を配置する状況がみてとれる。古墳時代前期後半～中期前半段階で家族内の階層制も一部に認められるが、突出した権力集中には至らなかったとみられる。奈具岡北古墳群では、５世紀前半段階で全長約60mの前方後円墳である１号墳が築かれる。１号墳は、墳丘規模・副葬品において奈具岡南・奈具岡北の両古墳群のなかでも格差が大きく、両古墳群の構成者とは出自の異なる人物が葬られたとみることが妥当と思われる。

今回の調査で、奈具岡南古墳群は、古墳群全体の調査を終了し、その実態が明らかになってきたが、それと同時に多くの問題も出てくることとなった。奈具・奈具岡の両遺跡と奈具岡南・奈具岡北の両古墳群との関連など、過去の調査の整理や今後の調査の成果をまって論議しなければいけないが、この地の歴史を明らかにする上で、また貴重なデータが得られたと意義づけられよう。

（竹原一彦）

付表2　古墳一覧表

| 古墳 | 立地 | 形態 | 規模 | 主体部 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 番号 | 墓壙形態・規模 | 棺形態・規模 | 棺方位 | 副葬品 |
| 1 | 丘陵頂 | 方 | 長20.0m<br>短16.0m<br>高0.8m | 第1 | 長方形　長4.7m<br>短1.8m<br>深0.25m | H形　長2.5m<br>短0.5m<br>深0.3m | N72°E | 管玉1<br>鏃先1<br>不明鉄製品1 |
| | | | | 第2 | 長方形　長4.2m<br>短1.7m<br>深0.35m | H形　長2.3m<br>短0.5m<br>深0.2m | N66°E | 鉄剣1<br>鉄斧1 |
| | | | | 第3 | 長方形　長3.2m<br>短1.15m<br>深0.4m | 箱？　長2.1m<br>短0.5m<br>深0.05m | N69°E | |
| 2 | 丘陵頂 | 方 | 長8.0m<br>短7.0m<br>高0.55m | | | | | |
| 3 | 丘陵頂 | 円 | 径13.5m<br>高1.0m | 第1 | 長方形　長3.4m<br>短0.75m<br>深0.2m | 箱形　長3.15m<br>短0.55m | N68°W | 鉄刀1<br>鉄鏃24<br>鉋1<br>刀子1<br>鑿1<br>鎌1 |
| | | | | 第2 | 隅丸長方形　長2.9m<br>短0.85m<br>深0.15m | 割竹　長2.3m<br>短0.4m<br>深0.1m | N73°W | 鉄斧1<br>杯蓋1<br>杯身2 |
| 4 | 丘陵頂 | 方 | 長14.0m<br>短12.0m<br>高0.8m | 第1 | 長方形　長2.65m<br>短0.75m<br>深0.1m | H形　長2.3m<br>短0.55m<br>深0.05m | N72°W | |
| | | | | 第2 | 隅丸長方形　長2.1m<br>短0.7m<br>深0.15m | 箱形？ | N76°W | |
| | | | | 第3 | 長方形　長2.4m<br>短0.9m<br>深0.1m | H形　長2.05m<br>短0.5m<br>深0.05m | N76°W | |
| 5 | 丘陵頂 | 円 | 径7.0m<br>高1.0m | | 横穴式石室 | | N2°W | 杯身2<br>杯蓋1<br>金環1<br>土師器3 |
| 6 | 丘陵頂 | 自然地形 | | | | | | |
| 7 | 丘陵頂 | 方 | 径12.0m<br>高0.6m | | 長方形　長3.1m<br>短（1.0m）<br>深0.05m | 箱形？ | N40°W | |
| 8 | 階段状 | 半円 | 長(5.0m)<br>短4.0m | | 長方形？ | 箱形　長2.15m<br>短0.55m<br>深0.3m | N36°W | |
| 9 | 丘陵頂 | 円 | 径11.0m<br>高0.6m | | 長方形　長（3.7m）<br>短1.7m<br>深0.3m | 箱形　長（3.2m）<br>短0.8m<br>深0.3m | N7°W | |
| 10 | 丘陵頂 | 自然地形 | | | | | | |

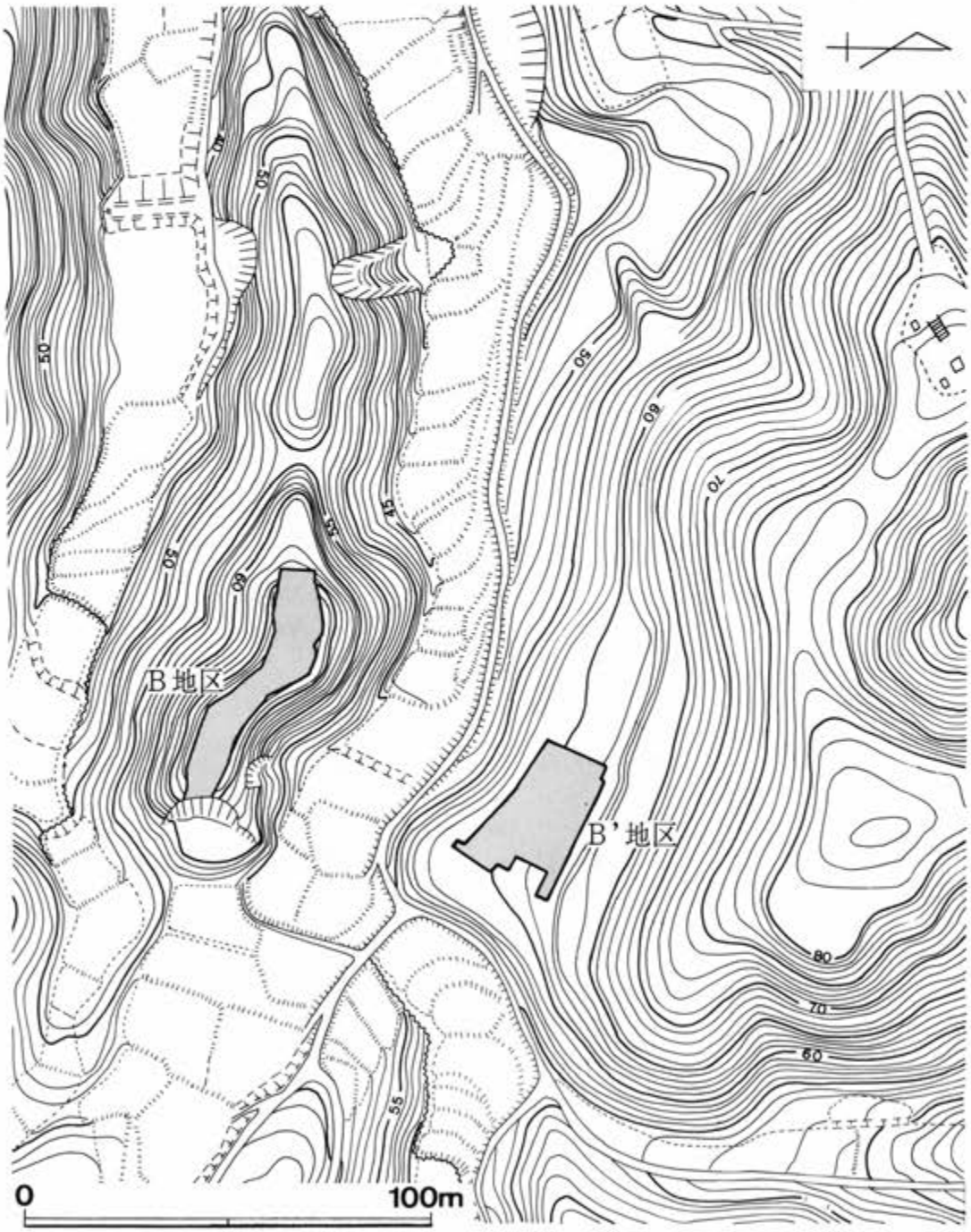
| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 丘陵頂 | 方 | 長14.5m<br>短12.5m<br>高1.0m | | 長方形 | 長7.6m<br>短2.8m<br>深0.3m | 箱形 | 長7.0m<br>短0.8m<br>深0.35m | N77° E | 管玉1 |
| 12 | 丘陵頂 | 方 | 長14.5m<br>短12.5m<br>高1.5m | 第1 | 長方形 | 長4.4m<br>短1.8m<br>深0.65m | 箱形 | 長3.9m<br>短0.7m<br>深0.2m | N53° E | |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長4.4m<br>短1.3m<br>深0.6m | 割竹 | 長3.5m<br>短0.5m<br>深0.14m | N48° E | |
| | | | | 第3 | 長方形 | 長2.2m<br>短1.35m<br>深0.35m | 箱形 | 長1.7m<br>短0.5m<br>深0.35m | N48° E | |
| 13 | 丘陵頂 | 円 | 径14.5～<br>16.5m<br>高1.2m | 第1 | 長方形 | 長3.7m<br>短1.7m<br>深0.9m | H形 | 長3.1m<br>短0.5m<br>深0.2m | N78° E | 刀子1<br>鉇1 |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長3.5m<br>短2.2m<br>深1.3m | 割竹 | 長2.6m<br>短0.5m<br>深0.15m | N77° E | 鉄剣1<br>刀子1<br>鉇1 |
| 14 | 階段状 | 方 | 長7.0m<br>短6.5m | 第1 | 長方形 | 長4.2m<br>短1.2m<br>深0.3m | 箱形 | 長3.5m<br>短0.5m<br>深0.3m | N66° E | |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長3.3m<br>短1.3m<br>深0.5m | H形 | 長2.3m<br>短0.4m<br>深0.1m | N68° E | 鉄剣1 |
| | | | | 第3 | 長方形 | 長2.0m<br>短0.9m<br>深0.5m | 舟形 | 長1.35m<br>短0.35m<br>深0.1m | N60° E | 勾玉3<br>管玉2 |
| 15 | 階段状 | 方 | 長8.0m<br>短7.0m | 第1 | 長方形 | 長5.2m<br>短2.1m<br>深0.5m | H形 | 長4.7m<br>短0.9m<br>深0.3m | N74° W | |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長1.8m<br>短0.85m<br>深0.4m | 舟形 | 長1.4m<br>短0.35m<br>深0.1m | N76° W | |
| | | | | 第3 | 長方形 | 長1.5m<br>短0.8m<br>深0.05m | 箱形 | 長1.4m<br>短0.55m<br>深0.25m | N54° W | |
| 16 | 階段状 | 方？ | 長（7.5m）<br>短7.5m | 第1 | 長方形<br>？ | 長（3.6m）<br>短1.9m<br>深0.55m | 舟形 | 長3.4m<br>短0.6m<br>深0.25m | N6° E | 鉇1 |
| | | | | 第2 | 隅丸長<br>方形 | 長（3.5m）<br>短1.5m<br>深1.0m | H形 | 長2.75m<br>短0.5m<br>深0.2m | N17° E | 刀子1 |
| | | | | 第3 | 長方形 | 長2.3m<br>短1.6m<br>深0.5m | 箱形 | 長1.3m<br>短0.5m<br>深0.2m | N80° W | |
| | | | | 第4 | 長方形<br>？ | 長1.3m<br>短（0.8m）<br>深0.5m | 箱形？ | | N11° W | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 階段状 | 方 | 長12.0m<br>短10.0m | 第1 | 長方形 | 長（4.5m）<br>短1.9m<br>深0.5m | H形 | 長3.6m<br>短0.5m<br>深0.2m | N41° E | 鉇1<br>鑿1 |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長4.4m<br>短1.7m<br>深0.85m | 割竹 | 長4.1m<br>短0.6m<br>深0.2m | N34° E | |
| | | | | 第3 | 隅丸長方形 | 長（2.2m）<br>短（1.3m）<br>深（0.4m） | H形 | 長2.1m<br>短0.45m<br>深0.15m | N42° E | |
| 18 | 階段状 | 方 | 長12.0m<br>短8.0m | 第1 | 長方形 | 長4.1m<br>短2.8m<br>深0.6m | 箱形 | 長3.0m<br>短0.6m<br>深0.3m | N47° E | 鉄剣1<br>鉇1 |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長3.0m<br>短1.5m<br>深0.5m | 割竹 | 長1.9m<br>短0.5m<br>深0.1m | N45° E | 勾玉1<br>管玉1 |
| 19 | 階段状 | 円 | 径8.5m | 第1 | 長方形 | 長4.6m<br>短2.6m<br>深0.5m | H形 | 長3.6m<br>短0.7m<br>深0.3m | N28° E | |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長2.8m<br>短（1.2m）<br>深0.8m | 舟形 | 長2.0m<br>短0.5m<br>深0.1m | N24° E | |
| 20 | 階段状 | 半円 | 長7.0m<br>短5.0m | | 長方形 | 長3.1m<br>短1.3m<br>深0.25m | 箱形？ | | N57° E | |
| 21 | 階段状 | 半円 | 長7.0m<br>短5.0m | | 長方形 | 長2.0m<br>短1.1m<br>深0.35m | 舟形 | 長1.5m<br>短0.45m<br>深0.2m | N25° E | |
| 22 | 丘陵頂 | 方 | 長12.0m<br>短8.0m<br>高0.8m | 第1 | 長方形 | 長4.8m<br>短1.0m<br>深0.5m | H形 | 長4.3m<br>短0.9m<br>深0.4m | N1° E | 管玉1 |
| | | | | 第2 | 長方形 | 長1.7m<br>短0.9m<br>深0.35m | 箱形？ | | N65° W | |
| | | | | 第3 | 楕円形 | 長0.65m<br>短0.45m<br>深0.35m | 壺棺 | | N72° W | |
| 23 | 丘陵頂 | 方？ | 長8.0m<br>短（6.0m）<br>高0.5m | | 長方形？ | 長（2.2m）<br>短（0.75m）<br>深（0.1m） | 箱形？ | | N68° E | |
| 24 | 丘陵頂 | 方 | 長9.0m<br>短8.0m<br>高？ | | | | | | | |
| 25 | 丘陵頂 | 方 | 長10.0m<br>短9.0m<br>高？ | | | | | | | |

## (2) シミズ谷城跡

### 1．はじめに

今回の調査対象地は、竹野郡弥栄町堤小字平野・シンズ・山の神(A・B・B′地区)の3か所である。発掘調査は、A地区が平成8年5月7日から5月14日、B地区は5月13日から9月6日、



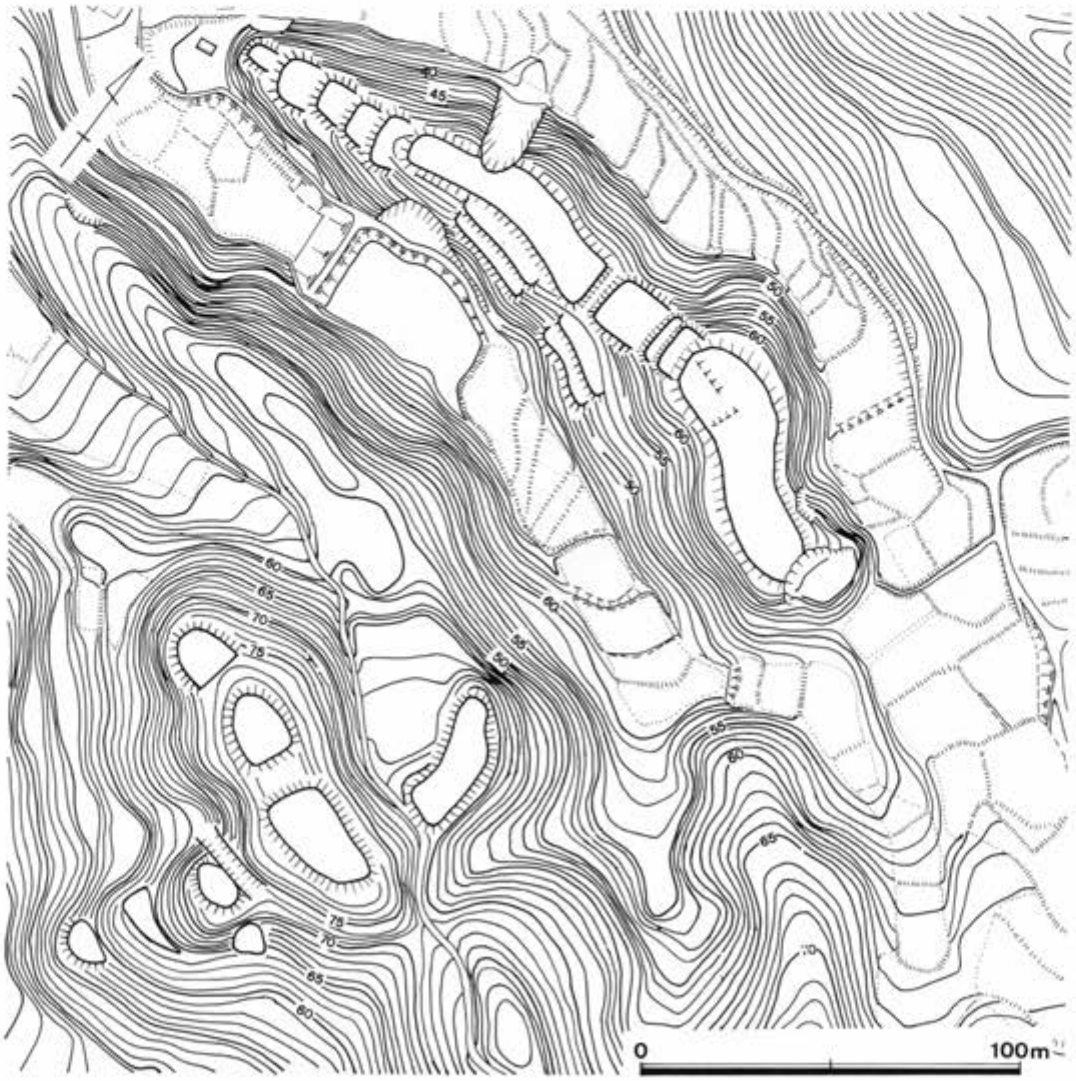

第129図　調査地位置図

B′地区は7月25日から8月9日まで実施した。3地区合わせての調査面積は約1,700㎡である。現地調査は、調査第2課調査第1係調査員柴　暁彦が担当した。また、本概要の執筆は柴が行った。調査期間中、弥栄町教育委員会をはじめとして、地元有志の方、及び学生諸氏のお世話になった。記して感謝する(注1に同じ)。

なお、B地区は、『京都府遺跡地図』では小屋ヶ谷城跡の一部とされており、今回の名称は仮称である。

## 2．調査の概要

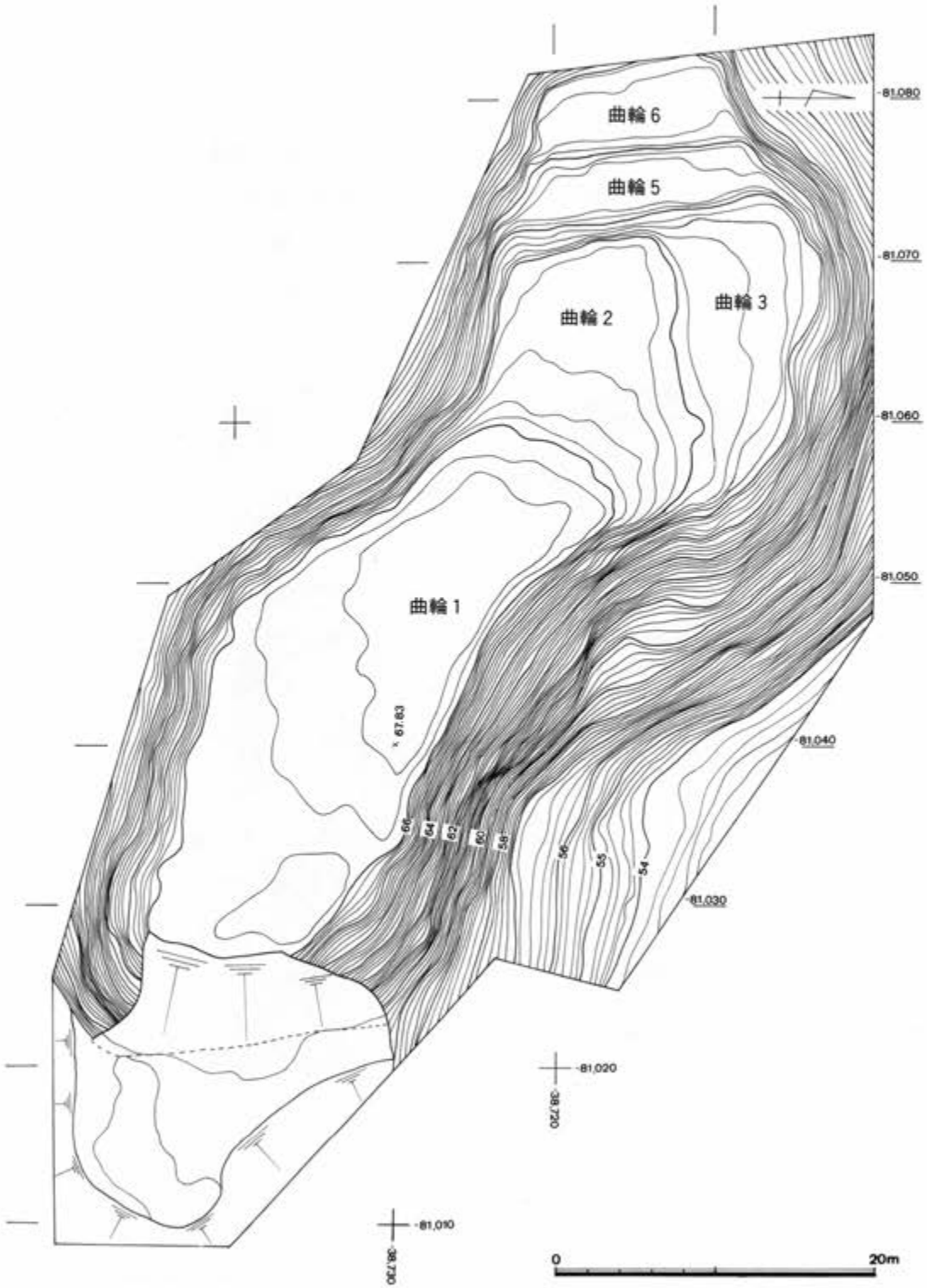
A地区では、曲輪状の平坦面を重機によって試掘調査を行ったが、遺構・遺物とも出土しなかった。B′地区は、B地区とは谷を隔てた北側にある山の平坦面に位置する。検出した遺構には、多数のピットをはじめとして、2間×3間の掘立柱建物跡1棟、柵列、井戸跡1基などがある。これらの遺構の帰属時期は、出土遺物が少量なため不明確であるが、およそ古墳時代後期頃のものと思われる。



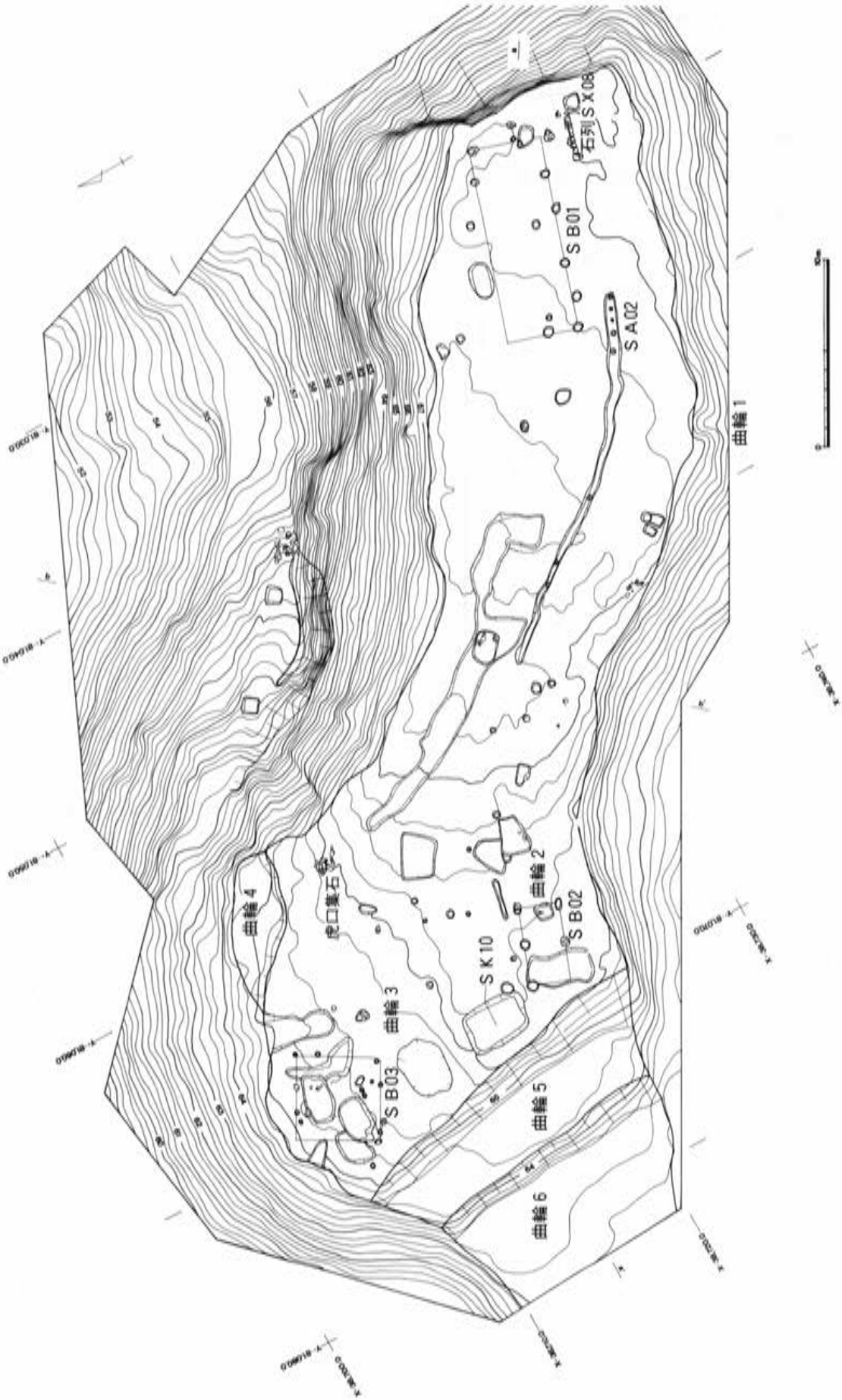

第130図　縄張り図

### (1) B地区の調査

独立丘陵(東西約300m・南北約60m)のすべてが山城として認識され[注2](小屋ヶ谷城跡)、開発対象の東側主郭部分を調査した。独立丘陵の西端は平野に面しており、ここから東方へ階段状の曲輪が5段続く。その端に堀切があり、さらに東方に主郭(曲輪1～3)と副郭部分(曲輪4・5)が




第131図　調査前地形測量図



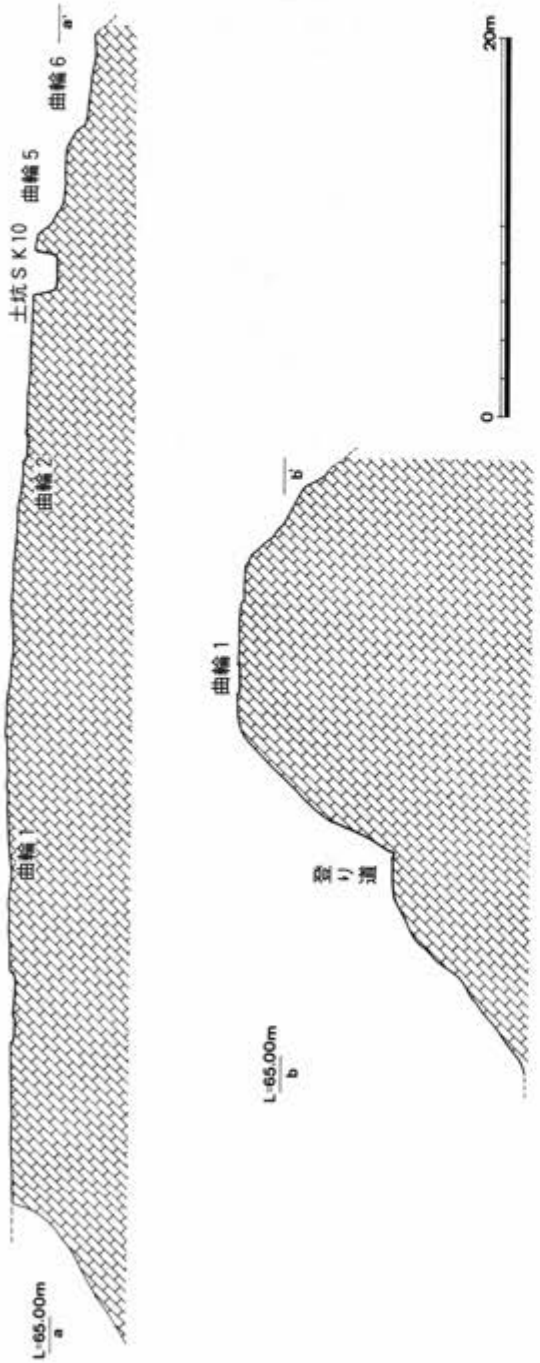

第132図　検出遺構平面図

ある。堀切の底から副郭までの比高差は約６ｍである。調査を行った主郭・副郭部分は４つの曲輪と地元の伝承による「馬繋ぎ」と呼ばれる２段のテラス状の曲輪からなる。調査の結果、主郭部分及び副郭では、２時期の遺構が確認された。以下に上層遺構・下層遺構に分けて説明する。

**Ａ．上層遺構**

登り道、虎口部分集石、掘立柱建物跡２棟、石列、土坑、溝、炉跡などがある。

**①登り道**　谷から曲輪まで丘陵腹部を斜めに上がる登り道が検出された。花崗岩の岩盤を断面「Ｌ」字状にカットしており、幅は約1.3mを測る。山側には浅い素掘り溝が付されていた。曲輪との境には人頭大の礫の集石が見られた。特に、石段として整然と並ぶものではなく、集石の近辺に直径0.25mの円形ピットが存在したことから、この部分に門状の施設があったと推定される。集石には熱を受けたものも認められた。また、登り道の途中、２か所に一辺約0.7mの方形の土坑状の掘り込みが見られた。用途は不明であるが、武者隠しといった防御に関連したものかもしれない。



第133図　土層断面図

**②曲輪１の遺構**

曲輪１は、東西約39m・南北約12mの平坦面である。

**掘立柱建物跡ＳＢ01**　曲輪１の東側に位置する。柵列及び石列８の北側に展開する。２間×５間の東西棟である。規模は、南北約４ｍ・東西約10mを測る。

**石列ＳＸ08**　曲輪１の東側部分で検出した。東西方向に人頭大の礫12石が南側に面をそろえて並び、北側に鈎状に屈折していた。一部２段に積まれた部分も見られた。使用された礫は、被熱により赤変したものが認められた。掘立柱建物跡ＳＢ01に伴う土壇の一部と考えられる。

**柵列ＳＡ02**　掘立柱建物跡ＳＢ01の南西側に位置する。この建物跡に付随する遺構と思われる。延長約21mを確認した。柵は、浅い溝状のいわゆる布掘りを行った後、杭

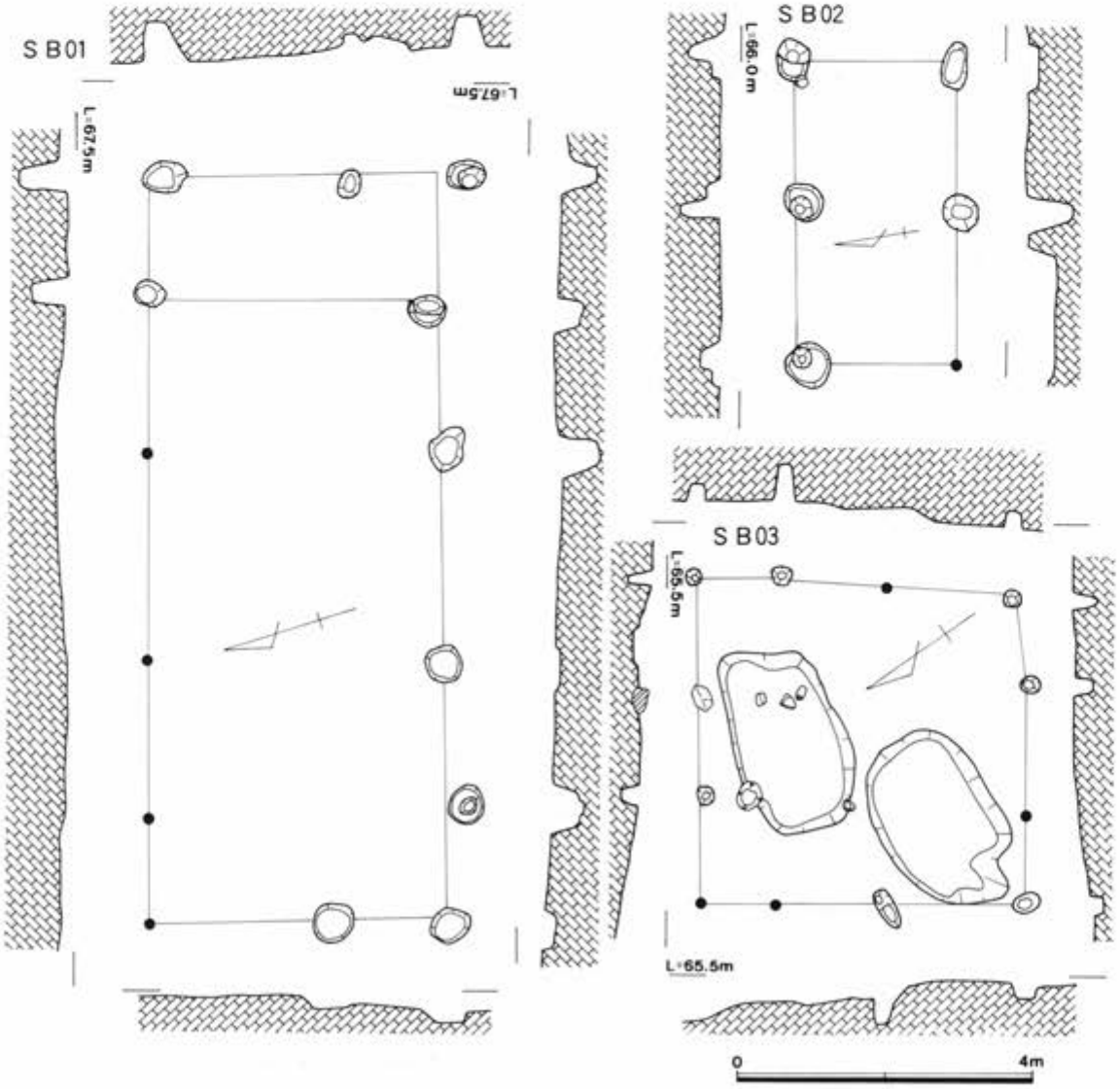
を打ち込んだものである。建物の目隠し塀と思われる。埋土中から宋銭である天聖元寶・熙寧元寶各１点が出土した。

③曲輪２の遺構

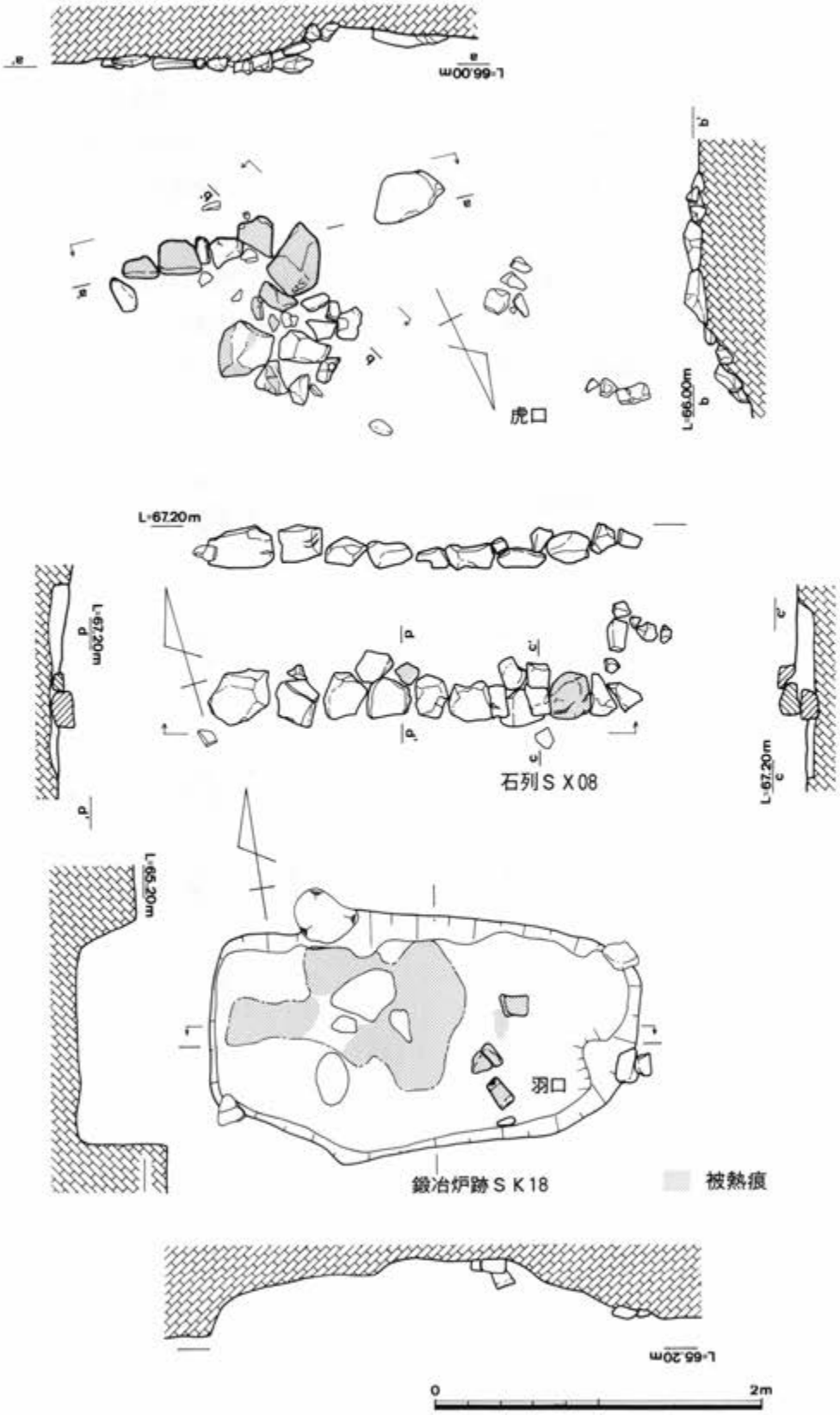
曲輪２は、東西約10.5m・南北約16.5mの平坦面である。

**掘立柱建物跡ＳＢ02**　南北１間・東西２間の東西棟の建物跡である。南北約2.1m・東西約4.2mを測る。ピットの一つから炭化籾が出土した。炭化米には炭化した板材が付着していた。おそらく木箱に入れられていたと思われる。切り合い関係から見ると、時期的には、土坑ＳＫ17が埋まった後に建てられている。

**土坑ＳＫ10**　短辺約2.2m・長辺約3.2mを測る、平面長方形の竪穴状土坑である。深さは約1.2mを測る。地山を掘削している。埋土として、下層に茶褐色粘質土ブロックが観察された。出土遺物には瀬戸・美濃灰釉皿、土師器皿、茶臼片、袋が銅板巻の小把、椀形鍛冶滓、宋銭である皇宋通寶などがある。




第134図　上層遺構実測図




第135図　虎口・石列ＳＸ08・鍛冶炉跡ＳＫ18実測図

**土坑ＳＫ14**　一辺約0.7m四方で、深さ約0.5mを測る土坑である。底部に接して、被熱角礫が出土した。埋土中から宋銭である元豊通寶・紹聖元寶、及び目の粗い布袋に粟を入れて、木箱状のものに納めたと思われる、炭化粟が出土した。

**土坑ＳＫ17**　短辺約1.2m・長辺約3.2m・深さ約0.6mを測る長方形の土坑である。曲輪２の南西隅で検出した。出土遺物に土師器皿片、瓦質すり鉢、瀬戸・美濃碗片、銅板巻付小把状品、銅製の棹ばかりのおもりが１点ある。特に、棹ばかりのおもりは六角形の塔形で、表面に毛彫り文様の認められる精巧なつくりである。高さ４cm・径2.5cm・重さ85.3ｇある。上部には釣り下げるための孔のあいた突出部を持ち、環が残る。同様な形態のものは、福井県福井市の朝倉氏遺跡、大阪市の大坂城跡、堺市の堺環濠都市遺跡などで出土しており、管見によれば、全国で６例目となる。また、埋土の上層から寛永通寶に２孔を穿孔したボタン状製品が出土した。

**④曲輪３の遺構**

**虎口**　虎口部分は、一部列状をなす集石20数石と、上面が偏平になった踏み石状の礫からなる。集石に利用された礫は被熱により赤変したものと、人頭大の花崗岩で、直径約５cmの円形の浅い窪みをもつものが認められた。この石は、門などの構造物の扉の束石の可能性が考えられる。また、虎口集石の東側は腰曲輪状の１段低いテラス(曲輪４)が取り付く。登り道と虎口の関係は、道が虎口(曲輪４)下部で消滅している。

**鍛冶炉跡ＳＫ18**(第135図)　曲輪３の北端で検出した。短辺約1.4m・長辺約2.7mの長方形をなし、深さは最大で0.5mを測る。基本的には地山を掘り窪めたものであるが、一部床面や壁面に粘土を貼り付けていた。床面及び壁面４か所は、被熱により赤変していた。床面直上には直径約９cm・長さ約20cmの鞴の羽口１点と子どもの頭大の偏平な礫２つが残存していた。これらも被熱により赤変していた。この炉跡には簡易な上屋が存在していたと思われ、小ピットが炉の周囲を囲うように、方形にめぐっていた。埋土中からは、被熱礫に混じって鉄釉の小壺、染め付け皿、茶臼上臼片などが出土した。大鍛冶炉と思われる。

**土坑ＳＫ16**　短軸約1.6m・長軸約2.5m・深さ約0.3mを測る、平面が楕円形の土坑である。規模は鍛冶炉跡ＳＫ18に類似する。埋土に焼土を含んでいた。出土遺物には六角柱状の形状を呈する砥石がある。

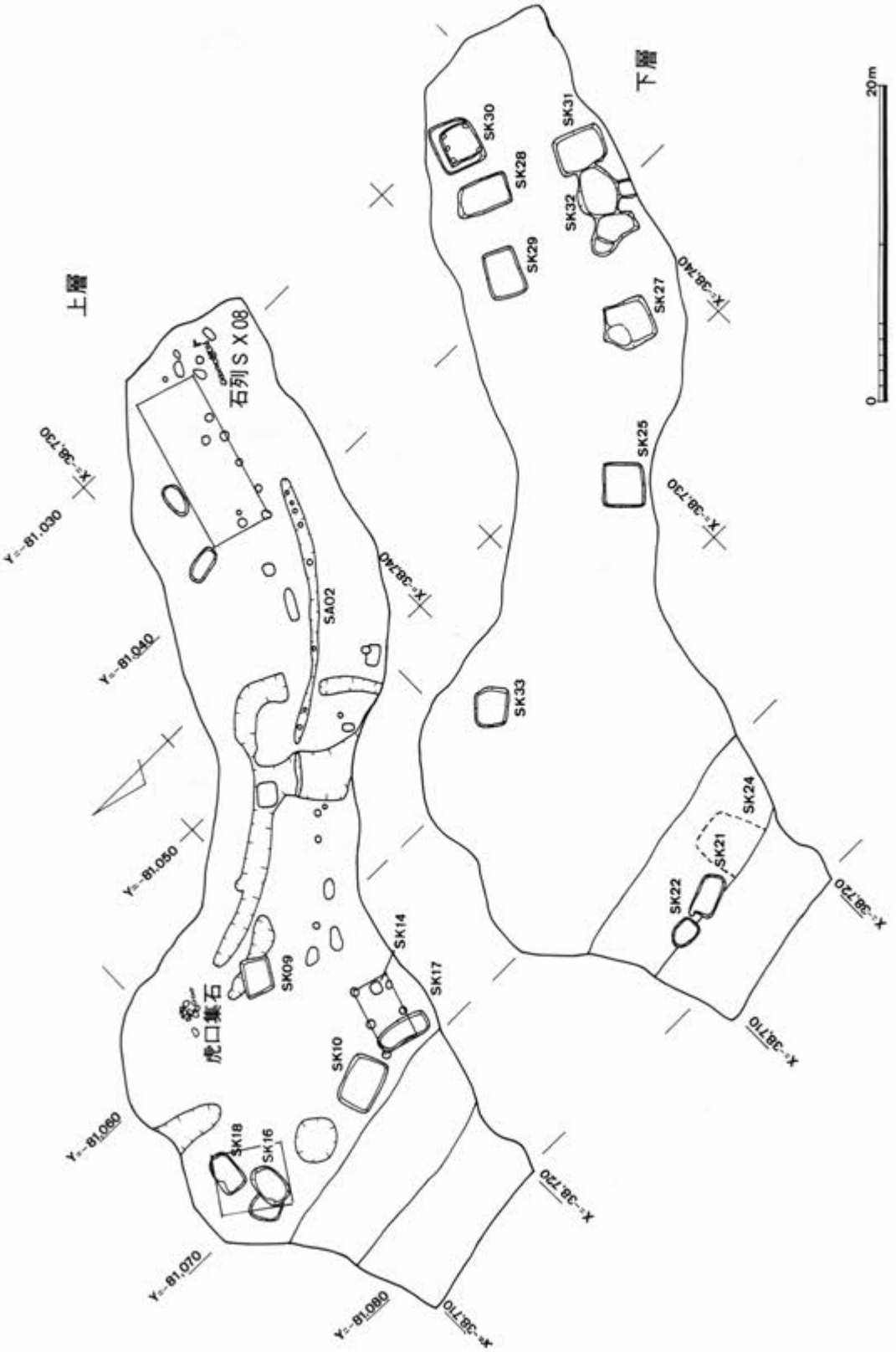
**Ｂ．下層遺構**(第136・137図)

下層遺構として、規模・深さとも1.5mを越える土坑群がある。土坑は計11基ある。土坑は、曲輪の縁辺に集中する。

**①曲輪１の遺構**

**鍛冶炉跡ＳＫ25**(第137図)　短辺約2.2m・長辺約2.8m・深さ約1.4mを測る。平面形は、長方形を呈している。地山面をほぼ垂直に掘り下げている。埋土中には一抱えから人頭大の礫50数個が見られた。礫の大半は被熱により赤変していた。多数の礫の下部は、径約0.6mの範囲に粘土が貼り付けられ、その上に礫を並べている下部構造を持つ。土坑の床面の周囲には溝が掘削されていた。床面上には厚さ約10cmの灰層が見られたことから、礫は土坑に投棄されたものではなく、

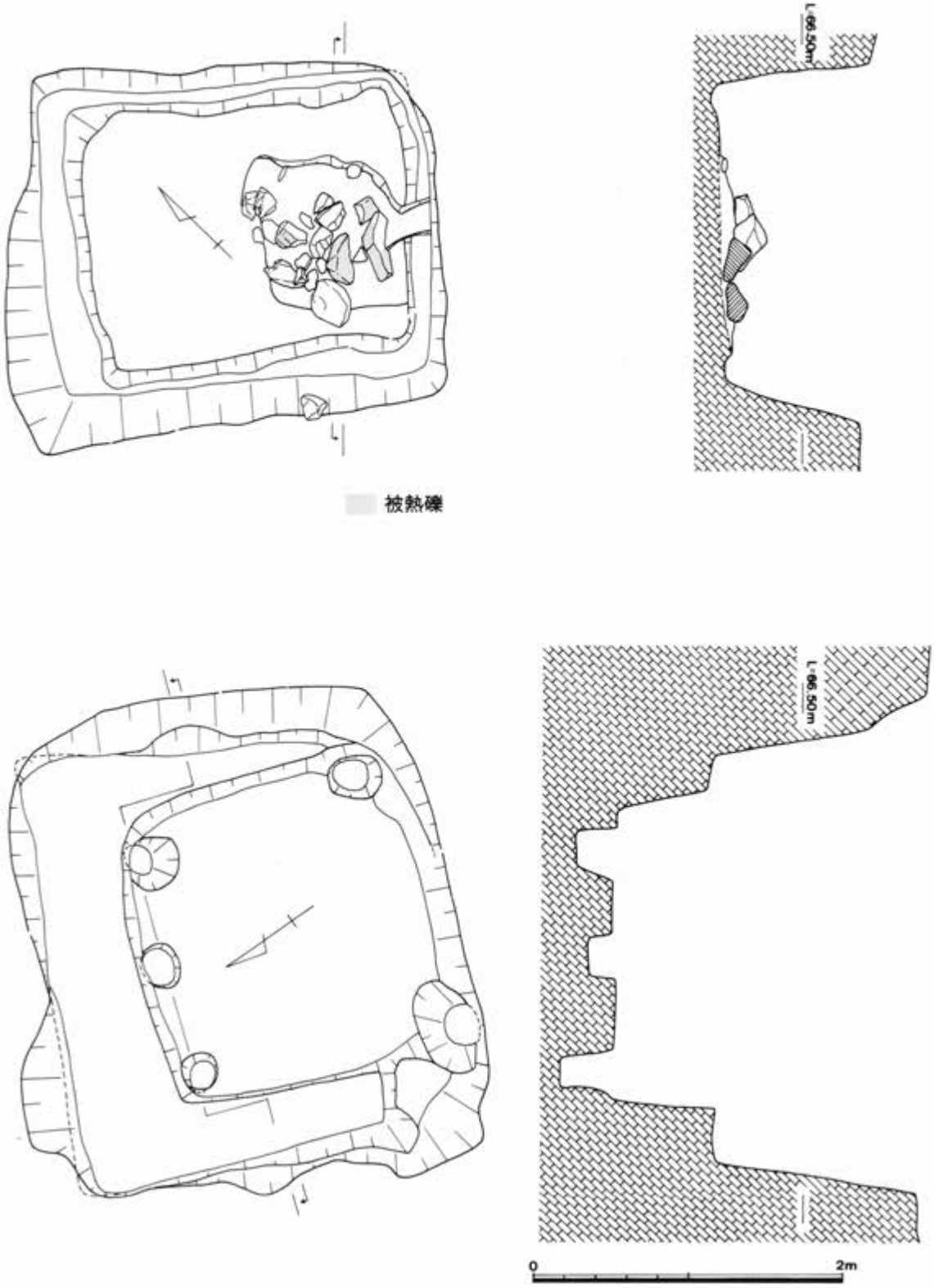
土坑内で使用されたものと思われる。埋土中から鍛造盤状鉄、砥石、刀子状鉄製品、炭化米が出土した。この炭化米は三角にぎり状の塊であったことから、おにぎりと思われる。また、炭化した雑穀(粟か？)も出土した。なお、砥石(第144図１)は、土坑ＳＫ27出土のものと接合した。




第136図　検出遺構平面図

**土坑ＳＫ27**　短辺約2.8m・長辺約2.9m・深さ約1.7mを測る。埋土中に人頭大の被熱礫を数個含んでいた。出土遺物には、土師器皿・青磁椀、鉄釘・鉄鍋片などの鉄製品がある。

**土坑ＳＫ28**　南北約3.2m・東西約2.0m・深さ約1.4mを測る、平面形が長方形の土坑である。




第137図　鍛冶炉跡ＳＫ25(上)・竪穴状遺構ＳＫ30(下)実測図

地山を掘削して造られている。埋土中から茶臼片、開元通寶１点が出土した。

**土坑ＳＫ29**　南北約2.1m・東西約3.0m・深さ約1.4mを測る長方形の土坑である。床面直上に一抱えもある被熱礫数個が廃棄されていた。床面北側の中央には、ピットが１つ掘削されていた。出土遺物には、桜の花と思われる花弁を表現した銅製装飾品(第147図11)、聖宋元寶(1101年初鋳)・洪武通寶(1368年初鋳)、不明銭貨２枚などがある。

**竪穴状遺構ＳＫ30**(第137図)　短辺約2.7m・長辺約3.1m・深さ約1.9mを測る。平面形は長方形を呈している。南側を除く三方を幅0.6mほど掘り残し、通路状空間を造り出している。南西隅は昇降に利用したと思われる、階段状の掘り残しがある。床面には北側に三つ、南側に二つピットがある。この遺構は、上屋構造を持つ地下室と思われる。出土遺物には、土師器皿、唐銭である開元通寶(621年初鋳)、北宋銭である治平元寶(1064年初鋳)・淳熙元寶(1174年初鋳)、明銭である永樂通寶(1408年初鋳)３枚の合計６枚、釘、鋤、釣針・柄の木質部が残存する庖丁などの鉄製品、漆椀に塗られていたと思われる朱漆の皮膜などがある。

**土坑ＳＫ31**　４基の土坑が重複した土坑である。出土遺物に土師器皿、青磁皿、底部分に吉祥句と思われる「上吉」の墨書の見られる白磁皿、湯口、鉄釘などの鉄製品、刀の鞘に付くと思われる金銅製金具１対、胄の金銅製八幡座(第147図４)、金銅製飾り金具(第147図３)、祥符通寶(1009年初鋳)・天聖元寶(1023年初鋳)・永樂通寶(1408年初鋳)などがある。

**土坑ＳＫ32**　長軸約3.1m・短軸約2.4m・深さ約1.7mを測る、楕円形の土坑である。この土坑の南側に通路状の段が取り付く。出土遺物には、銭貨である太平通寶(976年初鋳)・至道元寶(995年初鋳)・不明２枚がある。

**②曲輪５の遺構**

**土坑ＳＫ22**　平面楕円形の浅い皿状の土坑である。埋土に焼土を含んでいた。炉跡の可能性がある。

**土坑ＳＫ21**　平面隅丸長方形の土坑である。南北約2.4m・東西約1.1m・深さ約0.9mを測る。地山を掘削している。北東壁面には煙道状の穴が掘られている。炉跡の可能性がある。

**鍛冶炉跡ＳＫ24**　大半の上部構造は失われていたが、被熱線刻礫が見られ、床面が被熱によって硬く焼け締まっていた。礫と床面の被熱面との位置関係からみて、東側に作業面を設けていたと考えられる。

### (2) Ｂ′地区の調査

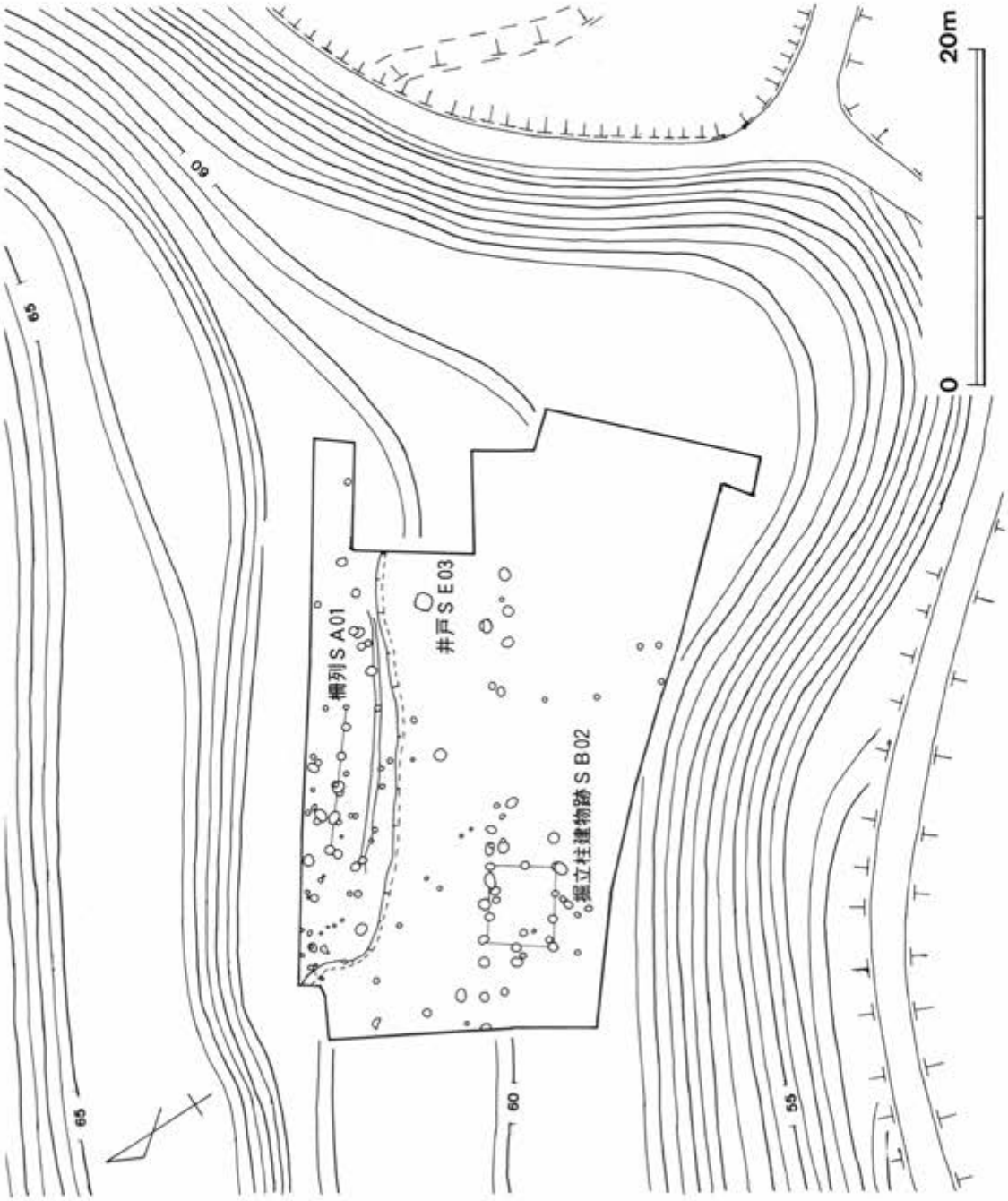
Ｂ地区と里道を挟んで北側に位置する調査地である。調査前の土地利用の現状は、竹林となっており、当初、その竹林としての利用に伴う平坦面か、山城に対する有事以外の居住域が展開しているものと予想され、とりあえず試掘対象とした。重機による試掘調査の結果、時期は不明なものの、一定の間隔をもって東西に並ぶピット列を確認したため、急きょ、拡張を行うこととした。この拡張によって、多数のピット群を検出することができた。明確になった事実関係は以下のとおりである。

### Ａ．検出遺構

設定した調査区の中には、雛壇状の段地形が見られ、段の上下によって遺構の構成に変化が認められた。出土遺物は少なかったものの、段の上下の遺構は関連するものと判断された。便宜上、上段・下段に分けて説明する。

①上段の遺構

**柵列ＳＡ01**　直径0.3m前後の円形のピットが東西５間(約6.7m)にわたり並ぶ。この柵列の南側には、平行する浅い溝跡が見られ、柵列に伴う雨落ち溝と思われる。なお、柵列の北側は、約1.5mで、次のテラス状地形との法面となっており、建物跡になる可能性は低いと判断した。出




第138図　Ｂ′地区遺構配置図

土遺物は、須恵器杯身片・土師器片、鍛冶滓がある(第151図)。

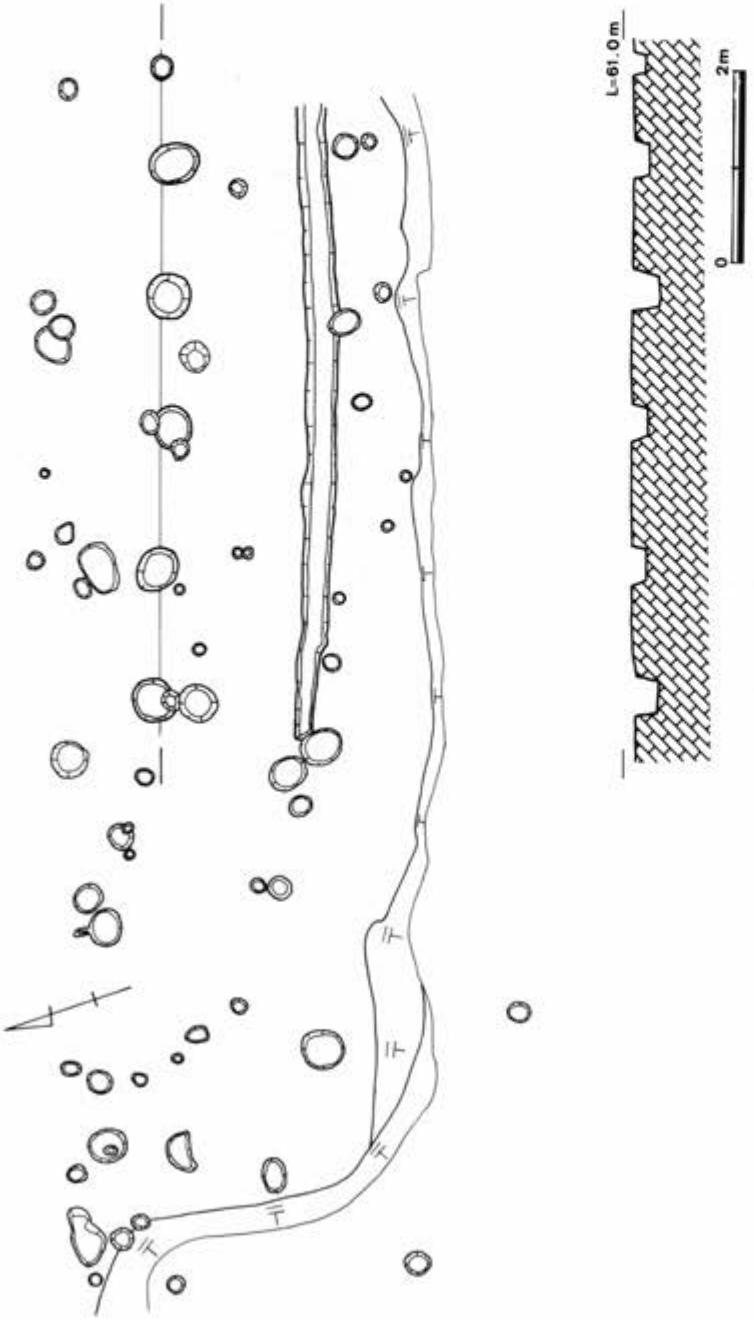
②下段の遺構

**掘立柱建物跡ＳＢ02**　南北２間(約3.6m)・東西３間(約4.6m)の東西棟の建物跡である。ピットは、直径約0.4m・深さ約0.3mを測り、円形を呈する。出土遺物には土師器がある。時期は、古墳時代後期頃と思われる。

**井戸跡ＳＥ03**　直径約0.7m・深さ約0.5mを測る、円形の素掘りの井戸跡である。深さが浅く、湧水点まで到達していないため、水溜め用の井戸と考えられる。

**Ｂ．小結**

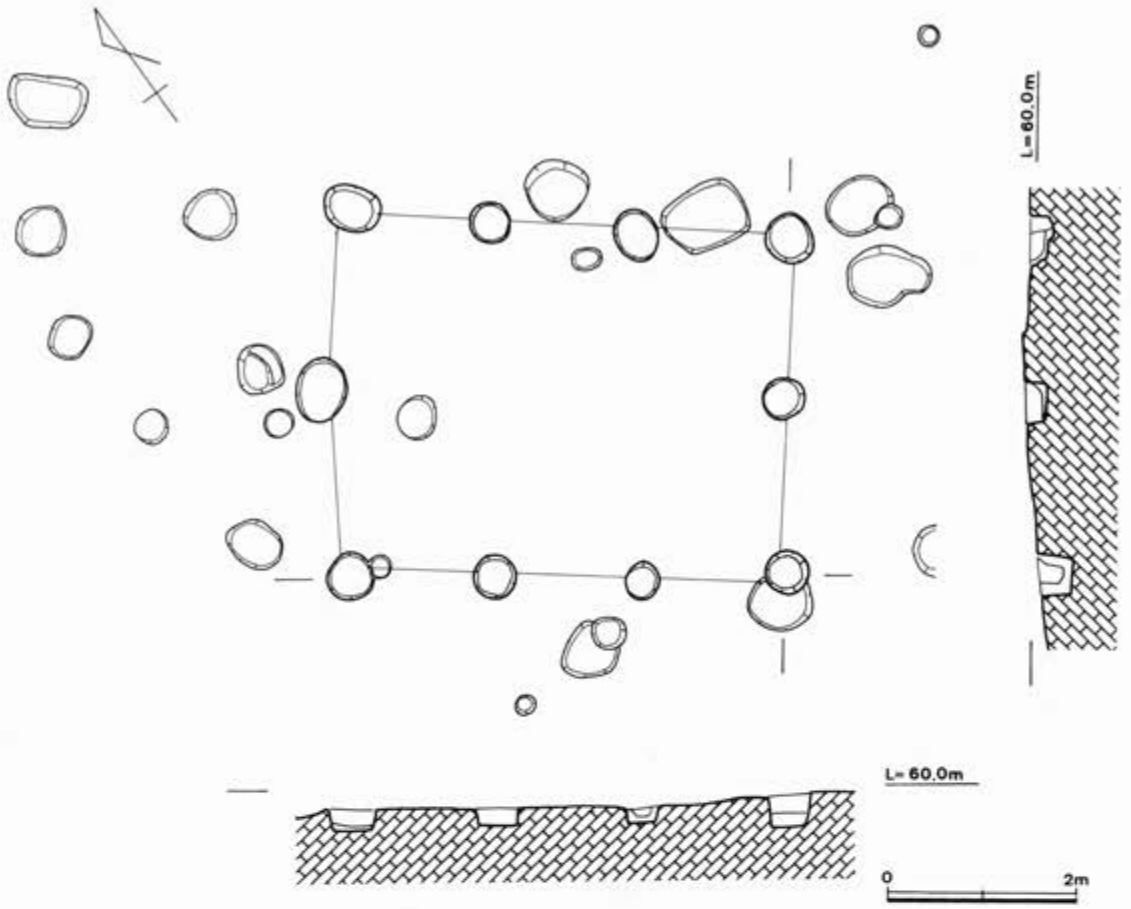
確認された遺構は、在地の有力者の屋敷の一画と思われる。時期は、出土遺物から古墳時代後期以降のものと考えられる。少なくともＢ地区の山城とは関連が薄い。




第139図　構列ＳＡ01実測図

**３．出土遺物**

出土遺物には、土師器皿、瀬戸・美濃焼、染付、青磁椀、瓦質・越前焼擂り鉢、庖丁・釣り針などの鉄製品、兜の鉢の八幡座といった部品、大刀の鞘の金具などの銅製品、唐銭・北宋銭・明銭・国内銭などの銭貨、棹ばかりのおもり、砥石・茶臼片といった石製品、鍛冶滓などがある。中でも、すり鉢18点、茶臼６点は他の遺物の組成比率から見て多数ある。また、下層遺構に伴う遺物には、土師器皿、青磁椀、銭貨、小把、刀の銅製飾り金具、銅製装飾品、鉄釘・鉄鍋・鋤などの鉄製品がある。この中で、鉄製品が




第140図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図

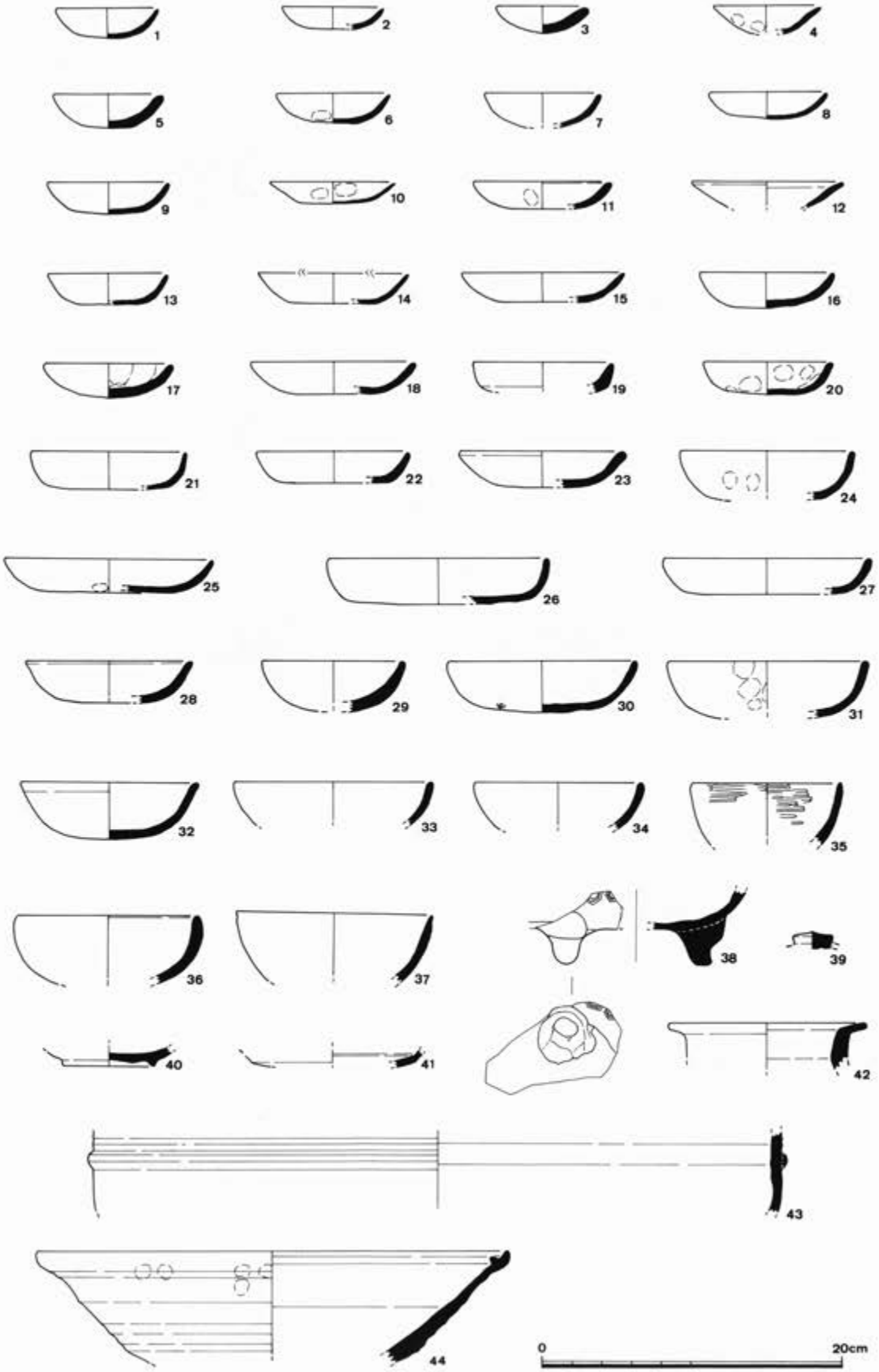
30数点出土しているのが特徴的である。

なお、小把は、弥栄町教育委員会が調査を行った、矢田城跡でも同様のものが出土している。この遺物のＸ線写真撮影の結果、特に装飾などは見られなかった。

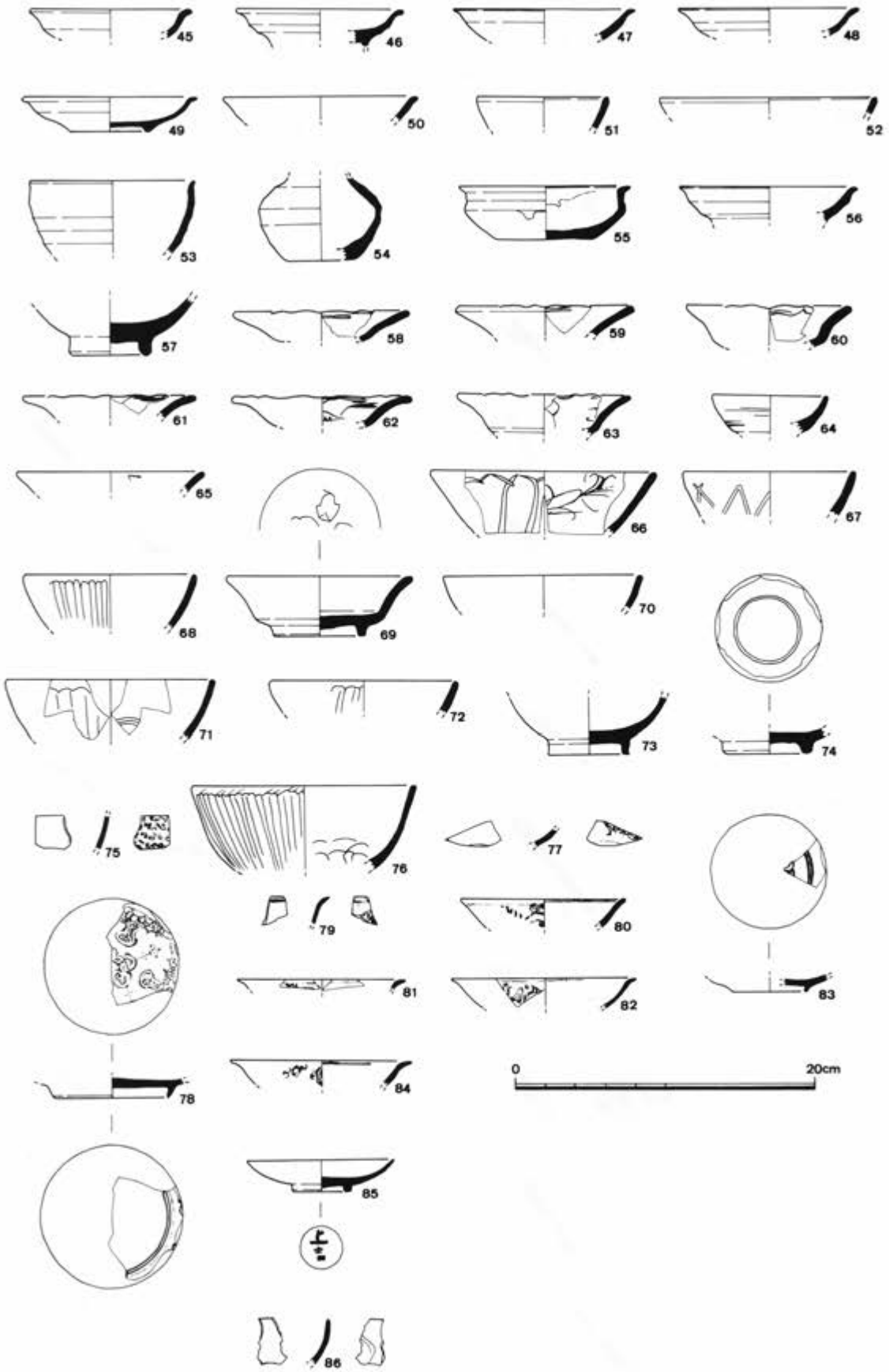
土器・陶磁器の出土地点を列挙すると、曲輪１で58・69・94・98～100・103、曲輪１・２の間で23、曲輪３で５・91、曲輪４で37、曲輪５で11・21・71、曲輪６で３・47・55・64・68・70・81・97、曲輪の断ち割りで35、登り道で14・39・41・43・53・73・89、虎口石敷で95、虎口部分で45が出土した。

遺構としては、ＳＫ02で13・25・80、ＳＤ02で51・90、ＳＤ05で46・86、ＳＫ07で72、ＳＸ08で75、ＳＫ09で30・49、ＳＫ10で９・20・31、ＳＫ16で50、ＳＫ17で60・65・84・96、ＳＫ18で54・78・87、ＳＫ20で１・27・33、ＳＫ21で63、ＳＫ24で66・76、ＳＫ25で２・４・15・16・88、ＳＫ26で52、ＳＫ27で32・57・67、ＳＫ28で82、ＳＫ29で29、ＳＫ30で６・10・18・40・77、ＳＫ31で８・17・22・26・61・83・85・101、ＳＫ32で34・36・42・44・59が出土した。

**土師器**（１～23・25～28・30～34・36・89・94・95・101・103）　皿は、口径から見て、口径が６～８cm、10cm前後のもの、14cm前後のものの３つに分類できる。小型品には底部が丸みを帯び、口縁が斜め上方に立ち上がるものと、底部の接地面が広く、口縁が内湾しながら立ち上がるものとがある。また、中・大型品には、器高が４cmを越えるような深めの皿も存在する。鉢は、越前




第141図　出土遺物実測図(1)

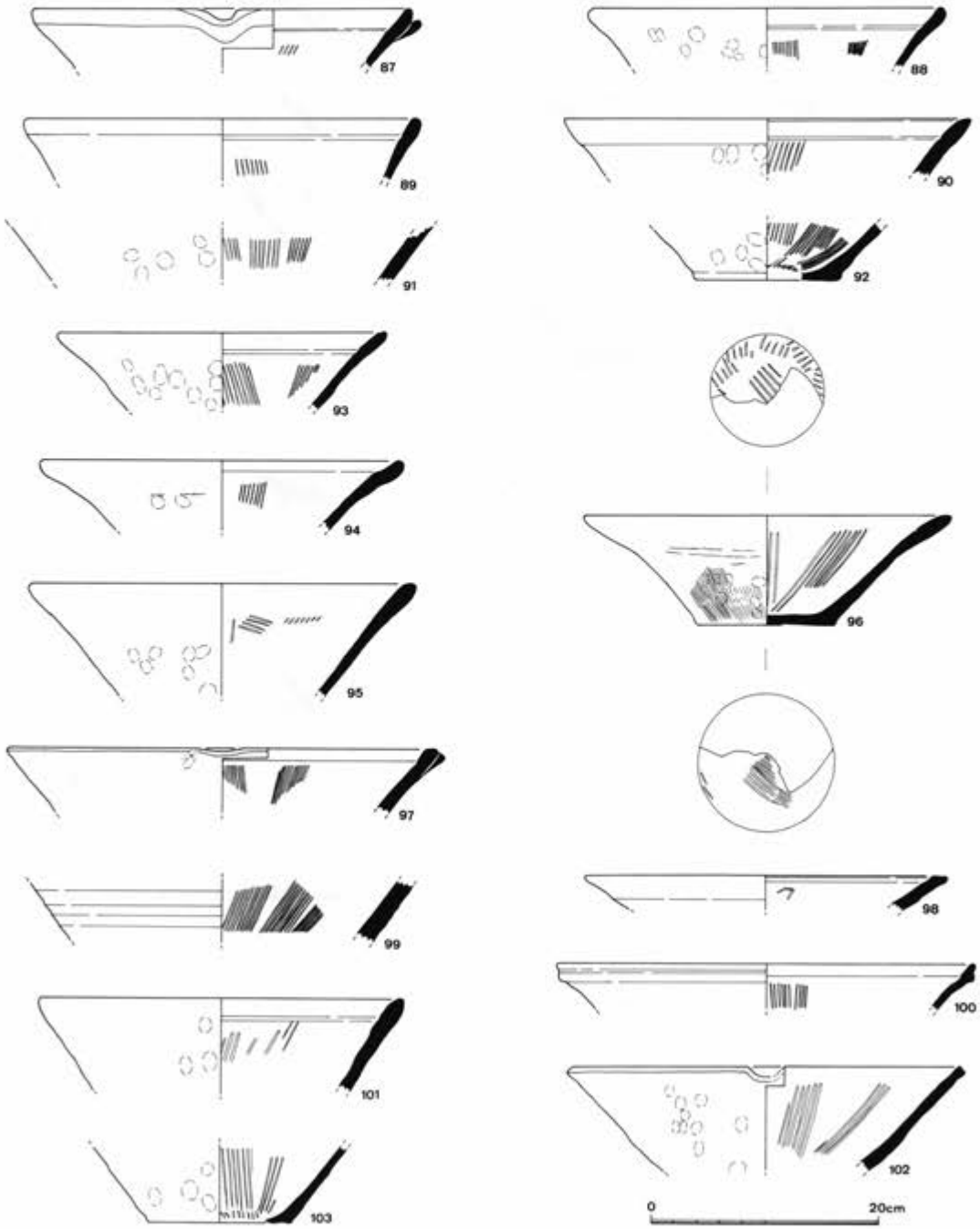



第142図　出土遺物実測図(2)

焼を模倣したものがほとんどである。

**黒色土器**(29・37・40)　29・40は、在地の黒色土器である。特に40は、平安時代前期にさかのぼるものである。

**瓦質土器**(24・35・38・42・87・88・90～93・96・99)　皿(24)は、素地が灰色味を帯びており、典型的な瓦器ではない。また、35も同様である。鉢は、越前焼を模倣したものがほとんどである。38は、外面に亀甲スタンプ文が横一列に施された3足脚付の火鉢である。42は、香炉の上半部と思われる。

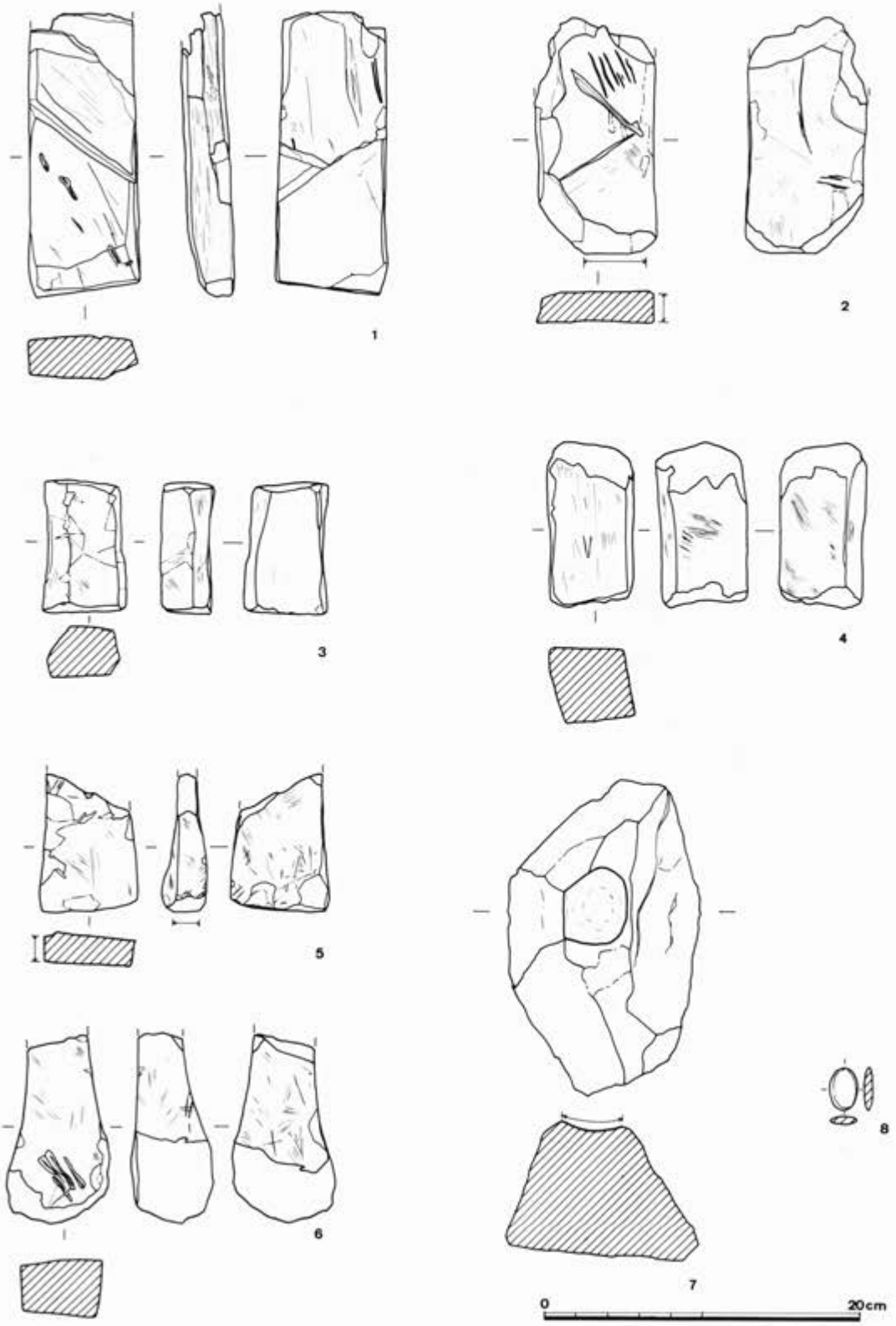



第143図　出土遺物実測図(3)

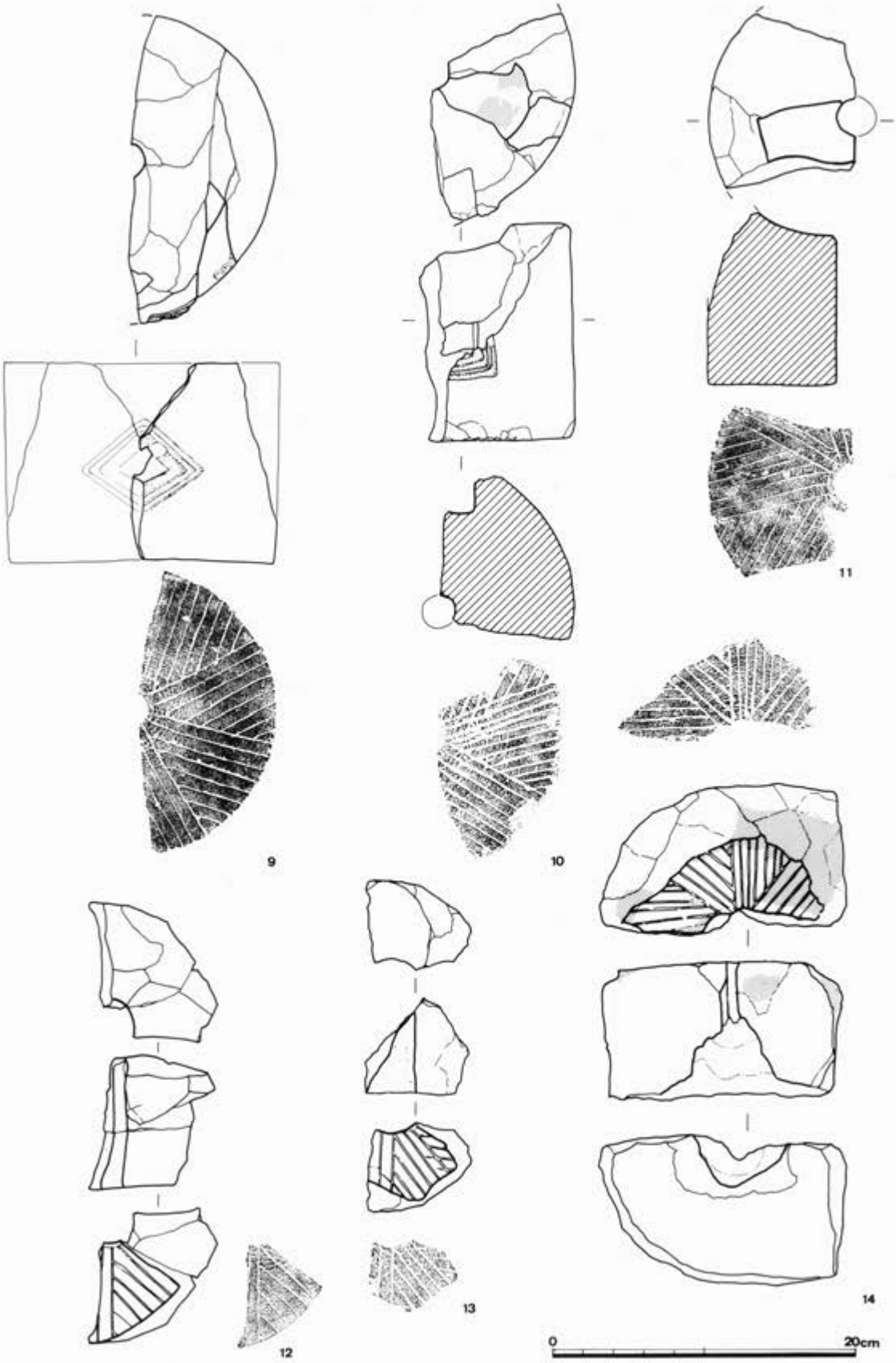
**須恵器**(39)　奈良～平安時代前期にさかのぼる、蓋のつまみである。

**緑釉陶器**(41)　硬質な焼きの、皿である。平安時代前期に属する。

**瀬戸・美濃焼**(44～48・51～56)　灰釉・鉄釉のものがあり、器種には皿・椀・小壺・鉢がある。




第144図　出土遺物実測図(4)




第145図　出土遺物実測図(5)

54は、鉄釉の茶入である。55は鉢である。高台の付かない平底の底部から斜め上方にのび、胴部上半で屈曲して内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し外反する。内面及び外面上半部に釉が施されているが、下半部は露胎である。53は、天目茶碗である。

**越前焼**(43・97・98・100)　43は、甕の胴部片である。他は、鉢である。

**青磁**(58～74・76)　青磁椀・皿がある。椀は、時期的には14～15世紀の蓮弁文様の顕著なもの(66・67)と、15世紀後半～16世紀前半の簡略化され、細弁化したもの(68・71・72・76)とがある。76は、内面に青波文が施される。皿には口縁部を平滑に仕上げるもの(69)と、稜花皿(58～63)がある。69は、見込み部分に葉の透かし文様が施されている。稜花皿は、口縁部の破片のみで全形のわかるものはない。青磁は、いずれも龍泉窯系である。

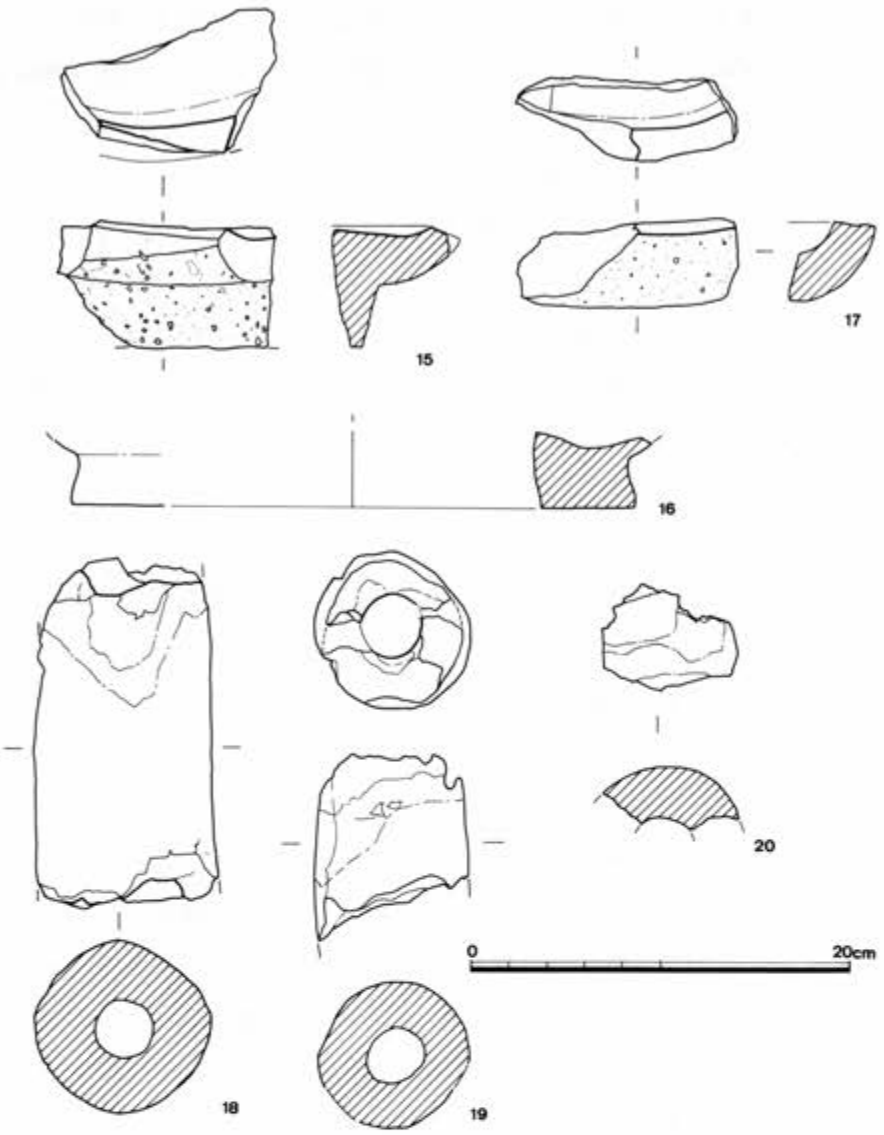
**染め付け**(75・77～84)　出土した破片10点のうち、９点を図示した。いずれも小破片である。78が大型の皿となる以外は小皿である。78は、高台の径が４cmになると思われる皿である。見込み部分と外面に文様がある。見込み部分の文様は、中心の文様の周囲に４個１対となると思われる文様が描かれている。

**白磁**(85・86)　皿・椀がある。85は、ほぼ完形の皿である。底部に「上吉」の墨書がある。吉祥句であろうか。

**石製品・土製品**(第144～146図１～20)　出土地点を列挙すると、曲輪１で２・８・15・17、曲輪３で12・16、曲輪５で５、登り道で13・19、虎口の集石部分で７、ＳＫ10で14、ＳＫ18で９～11・18、ＳＫ20で６、ＳＫ25で１、ＳＫ26で３、ＳＫ33で４、谷部試掘で20が出土した。

石製品には、砥石・茶臼などがある。１は、粘板岩の砥石である。長さ18.1cm・幅７cm・厚さ３cmを測る。３は、断面が六角形の砥石である。長さ8.3cm・幅5.5cm・厚さ6.3cmを測る。砂岩製である。７は、虎口部分の集石の中にあった礫である。図示した上面の部分が浅い皿状に窪んでおり、使用痕跡がある。虎口の門の東石として利用されたものであろうか。石質は花崗岩である。８は、碁石である。暗灰色のチャートであり、全面に光沢を帯びる。長さ2.6cm・幅1.8cm・厚さ0.3cmを測る。９～17は、茶臼である。９～11は上臼である。９は、復原で直径18cmになると思われる。高さは12.9cmを測る。引き手部分の装飾は３重の子持ち菱である。すり目は７分画８溝である。10は、直径19cm・高さ18.2cmを測る。引き手部分は３重の方形の装飾になると思われる。すり目は７分画12溝ある。11は、直径19.6cm・残存高11.5cmを測る。すり目は７分画10溝である。12は、接合する資料のない中、唯一接合できた。14～17は、下臼である。14は、残存高8.7cmを測る。７分画６から７溝である。被熱痕が認められる。15～17は、下臼の受け部分及び台である。16は、台部分の底部の径が29.6cmとなる。18～20は、鞴の羽口である。18は、鍛冶炉跡ＳＫ18に伴って出土した。長さ19.6cm・直径9.4cmを測る。

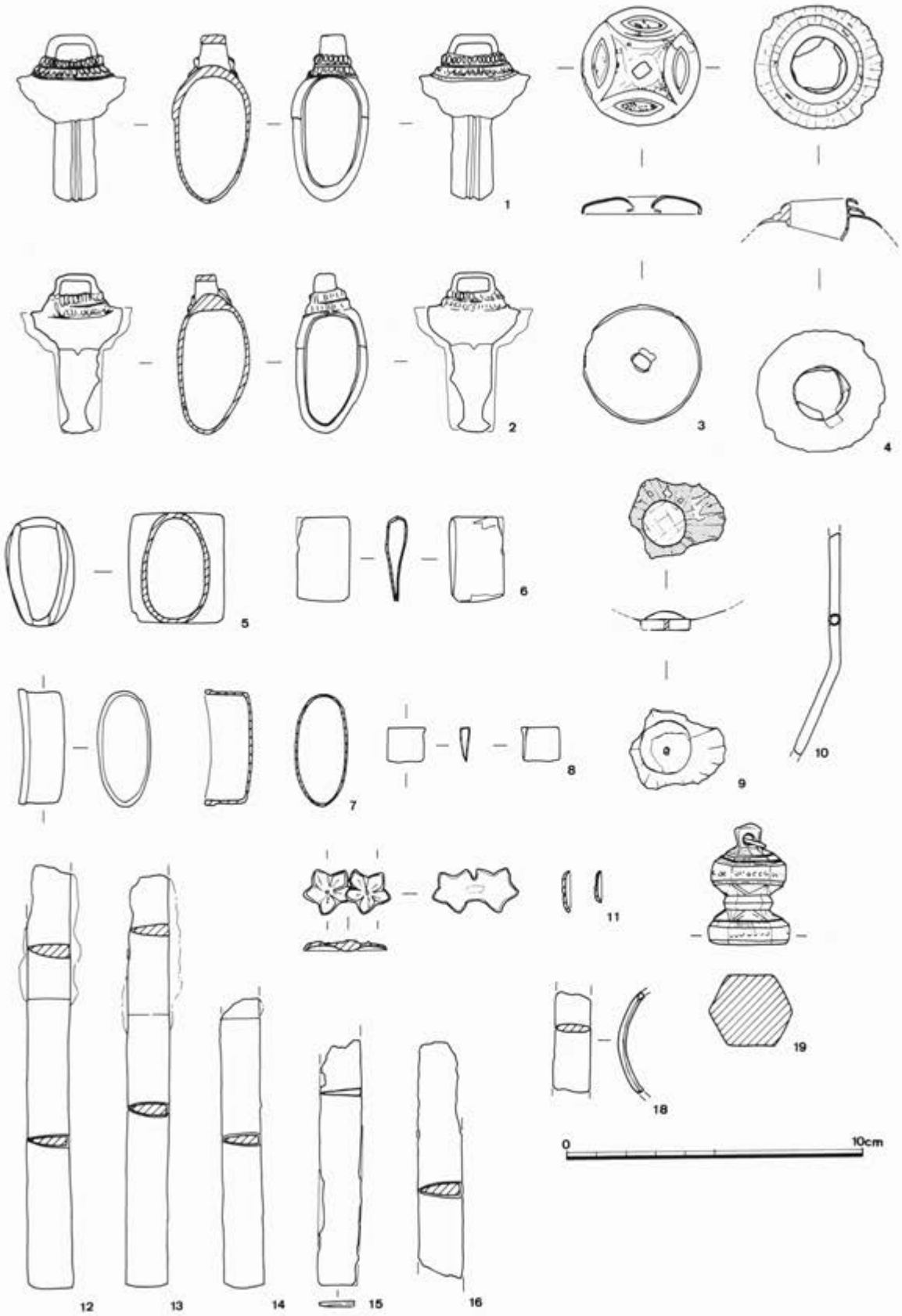
**金属製品**(第147～150図１～108)　銅製品・鉄製品がある。鉄製品には素材鉄(鋼)もある。出土地点を列挙すると、曲輪１で10・56、同石列で50・64、曲輪３で75、曲輪５で88、曲輪６で46、虎口で48、ＳＤ02で35・73・93・94、ＳＤ05で97・104、ＳＫ06で51・87、ＳＫ07で55、ＳＫ10で53・101・102、ＳＫ16で99・105・106、ＳＫ17で19、ＳＫ19で49、ＳＫ20で82、ＳＫ24で89、



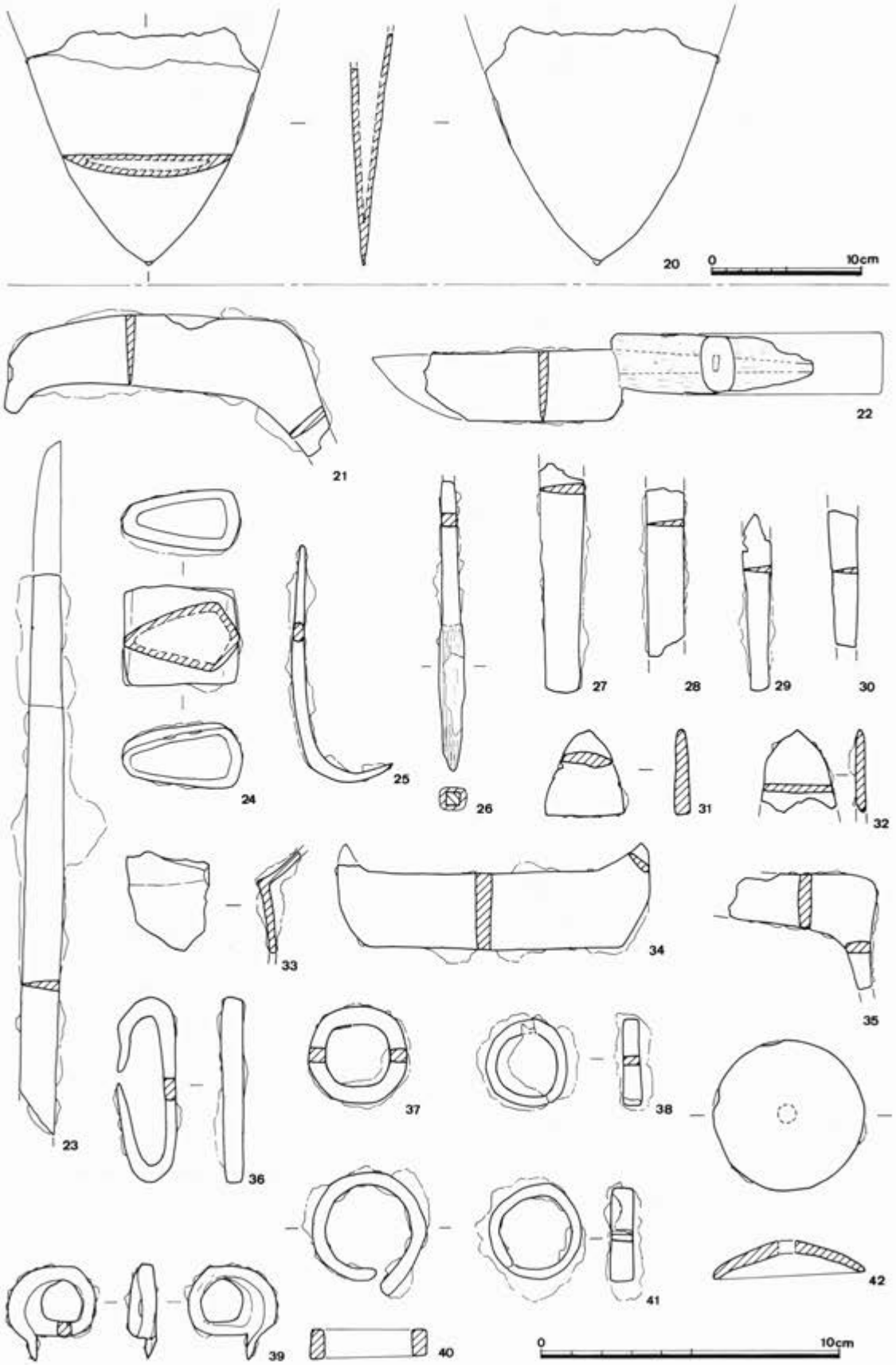

第146図　出土遺物実測図(6)

ＳＫ25で44・62・65・72・79・84、ＳＫ27で29・30・42・60・63・85・90、ＳＫ28で52・57・61・67～69・83・91・98・100、ＳＫ29で11・28・31・40・70・76・92、ＳＫ30で６・15・20・22～25・33・36・38・41・45・54・58・59・71・77、ＳＫ31で１～５・７・９・14・16・34・37・39・66・78、ＳＫ32で21・26・27・32・43・47・86・96、谷試掘で107・108が出土した。

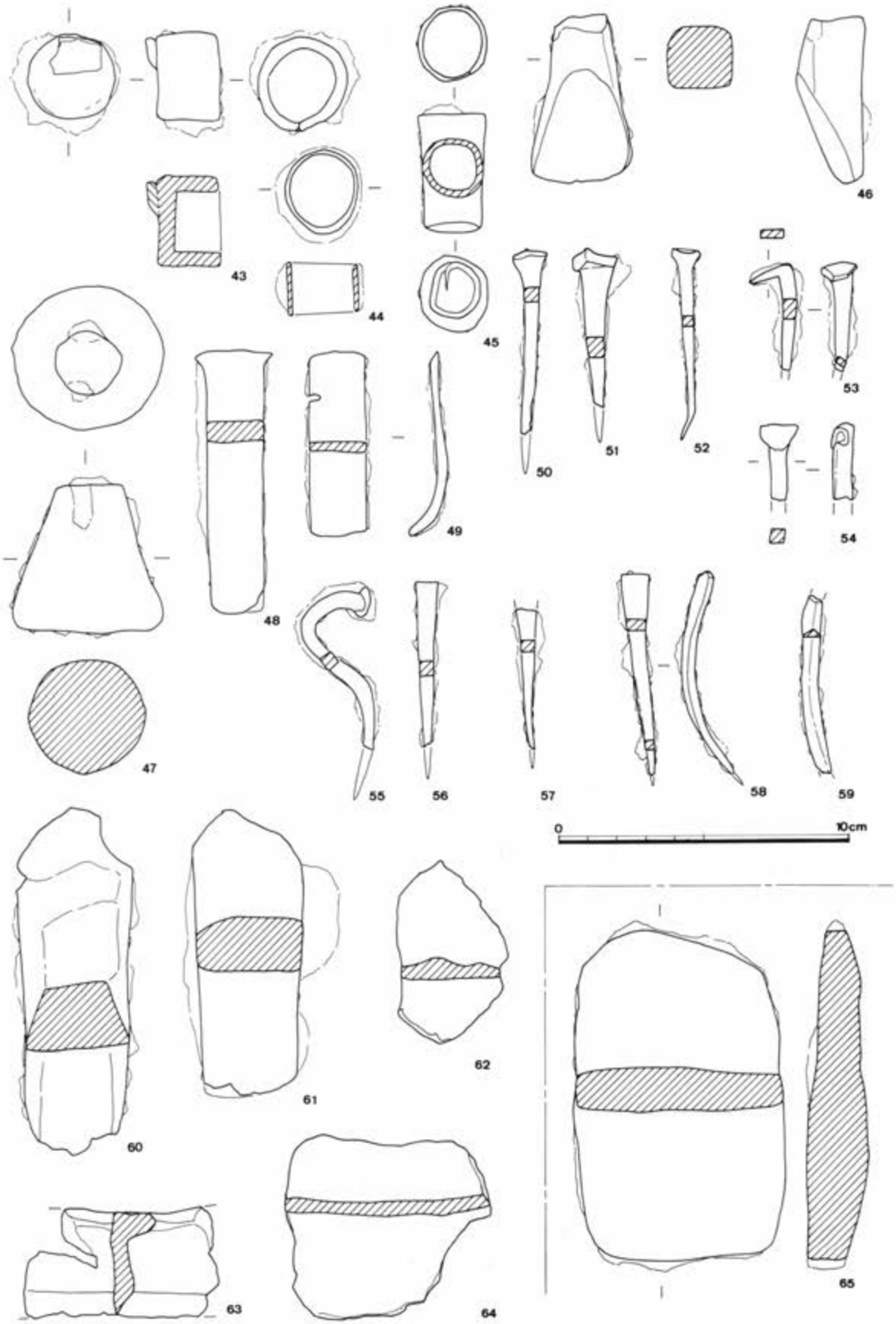
**銅製品**(第147図１～19)　１・２は、刀の鞘金具である。１は、長さ10.2cm・幅7.4cmを測る。３は、円盤状の装飾金具である。表面に繊細な文様が刻まれている。直径８cm・厚さ0.5cmを測る。金箔は認められない。４は、兜の鉢の八幡座である。表面に金箔が残存する。９は、用途不明の金具である。図示したアミ掛け部分に金箔が残存している。11は、サクラあるいはキキョウの花を型どった装飾金具である。裏面には鋲状のものが付いていた痕跡が残る。12～16は、小把である。12～14は、刃部が破損している。把の部分は銅板を巻き付けている。Ｘ線撮影の結果、銅板部分には象眼などの装飾は何も確認されなかった。18は、環状の製品である。19は、棹ばかりのおもりである。高さ8.4cm・幅5.4cmを測る。おもりの表面には毛引き文様が見られる。



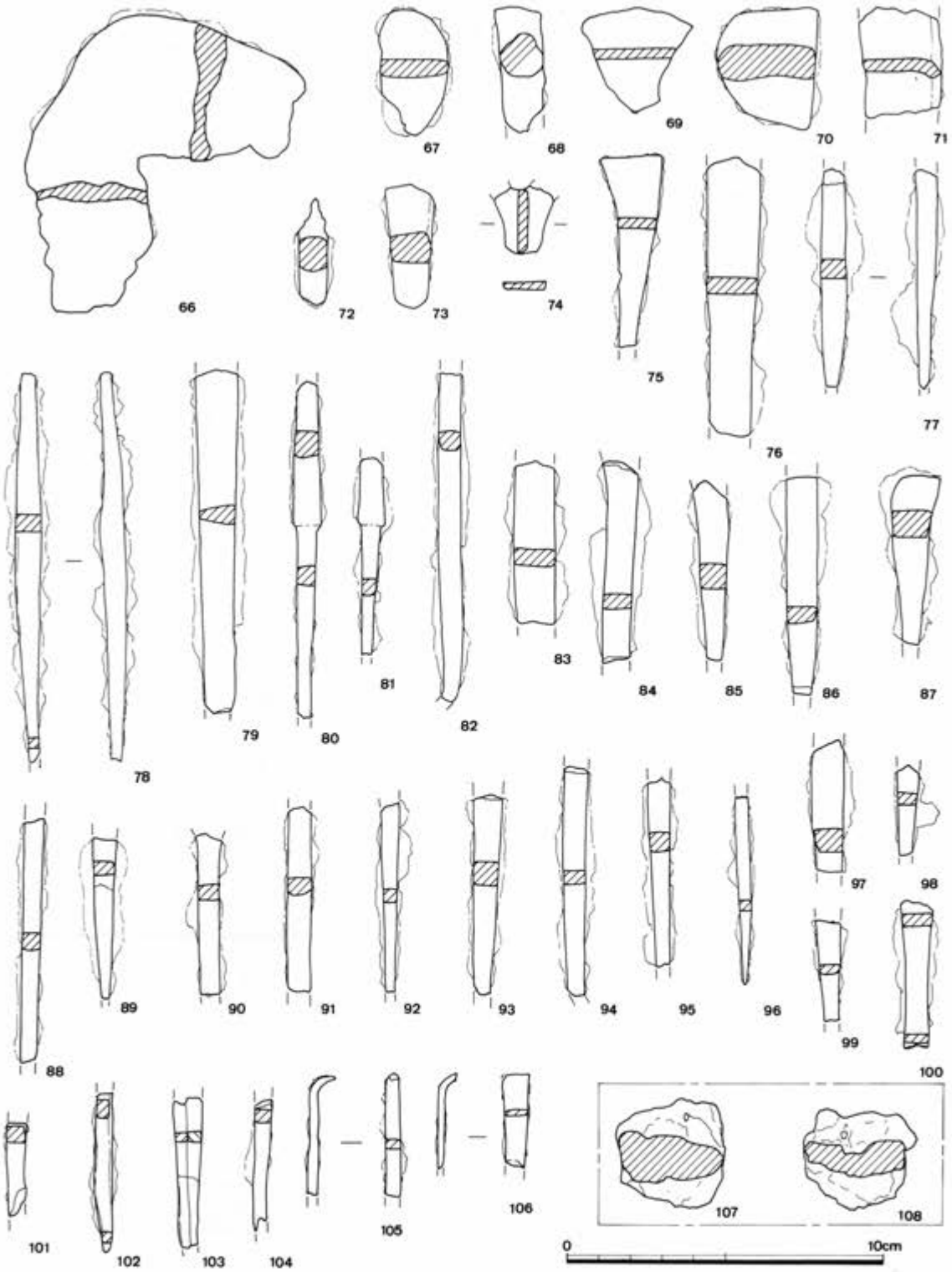

第147図　出土遺物実測図(7)




第148図　出土遺物実測図(8)



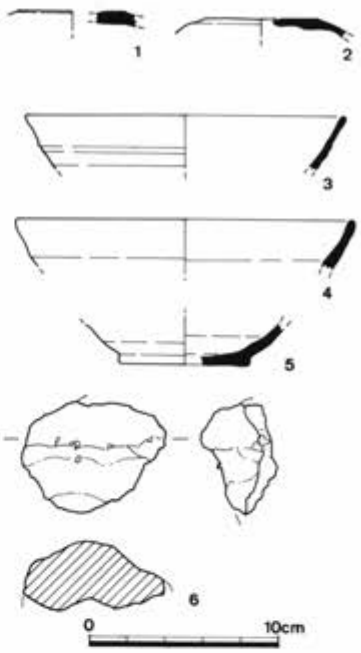

第149図　出土遺物実測図(9)　65のみ1/4




第150図　出土遺物実測図(10)　107・108は1/4

**鉄製品**(第148～150図)　20は、鋤先である。基部の装着部分が破損している。長さ15.4cm・幅15.8cm・厚さ2.8cmを測る。21は、鎌である。柄の着へい部が破損している。22は、庖丁である。柄の木質部が残存する。25は、釣り針である。長さ15.6cmを測る。針先端の返しは確認できない。33は、鉄鍋の破片と思われる。36～41は、環状及び螺旋状製品である。42は、円盤状製品である。

直径5.2cmを測る。中心部に穿孔がある。45は、筒状製品である。鉄板を筒状にしたものと思われる。47は、湯口である。長さ5.4cm・幅5.5cmを測る。48は楔状製品で、先端部は厚みが薄くなっている。50～58は、釘である。65は、鍛造盤状鉄である。長さ22.4cm・幅14.5cm・厚さ4.4cm・重さ4.2kgを測る。付載に分析結果を載せているので参照されたい。66～106は、素材鉄の可能性のあるものを並べた。これらの類例は、青森県浪岡城跡に見られる。107・108は、椀型滓である。小鍛冶に伴うものと思われる。



第151図　B′地区出土遺物実測図

## 4．まとめ

遺物の中心は16世紀前半であり、青磁椀などは15世紀にさかのぼるものも見られる。築造時期も、この当たりに比定できると思われる。なお、16世紀後半から17世紀前半の遺物もある。これら遺物の時期編年をもとに若干の考察を行い、まとめとしたい。

**①山城築城以前**　15世紀後半～16世紀前半に当たる。大型の土坑が掘削された時期である。時期的には、銭貨の初鋳年で見ると、太平通寶(976)から洪武通寶(1368)を経て、永樂通寶(1408)までに限定される。永樂通寶が土坑内から出土するのは、丹後半島では希少な例である。また、この時期の土器に輸入陶磁器類がまとまって見られることで、必需品の買い付けを行ったことが予想される。下層遺構の出土遺物に鉄製品が多数見られるのは、破損した製品を集めて、鍛冶炉で溶解し、脱炭して鍛造盤鉄を得たものと思われる。また、甲冑金具にしても漆皮膜が付着するなど、部品として使用された痕跡が確認されないものもあることから、材料として備蓄されていたことが想定される。それらが鋤・鍬などの農具となったのか、あるいは武器となったのかは、不明であるが、もし、武器に利用されたとすれば、戦国時代末期の緊迫した状況を物語っていると思われる。

**②山城築城期～安定期**　16世紀前半～16世紀後半の時期。実際に山城において生活を行っていた時期である。日常的に鍛冶炉跡ＳＫ18などを利用し、道具の打ち直しを行っていたことが想像される。上層の出土遺物はすり鉢・茶臼が目立ち、何かの調合に必要なおもりが出土したことで、山城での火薬製造を行っていた可能性もある。上層遺構で確認された虎口の集石、石列８の礫など、全体に被熱礫が多数見られたことは、築城期の段階で大鍛冶を行うために大量に必要となった礫の再利用のためと思われる。

**③山城改修～衰退期**　遺物から見て17世紀前半以降となる。遺構として該当するものは、主郭に取り付く登り道・虎口部分がこれに当たると思われる。本来の進入路は、派生する尾根づたいをたどるルートであったと考えられるが、最終的に道の付け替えを行ったものと思われる。

末尾になったが、五十川伸矢・久保智康・西尾幸雄・福島克彦の各氏、当調査研究センターの

松井忠春・引原茂治・森島康雄からは、有益な助言を得た。記して感謝の意を表する。

（柴　暁彦）

注1　調査参加者(敬称略)　奥田栄吉・藤原　諭・中尾清之・井山暁子・井上貴治・大橋一弘・津久井端絵・甫喜山淳・楠　浩・葛西雄介・糸川剛史・服部大介・荻野冨紗子・中島恵美子・森川敦子・松崎才枝・河崎祐子・金保真由美・金久真弓・谷辻絹代・有田美恵子・上田奈智子・野口美乃・永埜ヤス子・山田恵子・伊熊佐知子・馬場行幸・吉岡千恵美・吉岡美秋・山本　絹・小林宏和・平林秀夫・松村　仁・森野美智代・熊谷千代子・菱川　實・藤原敏子・山副まつ江・尾崎二三代・村上五月・坪倉愛子・森　秀雄・小國喜市郎・藤原多津子・堀江登喜雄・岩佐正一・石井　清・石嶋文恵・石田寿子・嵯峨根清一・大下成子・大江田洋子・城下サヨ・安田正夫・田宮節子・新井俊一・金久富美子・黒川花恵・吉岡つや子・入江敏夫・上田辰巳・田中義直・藤原悦子・増田英男・谷口勝江・藤原ヒサエ・吉岡正子・吉岡道子・森野咲枝

注2　豊岡南高等学校教諭西尾孝昌氏から有益な教授をいただいた。また、但馬・両丹考古学研究会「北近畿における中世城郭の諸問題」の席上では発表の場をいただき、極めて貴重な意見交換ができた。

## 付　載１

# シミズ谷城跡出土椀形鍛冶滓と盤状鉄の金属学的調査

**１．はじめに**：弥栄町シミズ谷城跡出土の椀形鍛冶滓２点と盤状鉄の金属学的調査を行った。

**２．供試材**：Table.1に示す。

**３．調査結果**

3－1、SMZ－1、SMZ－2：椀形鍛冶滓(鍛錬鍛冶滓)

①肉眼観察：平面が円形と方形状の鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。裏面は弯曲状突起をもつ。両方とも木炭痕をもち、色調は茶黒色を呈する。中型品である。

②顕微鏡組織：Photo.1の①～④に示す。鉱物組成は両方共に白色粒状のヴスタイト(Wustite：FeO)を大量に晶出し、この粒間を淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)と暗黒色ガラス質スラグが埋める。鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温操業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。また、SMZ－2鉄滓の表皮には、赤熱鉄材の表面酸化膜の飛散した鍛造剥片が付着していた。これも鍛錬鍛冶を傍証する有力な試料である。

③ビッカース断面硬度：白色粒状結晶の硬度値は498Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450～500Hvであり、この範疇に収まって、ヴスタイトに同定できる。また、当組織を王水(塩酸3：硝酸1)で腐蝕すると、全面侵されて、これからもヴスタイトの鉱物相が証明された。

④化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)は59.04～60.04%、ガラス質成分($SiO_2$+$Al_2O_3$+CaO+MgO+$K_2O$+$Na_2O$)15.90～17.37%と、鉄分が多くガラス質成分が少なく、更に、脈石成分も低減傾向にあり、塩基性成分(CaO+MgO)1.30～1.90%、二酸化チタン($TiO_2$)0.24～0.25%、バナジウム(V)0.01～0.02%、酸化マンガン(MnO)0.06～0.10%、銅(Cu)0.002%などであった。成分的にも鍛錬鍛冶滓に分類される。

3－2. SMZ－3：盤状鉄

①肉眼観察：寸ずまりの不整長方形の厚板(25mm厚み)である。面出しも平坦度に欠け、鍛造時の凹凸が残る。全面が赤褐色鉄銹に覆われるが、中核部は金属鉄を残す。供試材は木口端部の一角から、採取された。

②顕微鏡組織：Photo.1の⑤⑥に示す。⑤は鉄中の非金属介在物である。小型品で球状を呈す

Table.2　供試材の化学組成

| 試料番号 | 種別 | 全鉄分 | 金属鉄 | 酸化第１鉄 | 酸化第２鉄 | 二酸化珪素 | 酸化アルミニウム | 酸化カルシウム | 酸化マグネシウム | 酸化カリウム |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | Total Fe | Metallic Fe | FeO | $Fe_2O_3$ | $SiO_2$ | $Al_2O_3$ | CaO | MgO | $K_2O$ |
| SMZ-1 | 鍛錬鍛冶滓 | 59.04 | 0.35 | 50.64 | 27.64 | 11.35 | 3.7 | 0.77 | 0.53 | 0.82 |
| SMZ-2 | 鍛錬鍛冶滓 | 60.04 | 0.31 | 56.69 | 22.4 | 10.14 | 3.03 | 1.44 | 0.46 | 0.64 |

るのは、鍛打加度の度合が少ない事を表わす。⑥の左側の組織は、高炭素域の共析鋼(C：0.77%)レベルの浸炭素組織をもち、内部側は低炭素域(C：0.25%前後)となる。組織の白い部分はフェライト(Ferrite)、黒または層状はパーライト(Pearlite)である。

③ビッカース断面硬度：高炭素域(共析鋼部)は228Hv、低炭素域で139Hv、フェライトで99.7Hvと組織に見合った硬度値であった。圧痕写真は割愛している。

## 4．まとめ

(1)椀形鍛冶滓は、鉄器製作時の鍛錬鍛冶滓に分類される。鍛冶原料鉄は、砂鉄濃度の低い素材であった。

(2)盤状鉄は、低温還元で生成された荒鉄を鍛打により軽く展伸させた鍛造品であった。15～16世紀後半の産物として貴重品である。

(大澤正己)

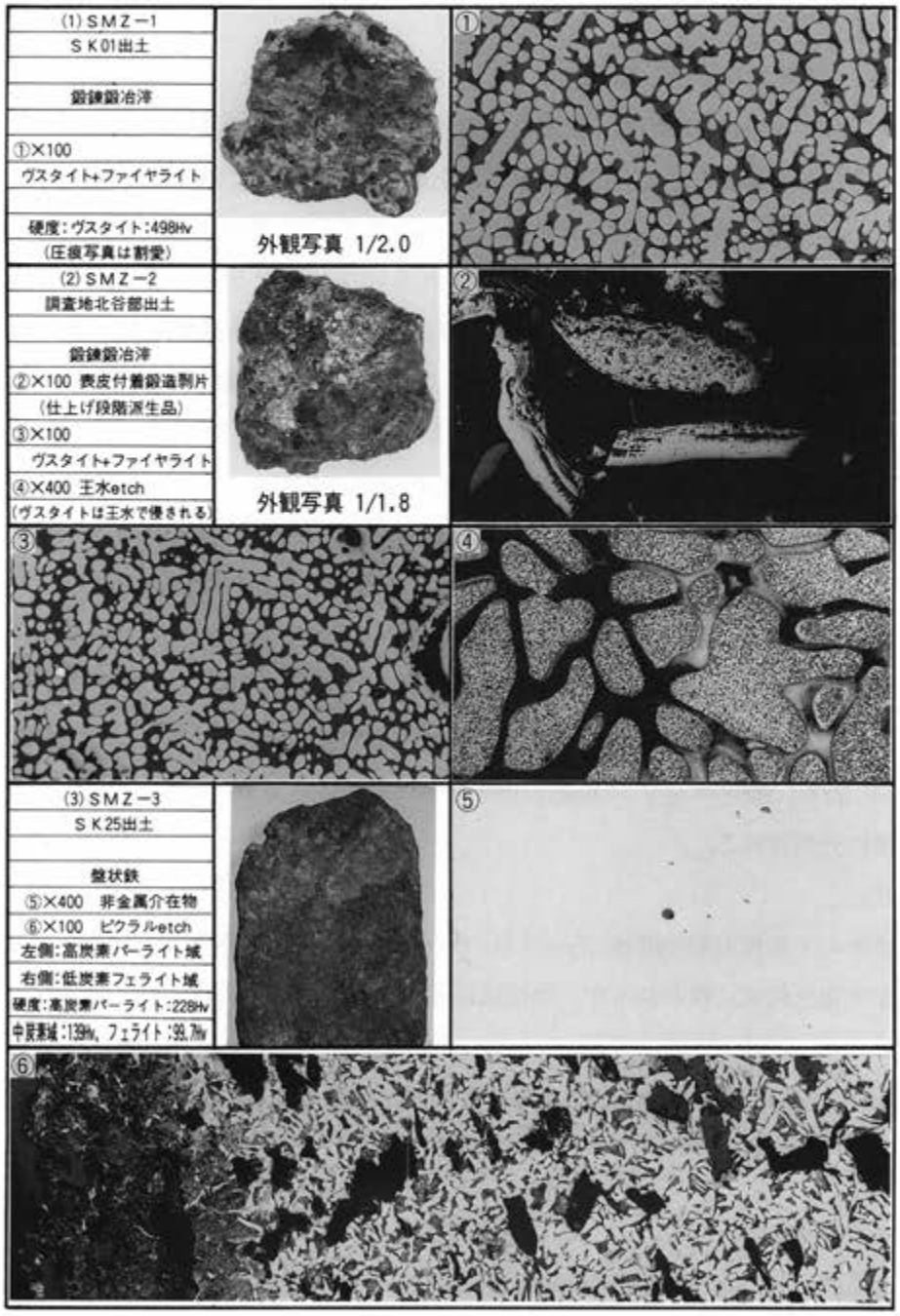



Photo.1　鉄滓と盤状鉄の顕微鏡組織

付　載2

# シミズ谷城跡土壌の分析

## はじめに

京都府竹野郡弥栄町堤で発掘されたシミズ谷城跡からは擂り鉢や臼が多数出土した。しかし、茶碗が少ないということと、何かを調合するために必要なおもりが出土したことで、火薬の製造を行っていたという可能性がある(『シミズ谷城跡現地説明会資料』No96-06　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　より)。今回はこの点を明らかにするために臼に付着していた土壌成分を分析した。

## “火薬”について

周知のとおり、火薬は中国人の四大発明の一つである。硝石、硫黄、木炭の混合物からなる黒色火薬がその最初のものであり、18世紀終わりに近代的火薬類が発明されるまで広く使われてきたし、現在も多用されている。硝石(Niter)というのは硝酸カリウム($KNO_3$)のことで、天然に存在する。今回はこの硝石の存在を裏付けるものとして、硝酸イオン($NO_3^-$)の濃度を測定することにした。

## 分析方法

まず、８個の試料から表面に付着していた土壌を採取した。それを秤量後、蒸留水を約20ml加え、オートクレーブ：(株)平山製作所製　HICAVEで減圧下で120°C、２hr放置する。放冷後、水溶液を濾過した。この水溶液は肉眼で見ても若干濁りがあるため、そのままイオンクロマトグラフィーで分析すると機械が汚染されてしまうおそれがある。そこで分析を開始する前に再度、微粒子を取り除くフィルターを通液させてからイオンクロマトグラフィー：(株)日本ダイオネスク製DIONEXSERIES2000iで分析した。

## 結果と考察

表１に試料名と硝酸イオン濃度を載せた。どの試料からも硝酸イオンが検出された。その濃度は平均で約2.43ppmという値が得られた。次に、周辺の土壌を分析して比較することにした。その結果を表２に示す。硝酸イオン濃度は平均で約1.86ppmであった。硝酸イオン濃度に対して装置自体が持つ誤差の値は±0.36ppmであるから、表１との値の差、約0.5ppmという大きさは、誤差と見るならば、装置以外のものに起因するものと思われる。あるいは、周辺土壌と発掘地点の硝酸イオン濃度の違いと見ることも出来る。

以上の結果から、火薬製造がなされたのかどうかは明らかにならなかった。

（肥塚隆保）

表1　付着土壌の硝酸イオン濃度

| 試料番号 | 遺構・層位 | 土壌重量(g) | 硝酸イオン濃度(ppm) |
|---|---|---|---|
| 1 | B,SK19 | 2.13 | 2.366 |
| 2 | B,SK17 | 1.60 | 3.730 |
| 3 | B,SK29 | 6.24 | 2.382 |
| 4 | B,曲輪5斜面 | 1.65 | 2.051 |
| 5 | B,曲輪1石列 | 0.93 | 1.562 |
| 6 | B,SK33 | 3.40 | 2.736 |
| 7 | B,曲輪1 sp02 | 1.35 | 2.485 |
| 8 | B,曲輪1南東2層 | 0.56 | 2.159 |

表2　周辺土壌の硝酸イオン濃度

| 試料番号 | 遺構・層位 | 土壌重量(g) | 硝酸イオン濃度(ppm) |
|---|---|---|---|
| 9 | B,SK10 | 4.02 | 1.880 |
| 10 | B,SK17 | 3.66 | 1.821 |
| 11 | B,SK30 | 4.29 | 1.875 |

# 3．五領池東瓦窯跡群発掘調査概要

## 1．　は　じ　め　に(第152・153図、図版第67～69)

この調査は、関西学術研究都市開発に関連する、住宅・都市整備公団関西支社の木津団地造成事業に伴い、同公団の依頼を受けて実施した。同事業に関連して当調査研究センターは、昭和59年から継続して調査を実施しており、今回の調査でほぼ南地区の調査を終了した。現在この地区は、宅地分譲が行われ、すでに街造りが着々と進行中である。

調査対象地は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平に所在する。五領池東瓦窯跡群は、平成５年度の市坂瓦窯跡の発掘調査のおりに、木津町教育委員会のご教示と当調査研究センターの分布調査の結果、新たに発見された遺跡である。調査地付近は、木津川南岸に開けた盆地を東側から臨む台地の縁辺部にあたり、南東から北西方向にのびる台地を人の掌状に刻む開析谷の一角に位置する。台地の西側にはJR西日本の関西本線が南北に走る。台地の上面には、平城宮大膳職所用の瓦生産施設跡として知られる上人ヶ平遺跡がある。すぐ南側の谷には、その瓦を焼いた市坂瓦窯跡が、８基の半地下式ロストル平窯によって構成されていることは、すでに当調査研究センターの調査によって明らかにされている。(注1)

また、平城京の北に広がる平城山丘陵の北側斜面付近には、ほかにも瓦窯跡が多く分布する。今回の調査地の南約400mには歌姫瓦窯跡があり、盆地を挟んだ西側約1.5kmには、歌姫西瓦窯跡・音如ヶ谷瓦窯跡がある。(注2)いずれも平城京造営時の窯跡で、特に音如ヶ谷瓦窯は、法華寺阿弥陀浄土院の所用瓦を生産した瓦窯跡として知られている。(注3)

五領池東瓦窯跡は、市坂瓦窯跡に隣接することから、当初その関連性が注目された。しかし、今回出土した瓦から、木津町音如ヶ谷瓦窯跡と共通する型式のものが多く、音如ヶ谷瓦窯と同様に奈良市法華寺阿弥陀浄土院所用瓦を生産した瓦窯跡と確認した。なお、今回出土の瓦の形式名は、奈良国立文化財研究所の分類名を使用している。(注4)

奈良市法華寺は、五領池東瓦窯から南南東に、直線距離で約３kmに位置する。現在国道24号線の通る谷筋を使って瓦は運ばれたのであろう。法華寺は、光明皇后縁りの寺として知られ、東大寺とならんで総国分尼寺として整備された。阿弥陀浄土院は、法華寺の南東に設けられた施設で、奈良国立文化財研究所によってその推定地が発掘調査されている。(注5)

今回の調査地は、上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡の南側に隣接する、標高47～55mの西方向に開けた小開析谷に位置する。調査地付近には竹林が広がり、筍栽培に伴う土砂の移動により旧地形とはかなり異なっていた。幸い、窯付近は盛り土が著しく、一部の窯跡には天井部分が残るほど残存状況は良好であった。また、谷底部分には窯跡群に伴う灰原が広がっていたが、水田耕作によって東側は削平が著しく、西側の低い部分に残っている状況であった。検出した遺構は、３基の

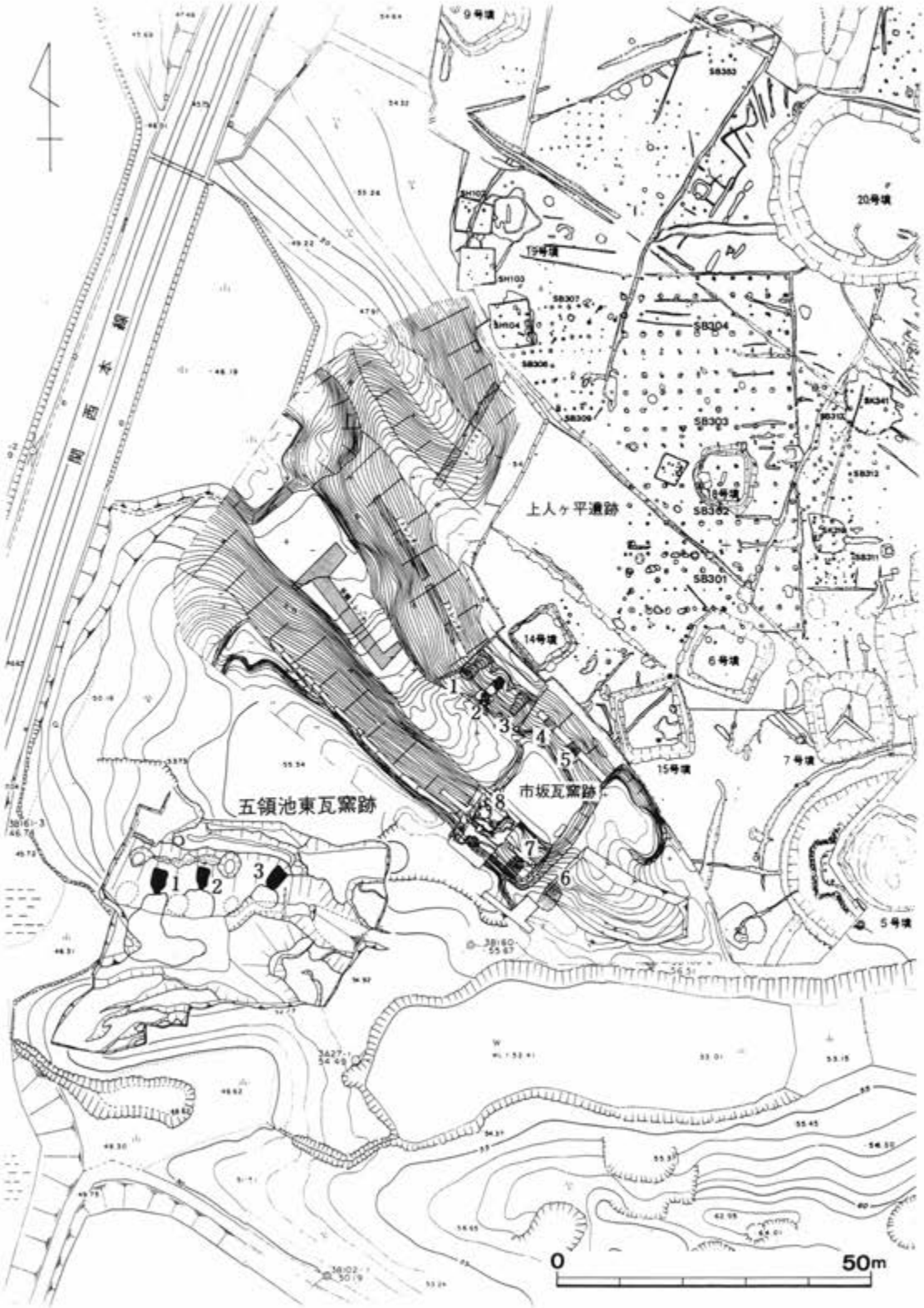
半地下式ロストル平窯(西から１～３号窯)、１・２号窯に伴う排水溝とそれに関連する土坑２基、灰原、３号窯前庭部付近の東からのびてくる溝が主なものである。

調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第３係長奥村清一郎・同主任調査員引原茂治・同調査員有井広幸が担当して調査を行い、本報告は有井が執筆した。なお、遺構の撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中　彰と有井が行い、遺物の撮影は、奥村と田中・有井が担

第152図　調査地位置図(1/50,000)

1.五領池東瓦窯跡群　2.市坂瓦窯跡群　3.上人ヶ平遺跡　4.瓦谷遺跡・古墳群
5.瀬後谷遺跡・瓦窯跡群　6.音如ヶ谷瓦窯跡群　7.歌姫瓦窯跡群　8.梅谷瓦窯跡群

当した。調査及び報告の作成にあたっては、調査補助員、整理員の方がた[注6]に大変協力していただいた。また、調査期間中には、京都府教育委員会・木津町教育委員会・奈良国立文化財研究所などの関係機関をはじめ、さまざまな方がた[注7]から有益な助言・協力をいただいた。




第153図　遺跡周辺図(1/1,000)

調査期間は平成８年５月７日から同年９月27日、調査面積は約1,200㎡で実施した。調査に係わる経費は、全額住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。

## 2.　調　査　の　概　要

### (1)層　序(第154・155図、図版第69・84-(1))

調査トレンチは、小開析谷を全掘するように、東西約50m・南北約30mの規模で設定した。調査前は、谷の北側斜面中位に筍栽培に関連する小テラス状の地形があった。筍栽培による客土は、最大1.2mの厚みがあり、明黄灰色の地山土と、灰褐色砂質土の互層になっていた。テラスの北端下層には、調査地の北西端部が水田耕作されていた時期の用水路が残っていた。その南側には、標高約52m付近に幅1.5m前後の平坦面があり、東端は３号窯の北側で一段高くなって市坂瓦窯方向に続いている。平坦面が造られた時期は不明であるが、瓦窯関連の作業用通路の可能性も考えている。筍栽培関連の整地土の下にはそれ以前の旧表土(暗褐色砂質土)が斜面全体に残り、さらに下には奈良時代の遺物包含層(淡茶褐色砂質土・淡灰褐色砂質土)が薄く残っていた。出土遺物はほとんど瓦片である。

谷底部分は、以前水田が営まれていたようで、長方形にめぐる畔と水路跡が残っていた。谷底部分の東側は、表土直下で地山となるが、西側は灰原が厚さ最大0.3m残っていた。水田造成のおりに、東側を削り、西に盛り土したため、東側には灰原が残らなかったようである。

南側の尾根筋端部は、当初古墳の可能性を考えていたが、結果として、自然地形及び粘土採りの影響と考えているテラス地形と南東に続く小さな谷を確認した。テラス地形と谷地形の部分には奈良時代の包含層(にぶい黄褐色系砂質土)があり、土師器片が若干出土した。谷地形はさらに南東に続き、切り通し状になっていると考えている。この付近から東には、「フンドシ池」と呼ばれる池があり、粘土採掘跡と推定されている。その池とこの谷が続いている可能性があり、ＳＤ05と同様に粘土採掘跡と考えている。

地山は、明黄灰色シルトや青灰色粘土層に間層として灰色砂礫層が部分的に観察でき、基本的に水平に堆積している。いわゆる大阪層群に含まれる層で、奈良時代の遺構はこの層を切り込んで造られていた。

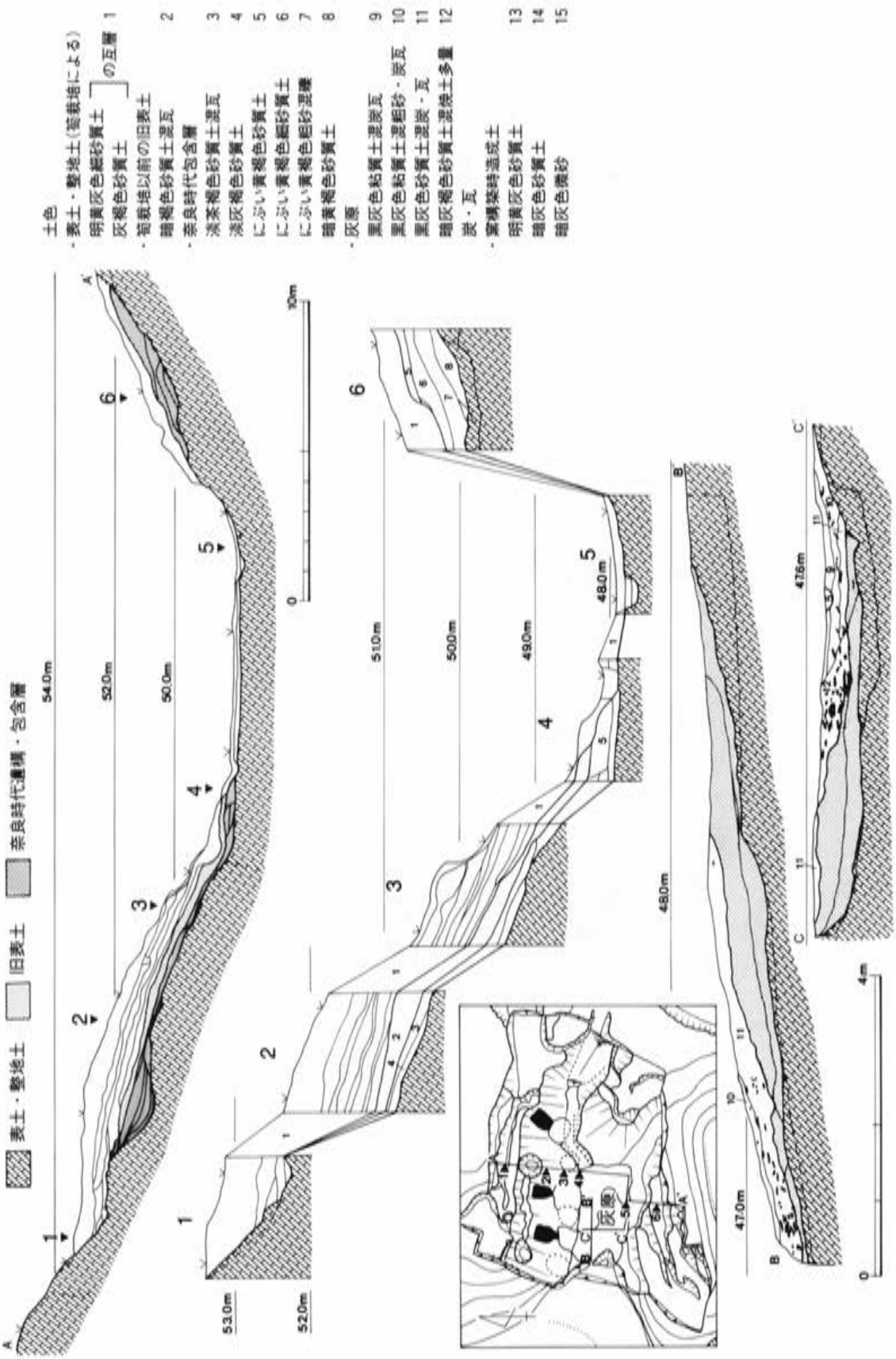
### (2)検出遺構

五領池東瓦窯跡群は、３基から構成されるが、１・２号窯とその斜面上方側の溝ＳＤ01、及びこの溝の両端に設けられている土坑ＳＫ03・04が当初の施設で、３号窯は追加施設と考えている(第155図、図版第70)。

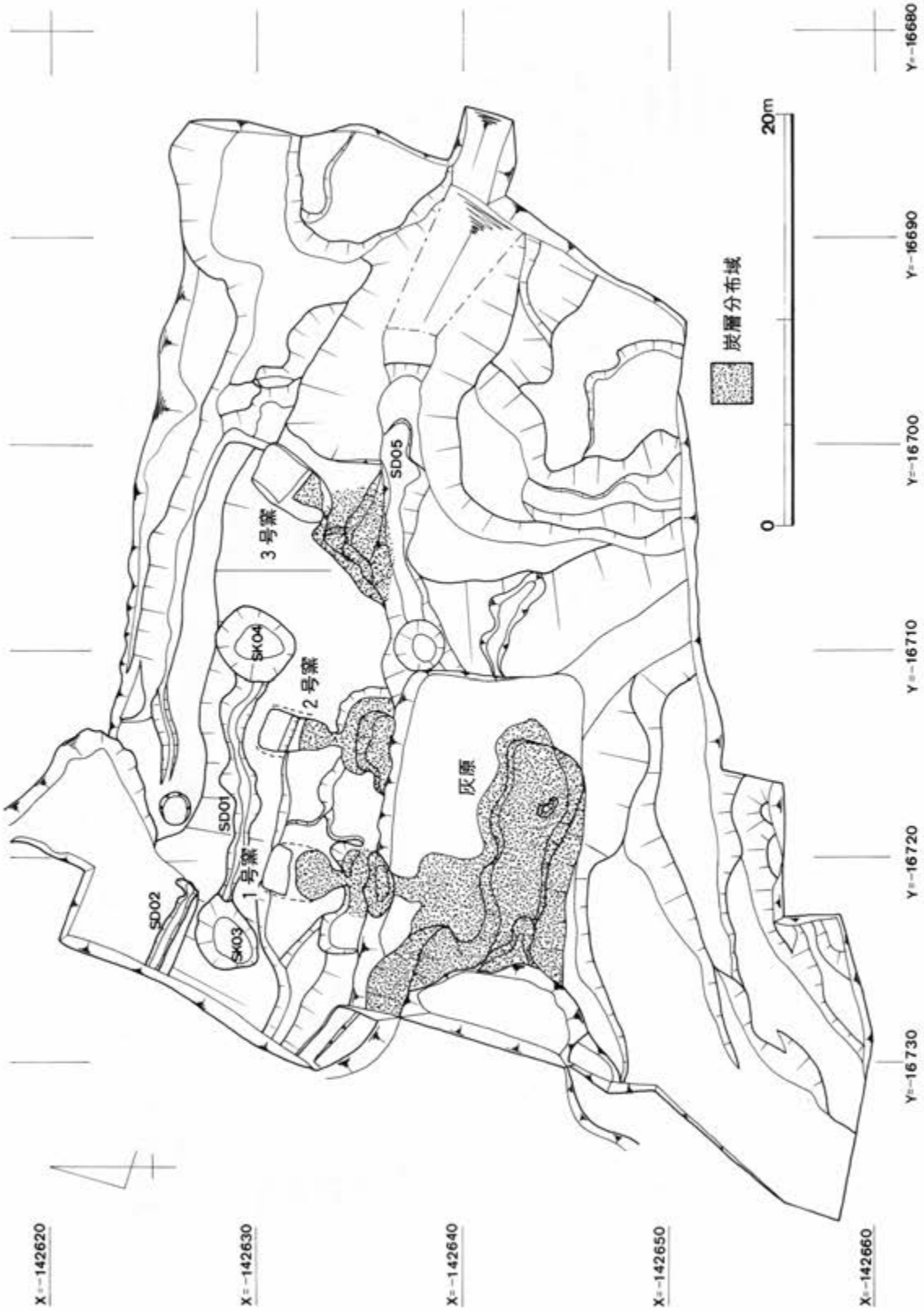
①１号窯(第156図、図版第71～73)

１号窯は、窯跡群の西側に位置し、３基の窯の中で最も標高が低く、焚き口付近で約48.3mを測る。窯の全長約3.6m、窯の北端は約50.4mである。

焼成室の奥行約1.2m・幅約2.1mの規模で、床には７条の火床が設けられていた。




第154図　調査地南北・灰原断面図




第155図　調査地全体図(1/300)

奥壁の表面は、大部分がはがれ落ちているが、北東端が一部残っており、その状況から奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がっていたと考えている。奥壁部分の掘形では、上端部分に斜めに立ち上がる若干の掘形の埋土が残る。北端隅の状況と、崩落していた壁材の状況から地山面にスサ入り粘土を塗って、一部に瓦片を貼り込んでいたと考えている(図版第72-(1))。

２号窯の奥壁のように全面に瓦片を貼り込んでいたようすはない。火床検出面直上で、奥壁から斜めに堆積した窯体片の上に多量の瓦片が重なって出土した。そのため、奥壁は壁裾のやや上から焼成室内側に向けて滑り落ちるように崩れ、次いで一部残っていたと考えている天井部が崩れ落ちたようである。窯体層の上層には多量の炭を含んだ黒灰色系の埋土があり、天井部に有機質のものを載せていた可能性もある。

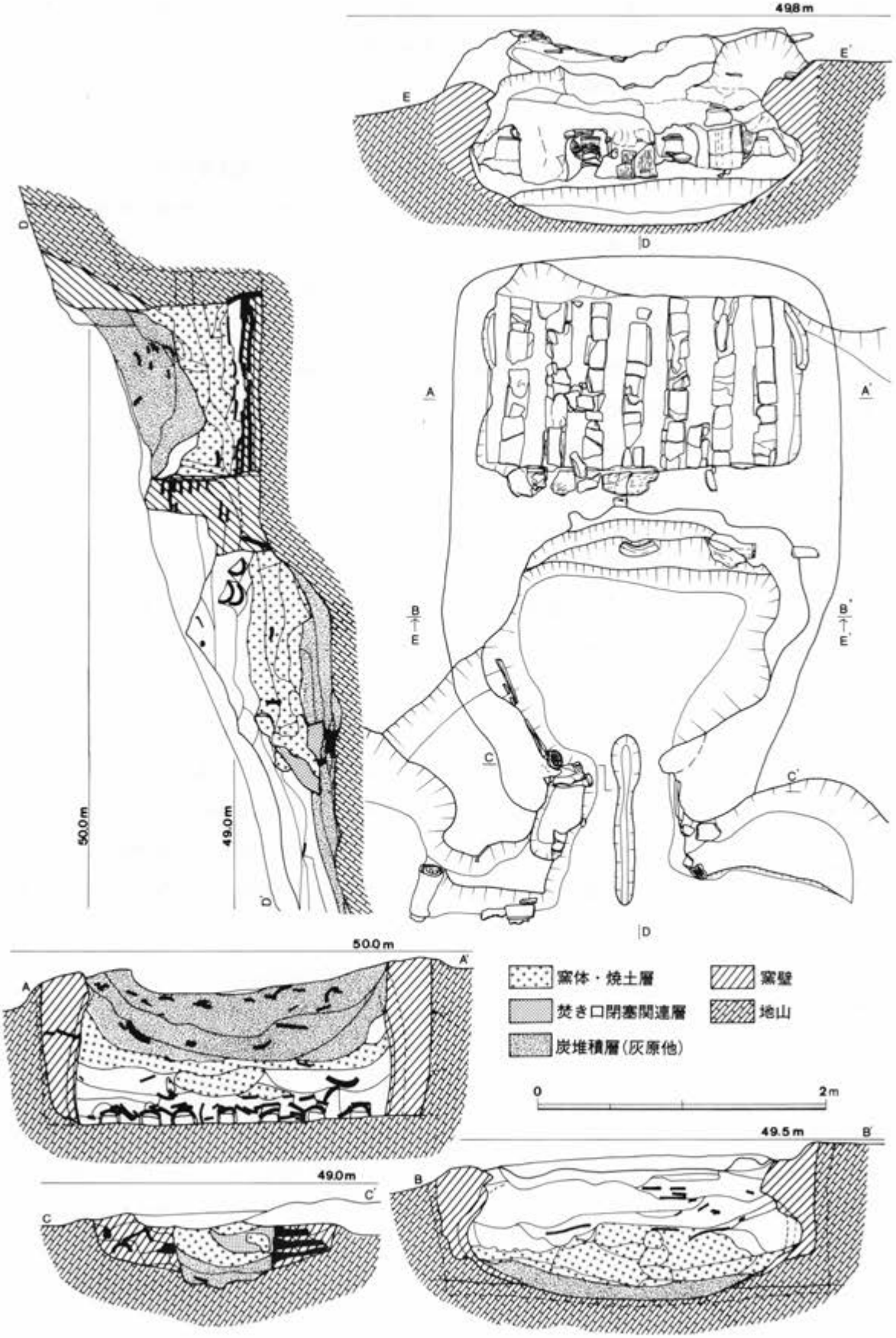
窯壁の最大残存高は、約1.3mである。両側壁は厚さ約0.2mあり、粘土を主として一部分に瓦を入れて造っていた。内壁表面は、スサ入り粘土で全面を固めていた。断面を断ち割った観察によれば、壁内の表面は灰色になって堅く焼け締まり、次いで橙色、暗褐色焼土と続く。

火床は地山面に粘土を置き、その上に丸瓦３～４個体を一段ならべ、さらにその上に割れた平瓦を置き、スサ入り粘土で接着・補強していた。

焼成室と燃焼室を分ける隔壁は、瓦と粘土を積んで造り、４か所に通焔孔が開いている。１か所の通焔孔と焼成室床面の２本の分焔溝が対応するようになっていた。分焔柱は割れた平瓦を積み上げ、スサ入り粘土で接着・補強していた。通焔孔の天井部は、平瓦を渡して造っていた。隔壁に積み上げていた瓦は、２・３号窯のような完形に近いものではなく割れたものがほとんどであり、破片数も他と比べて多くない。火が最もあたる燃焼室側の分焔柱の表面には、平瓦を貼って補強していたが、西端は欠損していた。この瓦の表面もスサ入り粘土で覆っていた痕跡がある。西端の通焔孔の西壁では、軒平瓦(6714Ａ)が瓦当面を主軸方向に向けてはめ込まれていた。

燃焼室は幅約2.1m・奥行約1.5m、焼成室の床との比高差は約0.4mある。両側壁は、粘土を主にして造り、焚き口に近い部分は平瓦、軒平・軒丸瓦の不良品を利用して補強していた。西側の壁からは、軒丸瓦(24)１点、軒平瓦(6767Ａ)３点が出土した。軒丸瓦は瓦当面を燃焼室側に向けていたが、軒平瓦は側面を向けて重ね、燃焼室側からは瓦当面が見えない状況であった。東側は、焼け歪んだ平瓦を利用していた。両側壁内面は、スサ入り粘土を貼っていた。燃焼室の側壁は円弧を描いて内湾しており、推定天井高は１m前後と考えている。燃焼室の内面の形状は、焚き口や隔壁側からも内湾していたと考えると、亀の甲羅状であったようである。燃焼室の天井は、粘土を多用して、部分的に瓦を使って造っており、使用していた瓦には、軒丸瓦(23・28・30)がある。燃焼室床面には、最終焼成時の炭状の灰がほぼ全面に厚さ約0.1m残っていた。燃焼室の床面は、地山のままで、補強などは行っていない。床面の形状はバチ形で、ほぼ平坦である。

焚き口は、両壁とも軒平瓦とスサ入り粘土を積み上げて造っていた。東側壁では軒平瓦(平城宮瓦型式(以下同じ)6732Ｆb)を瓦当面を内側に向けて垂直に三段重ね、瓦間はスサ入り粘土で接着固定している。瓦窯の操業時には、瓦当面をスサ入り粘土で覆うように造っていたのが残存状況で確認できた。西側壁も同様であったと考えられるが、後世の攪乱によって北側の一部を残し




第156図　1号窯実測図　1/40

て壊れていた。残存部分でも３段積みの状況は確認している。焚き口の床中央には、排水用と考えられる浅い溝があり、燃焼室から前庭部に続いている。溝の規模は、全長約1.2m・幅約0.15m・深さ0.05mである。埋土は、黒灰色砂質土に炭が交じる。焚き口は、灰色砂質土と完形の瓦などを使って閉塞している状況が観察できた。焚き口から左右に広がる前庭部に面する壁は、平瓦片などを入れて粘土で固めている。特に東側では、軒丸瓦(6138Ａ)の瓦当面を前庭部に向けて固めていた。

前庭部は、斜面を掘り下げ、テラス状の上段と、土坑状の下段の２段構造になっており、上段部分は下段部分を取り巻くように平坦面になっていた。下段部分は炭層が厚く堆積しており、斜面下手の灰原に浅い溝を伴って続いていた。

前庭部の西側斜面では、１号窯に伴うと考えている瓦溜まりを確認している。瓦溜まりは、斜面に瓦片と焼土が集積しているのみで、土坑などの施設は造っていない。

②**２号窯**(第157・158図、図版第74～77)

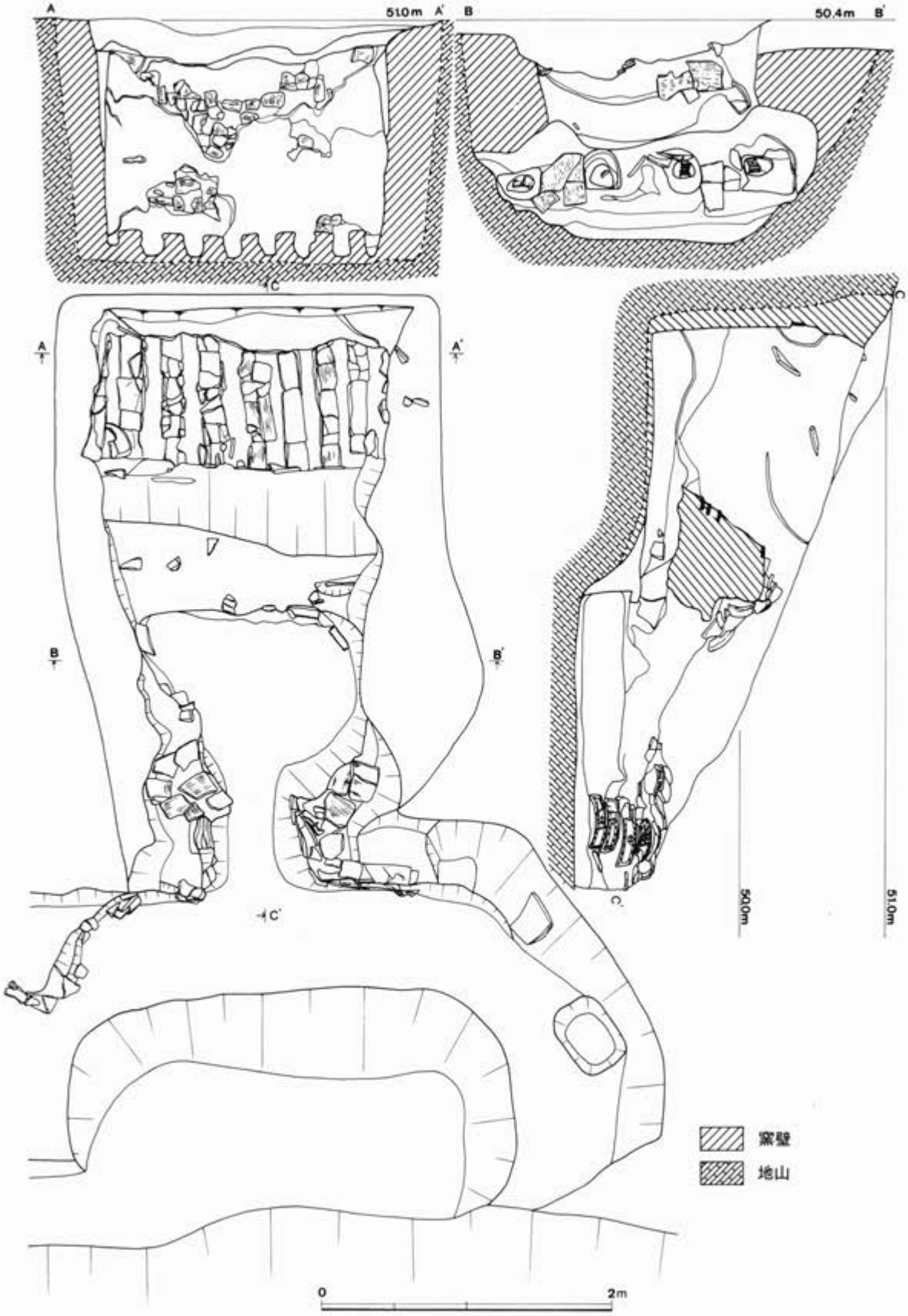
２号窯は、１号窯の東約５mに位置し、１号窯と主軸の方位をほぼ同じにしている。全長約４mで、標高は焚き口付近で約48.9m、窯の北端では約51.1mである。

焼成室の奥行約１m・幅約1.9m、窯壁の最大高は約1.3mである。奥壁では瓦と粘土を使って壁を強化している状況が観察できた。奥壁の表面には一部で剝落があり、地山面に平瓦片をスサ入り粘土を使ってタイル状に貼った後、スサ入り粘土を上塗りする。表面は、暗灰色に堅く焼き締まっていた。

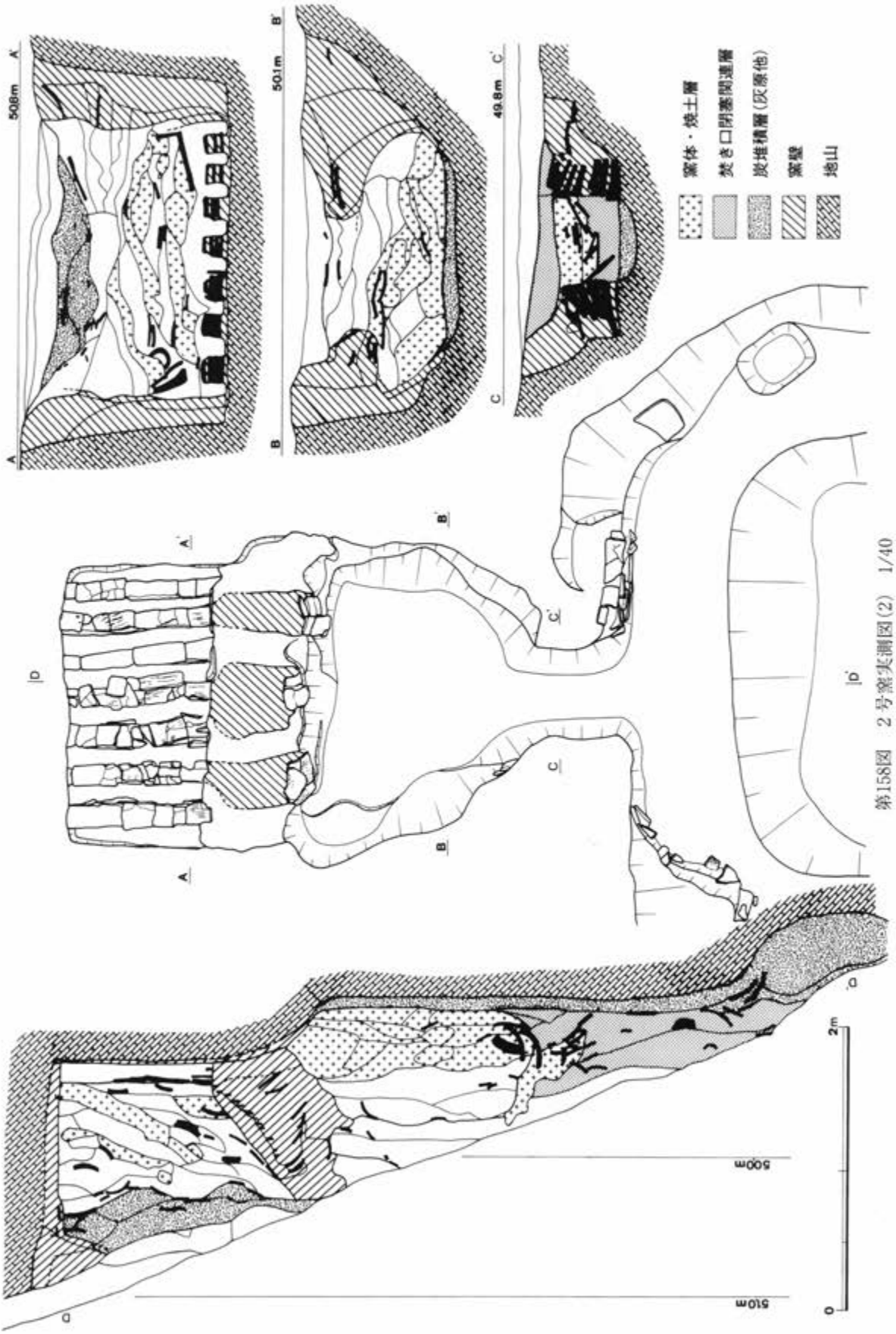
奥壁の上端部は、一部内傾化して残っており、窯の廃棄時に天井が残っていた可能性がある。焼成室を掘り下げた時の観察では、窯体層に挟まれて完形の平瓦や軒平瓦が中心に並んで重なりあって出土した。そのようすから、天井部は瓦を持ち送るように重ねて芯材とし、粘土で補強して造り、瓦を取り出すときに天井の一部を壊して作業したと想定している。最終操業後、窯が放棄され、残っていた天井部が落ちたと考えている。煙道部は奥壁にはなく、天井部に設けていたと考えられるが、確定できなかった。焼成室の埋土中最上層に、１号窯と同様に多量の炭を含んだ層が堆積しており、この層からの瓦の出土も多い。

火床は７条あり、地山面にスサ入り粘土を挟んだ平瓦を積み上げた後、のし瓦片を主として上面にならべてスサ入り粘土で接着・補強していた。焼成室の両側壁は、１号窯と同様に粘土を主として使い、瓦片を一部使用して積み上げ、内表面はスサ入り粘土で仕上げる。表面のほとんどは剝落しており、内側の暗褐色焼土層が目立っていた。断面を断ち割って観察すれば、壁の表面は灰色になって堅く焼け締まり、次いで内部は橙色、暗褐色焼土と続く。

また、窯の構造とは関係が薄い可能性があるが、軒平瓦２個体(41・42)が隔壁に貼り着くように出土した。41は、２号窯焼成室南東隅のロストル直上で、瓦当面を上に向けて出土した。42も同様な状況で、焼成室南西隅から出土した。不良品が偶然に残ったと考えるには不自然な位置であり、隔壁に貼り付いていたことなどから、むしろ意図的に置いたと考える方がよいと思われる。ともに、窯の機能に直接関係があるとは考えにくく、まじないのような性格をもっていたかもし




第157図　2号窯実測図(1)　1/40




第158図　2号窯実測図(2)　1/40

れない。

隔壁は、焼成室側では垂直に立たず、裾が火床にかぶさるように斜めに張り出していた。このため、焼成室側から通焔孔は見えない状態であった。隔壁は、平瓦の完形品を主として構築され、スサ入り粘土を挟んで斜めに積み上げ、焼成室側表面はスサ入り粘土を塗っており、窯壁が倒れ込んだ形跡はなかった。この状況からすると、隔壁を後から補強するために、瓦を多用して補修したと考えている。瓦は、西側下から東側へと積み上げている。本来の隔壁は、燃焼室側からの観察では、１号窯と同様の造りとみられる。焼成室と燃焼室の床の比高差は約0.4mある。分焔柱は１号窯と同様の造りで、燃焼室側表面に平瓦の凸面を向け広端面を下にして立てて、スサ入り粘土で固定強化していた。通焔孔は４か所あり、各通焔口は焼成室内の分焔溝２つと対応していた。

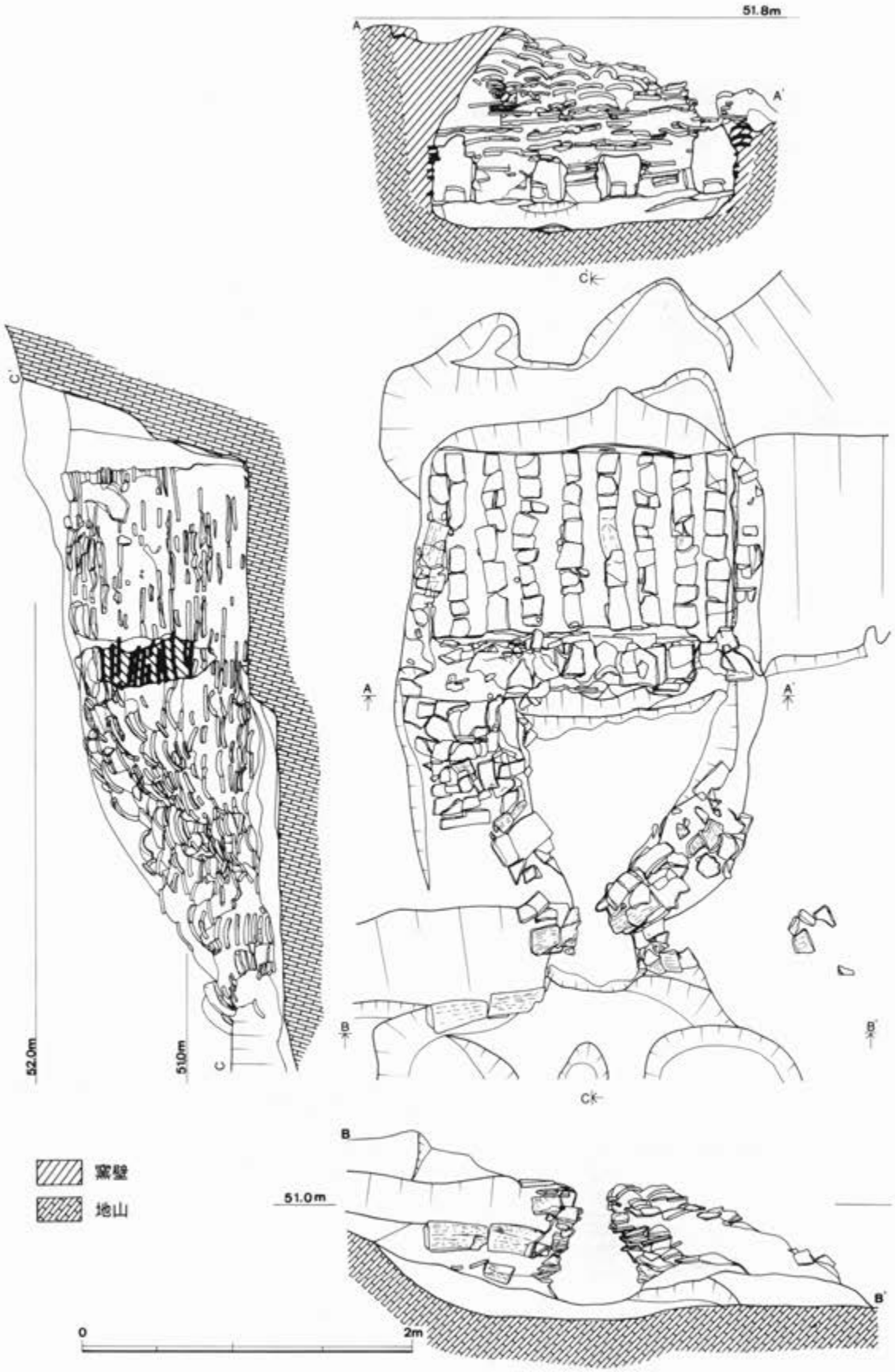
燃焼室は、幅約1.9m・奥行約1.6mを測り、推定天井高は0.9m前後である。燃焼室の側壁は、軒平瓦(6714Ａ)や平瓦を使って内湾させて造り上げていた。特に東壁では、軒平瓦(6714Ａ・6716Ａ)を各１個体含んでいた。表面はスサ入り粘土を塗っていたようであるがほとんど剥落している。内面形は、１号窯と同様であったろうと考えている。燃焼室の天井は、粘土を多用して、部分的に瓦を使って造っていた。特に、焚き口に近い付近では、焚き口から天井部に続く部分が残っていた。燃焼室床面には、最終焼成時の炭状の灰がほぼ全面に厚さ約0.1m残っていた。燃焼室の床面は、地山の礫層にあたっており、若干の湧水があったが、地山のまま補強などは行っていない。床面の形状はバチ形で、ほぼ平坦である。

焚き口の側壁は、１号窯と同じ軒平瓦(6732Ｆb)を東・西壁とも４枚積んで造っていた。焚き口の天井部分は落下していたが、東・西壁とも最上部に軒平瓦の狭端部片が残っており、6732Ｆbを使って橋掛けにしていた状況が観察できた。焚き口から左右に広がる前庭部に面する部分は、完形の閉塞用の瓦をやや乱雑に入れ、隙間を土で埋めていた。丸瓦などを積み上げ、粘土を使って固めるようにして造る。２号窯も灰色砂質土と完形の瓦を使用して焚き口を閉塞していた。

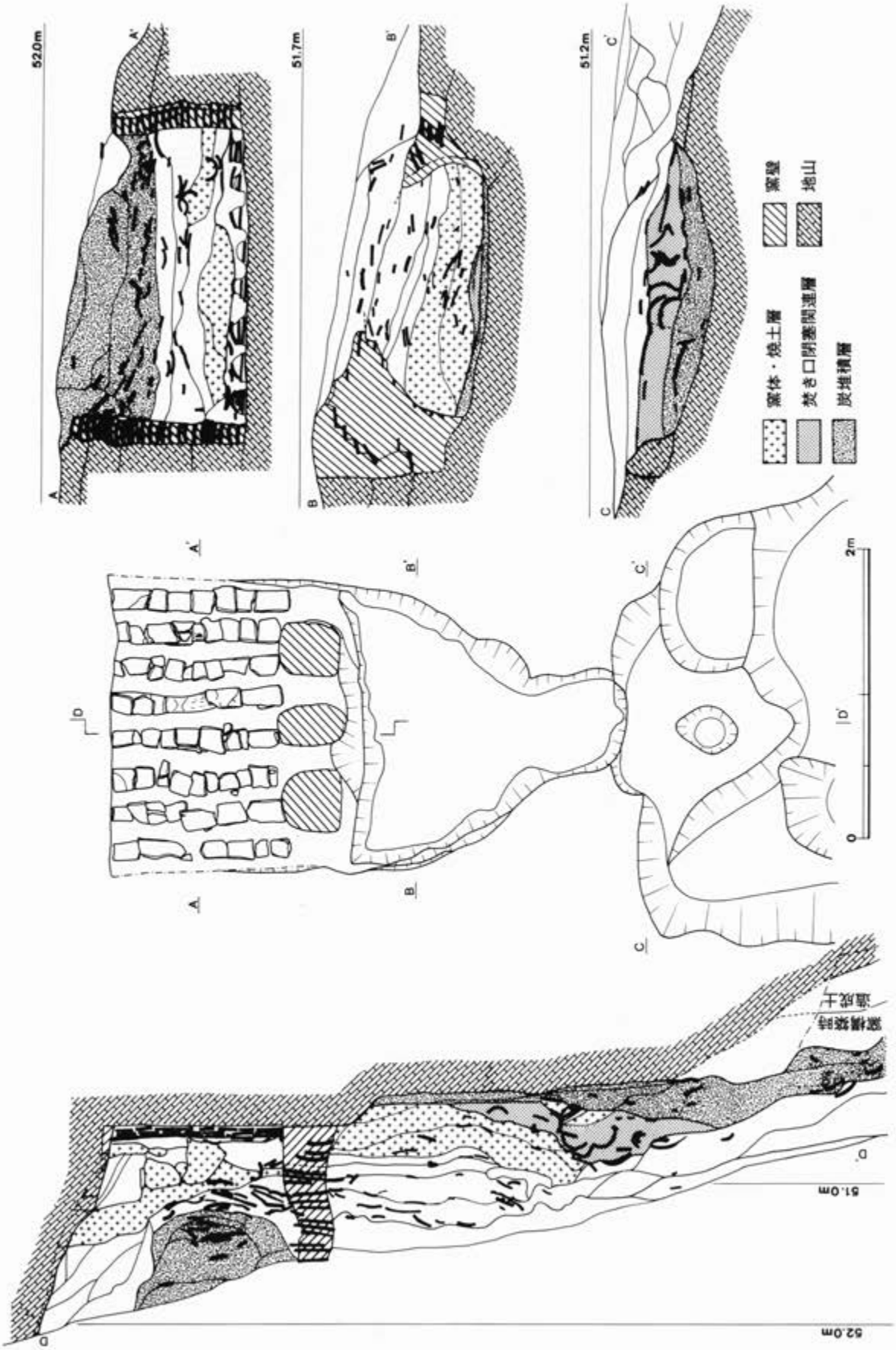
前庭部は、焚き口から少し離れると段差があり、１号窯と同様に上下２段の構造である。下段部分を取り巻くように、上段部分が狭いテラス状に設けられている。下段から先の灰原はすでに削平されて存在していなかった。下段部分の炭層には、多量の瓦片を含んでいた。前庭部西側の斜面には、２号窯に伴うと考えられる瓦溜まりを確認している。瓦溜まりの底は、若干のくぼみがある程度で、傾斜面に直接瓦と焼土を投棄した状況であった。

③**３号窯**(第159・160図、図版第78～81)

２号窯の東約９mに位置し、主軸方位は１・２号よりやや東に振っている。全長は約3.7m、標高は焚き口付近で約50.3m、窯の北端は約52.1mである。３号窯の特徴は、１・２号窯に比べて、窯の構造材にふんだんに瓦を使用している点にある。また、瓦を含めて窯全体が赤橙色をしており、酸化炎による焼成が行われていた可能性がある。おそらく壁など窯全体の密閉性が悪かったためと考えている。こうした影響か、燃焼室内の床には、１・２号窯のような炭層の良好な堆積は認められなかった。




第159図　3号窯実測図(1)　1/40




第160図　3号窯実測図(2)　1/40

ところで、３号窯の焼成室東側の上から燃焼室の東側を通り、前庭部を抜け、下の水田に達する近・現代の溝があり、遺構の残りにかなりの影響があった。

焼成室は、奥行約１ｍ・幅約２ｍの規模で、床には８条の火床を設ける。１・２号窯とも火床が７条であるのに対し、やや変則的である。火床の造り方は２号窯と同様に、地山面に平瓦の破片とスサ入り粘土を使って積み上げる。奥壁は、表面が１号窯と同じように剝がれ落ちていた。奥壁の構造は、１・２号窯と同様に地山面に瓦をスサ入り粘土で貼って固めていた。窯の側壁は、１・２号窯と異なり、焼成室、燃焼室、隔壁ともに平瓦と粘土を多用してレンガ状に積んでいた。表面は、スサ入り粘土で覆っていたが、ほとんど剝がれ落ちていた。３号窯でも、奥壁が崩れたことにより、残っていた天井部分が落下したと考えている。

隔壁には、４か所の通焔孔が設けてある。隔壁の東側上部は、水田関連の溝によって攪乱を受けたため東側の通焔孔の上部付近まで破壊されていた。隔壁は平瓦を積み上げて造るが、天井部に近い部分と中位以下の部分では瓦の積む方向が異なる。下方は平瓦の長軸を窯の中心軸に対し直角に積んでいるが、上部は平瓦の長側辺を窯の軸方向に平行に向けて積み、端部が下の部分より出っ張るようにしていた。これは、おそらく天井部を造る際の支えの工夫と考えている。

燃焼室は、奥行約1.7ｍ・幅約２ｍ、焼成室と燃焼室の床の比高差は１・２号窯に比べて低く、約0.15ｍである。燃焼室西側は、側壁から続く天井部分が良好に残っていた。天井は、重ね合わせた瓦を芯材にしてスサ入り粘土で固定しながら窯壁から円弧を描いて持ち送っており、外側は地山に近い砂質土で覆っていた。燃焼室の内側はスサ入り粘土で塗り固めていたようであるが、瓦の表面にその残りが観察できる程度で、ほとんど剝落していた。内面の推定天井高は、１ｍ前後であろう。東側側壁は、隔壁と同様に溝によって上部が壊されていた。

焚き口は、丸・平瓦を用いて閉じていたが、燃焼室床面に炭状の灰は少量残っているのみであった。瓦は、焚き口に差し込むように入れ、隙間には焼土がつまった状況であった。焚き口の側壁は、平瓦を積み上げているだけで、軒平瓦は使用していなかった。焚き口の天井部は、平・丸瓦をわたして造っていたようである。前庭部に面する部分は、西側では平瓦の完形品を貼りつけて強化していたが、東側は残っていなかった。

前庭部は、３号窯を構築する時の廃土で溝ＳＤ05を埋めて、焚き口付近を整地していたが、床面には不整形な窪みがあった。前提部西側では、斜面を掘り下げて造っていたが、東側には大きな段差はなかった。灰層は、前庭部付近でまとまって確認した。下手側は、２号窯付近にまでは広がらず、３号窯東側上面を通る後世の溝で削平されていた。また、前庭部の南西側に隣接する部分で、３号窯に関連すると考えている瓦溜まりを確認した。規模は、直径１ｍ前後を測り、不整形な焼土と炭を伴う高まりとなっており、斜面に若干の窪みがある程度であった。

④ＳＤ01・02、ＳＫ03・04（図版第82～83-(1)）

ＳＤ01は、１・２号窯の上方の斜面に、幅約１ｍ・深さ約0.2ｍの規模で、排水用として設けられ、その東西両端にＳＫ03・04が付属していた。浅く掘られたＳＤ01の中には、瓦片が多量に入れられていた。特に、２号窯の上方では、焼成に失敗したと考えられる生焼けの瓦がまとまっ

て出土した。暗褐色に焼けた瓦は、整然と重なりあって溝の検出面から出土している。ＳＤ01の深さからすると、雨水の排水を主目的とし、湧き水を意識する必要はなかったようである。現在では、２号窯燃焼室床面で若干の湧き水が認められるが、この湧き水は東側の池の影響と考えられ、操業当時はため池もなく湧き水に対する処置は必要なかったと思われる。

ＳＫ03・04内は、どちらとも少量の瓦片や炭状の灰が中位程度堆積しており、上層は廃棄後に堆積した流入土で、不良品などの廃棄用とは考えにくい状況であった。ＳＫ03は、東西約3.5ｍ・南北約３ｍの楕円形に近い土坑で、斜面の下手側には立ち上がりがほとんどない。東側の溝付近と土坑の中央部でややまとまって瓦片が出土した。ＳＫ04もほぼ同様の土坑で、東西約3.5ｍ・南北約４ｍの円形に近い形状で、斜面下手側に若干の立ち上がりがある。溝付近でややまとまって瓦片が出土した。

ＳＤ02は、ＳＫ03の北側約1.5ｍに位置し、平坦面端部に沿って西にのびる溝である。幅約0.8ｍ・検出長約4.5ｍ・深さ約0.1ｍの規模で、埋土に炭片が混じる。瓦片が数片出土した。

⑤**ＳＤ05**(図版第83-(2))

調査地東端で、一部が３号窯の前庭部下層に続き、２号窯の前庭部東端で途切れる。幅約10ｍ・深さ約３～４ｍの溝である。谷地形の続きとも考えられるが、谷奥の北側に偏っており、両側壁も急角度の傾斜を持つことから遺構と考えている。溝底付近からは瓦片が出土し、人工的に埋められたと考えられる黒灰色粘質土ブロックを含む土層もあった。東端は、現在のため池につながっている可能性があり、ため池とともに粘土採取跡を想定している。この溝が一部埋まってから３号窯が造られ、その廃土でさらに整地して前庭部を造っている。

⑥**灰原**(図版第84-(2)・(3))

１号窯の灰原は、谷中央にかけて厚く堆積している。前述したように、水田耕作の影響のため東側の残りは悪い。また、西側の上層部分は、暗灰黒色砂質土に瓦片が小片化し、炭が多量に混じるなど、二次堆積の状況が見られた。付近からは、多量の不良品瓦に混じり、軒平瓦片も出土した。２号窯の灰原は、谷部分が水田に利用された時に平らに削られたため、斜面にある前庭部分を除いて、あまり残っていない。３号窯に伴う灰原は、前庭部付近ではよく残っているが、それより下手にはほとんど残っていない。こうした状況のため、各窯の操業順は、灰原の層序では確認できなかった。また、１号窯から２号窯間の谷底部分には、窯構築時の廃土層が旧地形の自然の溝を埋めるように灰層の下に広がっていた。

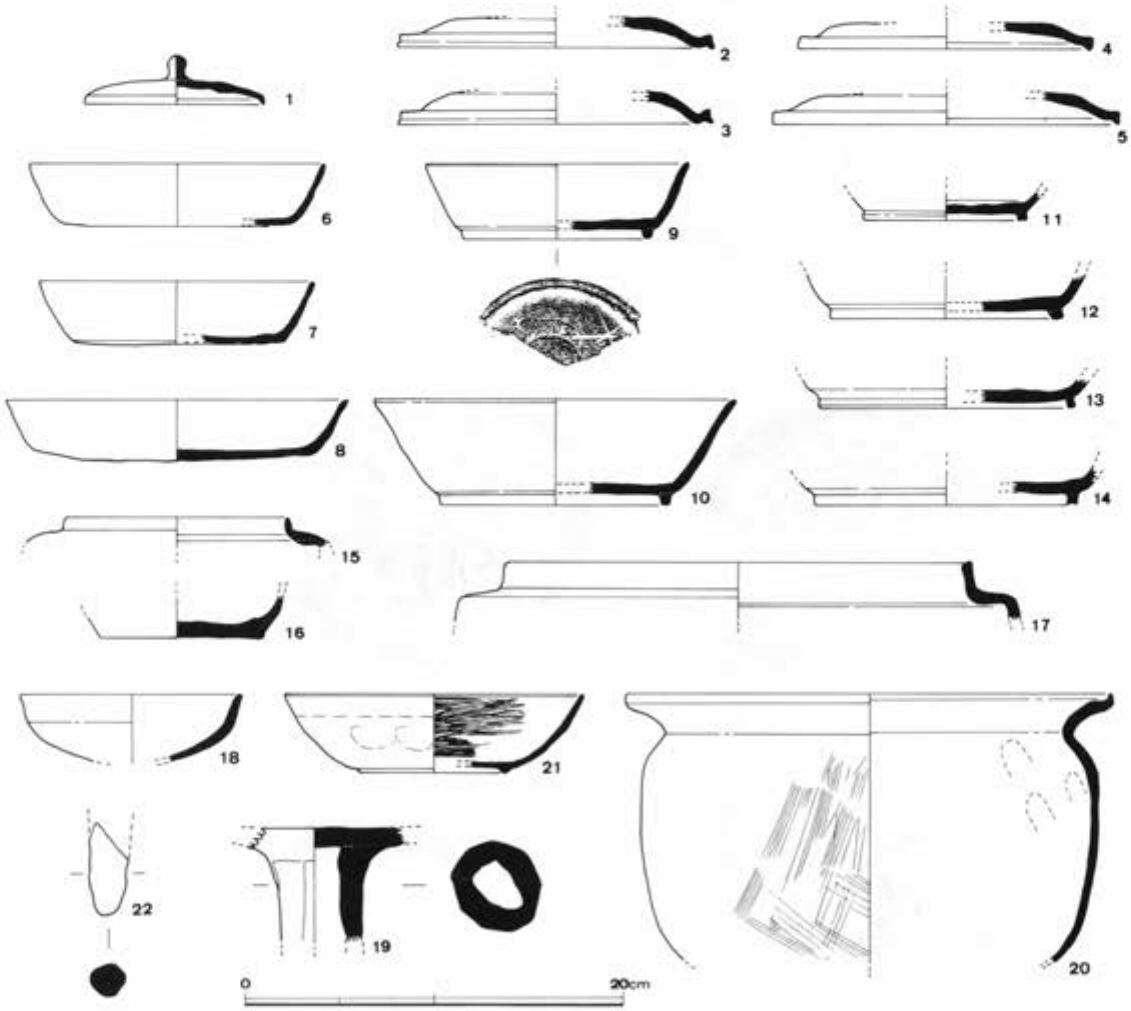
### ３．　出　土　遺　物(第161～167図、図版第85～88)

出土遺物の大部分は瓦類である。土器類は、灰原を主として整理箱に５箱ほど出土した。土器類は、ほとんど1/2以下の破片である。土器のうち、一部を図化して載せた。１～17の須恵器のうち、１はつまみに特徴のある小型の杯蓋で、ＳＤ01から瓦とともに出土した。10は１号窯前庭部、２は２号窯前庭部、３・９は３号窯前庭部の炭層から出土している。９は、底部にヘラによる線刻があり、「大」と読むのかもしれない。18～20の土師器のうち、19は高杯の脚部上端の破

片である。21は、黒色土器の口縁部から底部にかけての破片である。炭素の吸着は、内面が顕著で外面口縁部付近にも若干の煤の付着がある。内面には密にヘラミガキを施す。ＳＤ05の西端から出土しているが、溝に混入したものと考えている。22は、土馬の脚部の破片である。土馬は、このほか、胴部片が灰原から出土しており、付近で祭祀を行った可能性がある。土器の時期は、ほぼ奈良時代後半にあたると考えている。

瓦類は、整理箱で約500箱出土している。そのほとんどは丸・平瓦の破片である。

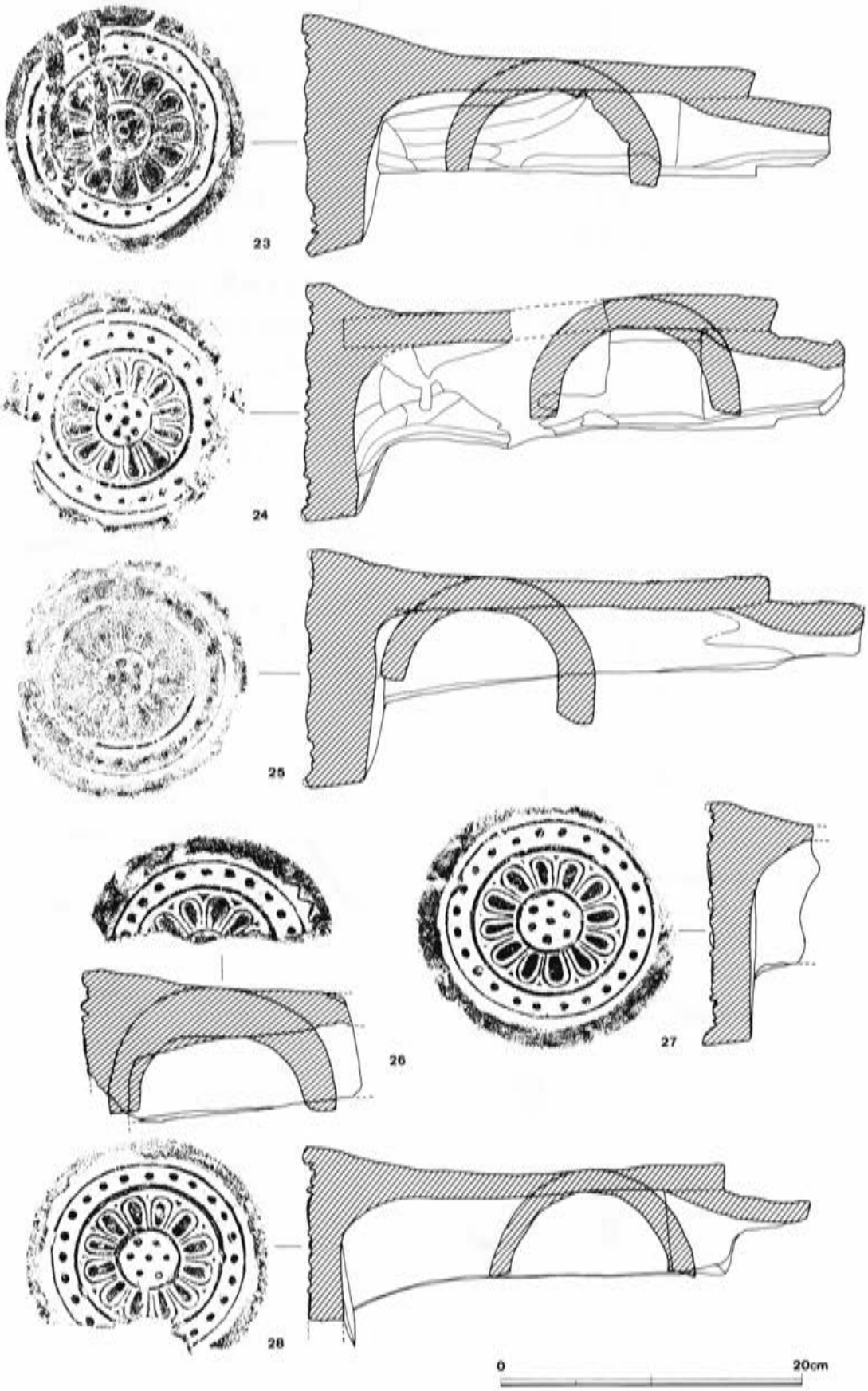
現在確認している軒丸瓦の種類は、6133Aa(31・32)、6138A(23～25)・6138B(26)・6138F(27～29)・6138Ｉ？(30)である。[註8] 6133Aaは上人ヶ平遺跡及び市坂瓦窯で生産された瓦で、今回の調査では、32は１号窯の焼成室埋土から、31は１号窯前底部西側から出土している。31は、瓦当面の一部を欠く以外は完形であるが、黄褐色を呈する軟質の焼成で、瓦当面の残りは悪い。玉縁部分は筒部と一体に作る。32は、灰色の須恵質に焼けた瓦当部分の一部である。23は、１号窯の燃焼室天井部に使用されていたもので、黒色に焼け筒部が焼け歪んでいる。全体に溶融した灰




第161図　出土遺物実測図(1)

1～17.須恵器　18～20.土師器　21.黒色土器　22.土馬

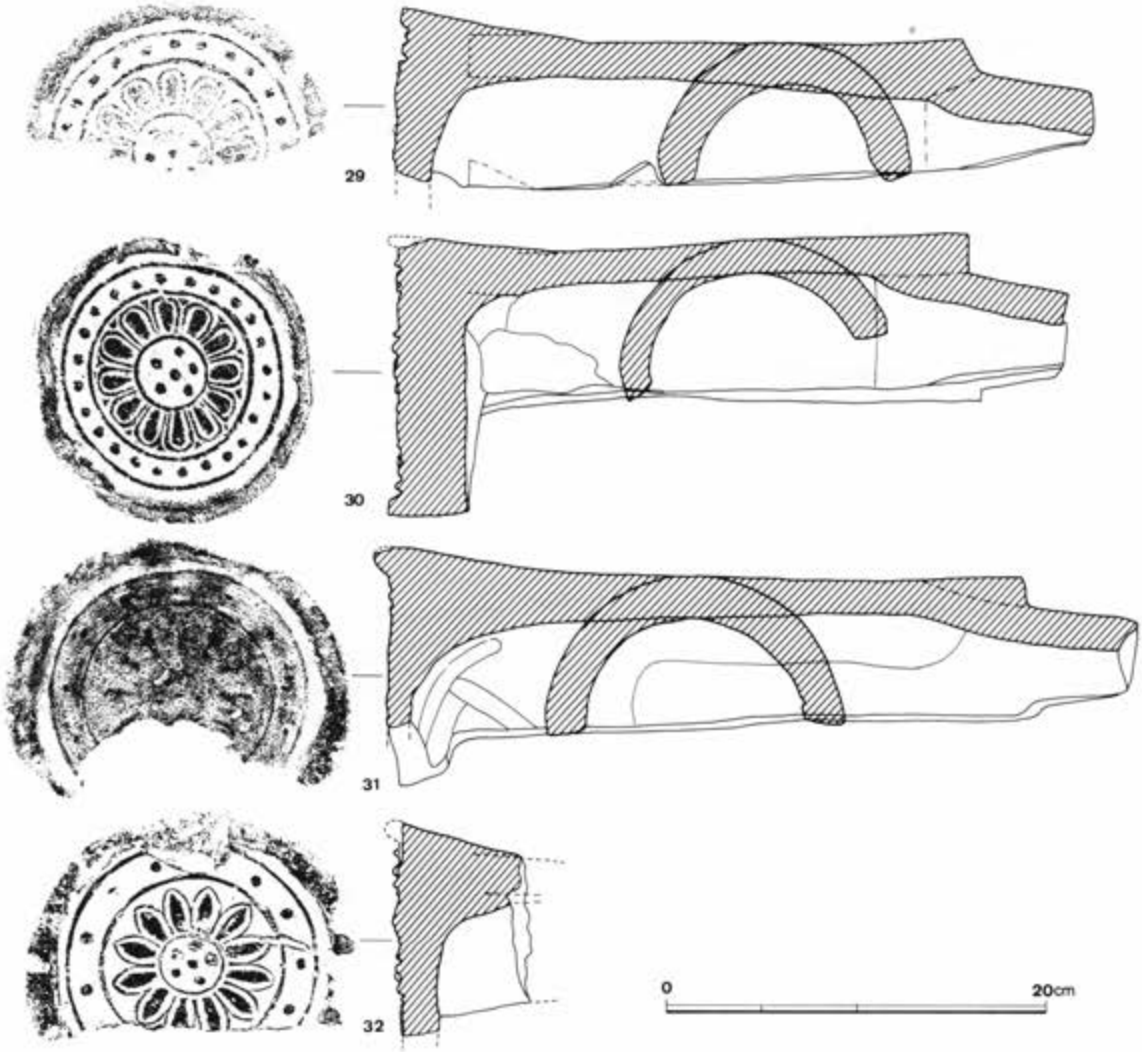
1.ＳＤ01出土　2～12・15～20・22.灰原出土　13・14.包含層出土　21.ＳＤ05出土



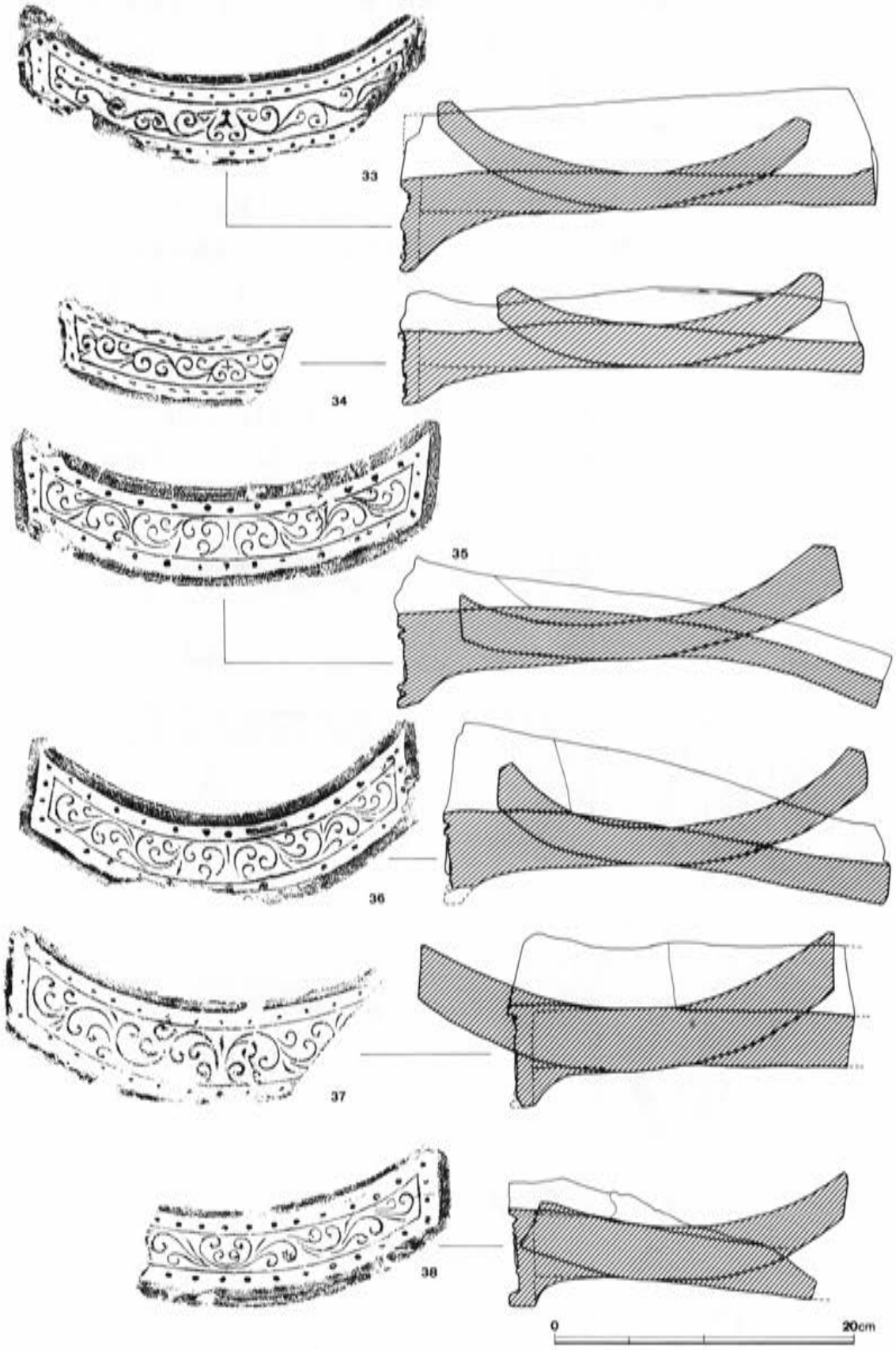

第162図　出土遺物実測図(2)

が付着し、瓦当面には瓦の端部が熔着した痕跡がある。24は、1号窯の燃焼室西壁内の焚き口に近い部分から出土した。筒部の中央部を欠くが、硬質に焼けている。25は、2号窯西側の瓦溜まりから出土した。黄灰色軟質の焼成で、玉縁中央に凸線が1条めぐる。6138Aの玉縁部分は、円筒部分に差し込んで作られている。26は、2号窯の焼成室から出土した。外区に線鋸歯文がめぐるのが特徴である。淡黄褐色を呈し軟質である。27は、1号窯の燃焼室から出土した。灰黒色を呈し、やや軟質である。筒部の中央部分が極端に薄くなっており、粘土板の接合付近のために薄くなっていると考えている。28は、1号窯の燃焼室から出土した。灰色を呈し、やや軟質である。全長は、今回出土中では最も短い。29は、2号窯の前庭部から出土した淡黄灰色軟質のものである。焚き口の閉塞に使われていた。30は、1号窯燃焼室天井部から出土している。黒灰色で、硬く焼けている。瓦当面の大きさが6138Iの既出例に比べ小さいため、型式決定には疑問が残る。

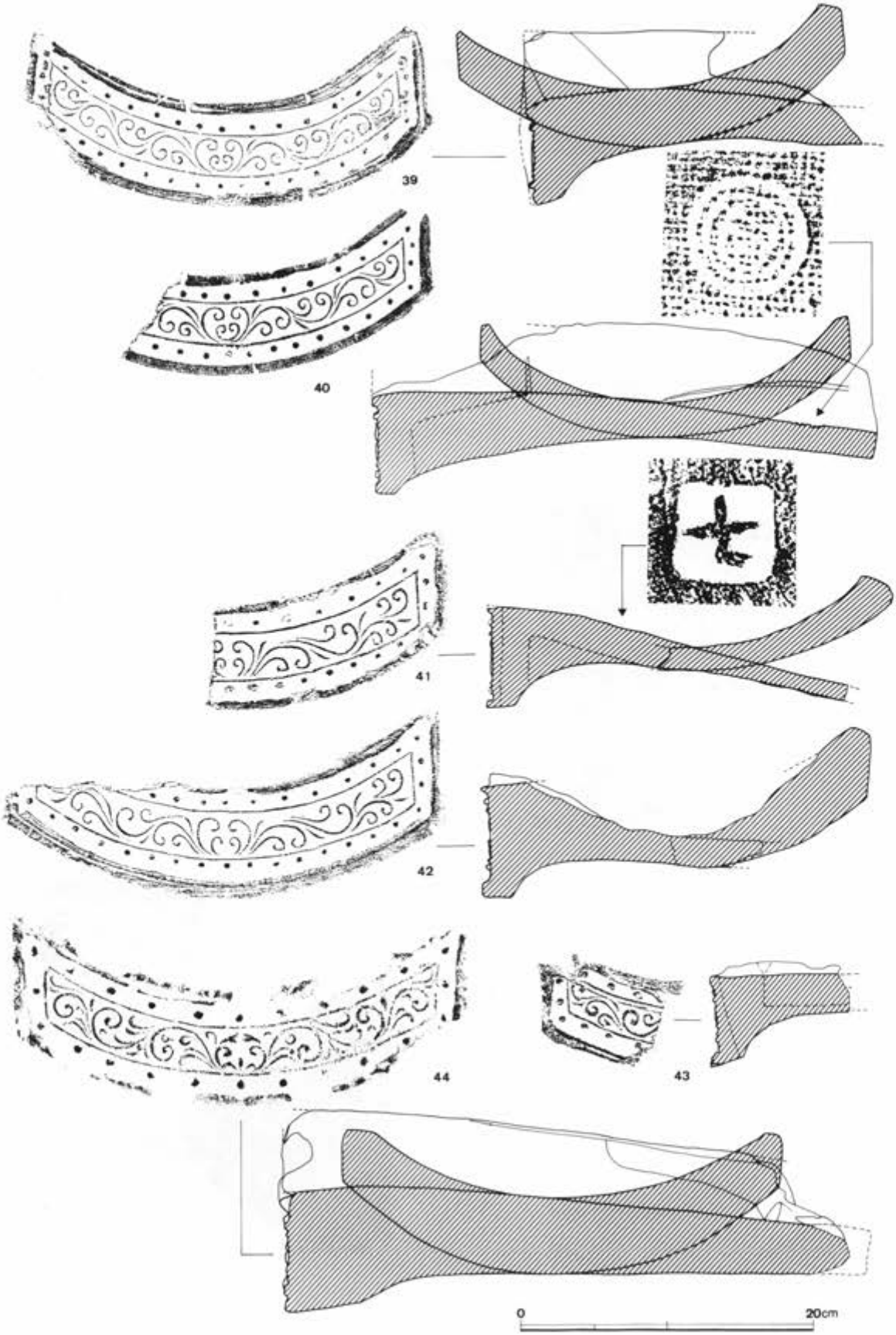
軒平瓦は、6767・6768が主として1・2号窯、灰原から出土している。現在確認している軒平瓦の種類は、6714A(33)・6716A(34)・6767A(35・36)・6767B(37)・6768A(38)・6768B(39・40)・6768C(41・42)・6768D(43)・6732Fb(44)である。33は、2号窯燃焼室の東壁内か




第163図　出土遺物実測図(3)

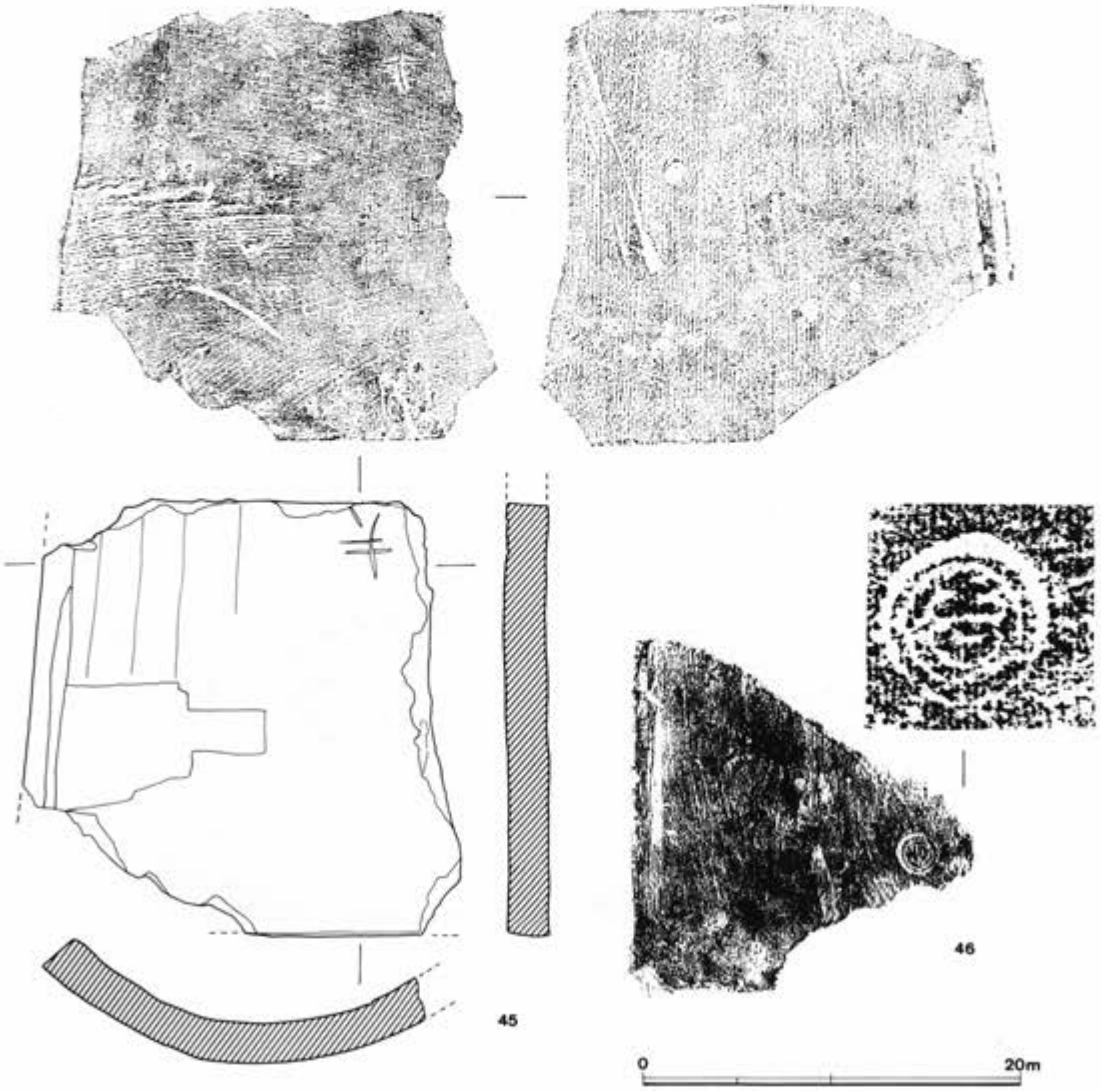



第164図　出土遺物実測図(4)

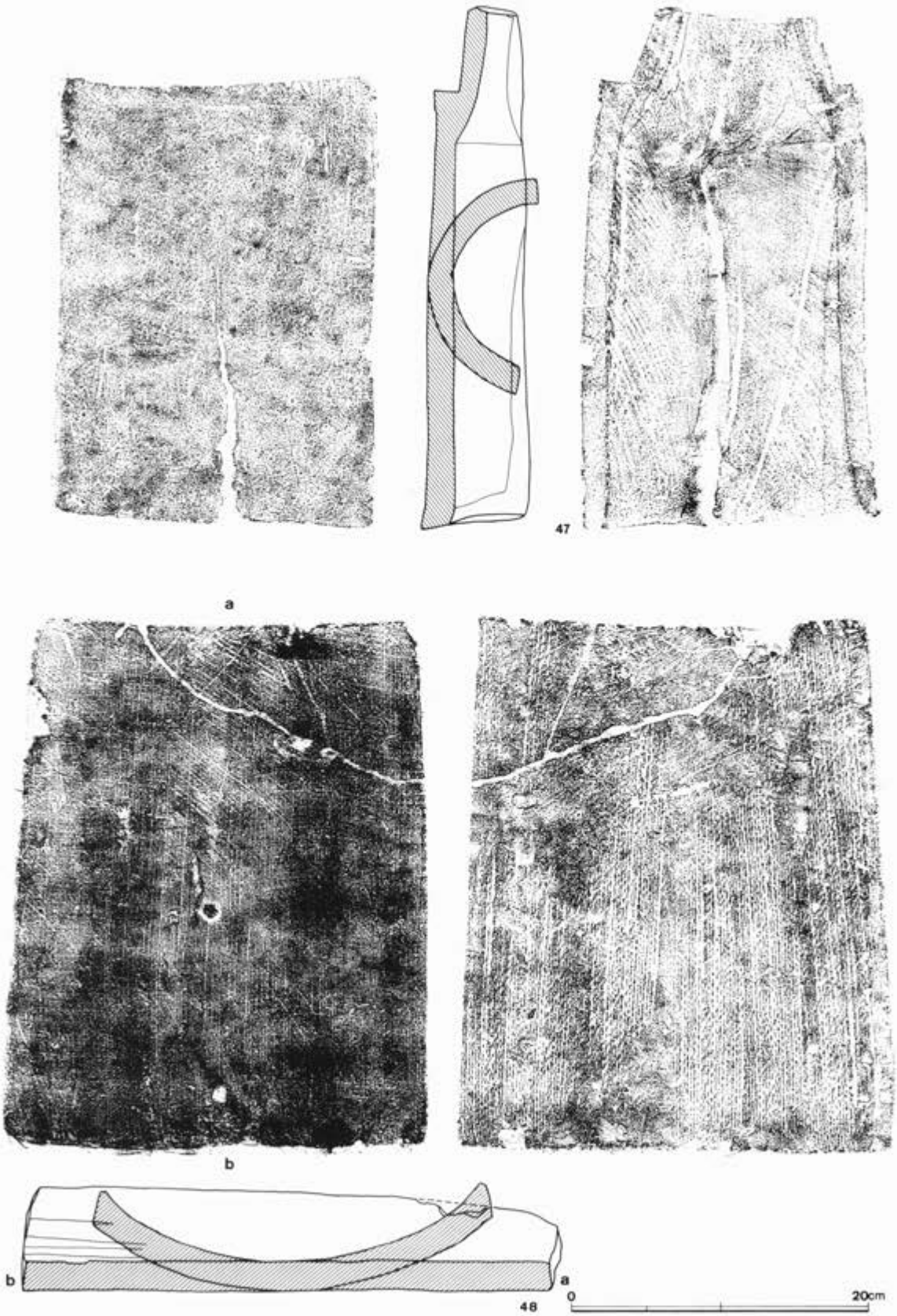



第165図　出土遺物実測図(5)

ら出土した。灰黒色でやや軟質焼成の個体である。凹面には布目痕が残り、瓦当付近は横方向の削りを行う。凸面は縄目叩痕が残り、瓦当付近はタテ方向の削りを行っている。6714Aは、1号窯隔壁からも出土している。6714Aは、音如ヶ谷瓦窯A期(Ⅲ・Ⅳ号窯)の製品とされており、歌姫瓦窯からの出土も確認されている。34は、2号窯燃焼室東壁から出土した。灰色で硬質に焼けており、瓦当面付近のみ黒灰色に変色している。壁体内で2次焼成を受けた可能性がある。調整は33と同様である。やはり音如ヶ谷瓦窯Ⅲ号窯から出土している。35～38は、2号窯の焼成室から出土した、天井材に使われていた可能性が高い個体である。35は、暗灰色で硬質に焼けた完形品である。調整は33と同様である。36は、黒灰色で硬質に焼けたほぼ完形品である。37は、瓦当面の右側と狭端部側を欠いている。淡黄褐色でやや軟質に焼けている。凸面瓦当部付近は、ヨコナデ調整の範囲が6767Aに比べ広い。38は、褐灰色でやや軟質に焼けている。39は、2号窯の焚き口付近から出土した。狭端側を欠き、暗灰色でやや硬質に焼けた個体である。凸面の顎傾斜部分をタテ方向の削りの後ヨコナデを行う。他の調整は33と同様である。40は、1号窯焼成室から




第166図　出土遺物実測図(6)




第167図　出土遺物実測図(7)

出土した瓦当面の左側を欠く個体である。灰色で硬質に焼けており、凹面の狭端部付近中央に刻印を施している。布目痕がよく残っているため、刻印は見えにくいが、46の例と同じく、二重円に「吉」の文字が刻印されていると判断している。41は、２号窯焼成室の南東隅のロストル直上で、隔壁面に貼り付くように出土した、瓦当面右側の破片である。平瓦の部分が薄い特徴があり、全体にきゃしゃな印象を受ける。２次焼成のため、赤褐色でやや硬質に焼けている。凹面側の瓦当端から約９cm内側に刻印がある。刻印は、一辺1.7cmの方形内に「七」と読める。音如ヶ谷瓦窯出土例にも同様の方形の刻印例があり、「三」・「五」の文字が刻印内に認められる出土例が知られている。(注9) 42は、２号窯焼成室南西隅のロストル直上で、隔壁面に貼り付くように出土した、瓦当面左側上部を欠く破片である。２次焼成のため、淡黄褐色でやや硬質に焼けている。平瓦の部分が41に比べ厚い傾向がある。43は、３号窯の下手の谷部東端付近の包含層から出土しており、青灰色で硬質に焼けている個体である。瓦当面の左端の破片である。

44は、１号窯焚き口東壁最下段から出土した。狭端部を欠く以外は、完形に近い個体である。凹面黒灰色、凸面灰色で、軟質の焼成である。凹面には狭端面付近に布目痕が残る以外は、タテナデの後ヨコナデを施す。凸面には、顎付近以外は縄目叩痕が残る。顎付近は剥離が著しいが、ヨコナデ調整であろう。他の軒平瓦に比べ格段に厚く大きく重い。この１・２号窯の焚き口に使われている6732Ｆbは、東大寺所用瓦である。

刻印の例は、３個体２種類確認している。41の例は「七」と読め、軒平瓦6768Ｃの凹面に押印する。もう１種類は、40・46に見える同心円内に文字らしい形跡が確認できる刻印である。46は、２号窯の隔壁内から出土した、赤橙色硬質焼成の軒平瓦の一部の可能性がある平瓦片である。凹面の中央付近に直径2.1cmの二重円内に「吉」と刻印している。

45の例は、ヘラ描きによる文字瓦で、平瓦の凹面に「夫」と刻んでいる。同じように、「夫」と書いた文字瓦が音如ヶ谷瓦窯からも出土している。(注10)

47は、１号窯の焚き口付近から出土した丸瓦の例である。暗灰色で硬質に焼けている。筒部内面に糸切り痕と布目痕が残る。筒部端部付近に亀裂が走り、粘土板から整形されて、焼成時に布の縫合部の影響で裂けたと考えている。玉縁部分は筒部に差し込んで作る。

48は、２号窯の焼成室から出土した平瓦である。窯体層に混じって、何枚かの平瓦と並んで出土したことから、焼成室天井部分に使われていた可能性が高い。暗灰色でやや硬質に焼けている。凹面には糸切り痕と布目痕が残り、広端面付近には模骨痕状の段差がある。凸面には全面に縄目叩痕が残る。粘土板一枚作りによって製作されたと考えている。

## ４．　ま　と　め

小さな谷の南向き斜面に、３基の平窯が確認できた。窯は、いずれも半地下式の平窯で、焼成室に火床をもついわゆるロストル式平窯である。窯の構造は、窯壁に瓦を多用する造りなど、音如ヶ谷瓦窯跡と共通する点もあるが、通焔孔(分焔孔)の数が音如ヶ谷瓦窯Ⅰ・Ⅱ号窯では分焔道と対応するのに対し、五領池東瓦窯では３号窯の一部を除き、基本的に通焔孔１と分焔道２つが

対応することなどに違いがある。

３基の窯は、１・２→３号窯の順に構築されたと考えている。これは、１・２号窯がセットで造られた状況であるのに対し、３号窯は単独で、前記の２基の窯と主軸方位や窯壁の構造が異なること、窯の構築に使っている瓦の量が１・２・３号窯の順で増加すること、ＳＤ05がある程度埋まった後に、３号窯が構築されていることなどから判断した。特に３号窯は、窯を造る地形条件としては、１・２号窯よりも悪い場所であり、追加的に設けられた可能性がある。また、各窯に伴う瓦溜まりの位置から、当時の作業のようすの一端が想像できる。焼成室から瓦を取り出すのは窯の西側から行って、不良品をその下方に捨てる傾向があったようである。また、当時の足場の状況を考えると、生瓦の供給や、製品の運搬は窯の上方を通っていた可能性が高いと思っている。今回の調査では、工房跡を確認できなかったが、西側の盆地側に工房跡を想定することも可能であろう。

出土した瓦は、音如ヶ谷瓦窯跡、法華寺阿弥陀浄土院跡出土のものと共通するものが多く、五領池東瓦窯跡で焼かれた瓦も、法華寺阿弥陀浄土院へ供給された可能性が高いと考えている。出土瓦の形式のほか、文字瓦の「夫」の出土例や、音如ヶ谷瓦窯出土の「三」・「五」と今回出土した「七」の刻印の類似性からも音如ヶ谷瓦窯と五領池東瓦窯との緊密な関係が想像できる。場合によっては音如ヶ谷瓦窯と共通の工房、さらには同一の工人集団による生産状況も想定することも可能であろう。また、東大寺所用瓦の6732Ｆbが１・２号窯の焚き口に使われている点からすれば、法華寺の施設造営に造東大寺司が何らかの関係を有していた可能性もあろう。

窯の操業していた時期は、法華寺阿弥陀浄土院の造営時期を考えると、奈良時代後半（第Ⅳ期・８世紀後半）頃と推定できる。音如ヶ谷瓦窯との前後関係では、Ａ期生産瓦の軒平瓦6714Ａやｂ期生産瓦の6767Ａが１・２号窯の壁材に使用されていることから[注11]、五領池東瓦窯が後から造られたといえる。隣接する市坂瓦窯も、この時期に操業していた可能性があり、五領池東瓦窯と操業時期が重なっていたことも想定できる。ただ、上人ヶ平遺跡をこの瓦窯の工房跡とするのは出土瓦からはいえない。

出土遺物は、まだ整理中であり、今後の整理作業の進行によって新たな知見を得られると考えている。なお、窯跡群付近は盛り土工事の予定であるので、一部断ち割りを行って、調査を終了している。

（有井広幸）

注１　上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡は、すでに調査が実施され、奈良時代後半に、平城宮大膳職所用瓦を生産した工房跡と、付属する瓦窯跡群（ロストル式平窯８基）として報告がなされている。ともに奈良時代の瓦生産の実態を知りうる好例と評価され、保存・整備の方向で関係機関の調整が行われている。

石井清司・伊賀高弘他「上人ヶ平遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第15冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

石井清司・森島康雄「木津地区所在遺跡平成５年度発掘調査概要　(4)市坂瓦窯」（『京都府遺跡調

査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995
石井清司・森島康雄「木津地区所在遺跡平成６年度発掘調査概要　(2)市坂瓦窯跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注２　『木津町史』史料編　木津町　1984　203～216頁参照。

注３　注２文献。音如ヶ谷瓦窯は４基(Ⅰ～Ⅳ号窯)の瓦窯が確認されており、A期(Ⅲ・Ⅳ号窯)・B期(Ⅰ・Ⅱ号窯)の２時期に分かれて操業していたとされている。

注４　『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』　奈良国立文化財研究所　1996

注５　『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(2)　奈良国立文化財研究所　1973、『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』　奈良県教育委員会　1984

注６　山口良太・森田貴子・三浦公靖・大海友軌・島田征二・川上裕司・室林由香・芳谷典子・小田邦彦・青木満理子・坂手華子・新谷二三代・林　恵子・辻　道子・吉永清美・西根正弘・井ノ口雄三・五百磐顕一・小原志奈子・木下町子・山田三喜子・筒井由香・岸本貢一・木本昌英・小関菜都子・奥村茂輝・中村久登・久田　亨・福井直樹・古川良子・林　益美(敬称略・順不同)

注７　上原真人・山崎信二・菱田哲郎・井上和人・百瀬正恒・上村京子・南　孝雄・前田義明・網　伸也・森　郁夫・高橋美久二(敬称略・順不同)

注８　すでに現地説明会資料や、『京都府埋蔵文化財情報』第63号(1997年)で軒平瓦・軒丸瓦の型式名を公表しているが、一部誤りがあった。今回の報告で訂正しておきたい。特に、軒丸瓦6138Hとしていたものを6138Fに変更し、6138Hは今のところ確認できていない。

注９　注２文献　211頁。

注10　注９と同じ。

注11　注３と同じ。

出土瓦集合写真

# 図　　版

図版第１　平遺跡

(1)調査地全景（南から）

(2)調査地全景（南から）

(3)調査地全景（下が北）

図版第２　平遺跡

(1)調査地全景（西から）

(2)土層セクション
設定状況（南から）

(3)土層セクション
設定状況（西から）

## 図版第3　平遺跡

(1)調査区東壁

(2)南北セクション東壁

(3)東西セクション南壁（(4)のアップ）

(4)東西セクション南壁

(5)調査区東壁

(6)南北セクション西壁

(7)南北セクション東壁（土石流）

(8)東西セクション北壁

図版第4　平遺跡

(1)埋甕検出状況（東から）

(2)埋甕内部の調査状況

(3)埋甕内面の状況
（標石及び蓋の検出）

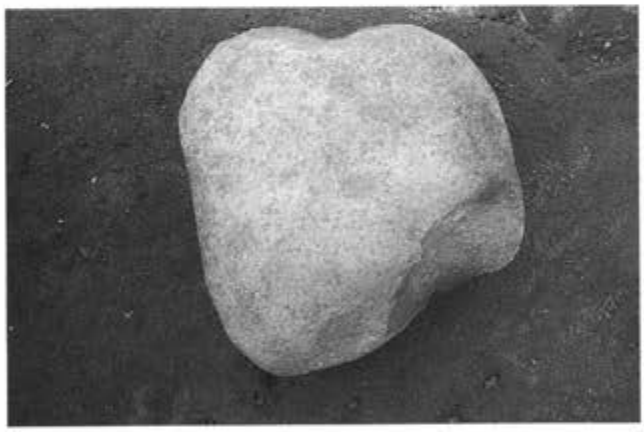
## 図版第5　平遺跡

(1)土器集積状況(1)　晩期

(2)土器集積状況(2)　晩期

(3)石組炉の土器集積状況

(4)石組炉検出状況



(5)石皿検出状況

(6)石組炉検出状況（(3)のアップ）

(7)調査風景（西から）

(8)調査風景（南から）

図版第6　平遺跡

(1)古墳時代石敷遺構全景
（北から）

(2)石敷遺構近景（南東から）

(3)石敷遺構近景（北から）

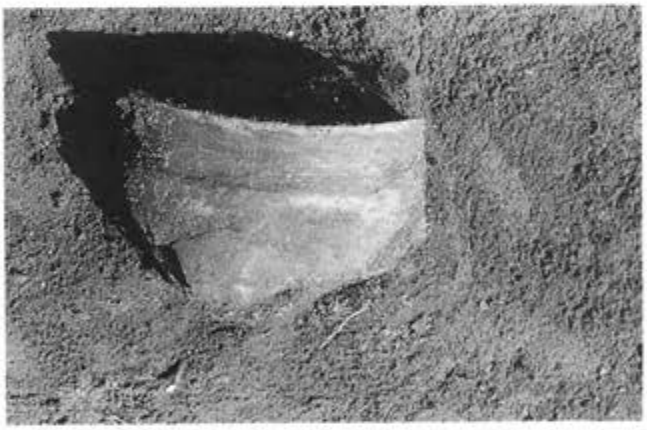
## 図版第７　平遺跡

(1)晩期土器出土状況(1)

(2)晩期土器出土状況(2)

(3)晩期土器出土状況(3)

(4)晩期土器出土状況(4)



(5)晩期土器出土状況(5)

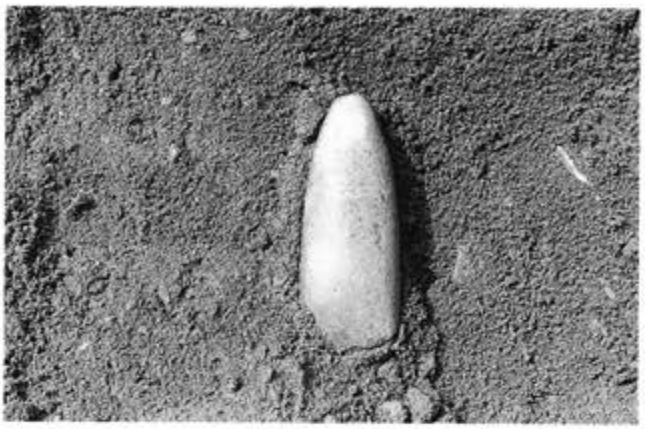
(6)晩期土器出土状況(6)

(7)注口土器出土状況(1)

(8)注口土器出土状況(2)

## 図版第8　平遺跡

(1)石斧出土状況(1)



(2)石斧出土状況(2)

(3)石錘出土状況

(4)土師器甕出土状況

(5)土器溜まり2 検出状況

(6)土器溜まり1 検出状況

(7)土師器椀出土状況

(8)製塩土器出土状況

## 図版第9　平遺跡

(1)篠原式土器出土状況

(2)新保式土器出土状況(1)

(3)元住吉山Ⅱ式土器出土状況

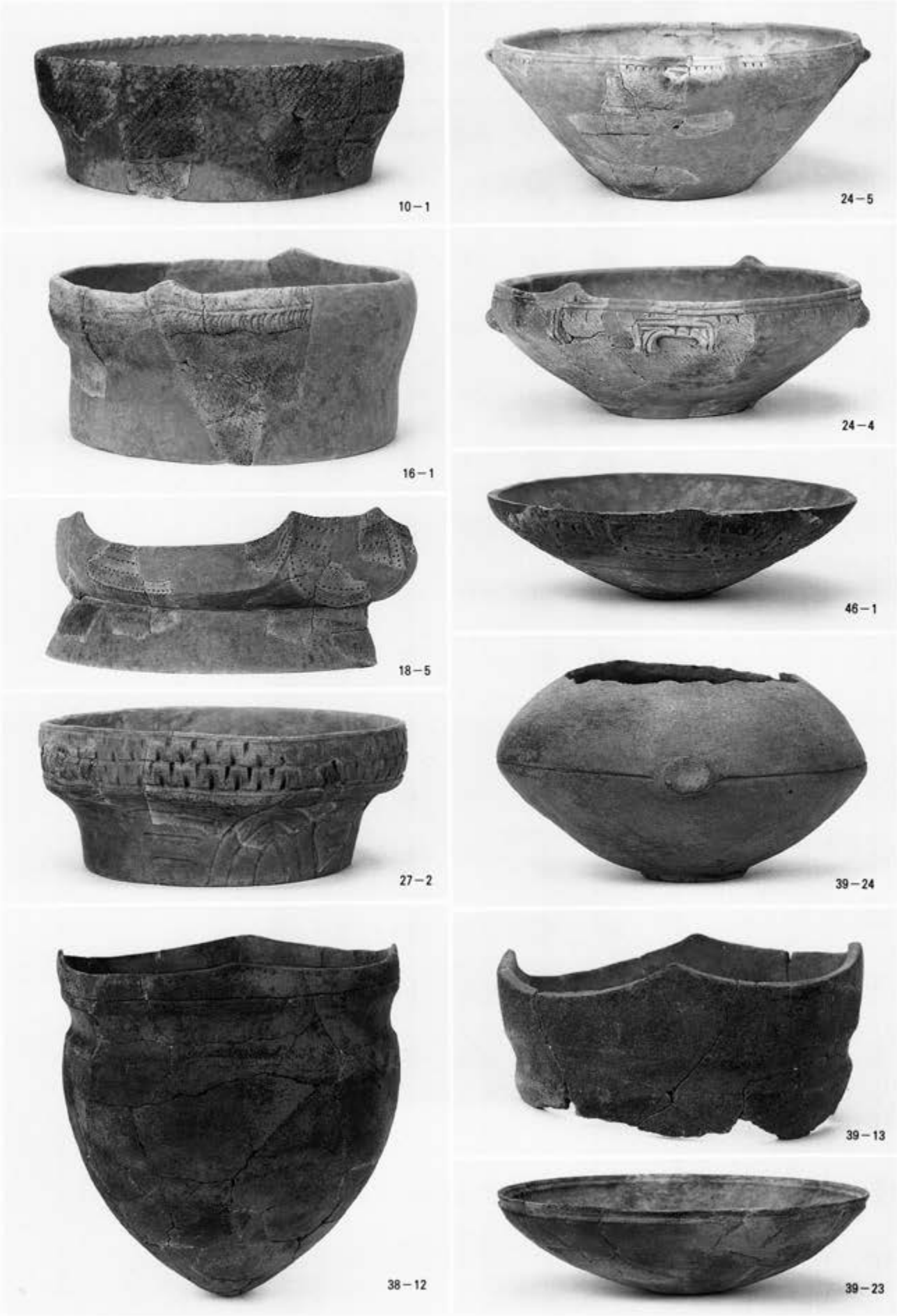
(4)船元式土器出土状況

(5)新保式土器出土状況(2)

(6)新保式土器出土状況(3)

(7)鷹島式土器出土状況

(8)北白川下層式土器出土状況




縄文土器(1)　第10・16・18・24・27・38・39・46図、番号は挿図と対応

39－22

43－14

42－5

39－21

8－1

44－26

8－4

44－28

縄文土器(2)　第８・39・42～44図、番号は挿図と対応

18－3

39－19

18－7

38－8

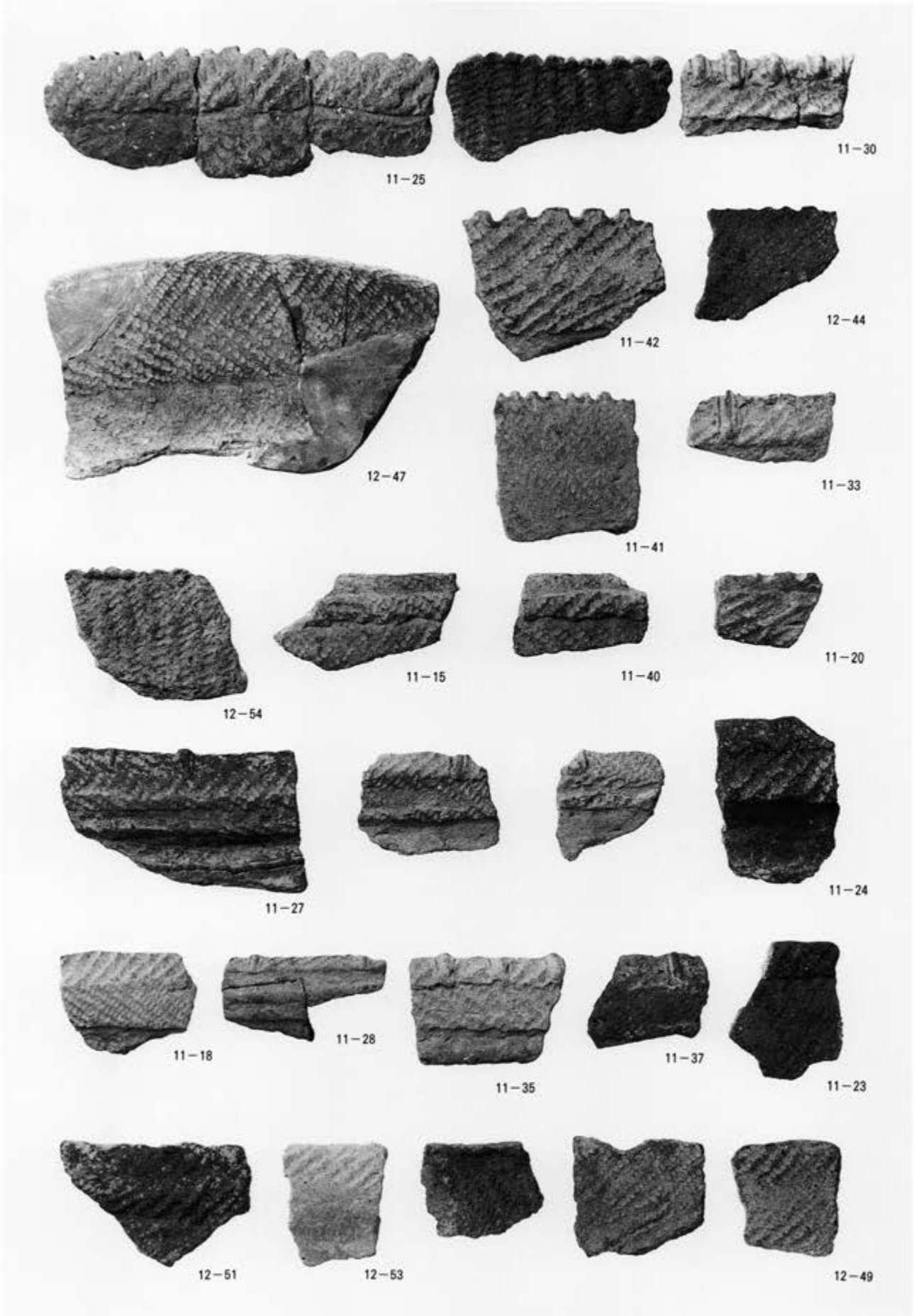
38－7

18－1

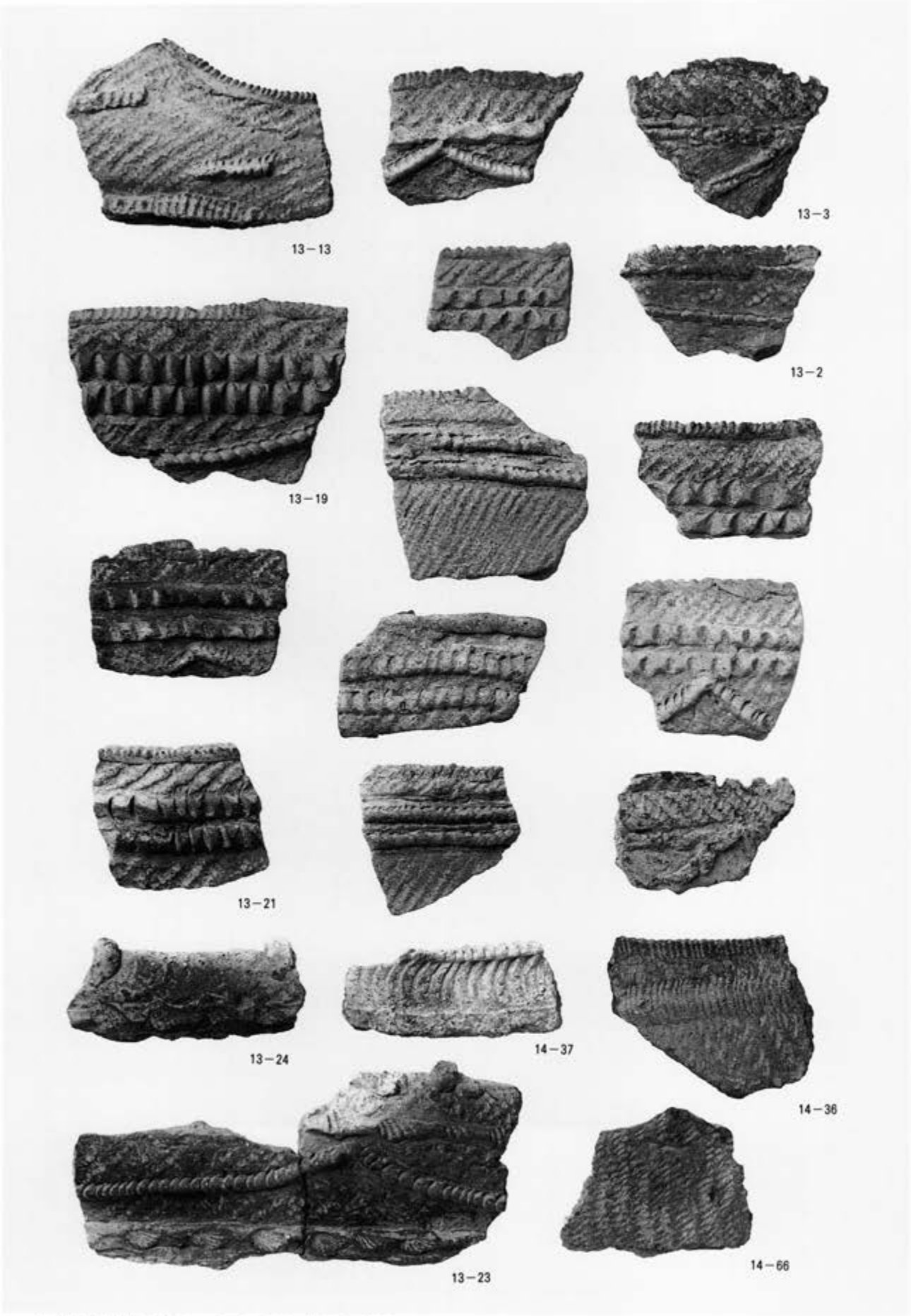
18－4

42－3

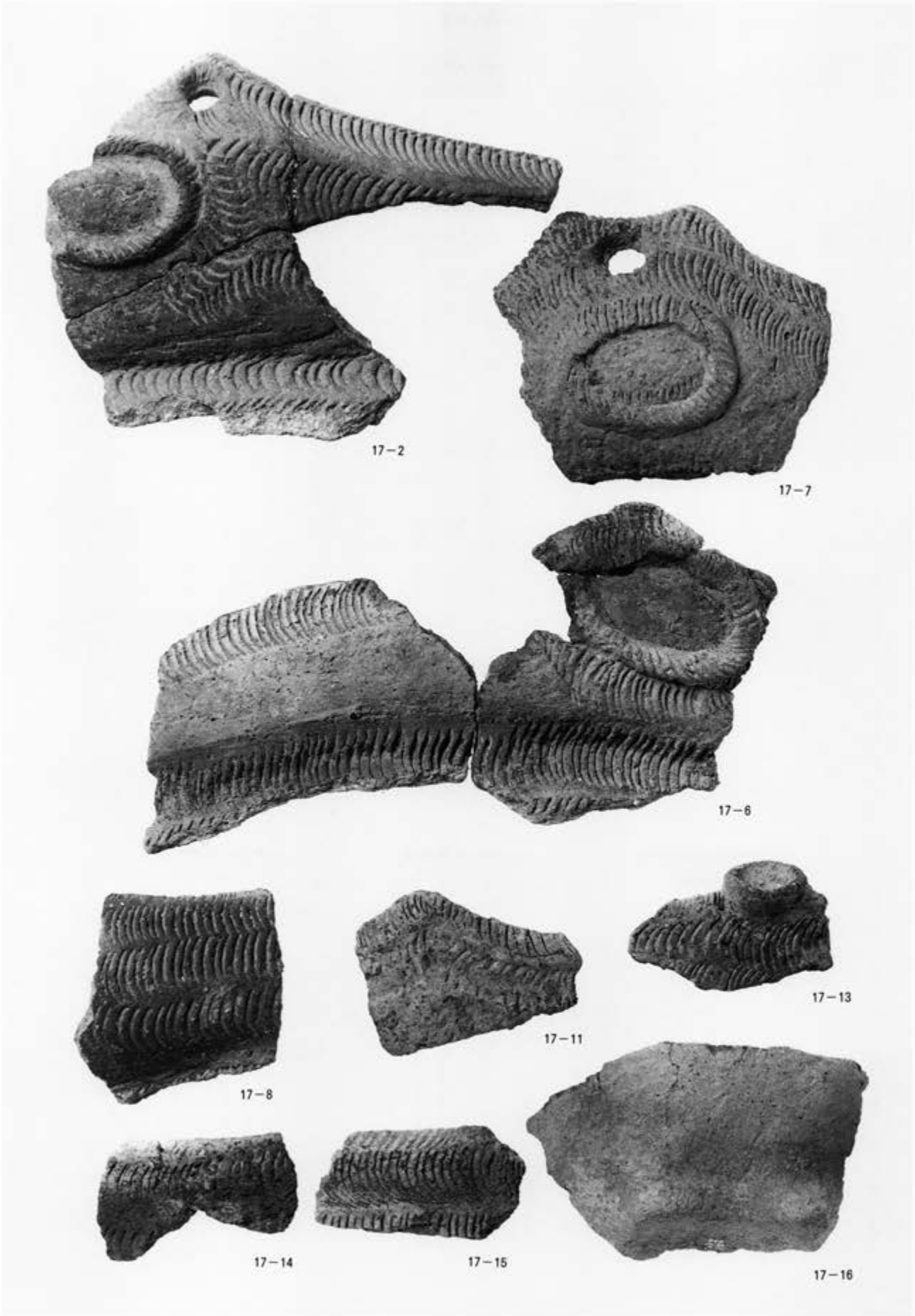
縄文土器(3)　第18・38・39・42図、番号は挿図と対応



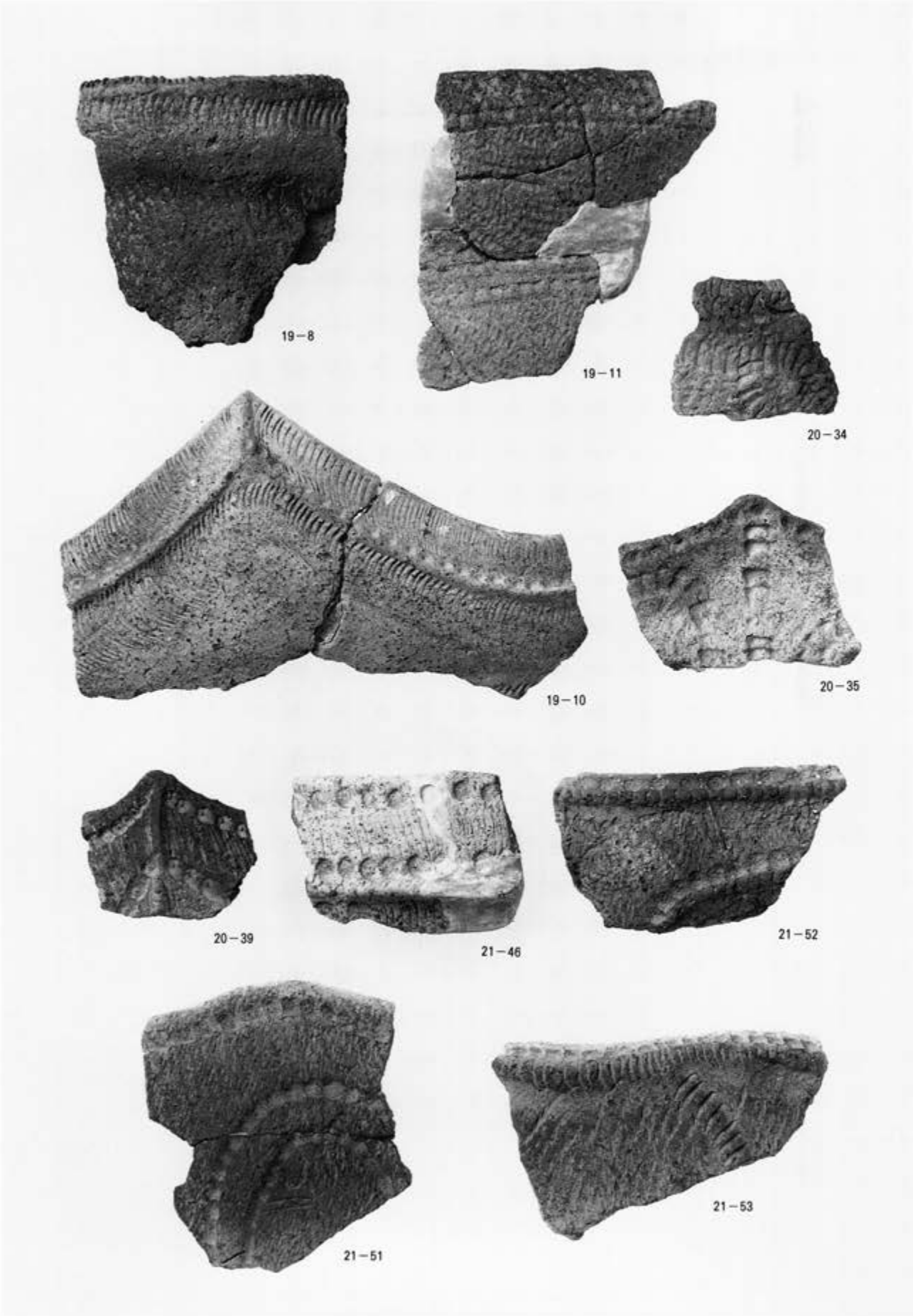

北白川下層Ⅱc・Ⅲ式土器　第11・12図、番号は挿図と対応




大歳山式土器　第13・14図、番号は挿図と対応




鷹島式土器　第17図、番号は挿図と対応




船元Ⅰ・Ⅱ式土器　第19～21図、番号は挿図と対応

21－56

19－13

21－57

21－64

22－68

19－15

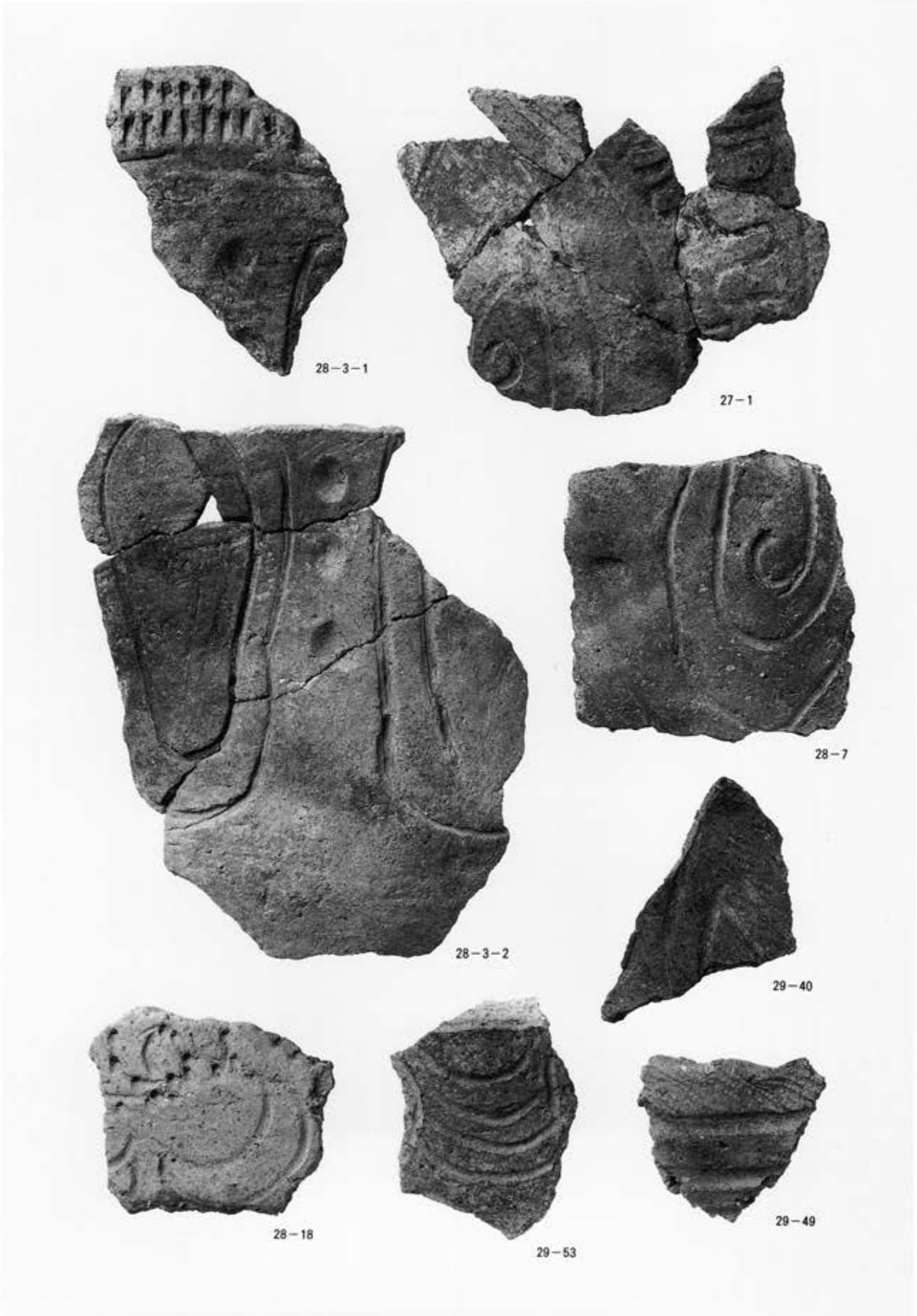
22－72

18－2

19－17

22－74

船元Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器　第18・19・21・22図、番号は挿図と対応




平式（平CⅢ式）土器　第27～29図、番号は挿図と対応

32－1

32－6

34－1

34－8

34－11

34－4

34－2

34－16

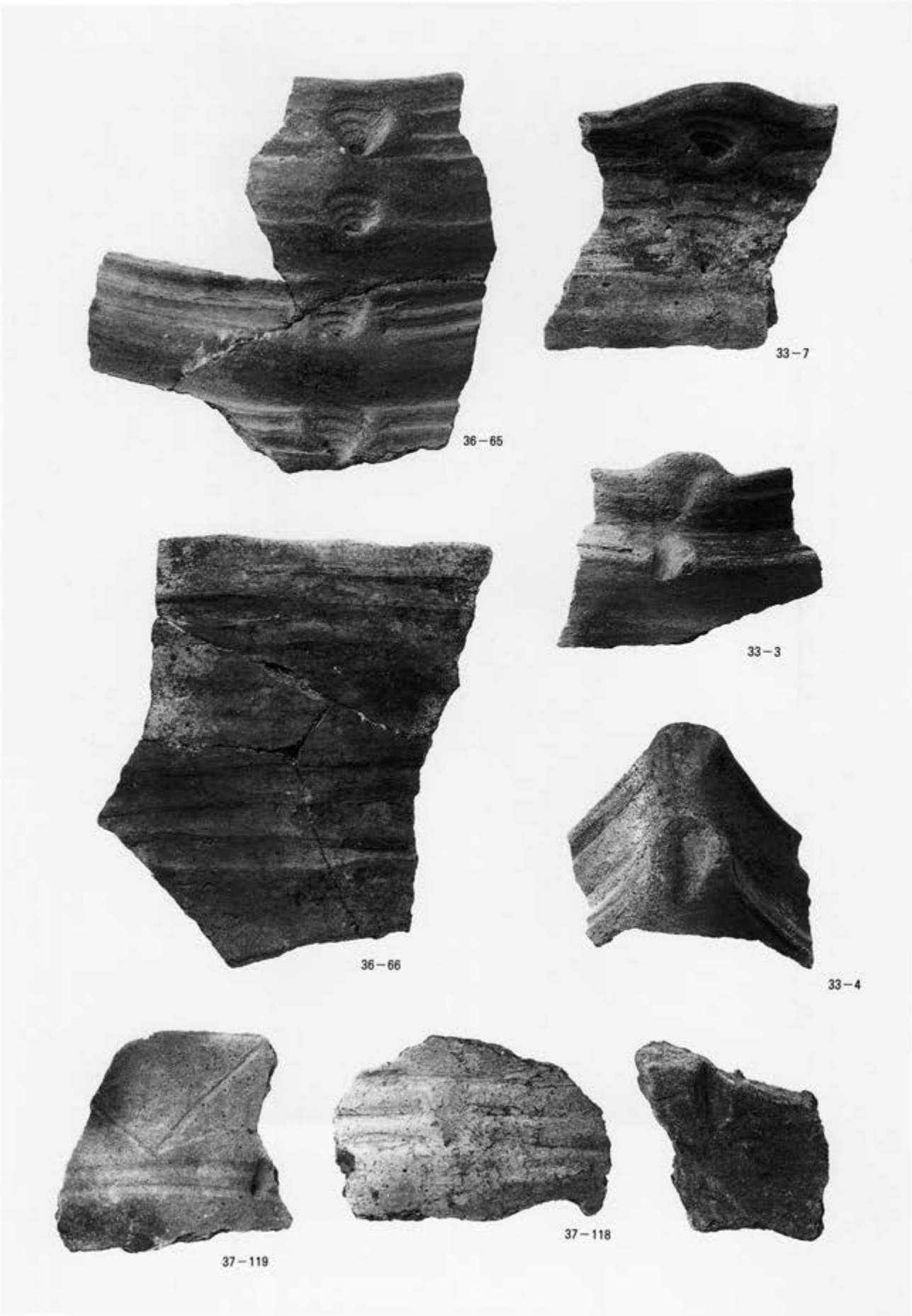
35－46

35－40

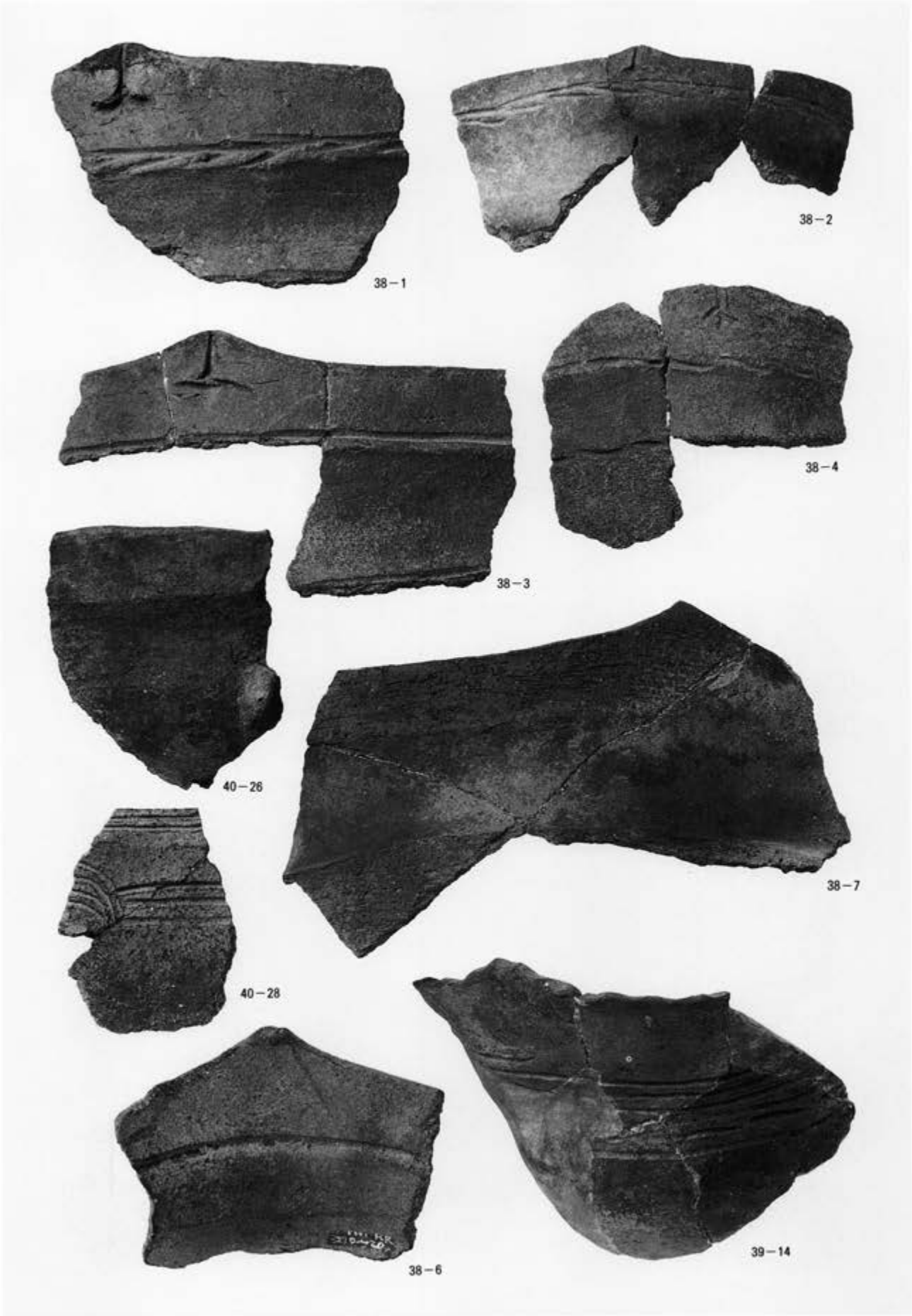
35－36

35－49

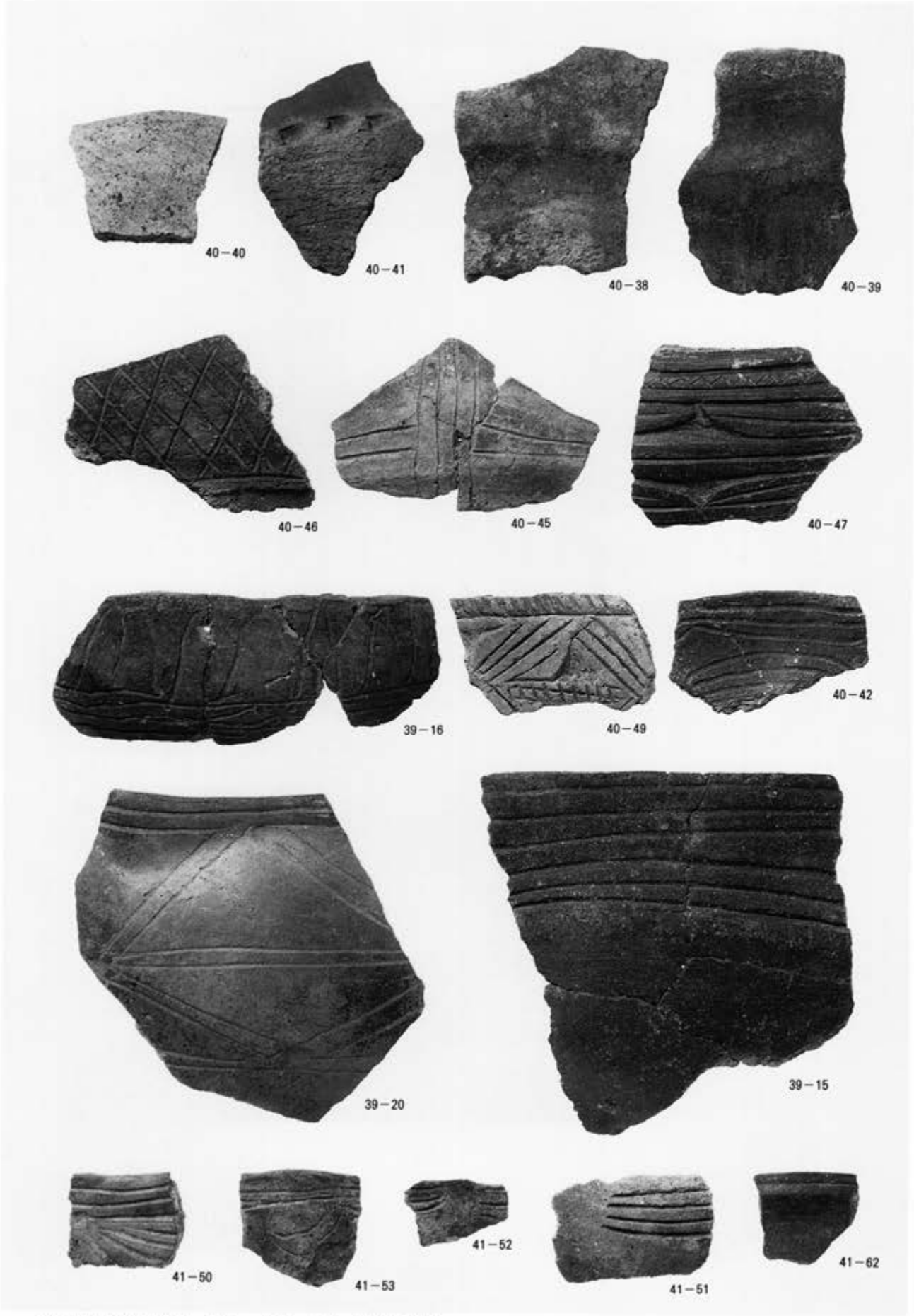
元住吉山Ⅰ・Ⅱ式土器　第32・34・35図、番号は挿図と対応



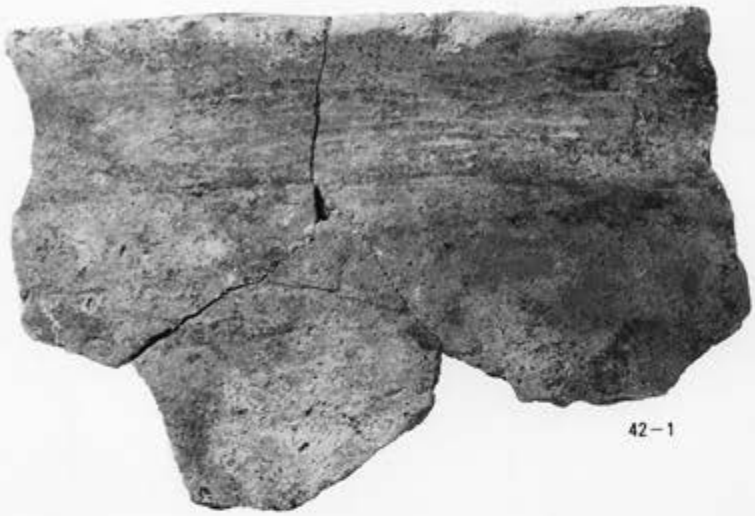

宮滝式土器　第33・36・37図、番号は挿図と対応




滋賀里式併行土器(1)　第38～40図、番号は挿図と対応




滋賀里式併行土器(2)　第39～41図、番号は挿図と対応


42－1

45－41

45－36

45－31

42－2

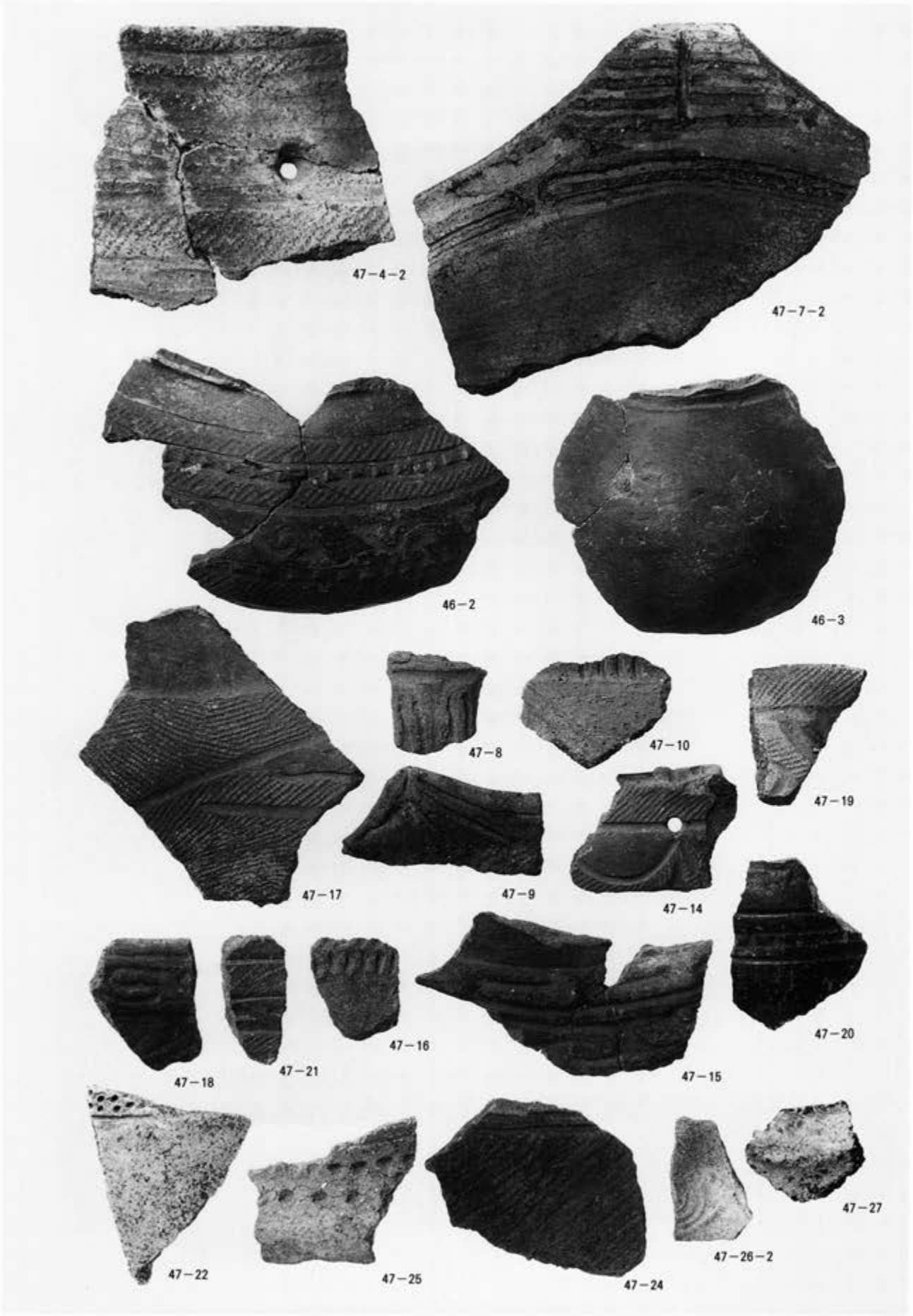
45－35

43－16

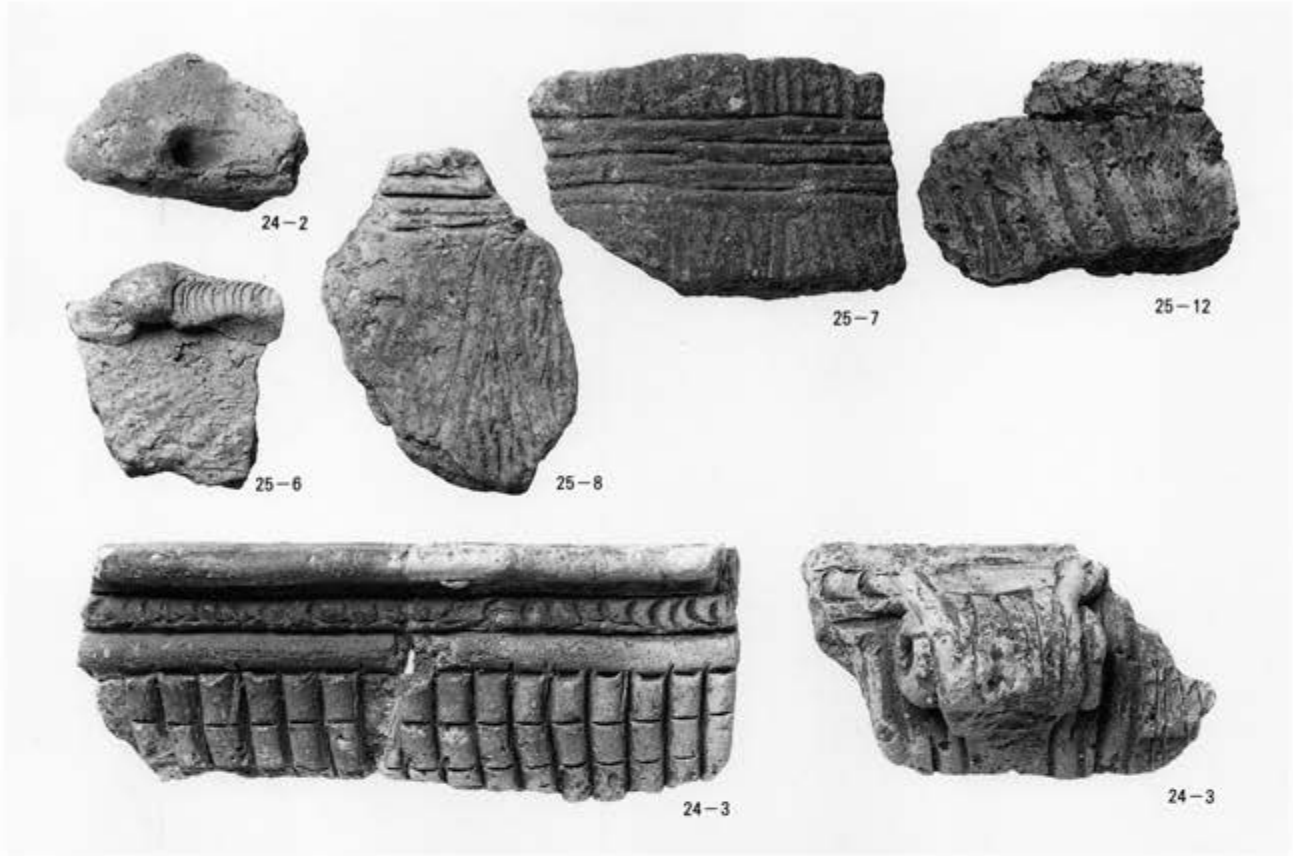
43－17

45－40

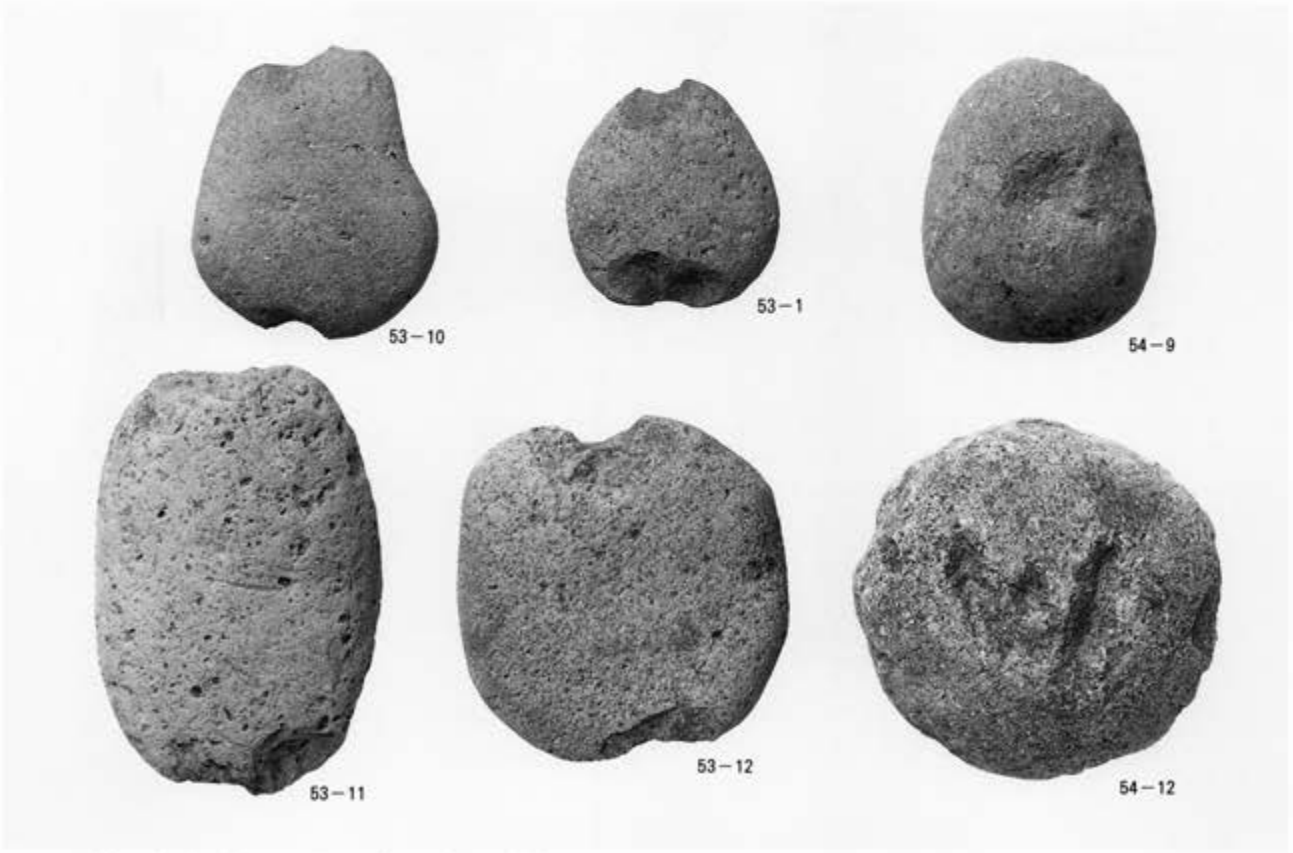
篠原式土器　第42～45図、番号は挿図と対応



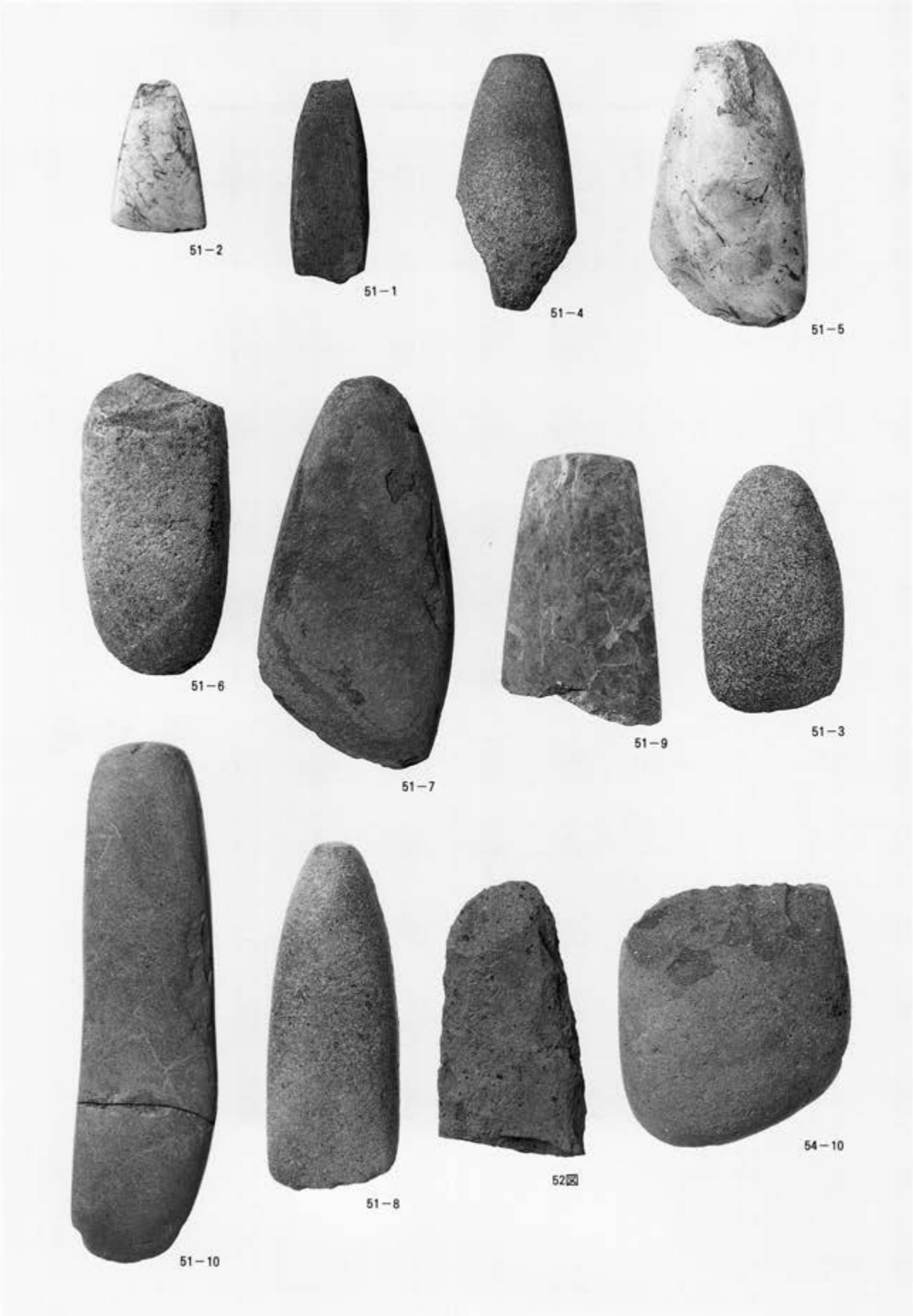

東日本系土器　第46・47図、番号は挿図と対応



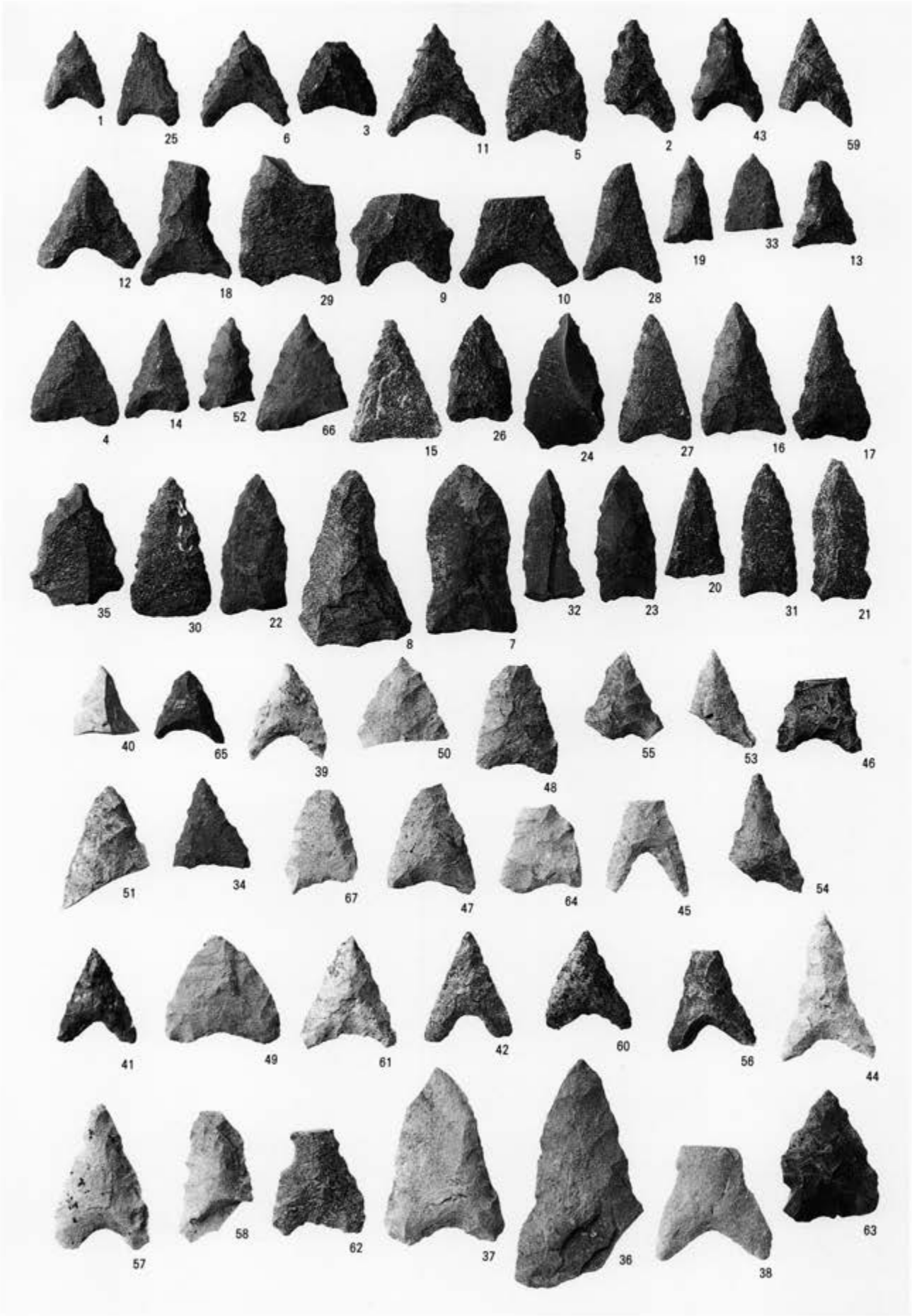

(1)他地域系土器（中期前葉）　第24・25図、番号は挿図と対応



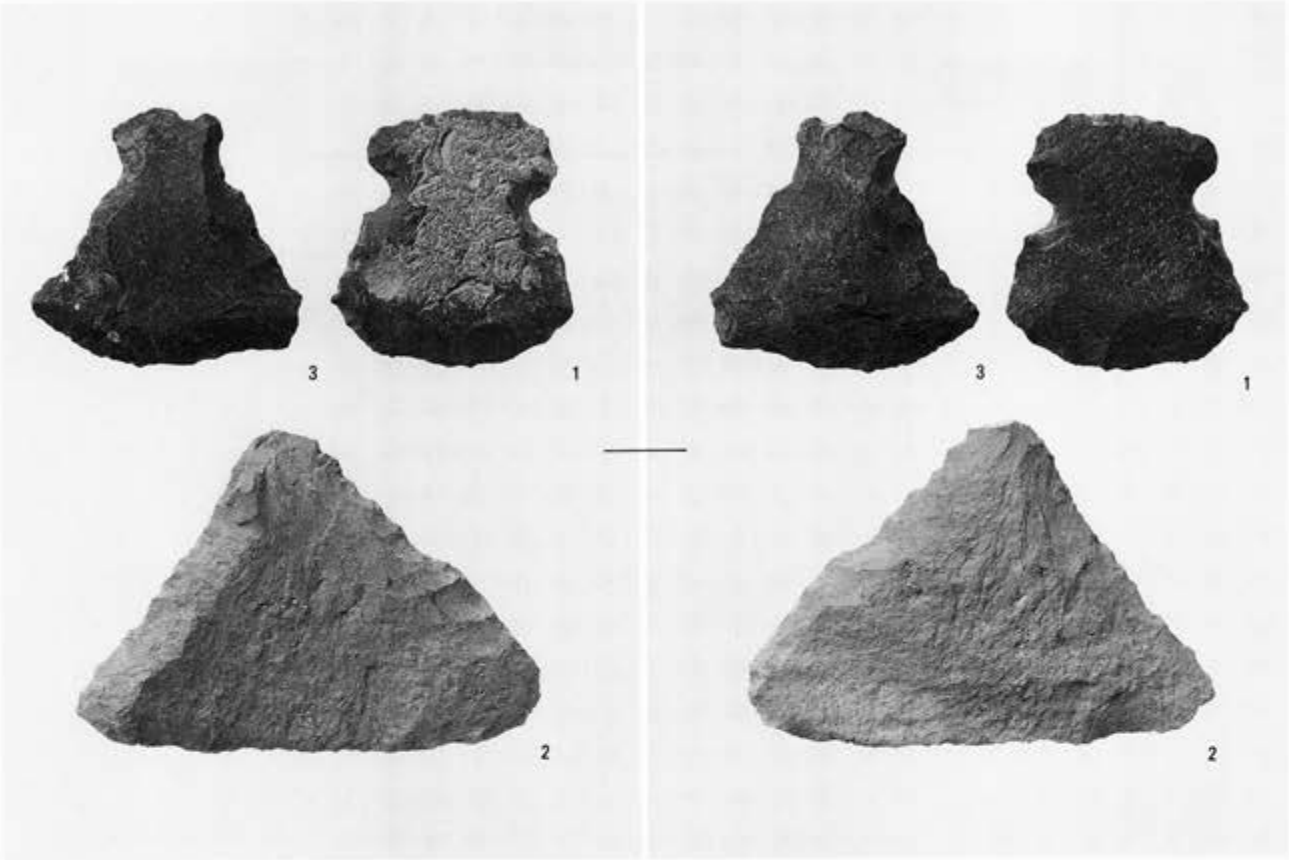

(2)石錘・敲石　第53・54図、番号は挿図と対応



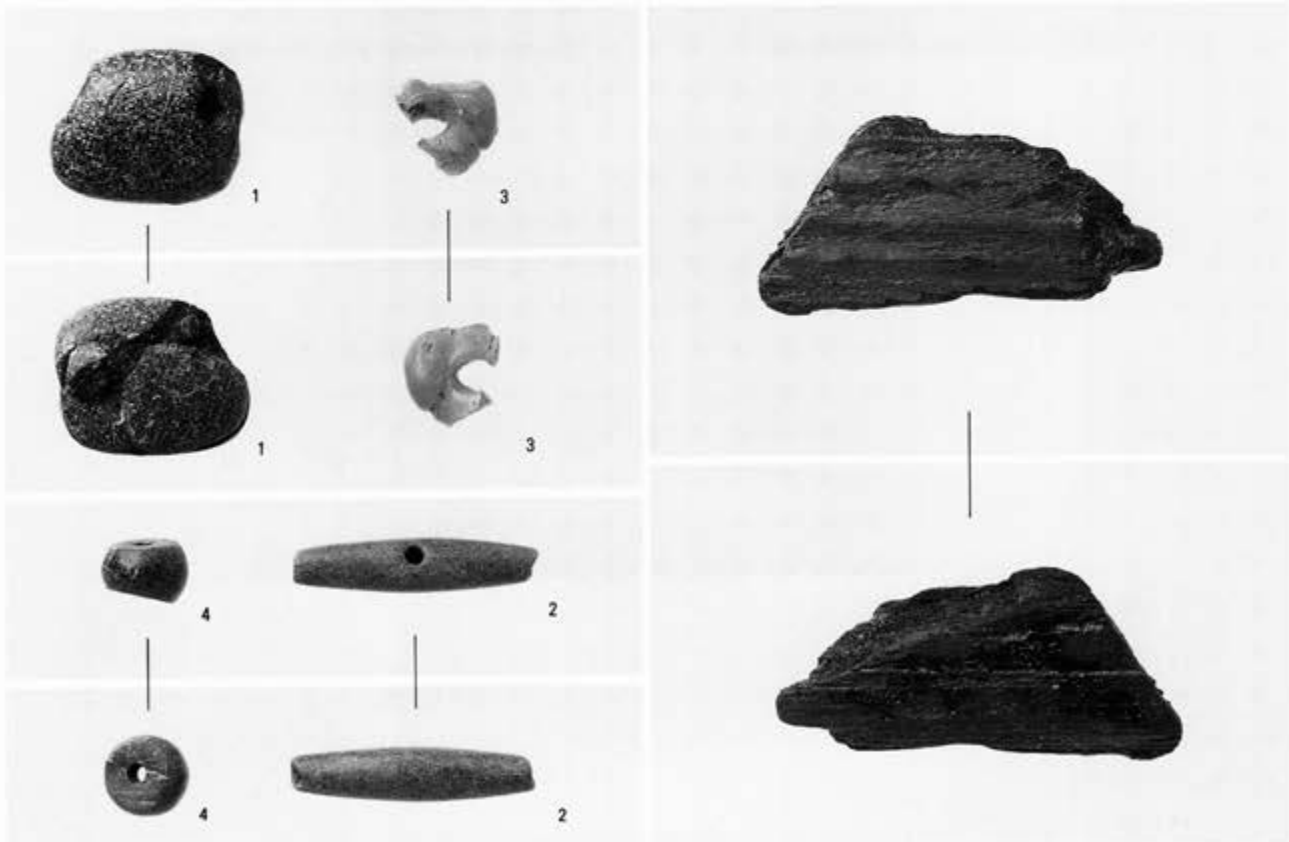

磨製石斧・打製石斧・礫刃器　第51・52・54図、番号は挿図と対応




石鏃　第50図、番号は挿図と対応




(1)石匙　第49図、番号は挿図と対応




(2)玉（第57図）・赤漆塗板（第58図）、番号は挿図と対応

60－1

61－7

60－9

61－9

61－1

61－10

61－3

61－13

61－2

61－12

61－5

61－4

61－11

62－34

須恵器・土師器　第60～62図、番号は挿図と対応

62－35

62－33

62－32

62－31

61－28

61－27

61－25

61－15

土師器　第61・62図、番号は挿図と対応

図版第31　奈具岡南古墳群

(1)奈具岡南古墳群全景（北から）

(2)奈具岡南古墳群全景（南から）

図版第32　奈具岡南古墳群

(1)中尾根調査前全景（北西から）

(2)北尾根調査前全景（南から）

(3)北尾根調査後全景（南から）

## 図版第33　奈具岡南古墳群

(1) 5 号墳調査前全景（北西から）

(2) 5 号墳石室（北東から）

(3) 5 号墳石室・外護列石
（南西から）

図版第34　奈具岡南古墳群

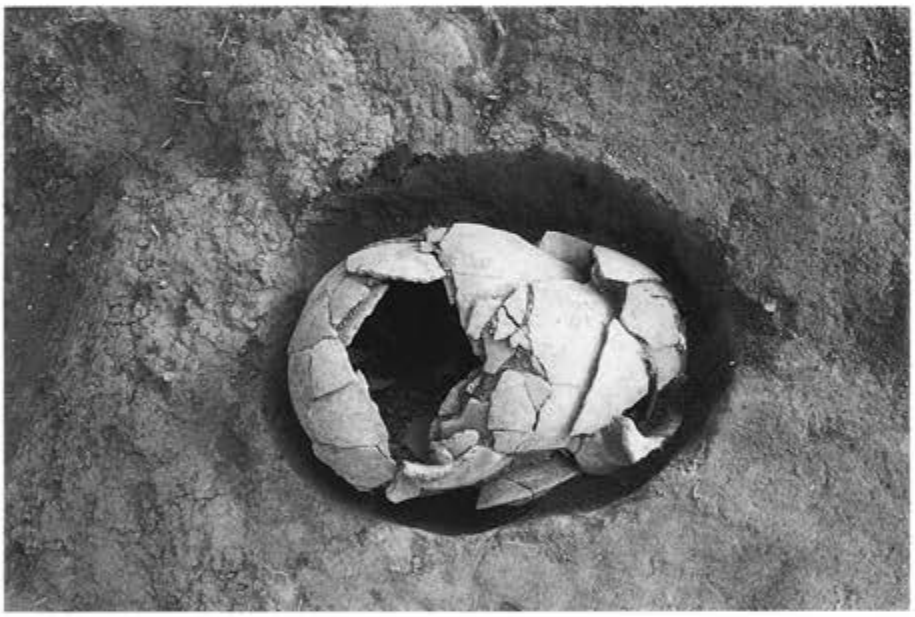
(1)22号墳（左）・11号墳（右）
（空撮、南から）

(2)11号墳主体部（西から）

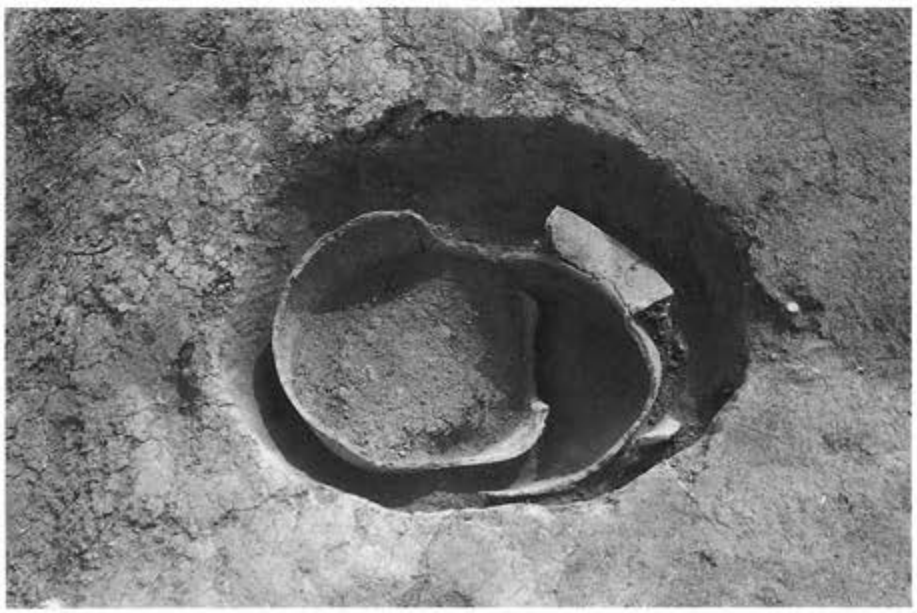
(3)22号墳第１主体部（南から）

## 図版第35　奈具岡南古墳群

(1)22号墳壺棺調査風景



(2)22号墳壺棺全景（北東から）



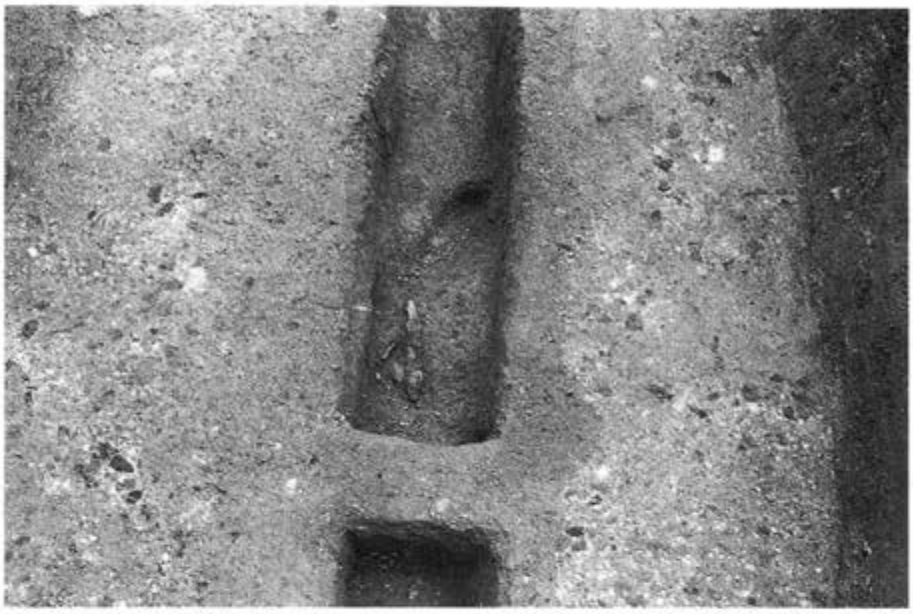
(3)22号墳壺棺内部状況
（北東から）

図版第36　奈具岡南古墳群

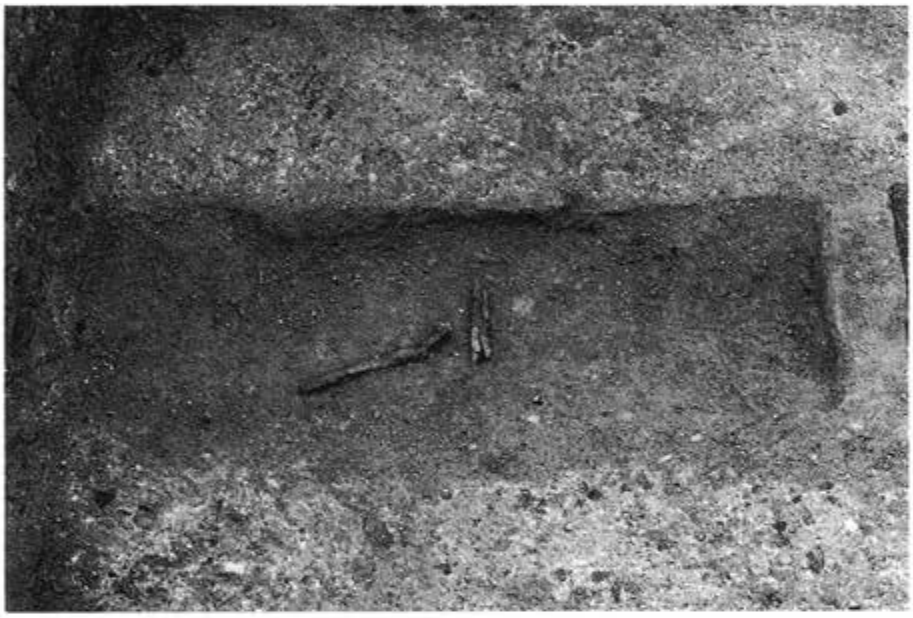
(1)12号墳（左）・13号墳（右）
（空撮、北東から）

(2)13号墳全景（南西から）

(3)13号墳主体部（北東から）



(1)13号墳第１主体部
鉄器出土状況（西から）

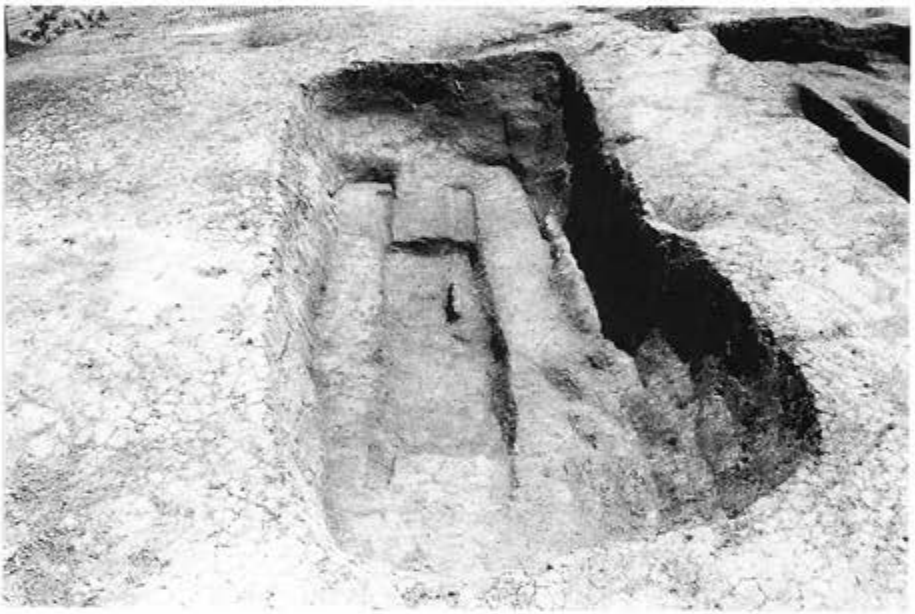


(2)13号墳第２主体部
鉄器出土状況（南から）

(3)13号墳第２主体部
鉄器出土状況（西から）

図版第38　奈具岡南古墳群

(1)21号墳（左）・14号墳（中央）・15号墳（右）
（空撮、北東から）



(2)14号墳第１主体部（南西から）

(3)14号墳第２主体部（南西から）

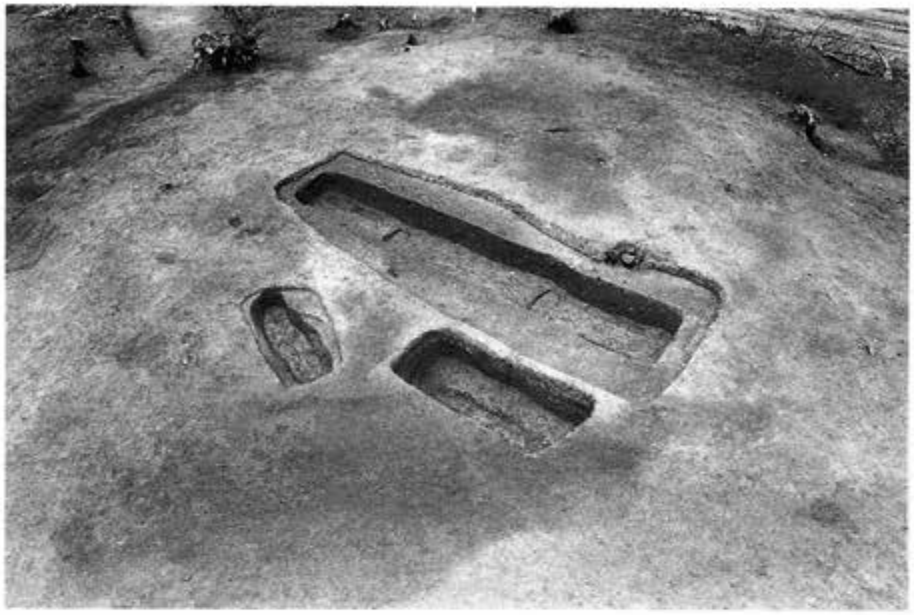
## 図版第39　奈具岡南古墳群

(1)21号墳主体部（西から）

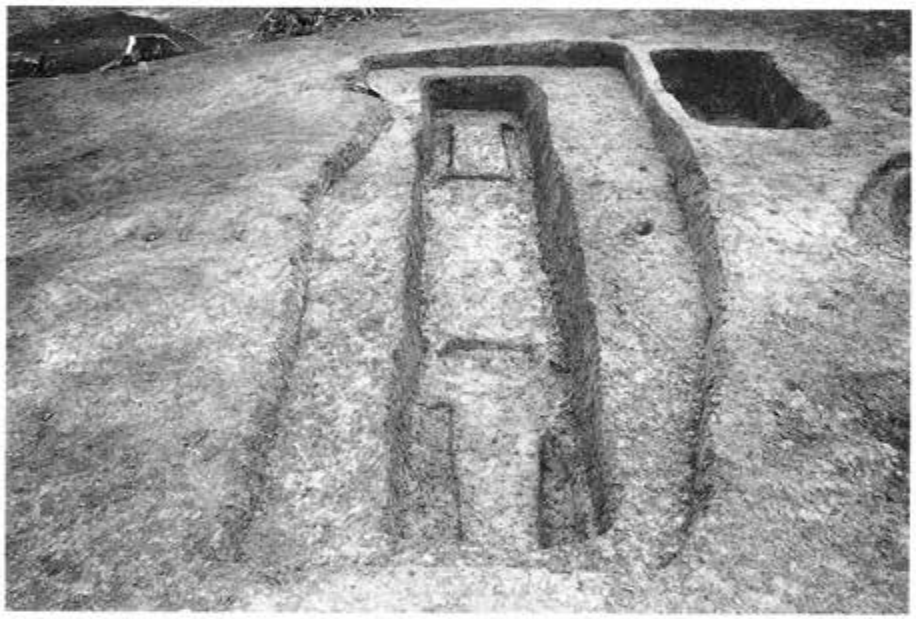
(2)14号墳第３主体部断面
（北西から）

(3)14号墳第３主体部玉類
出土状況（北西から）

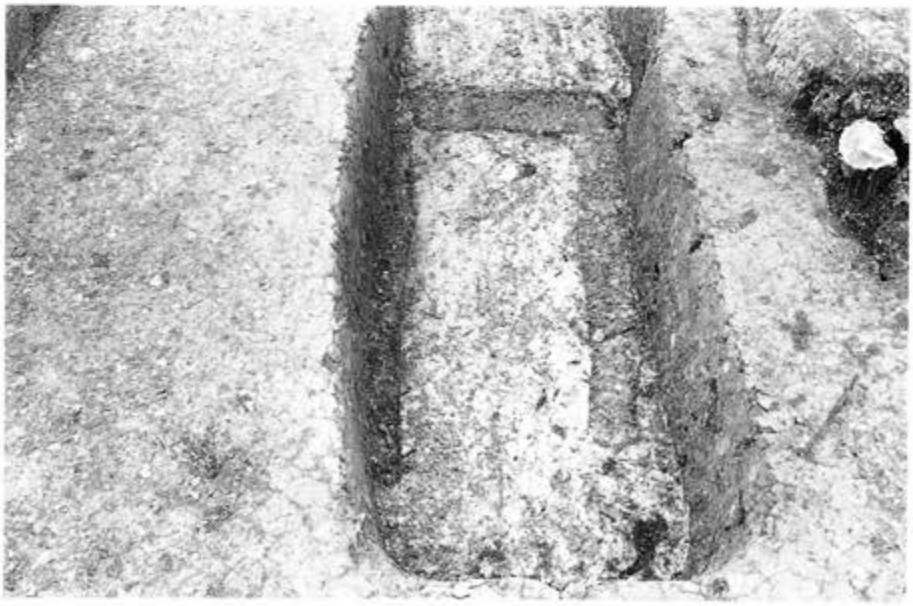
## 図版第40　奈具岡南古墳群



(1)15号墳全景（南から）

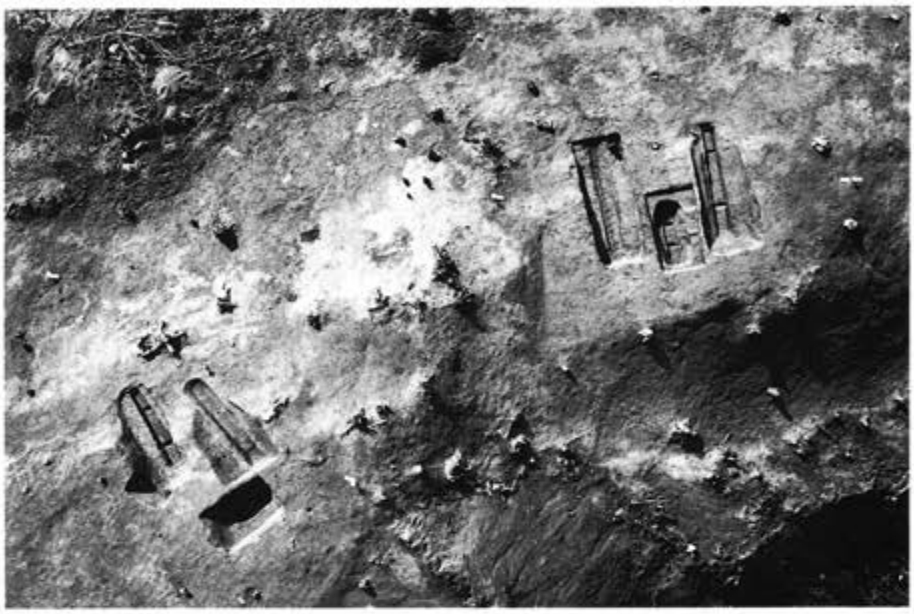


(2)15号墳第１主体部（南東から）



(3)15号墳第１主体部西小口
（西から）

図版第41　奈具岡南古墳群



(1)16号墳（左）・17号墳（右）
（空撮、北から）

(2)16号墳主体部全景（東から）

(3)16号墳第２・第４主体部
（北東から）

## 図版第42　奈具岡南古墳群

(1)16号墳第２主体部（東から）

(2)16号墳第１主体部鉋出土状況
（西から）

(3)16号墳第１主体部断面（南から）

## 図版第43　奈具岡南古墳群

(1)17号墳調査風景（東から）

(2)17号墳第１・第３主体部
（南西から）

(3)17号墳第１主体部
鑿・鉇出土状況（南東から）

図版第44　奈具岡南古墳群

(1)18号墳（左）・19号墳（右）
（空撮、北東から）

(2)18号墳主体部（南西から）

(3)18号墳第１主体部
鉄剣・鉇出土状況（北西から）

図版第45　奈具岡南古墳群

(1)18号墳主体部調査風景
（南西から）

(2)18号墳第２主体部
（南西から）

(3)18号墳第２主体部
玉類出土状況（南西から）

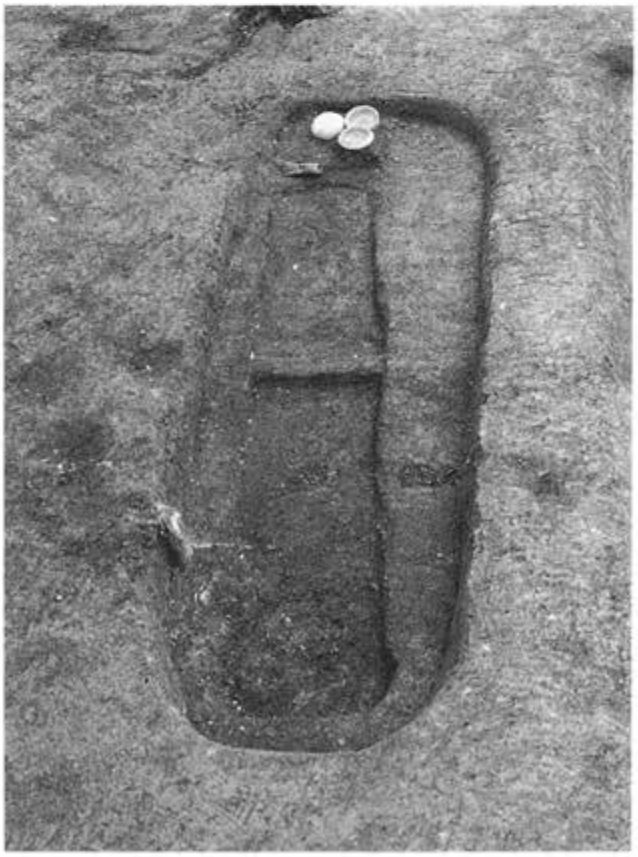
図版第46　奈具岡南古墳群

(1)19号墳主体部全景
（北東から）

(2)19号墳主体部断面
（南西から）

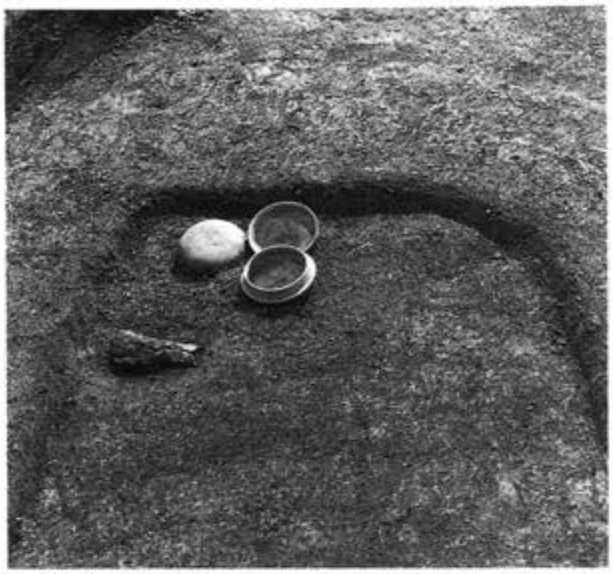
(3)墳丘掘削作業風景

(1) 3 号墳・4 号墳・23号墳（空撮、北から）



(2) 3 号墳第 2 主体部全景（西から）

(3) 3 号墳第 1 主体部全景（西から）



(1) 3 号墳第 2 主体部遺物出土状況(1)

(2) 3 号墳第 2 主体部遺物出土状況(2)

(3) 3 号墳第 1 主体部遺物出土状況(1)

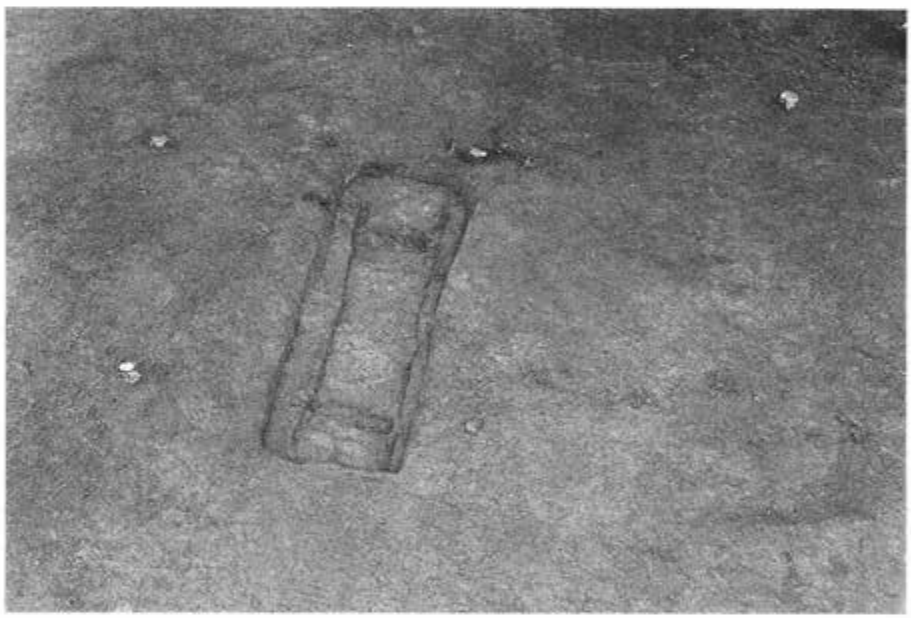
(4) 3 号墳第 1 主体部遺物出土状況(2)

(5) 3 号墳第 1 主体部遺物出土状況(3)

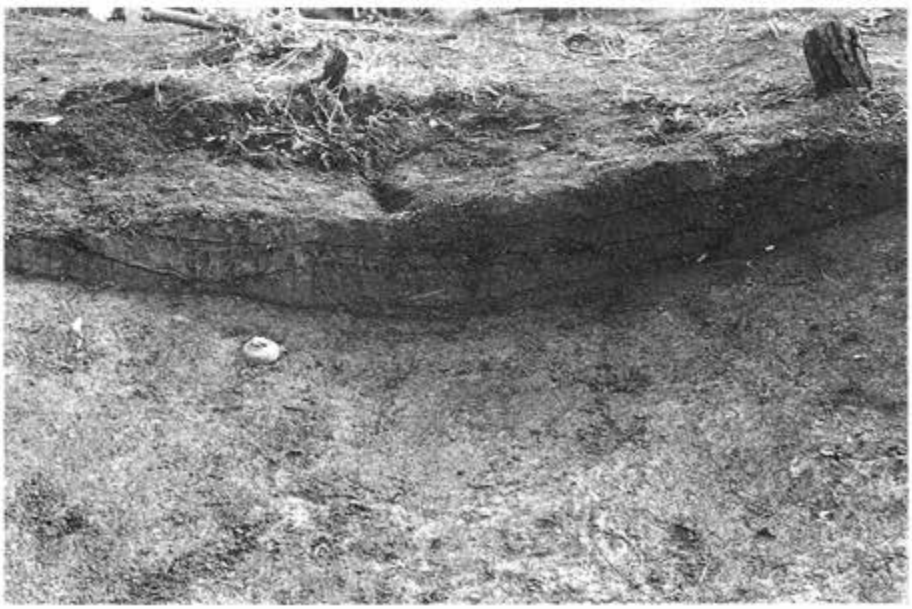
(6) 3 号墳第 1 主体部遺物出土状況(4)

## 図版第49　奈具岡南古墳群

(1)14号墳第１主体部
（北西から）



(2)14号墳第３主体部
（西から）



(3)４・５号墳間溝断面
（北から）

図版第50　奈具岡南古墳群

(1) 8・9号墳調査前遠景
（北東から）

(2) 8号墳主体部
（南東から）

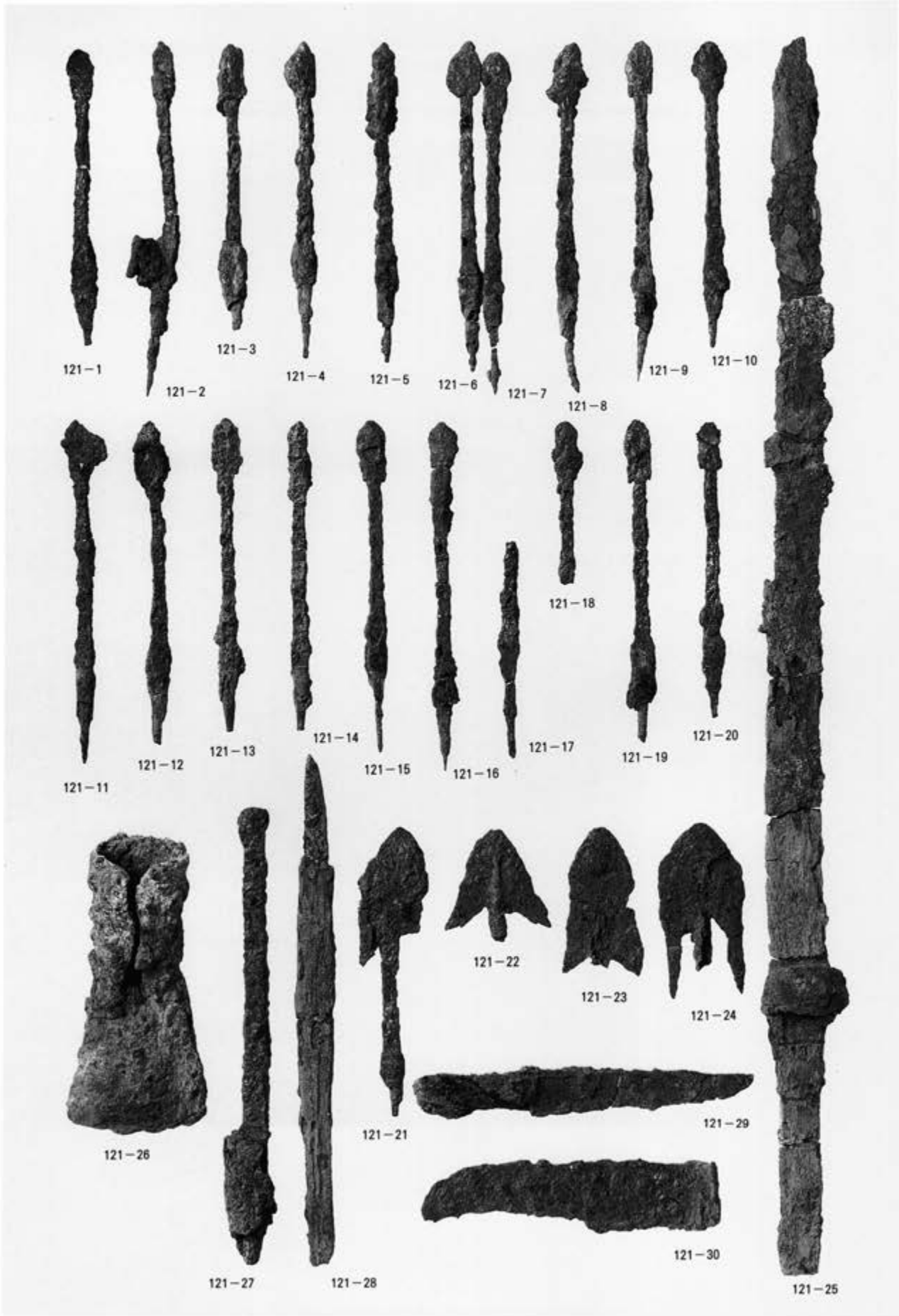
(3)墳丘部遺物出土状況

図版第51　奈具岡南古墳群

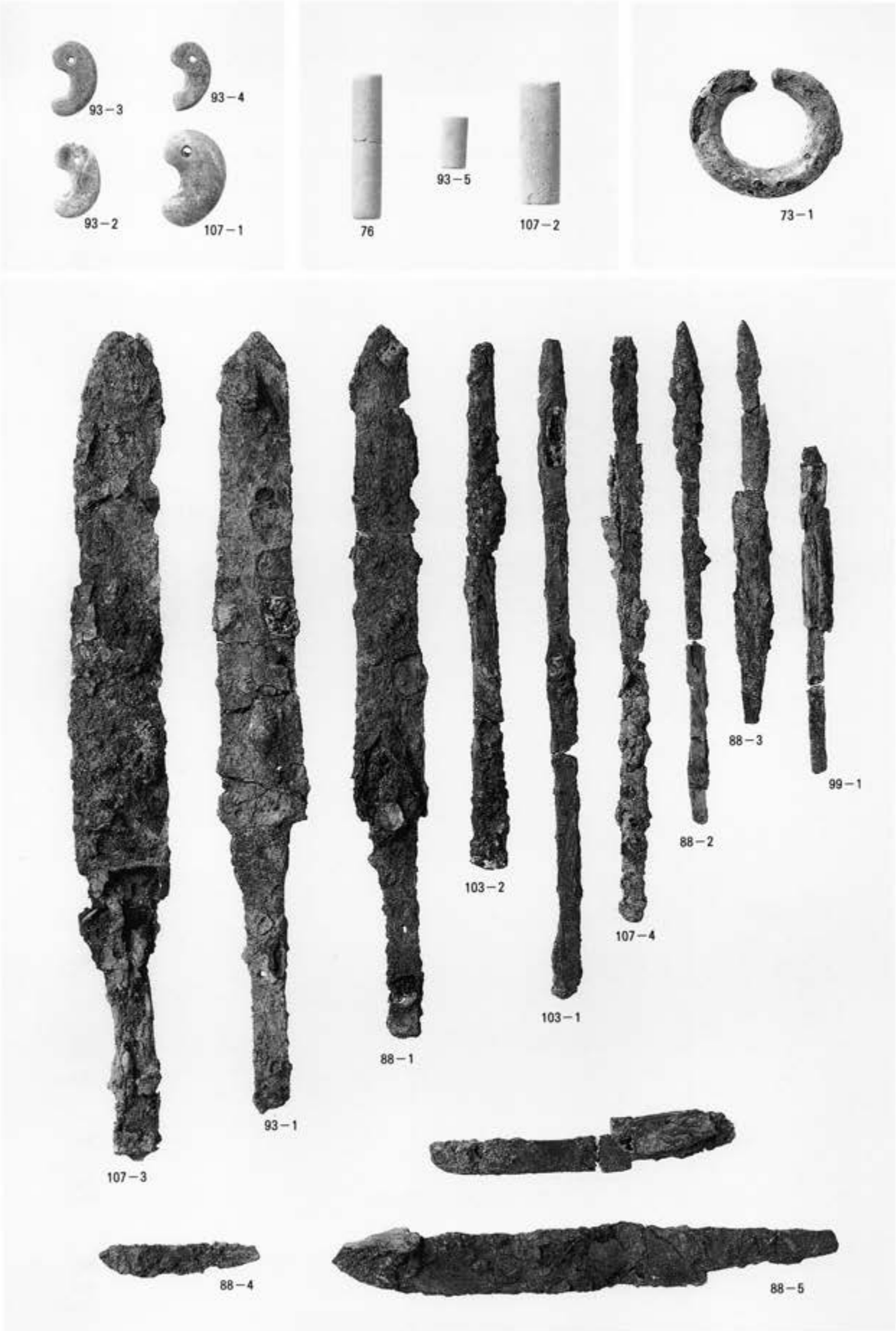
(1) 7 号墳全景
（東から）

(2) 7 号墳主体部
（北西から）

(3)現地説明会風景




出土遺物(1)　第121図参照




出土遺物(2)　第73・76・88・93・99・103・107図参照

## 図版第54　奈具岡南古墳群

120－1

120－2

120－3

117－1

73－3

106－1

80－2

80－1

出土遺物(3)　第73・80・106・117・120図参照

図版第55　シミズ谷城跡（B地区）

(1)調査前全景（上から、左上が北）

(2)上層遺構検出状況（上から、左上が北）

図版第56　シミズ谷城跡（B地区）

(1)登り道部分岩盤削り出しの状況
（北西から）

(2)登り道部分
（北西から）

(3)上層虎口集石
（北から）

図版第57　シミズ谷城跡（Ｂ地区）

(1)上層石列ＳＸ08検出状況
（南西から）

(2)上層土坑ＳＫ10完掘状況
（南西から）

(3)同上
（北東から）

図版第58　シミズ谷城跡（Ｂ地区）

(1)上層茶臼出土状況
（北東から）

(2)鍛冶炉跡ＳＫ18検出状況
（南東から）

(3)同上
（上から、左上が北）

図版第59　シミズ谷城跡（B地区）

(1)下層遺構検出状況
（南東から）

(2)下層土坑検出状況
（南東から）
手前から土坑31・32・34・27

(3)下層遺構検出状況
（北西から）

図版第60　シミズ谷城跡（Ｂ地区）

(1)下層鍛冶炉跡ＳＫ25礫出土状況
（東から）

(2)同上下部構造
（西から）

(3)同上完掘状況
（西から）

図版第61　シミズ谷城跡（Ｂ地区）

(1)下層土坑ＳＫ28
（北から）

(2)同上
（南から）

(3)竪穴状遺構ＳＫ30完掘状況
（北東から）

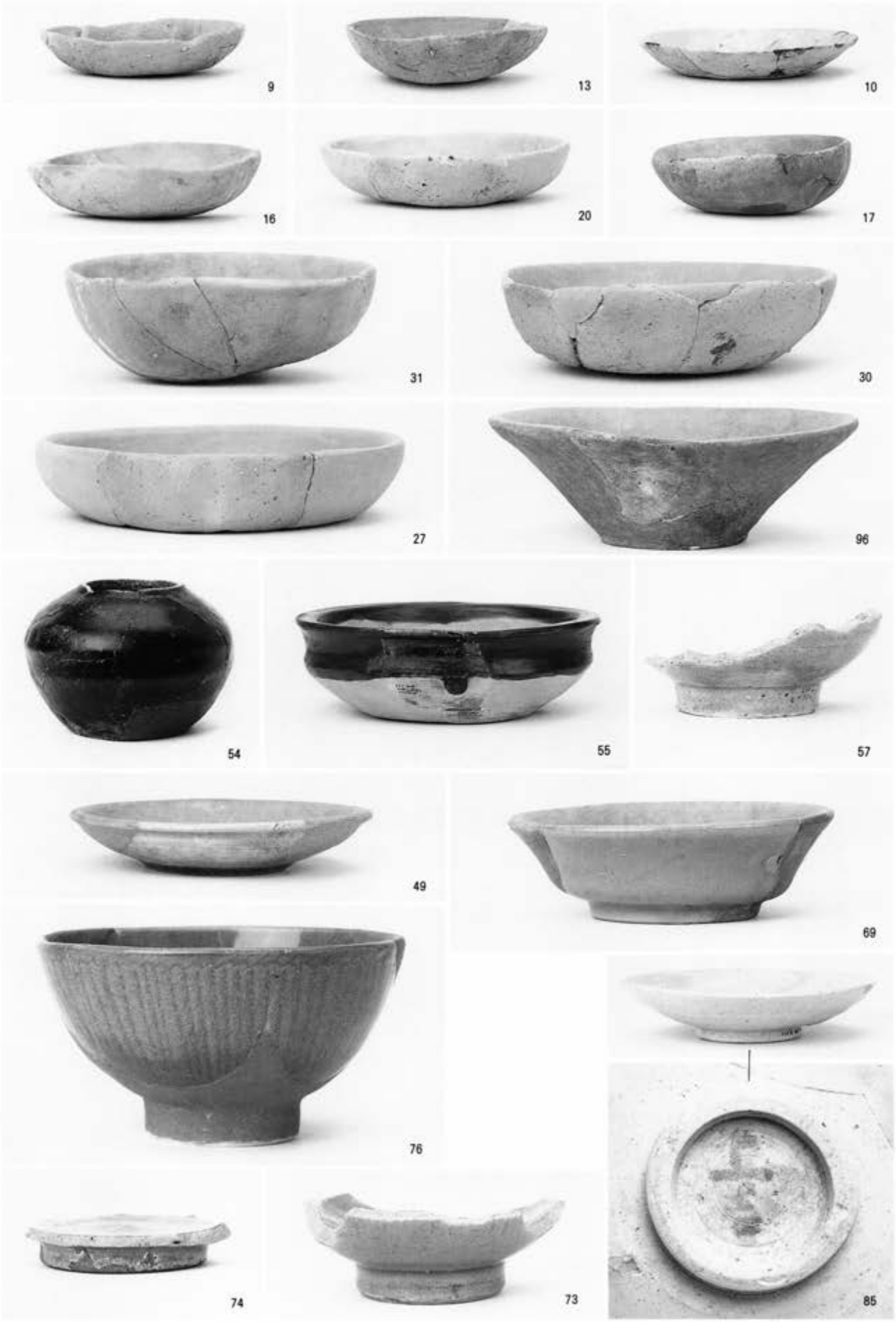
図版第62　シミズ谷城跡（B′地区）

(1)B′地区掘立柱建物跡ＳＢ02
（南から）

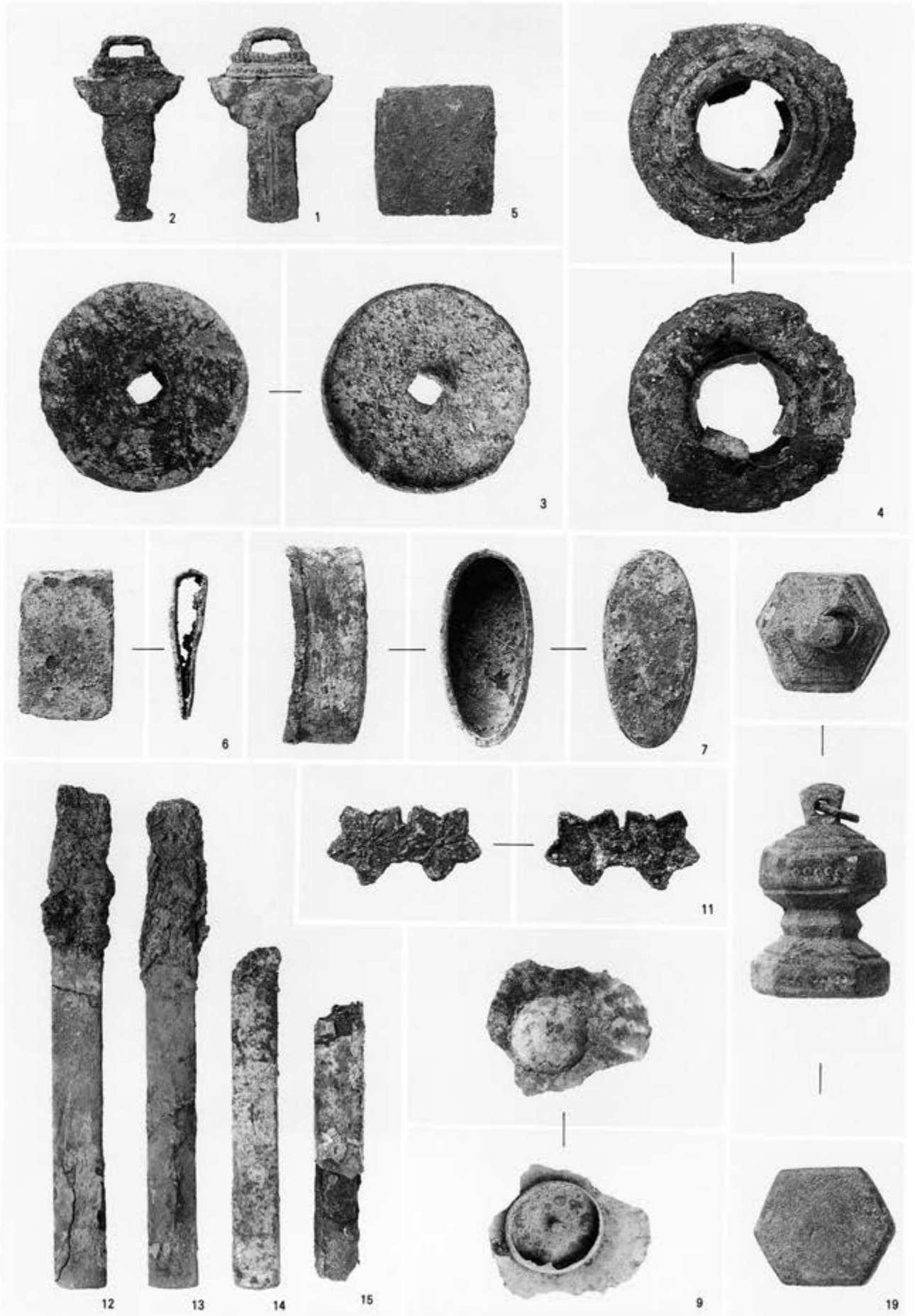
(2)同上
（東から）

(3)柵列ＳＡ01検出状況
（南西から）

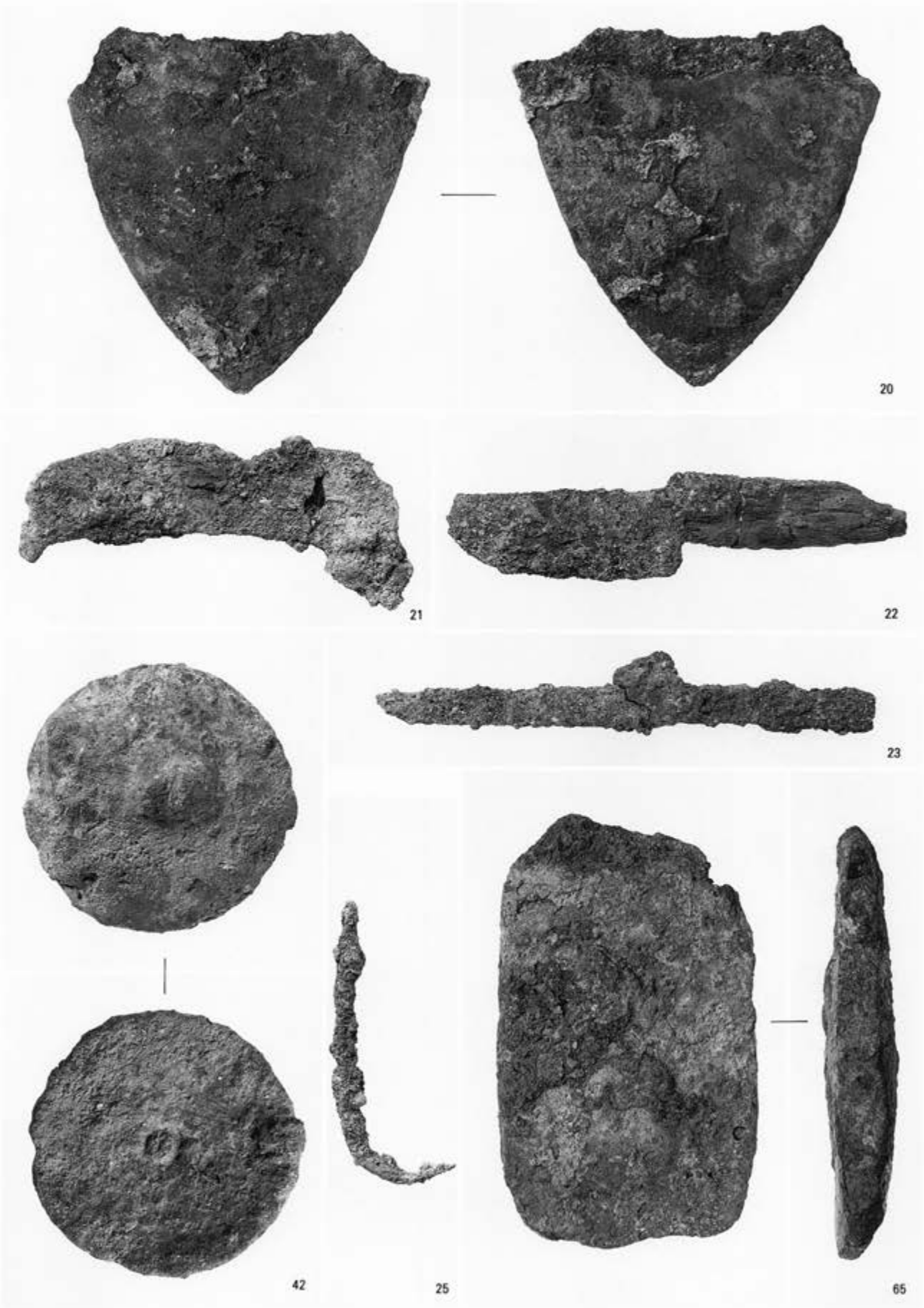
# 図版第63　シミズ谷城跡



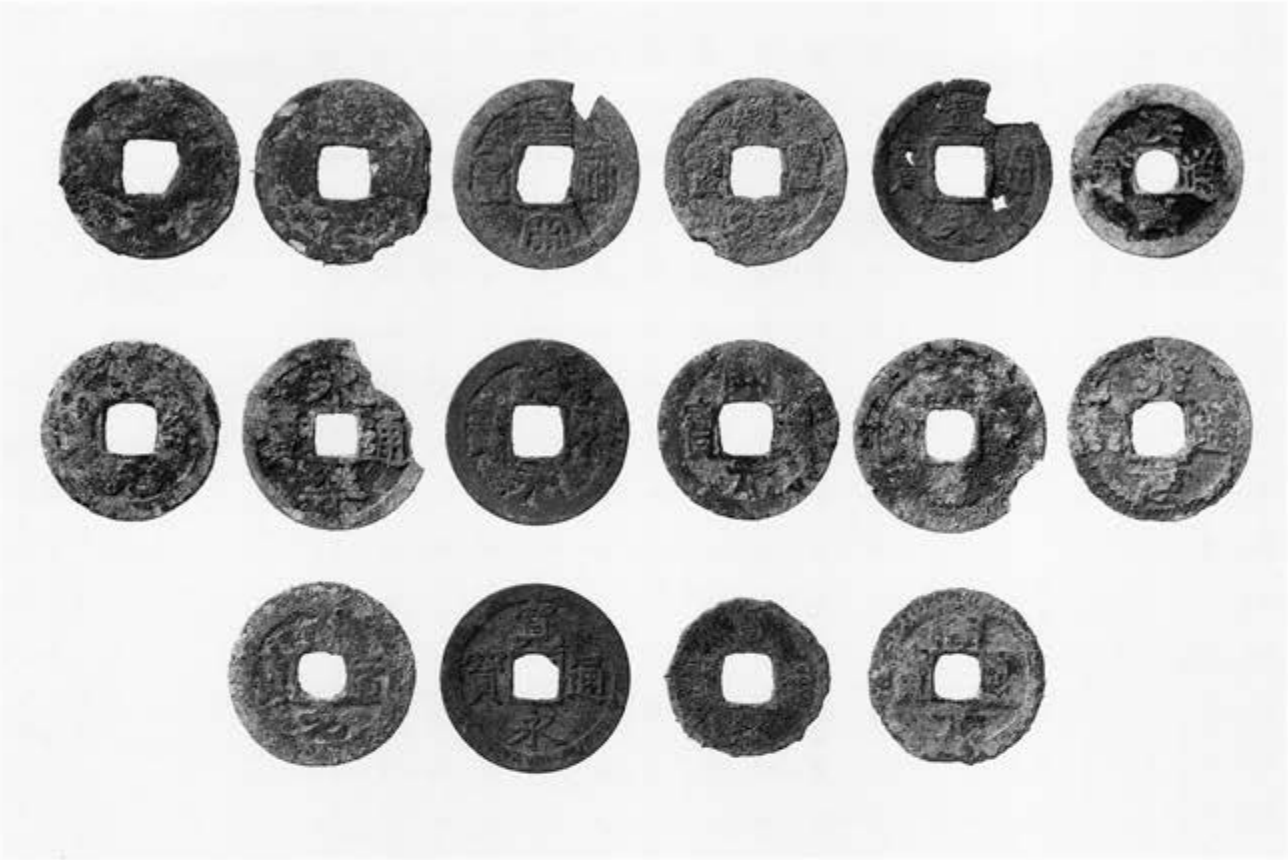

出土遺物(1)　土器



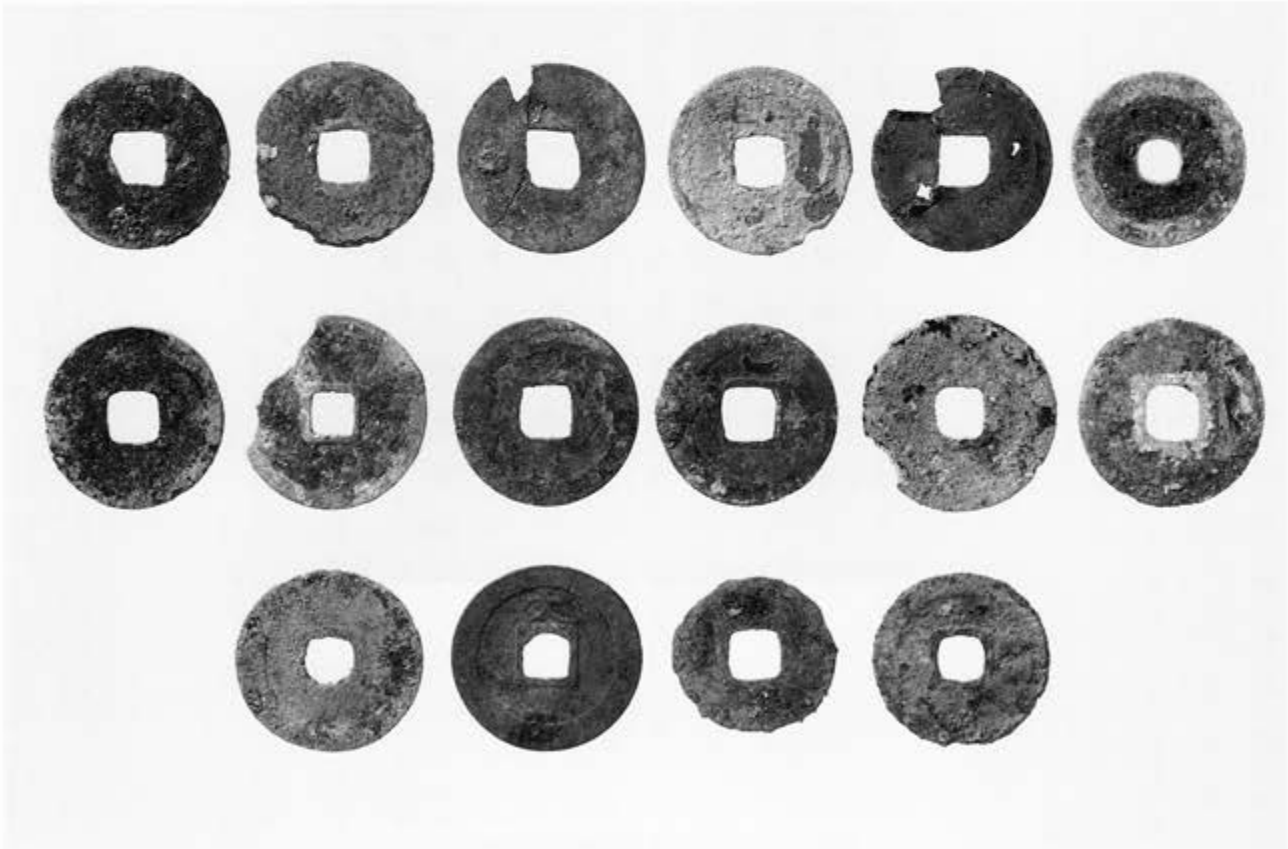

出土遺物(2)　銅製品




出土遺物(3)　鉄製品

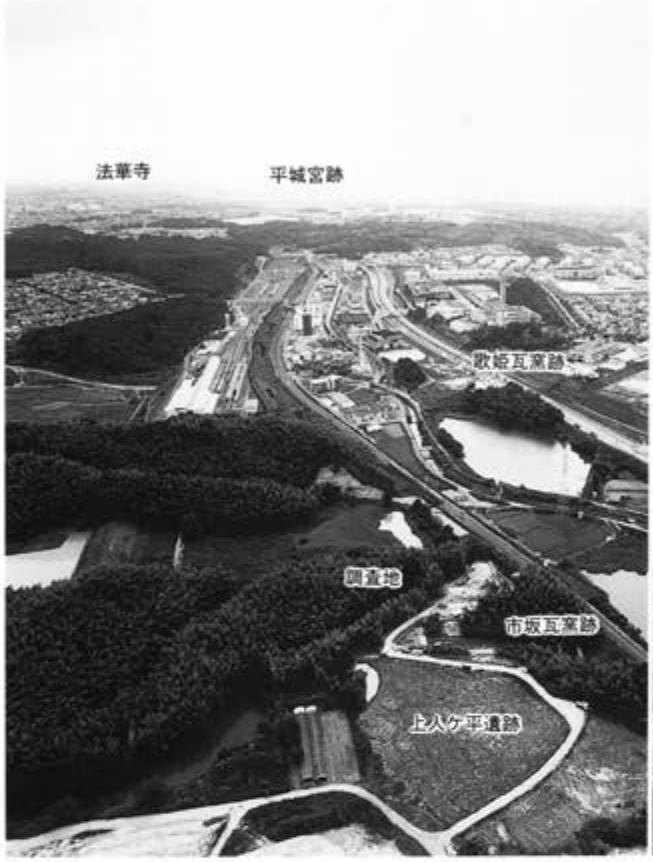


(1)出土遺物(4)　銭貨、表面



(2)出土遺物(5)　同上、裏面

## 図版第67　五領池東瓦窯跡群




(1)調査地周辺（北東から）

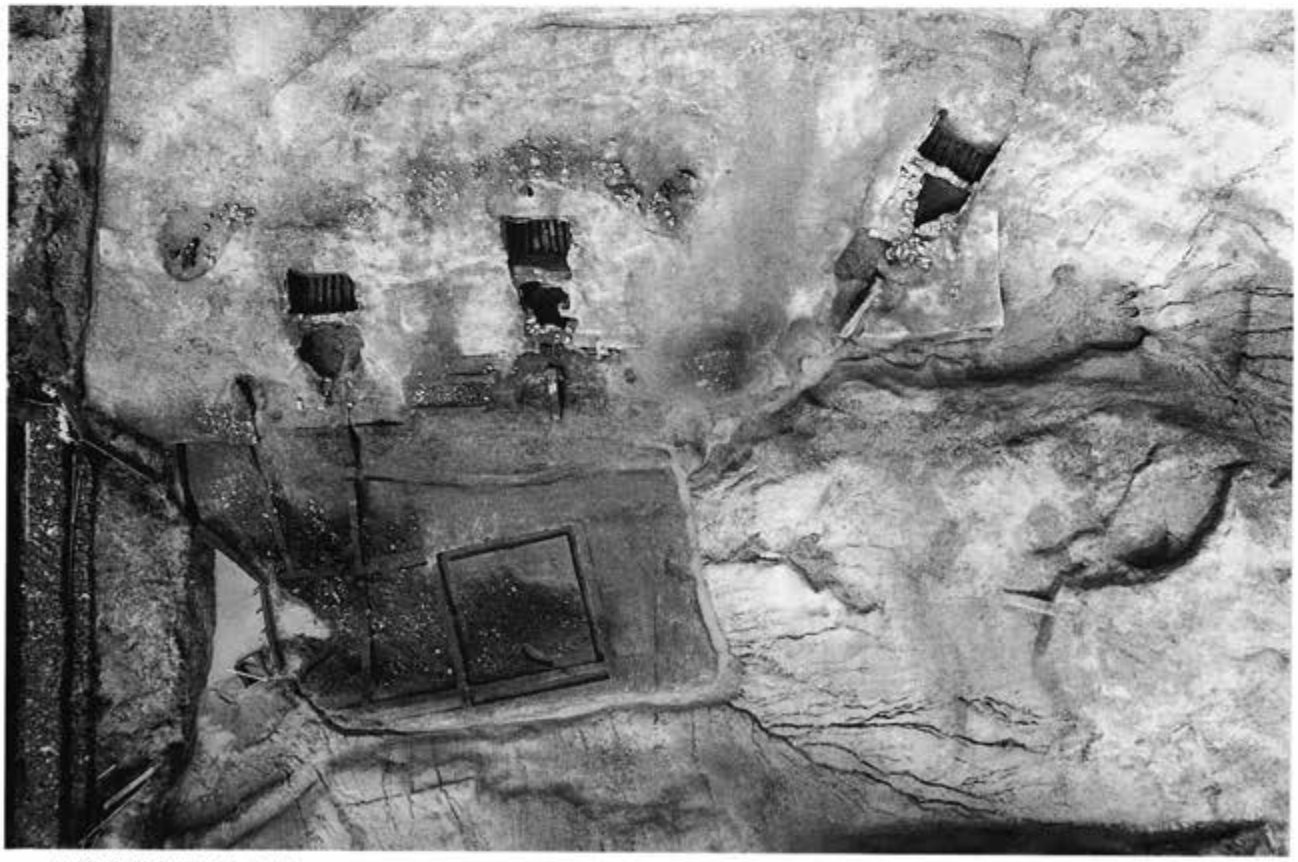
(2)調査地周辺（南東から）

(3)調査地周辺（南西から）

(4)調査地遠景（南西から）

図版第68　五領池東瓦窯跡群

(1)調査地全景（上が北）



(2)窯跡群全景（上が北）

図版第69　五領池東瓦窯跡群

(1)調査地遠景
（南西から）

(2)調査前風景
（東から）

(3)調査前風景
（南から）

図版第70　五領池東瓦窯跡群

(1)窯跡群全景（南から）

(2)1・2号窯全景（南から）

図版第71　五領池東瓦窯跡群

(1) 1 号窯掘削状況（南から）

(2) 1 号窯完掘状況（南から）

(3) 1 号窯焚き口から隔壁（南から）

## 図版第72　五領池東瓦窯跡群

(1) 1 号窯焼成室奥壁崩落状況
（南東から）

(2) 1 号窯焼成室火床検出状況
（北から）

(3) 1 号窯焼成室
火床に使用した丸瓦検出状況
（北から）

図版第73　五領池東瓦窯跡群

(1) 1 号窯西端通焔孔
軒平瓦検出状況
（南から）

(2) 1 号窯燃焼室縦断面
（東から）

(3) 1 号窯焚き口
東壁軒平・軒丸瓦検出状況
（南西から）

図版第74　五領池東瓦窯跡群

(1) 2 号窯掘削状況（南から）

(2) 2 号窯

(3) 2 号窯焚き口東壁検出状況（南西から）

図版第75　五領池東瓦窯跡群

(1) 2 号窯焼成室天井用瓦出土状況
（南から）

(2) 2 号窯焼成室縦断面
（東から）

(3) 2 号窯焼成室奥壁検出状況
（南から）

図版第76　五領池東瓦窯跡群

(1) 2 号窯焼成室床面検出状況
（東から）

(2) 2 号窯隔壁壁体内瓦積み状況
（西から）

(3) 2 号窯隔壁壁体内瓦積み状況
（北から）

## 図版第77　五領池東瓦窯跡群

(1) 2 号窯燃焼室隔壁検出状況
（南から）

(2) 2 号窯燃焼室横断面
（北から）

(3) 2 号窯焚き口閉塞状況
（東から）

## 図版第78　五領池東瓦窯跡群

(1) 3 号窯掘削状況（南から）

(2) 3 号窯完掘状況（南から）

(3) 3 号窯全景焚き口付近閉塞状況（南東から）

## 図版第79　五領池東瓦窯跡群

(1) 3 号窯焼成室天井用瓦検出状況
（西から）

(2) 3 号窯焼成室奥壁崩落状況
（東から）

(3) 3 号窯焼成室火床検出状況
（北から）

図版第80　五領池東瓦窯跡群

(1) 3 号窯焼成室西壁検出状況
（東から）

(2) 3 号窯燃焼室完掘状況
（南東から）

(3) 3 号窯燃焼室天井残存状況
（東から）

## 図版第81　五領池東瓦窯跡群

(1) 3 号窯隔壁検出状況
（南から）

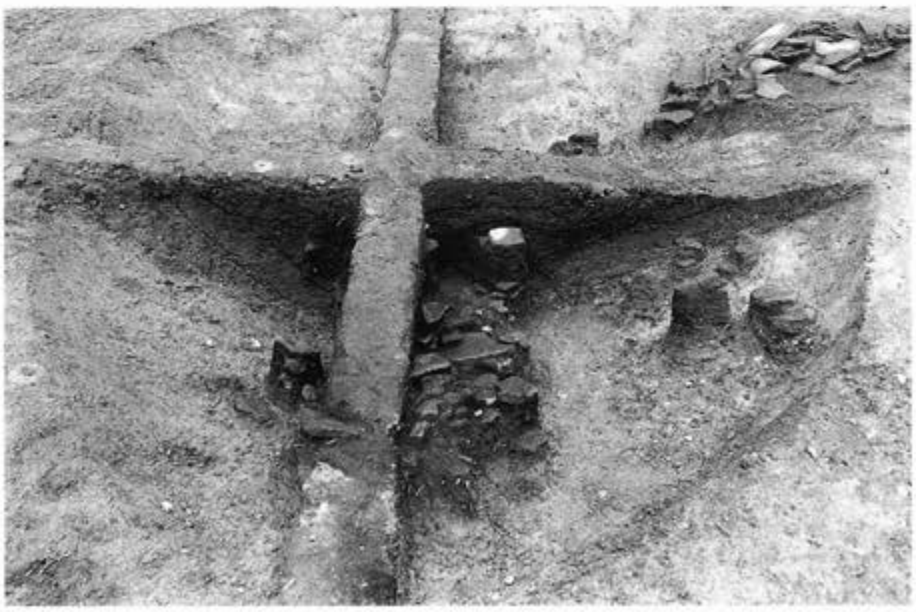
(2) 3 号窯焚き口閉塞状況
（南から）

(3) 3 号窯焚き口完掘状況
（南から）

図版第82　五領池東瓦窯跡群

(1) 2 号窯・ＳＤ01検出状況
（南から）

(2) ＳＤ01上面瓦出土状況
（南から）



(3) ＳＫ03掘削状況
（南から）

図版第83　五領池東瓦窯跡群

(1)ＳＫ04掘削状況
（南から）

(2)ＳＤ05掘削状況
（西から）

(3)調査地南斜面全景
（北から）

図版第84　五領池東瓦窯跡群

(1)調査地北斜面断面
2号窯東側付近
（西から）

(2)灰原掘削状況
（南から）

(3)灰原断面1号窯南側谷部分
（南から）

出土遺物(1)　土器

23

24

26

28

30

32

27

出土遺物(2)　軒丸瓦

出土遺物(3)　軒平瓦

出土遺物(4)　軒平瓦

報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | |
| 書　　名 | |
| 副書名 | |
| 巻　　次 | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査概報 |
| シリーズ番号 | 第79冊 |
| 編著者名 | 河野一隆・伊野近富・竹原一彦・岡崎研一・柴　暁彦・有井広幸・橋本　稔 |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 所在地 | 〒617　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877 |
| 発行年月日 | 西暦　1997　年　12　月　26　日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| へいいせき<br>平遺跡 | たけのぐんたんごちょうへいこあざみなと<br>竹野郡丹後町平小字湊 | 502 | 1 | 35°44′56″ | 135°9′20″ | 19960826<br>～<br>19961205 | 1,000 | 道路建設 |
| なぐおかみなみこふんぐん<br>奈具岡南古墳群 | たけのぐんやさかちょうみぞたにこあざなぐおか<br>竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡 | 503 | 109 | 35°39′55″ | 135°6′00″ | 19960411<br>～<br>19970130 | 6,200 | 農地造成 |
| しみずだにじょうあと<br>シミズ谷城跡 | たけのぐんやさかちょうつつみこあざひらの・しんず<br>竹野郡弥栄町堤小字平野・シンズ | 503 | 116・117 | 35°38′52″ | 135°6′18″ | 19960507<br>～<br>19960906 | 1,500 | 農地造成 |
| ごりょういけひがしがようあとぐん<br>五領池東瓦窯跡群 | そうらくぐんきづちょうおおあざいちさかこあざしょうにんがひら<br>相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平 | 362 | | 34°42′50″ | 135°49′3″ | 19960507<br>～<br>19960927 | 1,200 | 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平遺跡 | 集落 | 縄文<br>古墳 | 埋甕・石組炉<br>石敷遺構 | 縄文土器・石器・石製品<br>須恵器・土師器・製塩土器 | |
| 奈具岡南古墳群 | 古墳 | 古墳 | 木棺直葬墳 | 須恵器・土師器・鉄剣・鉄製鉇 | |
| シミズ谷城跡 | 城館 | 戦国 | 郭・建物・方形土坑・鍛冶炉 | 土師器・越前焼・中国製白磁・中国製青磁・瀬戸・美濃焼・金工品 | |
| 五領池東瓦窯跡群 | 窯跡 | 奈良 | 瓦窯(半地下式平窯) | 瓦類 | |

京都府遺跡調査概報 第79冊

平成９年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)